岐阜県指定史跡

風巻尾山大成徳寺跡

平成15～18年度範囲確認調査報告書

2007
下呂市教育委員会

岐阜県指定史跡

鳳凰尾山大成徳寺跡

平成 15～18 年度範囲確認調査報告書

２００７

下呂市教育委員会

伝本堂跡調査前

伝本堂跡調査後

出土遺物・多口瓶

出土遺物・蔵骨器と蓋

巻頭図版2

序

下呂市は、岐阜県のほぼ中央に位置し、天下三名泉の一つに数えられる出湯のまちであり、豊かな緑と清流に恵まれた、山紫水明のまちです。また、歴史的には旧石器時代から石器の材料となった下呂石で知られ、中世には天下十刹に数えられた禅昌寺が建立されるなど、多くの遺跡や文化財が知られています。

下呂市街地の東方、美濃と飛騨の国境である舞台峠近くの山中に建てられた大威徳寺は、鎌倉時代創建の伝承を持つ大寺院として、文覚上人の伝説とともに長く語り継がれてきました。昭和34年には、岐阜県の史跡に指定されましたが、その創建や沿革は確かなものがなく、言わば幻の寺でもありました。この度、国・県の指導・助成をいただく中、本格的な調査の緒についたことは、下呂市にとりましても、遺跡の保護と研究に取り組んでこられました地元の皆様方にとりましても画期的なことで、まさに長年の夢が実現したと言えるでしょう。

この度の調査は、寺院の範囲確認を目的に、平成15年度から4カ年にわたって行いました。調査の結果、当初の目的である寺院の範囲がほぼ明らかになるとともに、予想以上に大規模な寺院であり、遺構の残存状況が極めて良好なことが分かりました。さらに県下で4例目となる多口瓶など、貴重な遺物が出土し、来跡のうえご指導をいただいた諸先生方からは、全国的に貴重な遺跡として高い評価をいただいています。

今回、調査の区切りを迎え、それらの成果を皆様に報告することとなり、今後の史跡の保護・活用に向け、大きな一歩を踏み出すことができたことは、大きな喜びとするところです。下呂市としましては、今後さらに大威徳寺の全貌の解明に向け、取り組んでいく所存です。関係の皆様方には、当事業に対して変わらぬご理解とご指導を改めてお願いする次第です。

末文になりましたが、これまでにご指導・ご協力をいただいた国・県の関係各位、発掘調査指導委員会の諸先生方、また調査に対して色々と便宜をおはかりいただいた地元地権者や史跡保存会の皆様方に、心から御礼申し上げ、刊行の辞といたします。

下呂市教育委員会

教育長　田口正邦

例　　言

1．本書は、文化庁の国宝重要文化財保存整備補助金および岐阜県の岐阜県文化財保護費補助金の助成を受け、下呂市教育委員会が平成 15 年度から実施した、岐阜県下呂市御嶽野地内に所在する、岐阜県指定史跡鳳慈尾山大威徳寺跡(遺跡番号 G23G01077)の範囲確認調査の報告書である。

2．範囲確認調査及び整理作業は主に堀正人(平成 15～18 年度)が行い、二村陽子・伊東歩(平成 18 年度)及び下呂市教育委員会社会教育課、同下呂教育室職員がこれを援助した。

3．本書の執筆は、以下のように行い、編集は堀が行った

第 2 章、第 3 章第 4 節 3　二村

第 5 章　丹羽忠幸(鳳慈尾山大威徳寺史跡保存会)、小池三次(同左)、堀

その他　堀

4．地形測量及び遺構実測の一部は、大同コンサルタンツ(株)(平成 15 年度)、株式会社中部テクノス(平成 16 年度)　株式会社イビソク(平成 17・18 年度)に委託して行った。

5．大威徳寺跡関連地名の調査については、鳳慈尾山大威徳寺史跡保存会に調査を依頼して行った。

6．発掘調査および報告書の作成にあたって、次の方々や諸機関からご指導・ご助言をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。(敬称・肩書き略、五十音順)

相原精治　赤澤徳明　浅野泰樹　阿弥陀寺　飯村均　山澗公三　伊藤秀雄　井上喜久男
今井孝幸　今井直人　岩原剛　小縣宣夫　奥建夫　小野木学　加子母郷土史研究会
教育文化財団文化財保護センター　上野川勝　久保智康　黒田龍二　下呂市文化財審議会
小池三次　小池秀雄　小島憲昭　小澗忠司　近藤大典　斎藤慎一　佐伯哲也　坂井秀弥
澤村雄一郎　菅谷文則　鈴木景二　脊古真哉　宗獻寺　高岡徹　高木稔彦　谷口陽一
玉井哲雄　千早保之　八賀哲夫　原寛　朴澤直秀　鳳慈尾山大威徳寺史跡保存会
宝珍慎一郎　星野直哉　堀池哲生　増田三男　松井一明　山本一僧　吉田一彦　吉田英敏

7．遺構・出土遺物図の縮尺は、図中にスケール等で示したが、原則として土器は 1/3、1/2 のいずれか、金属器は 3/4 か 1/2 のいずれか、石製品は 1/3 か 1/4 か 1/6 のいずれか、石造物は 1/8 で作製した。

8．本文中で用いた遺構の略号は以下の通りである

土坑……SK　　柱穴・小穴……Pit　　性格不明遺構……SX

9．調査に関する資料および遺物は、下呂市教育委員会が保管している。

目　　次

序
例言
第１章　調査の経過 …… 1
　第１節　調査にいたる経緯 …… 1
　第２節　調査の経過 …… 2
第２章　遺跡の位置と環境 …… 4
　第１節　地理的環境 …… 4
　第２節　歴史的環境 …… 5
第３章　調査の成果 …… 10
　第１節　平成15年度調査 …… 10
　　１　調査の目的と方法 …… 10
　　２　主な遺構と出土遺物 …… 13
　　３　主な成果 …… 40
　第２節　平成16年度調査 …… 41
　　１　調査の目的と方法 …… 41
　　２　主な遺構と出土遺物 …… 42
　　３　主な成果 …… 74
　第３節　平成17年度調査 …… 75
　　１　調査の目的と方法 …… 75
　　２　主な遺構と出土遺物 …… 76
　　３　主な成果 …… 84
　第４節　平成18年度調査 …… 85
　　１　調査の目的と方法 …… 85
　　２　主な遺構と出土遺物 …… 86
　　３　石造物 …… 92
　　４　主な成果 …… 95
第４章　大威徳寺跡関連遺物について …… 96
　第１節　採集遺物について …… 96
　第２節　阿弥陀寺所蔵懸仏について …… 97
　第３節　高山市宗猷寺所蔵大威徳寺関連古文書について …… 99
第５章　大威徳寺関連地名について …… 101
第６章　まとめ …… 108
　第１節　建物について …… 108
　第２節　仏本堂跡とその建築について …… 110
　第３節　宗猷寺所蔵「威徳寺跡図」に見る大威徳寺 …… 113
　第４節　大威徳寺の寺域と空間構成 …… 114
　第５節　大威徳寺の寺領について …… 116
　第６節　調査の現状と今後の課題 …… 118
　付　　大威徳寺関連史料リスト …… 152(1)

題　字　鳳慈尾山大威徳寺史跡保存会　中島五朗

挿入図版目次

第１図　遺跡位置図　…4
第２図　周辺の遺跡　…6
第３図　推定寺領範囲と寺院関連地　…9
第４図　遺跡内地区割り図と表採遺物点数　…11
第５図　トレンチ設定図　…12
第６図　伝本堂跡平面図　…15
第７図　本堂西建物平面図　…16
第８図　伝本堂跡礎石(1)　…17
第９図　伝本堂跡礎石(2)　…18
第10図　伝本堂跡礎石(3)　…19
第11図　本堂西建物礎石(1)　…20
第12図　本堂西建物礎石(2)　…21
第13図　本堂西建物礎石(3)、出土遺物点数、Ａ３・４トレＳＫ１平面図　…22
第14図　伝本堂跡・本堂西建物出土遺物　…23
第15図　推定軒廻跡平面図　…24
第16図　ＴＰ５平・断・立面図、出土遺物　…26
第17図　池跡周辺遺構分布図、Ｂ４トレ平・断・立面図、出土遺物　…27
第18図　Ａ区石段平・断面図、出土遺物　…28
第19図　ＴＰ６平・断・立面図、Ｇ南拡張トレ平・立面図、ＴＰ９平・立面図　…30
第20図　Ｄ６・７トレ・ＴＰ３平・断面図、出土遺物、出土遺物点数　…31
第21図　ＴＰ１平・断・立面図、出土遺物　…33
第22図　Ｅトレ平・断面図、出土遺物　…34
第23図　Ｉ９トレ平・断・立面図、ＴＰ７平・断面図　…37
第24図　Ｉ８・９、Ａ８・９トレ、ＴＰ７出土遺物(１)　…38
第25図　Ｉ８・９、Ａ８・９トレ、ＴＰ７出土遺物(２)、出土遺物点数、トレンチ・ＴＰ出土遺物、表採遺物　…39
第26図　Ａ東西１・２、Ａ南北１トレ、ＴＰ１平・断面図、出土遺物　…43
第27図　Ｂ３トレ平・断面図、出土遺物　…46
第28図　史碑周辺遺構分布図、史碑周辺表採遺物(1)　…47
第29図　史碑周辺表採遺物(２)、Ｂ２トレ出土遺物、遺物点数　…48
第30図　Ｊトレ平・断・立面図、出土遺物、遺物点数　…50
第31図　ＴＰ３・ＴＰ９・Ｄ２トレ平・断面図、出土遺物、遺物点数　…51
第32図　Ｉトレ平・断面図、出土遺物　…54
第33図　Ｋトレ平・断・立面図、出土遺物、遺物点数　…55
第34図　Ｄ１・Ｅ１トレ平・断面図、Ｅ２トレ平・断面図　…57
第35図　Ｄ１・Ｅ・Ｆ・Ｃトレ出土遺物、遺物点数　…58
第36図　推定参道周辺遺構分布図、ＴＰ８・ＴＰ13平・断面図　…60
第37図　ＴＰ６・ＴＰ10平・断面図、出土遺物、トレンチ・ＴＰ出土遺物　…61
第38図　Ｅ区排水溝周辺遺構分布図、表採遺物　…62
第39図　Ｆ区遺構分布図、Ｅ・Ｆ区遺物点数　…64
第40図　Ｆ区石段平面図、Ｆ区表採遺物　…65
第41図　Ｆ区斜面石積み平・立面図、Ｆ区斜面遺物点数　…66
第42図　伝山門跡周辺遺構分布図　…68
第43図　伝山門跡南堀状遺構平面図　…68
第44図　伝山門跡平面図　…69
第45図　伝三重塔跡西斜面石積平・立面図　…70
第46図　伝鐘楼跡遺構分布図、表採遺物　…72
第47図　伝三重塔跡遺構分布図　…72
第48図　Ｄ区排水溝周辺遺構分布図　…73
第49図　Ｄ区西斜面石積平・立面図　…73
第50図　Ａ１・Ｂトレ平・断面図　…77
第51図　Ｃトレ石積平・立面図　…78
第52図　Ｄ東１・南１トレ平・断面図　…79
トレンチ出土遺物、表採遺物　…80
第54図　Ａ２～４トレ平・断面図、出土遺物　…87
第55図　Ｂ２トレ平・断面図、出土遺物、表採遺物　…88
第56図　右遺物集積地平面図、蔵骨器発見状況と蔵骨器　…90
第57図　礫集中地区略測図、表採遺物　…91
第58図　右塔配置図　…92
第59図　宝篋印塔　…93
第60図　組合わせ式五輪塔・基壇　…94
第61図　大威徳寺跡関連遺物　…100
第62図　大威徳寺関連地名図(1)　…103
第63図　大威徳寺関連地名図(2)、御厩野字限図　…104
第64図　大威徳寺跡構造模式図　…112
第65図　伝本堂跡礎石配置図、計測グラフ　…112
別添図　鳳慈尾山大威徳寺跡現況地形図

付表目次

第１表　大威徳寺跡範囲確認調査工程表　…3
第２表　大威徳寺関連社寺　…8
第３表　平成18年度設定トレンチ出土遺物点数　…85
第４表　大威徳寺跡採集遺物観察表　…96
第５表　御厩野区内小字名一覧表(1)　…105
第６表　御厩野区内小字名一覧表(2)　…106
第７表　御厩野区内小字名一覧表(3)　…107

第８表　大威徳寺跡礎石建物規模一覧表　…108
第９表　中世寺院の中心仏堂の規模比較表　…110
第10表　竹原郷村別石高変遷表　…116
第11表　遺物観察表(1)　…122
第12表　遺物観察表(2)　…123
第13表　遺物観察表(3)　…124
第14表　遺物観察表(4)　…125
第15表　遺物観察表(5)　…126
第16表　遺物観察表(6)　…127
第17表　遺物観察表(7)　…128
第18表　遺物観察表(8)　…129
第19表　遺物観察表(9)　…130
第20表　遺物観察表(10)　…131
第21表　遺物観察表(11)　…132
第22表　遺物観察表(12)　…133
第23表　遺物観察表(13)　…134
第24表　遺物観察表(14)　…135
第25表　金属器(鉄釘)観察表　…135
第26表　銭貨観察表　…135
第27表　石造物観察表　…136

写真図版目次

巻頭図版１　伝本堂跡調査前　伝本堂跡調査後
巻頭図版２　出土遺物・多口瓶　出土遺物・蔵骨器と盖
図版１　遺構写真(1)
①遠景　②伝本堂跡調査後(正面向拝部分)　③本堂跡礎石　④本堂西建物　⑤軒廊　⑥A区ＴＰ５
⑦A区Ｂ４トレ　⑧寺院中心部東方の石列と区画
図版２　遺構写真(2)
①A区石段と東西に続く石積　②A区G南拡張トレ　③A区ＴＰ６　④A区ＴＰ９　⑤A区ＴＰ１
⑥A区Ｅトレ　⑦B区ＴＰ７　⑧B区Ｉ９トレ
図版３　遺構写真(3)
①C区調査前　②C区(史碑南)調査前　③C区Ａトレ　④C区Ｂ３トレ　⑤C区築地塀の基礎
⑥C区史碑南建物跡　⑦C区C２トレ　⑧C区Ｅ２トレ
図版４　遺構写真(4)
①C区Ｊ東トレ　②C区K西トレ　③C区ＴＰ８　④C区ＴＰ６　⑤E区排水溝
⑥E区排水溝(伝三重塔跡から見る)　⑦E区参道北の石列と区画　⑧F区参道北の通路状の石列
図版５　遺構写真(5)
①C区通路状の石列　②F区基壇状の石列　③F区基壇状の石列西の建物跡
④伝三重塔跡西法面の石積　⑤伝三重塔跡　⑥伝鐘楼跡　⑦伝山門跡　⑧D区排水溝
図版６　遺構写真(6)
①B区A～Cトレ調査前　②別荘分譲地Dトレ調査前　③B区Ａ１・Ｂトレ
④B区Ａ２・３、Cトレ　⑤D南１・東１トレ　⑥林畑谷左岸・通路状の石列
⑦林畑谷左岸・排水路の護岸状の石積　⑧林畑谷左岸・敷石状の集石
図版７　遺構写真(7)
①林畑谷左岸・水場状の遺構　②土塁状に整地された尾根　③E区Ａトレ調査前　④F区Ａ４トレ
⑤E区Ａ４トレ築地塀の基礎状の集石　⑥E区Ａ３・４トレ　⑦E区Ｂ２・１トレ　⑧E区Ｂ２トレ土師皿出土状況
図版８　遺構写真(8)
①寺院北端の区画と考えられる石積　②西側をＬ字状に削られた尾根　③ほぼ直角に整地された尾根南端　④F区石段東方法面の石積　⑤F区石段　⑥F区谷筋を埋めた石積　⑦階段状に整地された尾根　⑧伝山門跡東法面の石列
図版９　遺構写真(9)
①伝山門跡南の堀状の遺構　⑩急傾斜で落ち込むG区南斜面　⑪D区西法面の石積　⑫秩父杉切株
⑬伝三重塔跡へいたる参道　⑭参道に残る石段　⑮K区古瀬戸遺物表採地点　⑯石造物集積地
図版１０　関連遺物写真
①高山宗猷寺所蔵「威徳寺跡図」　②同部分(1)　③同部分(2)　④同部分(3)　⑤阿弥陀寺所蔵懸仏
⑥石造物古写真
図版１１　出土遺物写真(1)
図版１２　出土遺物写真(2)
図版１３　出土遺物写真(3)
図版１４　出土遺物写真(4)
図版１５　出土遺物写真(5)
図版１６　出土遺物写真(6)

第１章　調査の経過

第１節　調査にいたる経緯

本遺跡は、下呂市御嶽野字威徳寺地内に所在する。平成16年３月１日、旧益田郡内の５町村が合併し、下呂市が誕生したが、本遺跡が所在する旧下呂町は、旧石器時代から石器素材として使用された下呂石を産出する町として著名であり、パン状炭化物で知られる峰一合遺跡など、市内の各所に旧石器・縄文時代遺跡が点在する。市名である「下呂」が、律令体制下の「下留」に由来することは周知のとおりであるが、旧益田郡内では古墳の存在は知られておらず、古代・中世の遺跡も希薄で、『岐阜県史　考古資料編』（岐阜県2003）では、平成９～10・12年度に岐阜県文化財保護センターによって調査された上ケ平遺跡のほか、２遺跡が知られる程度である。

本遺跡は、18世紀初めに書かれた『飛州志』や『飛騨国中案内』などにも紹介され、それらの記述によると、源頼朝発願、文覚上人（一説には永雅上人）創建の伝承を持つ。遺跡が所在する「御厩野」の地名も、大威徳寺に詣でた貴人が麓の野に馬を設け、そこに馬を留めて参拝したという伝説に由来すると言われている。伝本堂跡など、遺構の残存状況が良好なこともあり、遺跡に関する地元の関心は非常に高く、故今井精一（いまいせいいち）氏・故渡治政（わたりはるまさ）氏といった地元地権者や郷土史家を中心に、地道な研究と保存活動が続けられ、昭和36年には地元の有志によって、寺域内に記念碑が建てられている。昭和34年に県史跡に指定され、昭和16年・同38年に岐阜県によって調査・報告がされたが、本格的な発掘調査は行われておらず、遺跡の詳細は未確認のままであった。

さらに近年、いわゆる「山岳寺院」の調査例が全国的にも増加し、飛騨と美濃の国境という特別な場所に位置する大威徳寺の重要性も見直されるようになり、下呂町の活性化のためにも、発掘調査により遺跡の全容を明らかにし、歴史的に貴重な文化遺産として保護と活用を望む声が大きくなった。平成11年には地元地権者を中心に「鳳慈尾山大威徳寺史跡保存会」（会長今井直人氏）が結成され、下呂町へ発掘調査と史跡整備の要望が陳情されると同時に、同会会員によって遊跡の草刈や標柱の設置といった奉仕活動や史跡の保護活動が継続的に行われている。

旧下呂町時代の平成10年、同11年、相次いで御嶽野区から「竹原地区に残る歴史遺産の発掘と整備による地域活性化の要望」「史跡大威徳寺発掘調査に関する請願」が提出され、平成13年度から実施する「下呂町第四次総合計画」に盛り込み、対応することとした。

その間教育委員会は、平成11年12月、同13年４月に県教育委員会文化課と協議を重ね、その指導のもと、平成11年度には寺域の地形測量を実施し、14年度以降の発掘調査を目指して専門職員の採用を決定し、予算化するとともに、平成14年度には、発掘調査指導委員を委嘱し、伝本堂跡等の既知の遺構の測量などを実施した。そして、将来の史跡整備に備え、寺院の範囲を確認することを目的に、平成15年７月から範囲確認調査を開始し、平成16年３月の町村合併後は、下呂市教育委員会が継続して調査を行っている。平成15・16年度末には、それぞれ概要報告書を刊行し、同18年８月には、関連事業として、「山寺サミットin下呂温泉　～大威徳寺の謎を追う～」と題してシンポジウムを開催した。

第2節　調査の経過

今回の範囲確認調査は、岐阜県教育委員会文化課および下記発掘調査指導委員会の指導・助言のもと、平成15年度から18年度までの4ヵ年にわたって実施した。以下に各年の概要と、第1表に調査工程を記したが、各年度の調査の目的などは第3章を参照されたい。

平成15年度調査は、文化庁の国宝重要文化財保存整備補助金(2,500千円)および岐阜県文化財保護費補助金(365千円)の助成を受け、平成15年7月22日から平成15年11月21日まで屋外での作業を、その後は屋内での整理作業を行い、平成16年2月28日に終了した。15年度の最終的な発掘調査面積は850㎡である。

平成16年度調査は、文化庁の国宝重要文化財保存整備補助金(4,980千円)および岐阜県文化財保護費補助金(745千円)の助成を受け、平成16年5月11日から平成16年12月17日まで屋外での作業を、その後は屋内での整理作業を行い、平成17年3月18日に終了した。今年度の最終的な発掘調査面積は640㎡である。

平成17年度調査は、文化庁の国宝重要文化財保存整備補助金(7,115千円)および岐阜県文化財保護費補助金(711千円)の助成を受け、途中降雪のため作業を休止した期間を含めて、平成17年5月11日から平成18年3月17日まで屋外での作業を行い、平成17年3月18日に事業を終了した。17年度の最終的な発掘調査面積は330㎡である。

平成18度調査は、文化庁の国宝重要文化財保存整備補助金(2,667千円)および岐阜県文化財保護費補助金(266千円)の助成を受け、平成18年5月11日から平成18年9月25日まで屋外での作業を、その後は報告書作成のための作業を行い、平成18年3月20日に終了した。18年度の最終的な発掘調査面積は160㎡である。

なお、調査体制は以下の通りである。

調査主体者　下呂町教育委員会　出口正邦(教育長)(平成15年度)
下呂市教育委員会　出口正邦(教育長)(平成16～18年度)

調査員　堀正人(主幹心得・学芸員)(平成15～18年度)
二村陽子(嘱託・学芸員)(平成18年度)
伊東歩(嘱託・学芸員)(平成18年度)

事務局　中島健次(教育課長)　渡辺展(主任主査)(平成15年度)
今井美好(下呂教育課長)　渡辺展(下呂教育課主任主査)(平成16年度)
杉山裕(社会教育課長)　熊崎純也(社会教育課主査)　渡辺展(下呂教育室主任主査)(平成17年度)
熊崎純也(社会教育課長)　熊崎純也(社会教育課主査)(平成18度)

調査指導　八賀晋(三重大学名誉教授)
小野正敏(国立歴史民俗博物館教授)
早川万年(岐阜大学教授)
岐阜県教育委員会指導部文化課

作業員　今井恵子　河村省吾　小池尚武　進藤重義　曽我征夫　長瀬友　中田譲二
丹羽竹男　丹羽とみ子　松田典子　和田登志子　渡辺保純

第１表　大威徳寺跡範囲確認調査工程表

	平成 15 年度	平成 16 年度	平成 17 年度	平成 18 年度
4月		調査準備	調査準備	調査準備 指導委員会(30 日)
5月	調査準備	調査準備(杭打など) 調査開始(11 日) 調査区・旧地形測量図範囲草刈 指導委員会(20 日)	調査準備(杭打など) 調査開始(11 日) 地形測量範囲草刈(12 日～)	調査準備(杭打など) 調査開始(12 日) A・Bトレン掘削 地名調査(依存会に依頼)
6月	調査準備	旧地形測量図範囲草刈 A～Dトレ掘削、 草刈で確認した遺構の実測	地形測量範囲草刈 指導委員会	実測 磁気探査(1 日)
7月	調査準備(杭打など) 調査開始(22 日) A～Dトレ掘削 指導委員会	A・B・E・Fトン、TP1 ～3掘削 草刈で確認した遺構の実測	地形測量範囲草刈(～6 日) 基準点設置・地形測量(委託)	伝山門跡写真測量(委託)
8月	E～Gトレ・TP1・2 掘削	G・Hトレ、TP5・6・10 掘削 草刈で確認した遺構の実測	地形測量	八賀指導委員会長現地視察 (山寺サミット・現地公開)
9月	H～Jトレ掘削	I・J・kトレ、TP8・9・ 11～15 掘削 草刈で確認した遺構の実測	地形測量(～16 日) 作業再開(12 日～) A～Cトレ掘削 ※獄寺古文書調査	石造物集積地半面実測 埋め戻し 石造物集積地周辺踏査 屋外作業終了(25 日)
10月	八賀指導委員会長現地視察 現地説明会(25 日) TP3～5 掘削	文化庁・坂井調査官現地視察 現地説明会(3 日) TP11～15 掘削、実測 旧地形測量図範囲草刈	A～Fトレ掘削 八賀指導委員会長現地視察	報告書作成(整理作業)
11月	八賀指導委員会長現地視察 小野指導委員現地視察 遺構測量(委託) 実測・埋め戻し 屋外作業終了(21 日)	実測 仏本堂跡・本堂西建物跡測量 (委託) 旧地形測量図範囲草刈	現地説明会(5 日) Dへ Fトレ掘削	報告書作成(遺物実測)
12月	整理作業	実測・埋め戻し 屋外作業終了(17 日)	実測・埋め戻し 遺構測量(委託) 雪のため作業休止(5 日～)	報告書作成(トレース)
1月	整理作業	整理作業	雪のため作業休止 室内にて整理作業	報告書作成 (レイアウト・原稿執筆)
2月	整理作業 (概報刊行) 事業終了(28 日)	整理作業	阿弥陀寺懸仏調査 作業再開(20 日～) 雪かき・実測・埋め戻し	報告書作成 (原稿執筆・印刷製本)
3月		(概報刊行) 事業終了(18 日)	埋め戻し 米掲平・納守尾草刈・踏査 屋外作業終了(17 日) 事業終了(18 日)	報告書作成(印刷製本) 事業終了(20 日)

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

岐阜県指定史跡鳳凰尾山大威徳寺跡は、岐阜県下呂市御厩野地内に所在する（第１図）。

岐阜県は本州のほぼ中央に位置し、富山県・石川県・福井県・滋賀県・三重県・愛知県・長野県の７県に囲まれた内陸県である。岐阜県は北部を飛騨地方、南部を美濃地方に行政区分される。「飛山濃水」と呼ばれるように、飛騨地方には、御嶽山・乗鞍岳・奥穂高岳など標高 3000mを超える山々が連なる一方、美濃地方には木曽三川（木曽川・長良川・揖斐川）が流れ、太平洋に注ぐ。

第１図　遺跡位置図

下呂市は、岐阜県の中央東側、飛騨地方の南部にあたる。平成 16（2004）年３月に旧益田郡５町村（小坂町・萩原町・下呂町・金山町・馬瀬村）が合併し、下呂市が誕生した。北は高山市、西は郡上市と関市、南は加茂郡、東は中津川市と長野県に接する。下呂市内を北西－南東方向に活断層である阿寺断層が走る。市内は山林が約 90%を占めており、ほぼ中央を飛騨川が南北に流れる。東西には馬瀬川が流れ、北東端には御嶽山がそびえる自然豊かな地域である。飛騨川に沿うように国道 41 号線が走り、高山市から下呂市金山町までの区間は飛騨街道（益田街道）と呼称されている。飛騨街道は古代律令期に東山道飛騨支路として整備された街道で、下呂市内には萩原町上呂地区に上留駅、旧下呂町内に下留駅、金山町菅田地区に菅田駅が所在したと比定されている。いずれも場所は特定されていない。飛騨街道の中でも下呂－金山間は中山七里と呼ばれ、交通の難所であったので、古くは下呂地区小川－乗政間の初矢峠（この区間は後述の南北街道と重複）を通り、夏焼－久野川を経由して下原地区へと抜ける道筋が安全とされてきた。中山七里を含む飛騨川流域－木曽川中流域は景勝地でもあり、飛騨木曽川国定公園に指定されている。

南北に流れる飛騨川が下呂市大渕で東西に方向を変え、御厩野地区から流れる竹原川が合流する。竹原川に沿うように国道 257 号線が走る。この国道は 41 号から分かれて大渕から中津川市へ抜ける道で、南北街道と呼称される。南北街道と呼ばれるようになったのは江戸時代の頃で、古くは初矢峠を越えて小川－乗政地区を通る道が整備されていた。

大威徳寺跡は旧下呂町内、竹原地区に所在する。竹原地区は南東部の舞台峠を境に中津川市加子母と接し、飛騨地方の南端にあたる。また北東部にそびえる三国山・鞍掛峠・白草山・高森山を境に長野県とも接しており飛騨・美濃・信濃の境となるこの地に大威徳寺が建立された。

大威徳寺跡は、標高約 1400mの拝殿山から南西にのびる尾根上に位置し、その標高は約 740mを測る。御厩野集落や小郷集落からの比高差が約 150mの高台に所在し、現在は木が生い茂っているが、建立当時は集落一帯を見渡すことができたと思われる。

第２節　歴史的環境

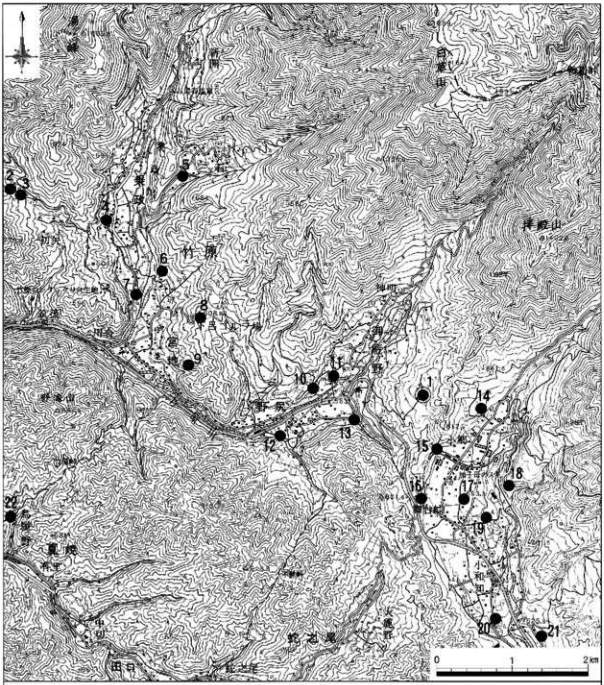
大威徳寺跡周辺の遺跡

大威徳寺跡（第２図１）周辺は、石器の素材として有名な通称下呂石（ガラス質黒雲母流紋岩）を産出する湯ヶ峰を背後に控えており、縄文時代を中心とした遺跡が旧南北街道に沿うように点在している。また、当地域は下呂から中津川へ抜ける交通の要所であったことから、中世や近世の遺跡も点在する。以下、時代をおって大威徳寺跡周辺の歴史的環境を概観する。

旧石器時代から縄文時代の遺跡の代表的なものとして、初矢遺跡（同図３）、下島遺跡（同図７）、杉ヶ平遺跡（同図14）、森ノ外遺跡（同図17）が挙げられる。初矢遺跡は下呂市乗政の標高650mに位置する。本格的な調査は行われていないが、ナイフ形石器、尖頭器、有舌尖頭器等の石器の表採資料が見受けられ、この地域における歴史の萌芽期の遺跡として注目される。同じ時期の遺物として、宮地地区からナイフ形石器、中津川市加子母に所在する森ノ外遺跡でも有舌尖頭器が１点表採されている。中津川市加子母に所在する杉ヶ平遺跡では、縄文時代前期の土器や石器が表採されているが、詳細な調査は行われていない。下島遺跡は乗政地区に所在し、昭和59(1984)年に県営圃場整備事業に伴って下呂町教育委員会（当時）による発掘調査が行われ、縄文時代後・晩期を中心とした遺構・遺物が検出された。乗政川の河岸段丘上に位置する遺跡で、土坑や敷石遺構・集石遺構などの遺構が検出された。出土遺物は宮田式上器に比定される土器など縄文時代後期・晩期の土器や、土偶が出土している。石器は石鏃・石匙などの石器を始め、石冠が出土している。旧下呂町内においてこの時期のまとまった資料がないことから、縄文時代後・晩期を代表する遺跡となっている。また、乗政地区ではこの他に御物石器が表採されている。石冠や御物石器は飛騨地方を中心に縄文時代後・晩期に見られる石器で、呪術的な役割を持つ石器と考えられている。

このように、縄文時代の状況はある程度明確になってきているが、弥生時代から古代にかけての状況は、資料がほとんどなく未だ解明されていない。弥生時代については、下島遺跡で水神平Ⅲ式土器に比定される土器が出土しているが、遺構は確認されていない。古代になると律令政権下で飛騨地方でも官道が整備される。旧下呂町内に下留駅が置かれてことがわかっているが、その場所については諸説ある。野尻地区に「小方場」という地名があることから、この地を駅に比定する説も存在するが、それを裏付ける資料はない。

中・近世の代表的な遺跡として大威徳寺跡の他に、宮地城跡（同図９）、県指定史跡である初矢峠石畳（同図２）、御厩野口留番所跡（同図13）がある。宮地城跡は、応永18（1411）年、京極氏が姉小路氏討伐の功により、竹原郷を与えられ築城した山城で、別名「小鷹場の城」と呼ばれた。標高600mの周辺を見渡せる高台に位置し、現在も堀切跡、竪堀跡、石塁跡などが残され、下呂市史跡に指定されている。京極氏の家臣であった二木氏は滅亡までの174年間、この地を拠点として勢力を広げ、ついには飛騨制定を成し遂げたと言われる。旧街道である小川－乗政間の初矢峠には、石畳敷きの道路が残されており、昭和48(1973)年に岐阜県史跡に指定されている。石畳が整備された時期は明確ではないが、この街道は明治20年代ころまで頻繁に使用されていた。金森長近が飛騨の大名となると、道路の整備と共に各地に口留番所を設置し、旧下呂町内でも門和佐、門原、大洞、御厩野に設置された。御厩野口留番所は明治維新まで引き継がれ、その門扉が現在も御厩野地区で大切に保管され、下呂市文化財に指定されている。



1．**大威徳寺跡**　2．初矢峠石畳　3．初矢遺跡　4．山口遺跡
5．三ツ石遺跡　6．下新開遺跡　7．下島遺跡　8．杉戸遺跡
9．宮地城跡　10．小平遺跡　11．大畑遺跡　12．浜井場遺跡
13．御厩野口留番所跡　14．杉ヶ平遺跡　15．堂垣外遺跡　16．田尻遺跡
17．森ノ外遺跡　18．大崩遺跡　19．下ヶ屋・小和知遺跡　20．鎌井野遺跡
21．多谷遺跡　22．鳥屋ヶ野遺跡

第２図　周辺の遺跡

大威徳寺跡推定寺領範囲と寺院関連地について

大威徳寺跡に関する文献史料は数少なく、その概要は謎に包まれている部分が多い。江戸時代に書かれた『飛州志』や『飛騨国中案内』などには、その創建と廃絶の経緯が伝えられる。それによると、創建は鎌倉時代、源頼朝の命により文覚上人（一説には永雅上人）が寺院建立の地を求め諸国を巡っていたところ、この地を訪れた。すると山中にあった池が鳴動し、大きな龍が現れた。その龍に真の姿を現すように祈念したところ、牛に乗った小童の姿（大威徳明王）となった。その報告を聞いた頼朝がこの地が霊地であることを感じ、大威徳寺を建立し、大威徳明王を安置したという。また、中津川市加子母小郷地区にある大杉地蔵尊（第３図９）が祀られる地蔵堂には源頼朝や文覚上人にまつわる伝説が多く残されている。廃絶については、その弘治２(1556)年に飛騨三木氏と苗木遠山氏との間で起こった「威徳寺合戦」（合戦の年代については諸説あり）で堂塔の多くを焼失、さらに天文13（1585）年の「飛騨大地震」で壊滅したと伝えられる。しかし『飛騨国中案内』や高山市宗猷寺（第１図）に伝わる古文書などによると、江戸時代初頭頃までは細々と法灯が伝えられていたようである。なお、大威徳寺跡に関係する文献史料については、巻末の関係史料リストを参考されたい。

『飛州志』に引用されるところの『濃州長瀧寺阿名院所在経文末書』（頁末資料参考、以下『経文末書』と略す）には、大威徳寺の堂塔や寺領について記されている。長瀧寺（第１図）は郡上市白鳥町に所在する天台宗の寺院で、白山信仰の拠点であり泰澄が創建したと伝えられる。同じ天台寺院の大威徳寺とも関係が深かったであろうということが、この史料の記載内容からもうかがえる。前半の堂塔に関する記述の中での「西坊」跡地に「阿弥陀寺」（第３図２）が臨済宗の寺院として復興されたと伝えられ、さらに阿弥陀寺は現在の位置から南東部にあったと伝えられる（同図３）。阿弥陀寺には大威徳寺跡出土と伝えられる懸仏の一部である観世音菩薩坐像が大切に祀られている。「多聞坊」については、中津川市加子母小郷地区に「多聞坊伝承地」（同図10）がある。また名古屋市に所在する香積院にはその前身が加子母小郷の多聞坊であったと言い伝えが残る。また乗鞍地区に所在する慈雲院は十二坊の一つであると伝えられ、宮地地区に所在した福来寺（所在地不明）も大威徳寺に関連した寺院であったという伝承がある。

後半の記述の「寺領」については、文中に出てくる地名がいずれも大威徳寺跡周辺の地名であることは多くの先学が指摘するところである。この寺領に関する記述について若干の検討を加える。まず、「寺領門前和泉橋」の「和泉橋」は現在、野尻区内にある「泉橋」（第３図７）と考えられる。神渕谷が竹原川に合流する地点に掛けられた橋で、『飛騨国中案内』には「野尻村の内に大威徳寺の境内の田畑これ有り、字子馬場という所・・・」との記述があり、泉橋を渡ったすぐ西に「小万場」という小字が残る

『濃州長瀧寺阿名院所在経文末書』

「本堂丈間五間四方、地蔵堂、大黒堂、講堂、鎮守、拝殿、鐘楼堂、三重塔、二王堂坊数十二坊、東坊、多聞坊、南坊、竹林坊、西坊、青蓮坊、北坊、寂光坊、池坊、満月坊、福成寺。〇本尊八大威徳明王、塔八大日如来、鎮守八伊豆・箱根・熊野・白山四所也。寺領門前和泉橋ヲ境、北八加賀ナシ谷通リ尾ヲ境、東八クラカケ白山ノ尾舞台、西八野尻山境、守護不入也。乗政之内寺領之田一町、反、上田之内ホキグチ二十貫、ヲゴウリ二十貫、ヲゴウ二大般若田二反、天正十五年丁亥林鐘下旬慶俊記之」

参考資料　『濃州長瀧寺阿名院所在経文末書』

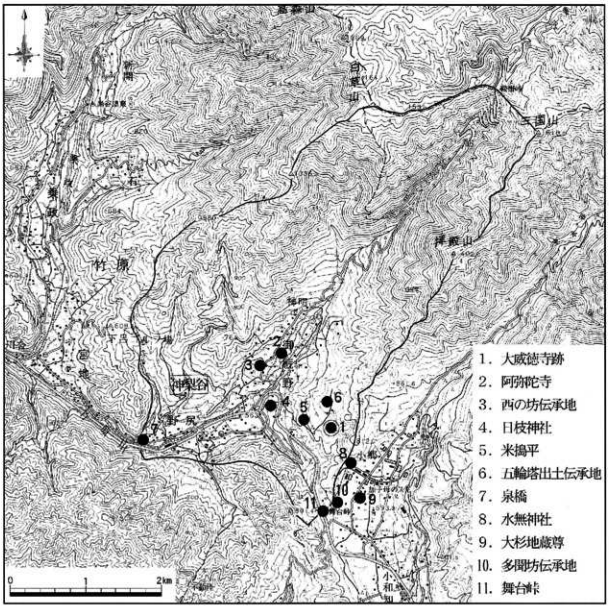
ことからこれを裏付ける資料となる。次に「北ハ加賀ナシ谷通リ尾ヲ境」の「加賀ナシ谷」とは、泉橋の谷沿いの北西方に「カミナシ」の小字が残ることなどから神梨谷と解釈したい。「東ハクラカケ白山ノ尾舞台」の「クラカケ」は蔵掛峠、「舞台」舞台峠を指すと考えられる。「白山ノ尾」については「拝殿山」が候補として挙げられるが、『岐阜県の地名』（平凡社　1989）によれば、拝殿山には御嶽信仰の遥拝所とされており解釈には検討を要する。以上のような知見をもとに、この資料で言う寺領の範囲を推定したのが第3図の太枠内にあたる。今後さらに検討を要するが、今回の推定範囲でいくと南北約6㎞、東西約5㎞という広大な範囲に及ぶ。

大威徳寺の末寺と伝えられる寺院に、中津川市加子母に所在する法禅寺（第1図）、永養寺（廃寺）、加茂郡東白川村に所在する大蔵寺（同図・廃寺）、常楽寺（廃寺）、蟠龍寺（廃寺）が挙げられる（第2表参照）。法禅寺は古くは極楽寺と称し、多聞坊から持ち込まれたと伝えられる仏像が祀られている。永養寺も古くは道照坊と称し末寺であったと伝えられる。東白川村に所在した大蔵寺、常楽寺、蟠龍寺はいずれも苗木藩による廃仏毀釈が行われたことなどにより廃寺となった。また『新修東白川村誌』（東白川村誌編纂委員会　1982 年）によると、神上村邦好家には大威徳寺で旧蔵されていた大般若経 600 巻が所蔵されていたという。

この他に大威徳寺に関連する社寺として、高山市宗猷寺、下呂市萩原町養松堂、同市金山町万福寺、同市門和佐和川白山神社が挙げられる。宗猷寺、養松堂には大威徳寺で祀られていたと伝えられる仏像が所在する。万福寺は古くは亀像院と称する天台寺院であったと伝えられ、『飛州志』が引用するところの『万福寺蔵阿弥陀経後書』には「大威徳寺住侶良玄」という名が出ている。これは天正7（1579）年に書かれたもので、大威徳寺に関係する文献資料の中では最も古いものであるが残念ながら現存しない。和川白山神社所蔵の『大般若波羅蜜多経箱墨書銘』に「多聞慶俊」という名が残る。このように現在に残る伝承や文献資料を見てみると、大威徳寺が当時、この地域において厚く信仰されていた様子がうかがえる。

第2表　大威徳寺関連社寺

社寺名	所在地	備　考
阿弥陀寺	下呂市御厩野	大威徳寺西の坊跡地に建立されたと伝えられる。伝大威徳寺州土懸仏が所在する。
慈恩院	下呂市乗政	大威徳寺十二坊の一つと伝えられる。
法禅寺	中津川市加子母万賀	末寺。旧極楽寺。多聞坊から移し祀ったと伝えられる仏像が所在する。
永養寺	中津川市加子母井尻	末寺。旧道照坊。廃寺。もとは万賀黒沼田にあったと伝えられる。
大蔵寺	加茂郡東白川村佐見	末寺。廃寺。
蟠龍寺	加茂郡東白川村五加	末寺。廃寺。
常楽寺	加茂郡東白川村神土	末寺。廃寺。
万福寺	下呂市金山町中津原	旧天台宗亀像院。『万福寺像阿弥陀経後書』に「大威徳寺住侶良玄」とある。
養松堂	下呂市萩原町西上田	臨堂の薬師如来が大威徳寺より移し祀ったものと伝えられる。
宗猷寺	高山市宗猷寺町	寛永9（1632）年建立の禅宗寺院。大威徳寺の復興に尽力する。観音堂内の薬師如来、観音・地蔵菩薩は大威徳寺から移されたものだと伝えられる。
和川白山神社	下呂市門和佐	「大般若波羅蜜多経箱墨書銘」に「多聞慶俊」と書かれる。



第３図　推定寺領範囲と寺院関連地

神　梨　谷

泉　　橋

第３章　調査の成果

第１節　平成15年度調査

１　調査の目的と方法

平成15年度の調査は、①伝本堂跡を中心とする寺院中心部の範囲確認、②伝本堂跡など、既知の遺構の規模などの確認、③その他の遺構の有無の確認の３点を目的に、主に伝本堂跡を中心とした70×60m程の範囲を対象とした。調査に先立ち、指導委員会の助言に基づいて、遺跡内をＡ～Ｋの11の地区に分け（第４図）、表採遺物なども地区別に取り上げ、必要に応じてさらに細かい平坦面や遺構ごとに取り上げた。試掘調査は幅３mのトレンチを基本とし、掘削は手作業で行った。トレンチは伝本堂跡の建物主軸に沿って設定し、検出した遺構に応じて適宜拡張した。また、必要に応じて任意の大きさのテストピットを設定した。最終的に設定したトレンチはＡ～Ｊの10本、テストピットは10ケ所である（第５図）。各トレンチ設定の目的は、以下の通りである。

Ａトレ：伝本堂跡の北側の確認および北方に近接する平坦面での遺構の有無を確認する。

Ｂトレ：伝本堂跡の東側の確認および東方に近接する石列周辺での遺構の有無を確認する。

Ｃトレ：伝本堂跡の南側（主に向拝部分）および南方に近接する平坦面での遺構の有無を確認する。

Ｄトレ：伝本堂跡の西側および本堂西建物の確認、西方の法面での遺構の有無を確認する。

Ｅトレ：本堂西建物の北側および寺院中心部西法面での遺構の有無を確認する。

Ｆトレ：本堂西建物の確認および西建物南方の法面や平坦面での遺構の有無を確認する。

Ｇトレ：寺院中心部の北に近接する25×20m程の平坦面の遺構の有無を確認する。

Ｈトレ：Ｇトレを設定した平坦面の西に隣接する平坦面での遺構の有無を確認する。

Ｉトレ：寺院中心部の北に近接する25×20m程の平坦面および北法面の遺構の有無を確認する。

Ｊトレ：Ｃトレの東方に露出する礫を中心に、Ｆ区との境近くの法面上の遺構の有無を確認する。

また、範囲確認の試掘であるため、トレンチ内で検出した遺構（ＳＫ・Ｐｉｔなど）の調査はプランの検出に留め、掘削などは極力控えるようにこころがけた。

平成15年度の調査では、鎌倉・室町時代の山茶碗、古瀬戸、大窯製品を中心に約2,000点の遺物が出土した。その多くは細かく破砕した小片で、全体の器形を復元できる遺物は少数である。また、伝本堂跡・本道西建物を中心に、鉄製の釘や古銭（洪武元寶）などの金属製品も約200点出土している。遺物の分類、名称、年代観などは基本的に既存の報告・研究成果に依拠しており、以下にその概要を記しておく。

灰釉陶器　『須恵器集成図録　第３巻　東日本編１』（齋藤孝正 1995）を参考にした。

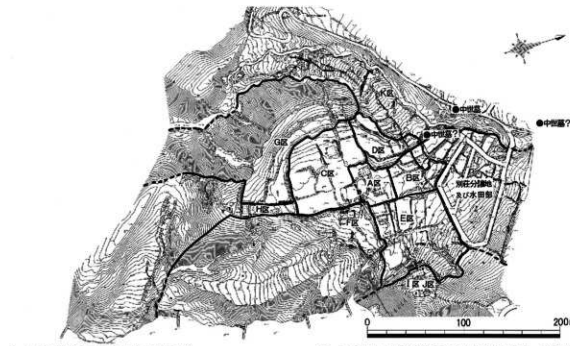
山茶碗　「山茶碗研究の現状と課題」（藤沢良祐 1994）を参考にした。

古瀬戸　「中世瀬戸窯の動態」および「付編古瀬戸編年表」（藤沢良祐 1997）を参考にした。

大窯製品　「瀬戸・美濃大窯製品の生産と流通－研究の現状と課題－」（藤沢良祐 2001）を参考にした。

連房式登窯　「本業焼きの研究(1)～(3)」（藤沢良祐 1987～1989）を参考にした。

貿易陶磁　『日本出土の貿易陶磁　東日本編』（国立歴史民俗博物館 1994）を参考にした。



A 区：伝本堂跡を中心とした寺院中心部

B 区：寺院中心部に近接する 40 cm程高くなった平坦面

C 区：寺院中心部の前面（南方および西方）に近接する平坦面

D 区：寺院中心部の北西方に近接する、緩斜状に展開する平坦面

E 区：寺院中心部から、東方の伝三重塔跡へ至る参道の両側に展開する平坦面

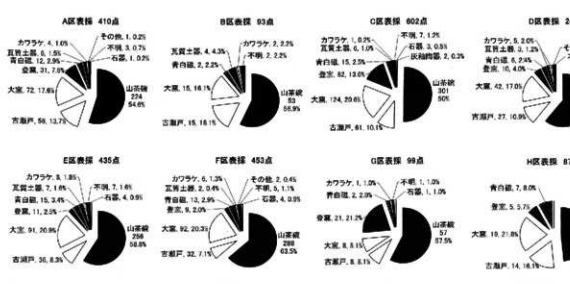
F 区：寺院中心部の南東に近接する、2 m程下がった平坦面と、その東南方に展開する尾根斜面

G 区：C区の南西に近接する腰郭状の平坦面と、その西南方に展開する急斜面

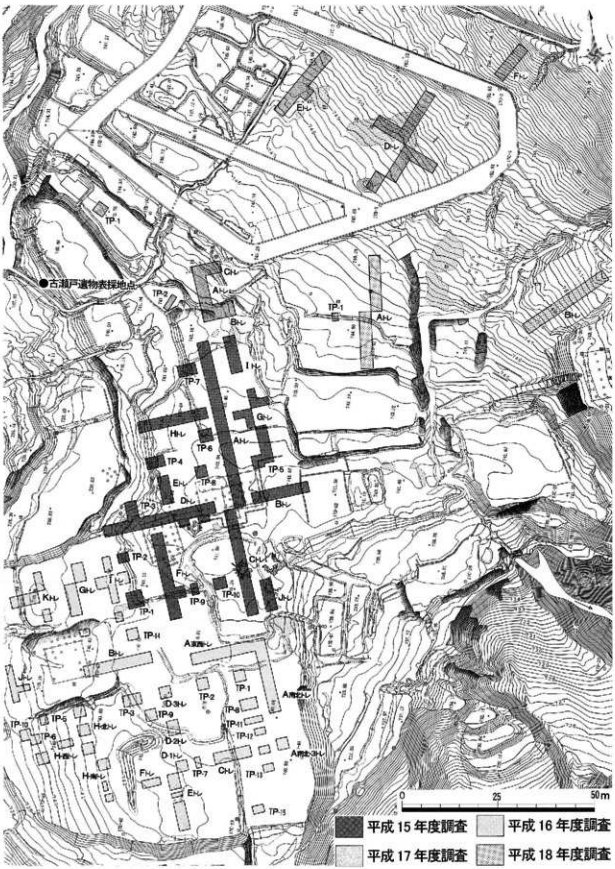
H 区：伝山門跡からC区へ至る参道と、山門跡の南方に展開する斜面

I・J区：伝三重塔跡が位置する平坦面（I区）と伝鐘楼跡が位置する平坦面（J区）を含めた、寺院中心部東方の丘陵地

K 区：寺院西方を流れる谷川（通称林畑沿い）両岸の緩斜面



第４図　遺跡内地区割り図と表採遺物点数



第５図　トレンチ設定図

2　主な遺構と出土遺物

①　伝本堂跡(第６図、第８～10 図、第 14 図)

寺域のほぼ中央に位置し、『絳文束書』は「大間五間四方」と伝える。桁行(正面)五間の建物の周囲に幅約 1.8mの縁側が巡り、正面には幅約３mの「向拝」が取り付けられ、その前方(南側)に 70×50×20 ㎝程の礫を並べた石段が設けられる。桁行の柱の間隔は約 2.4mであるが、真中の二間目の部分は約 2.7mと長くなる。建物の後方は後世に破壊を受けており、梁間(奥行き)方向の規模は不明確であるが、今回の調査で、縁側の束石を含めた五列目の礎石８個のうち７個を確認した。確認できた範囲は東西約 15.9m、南北約 9.3mで、奥行きは三間分である。梁間方向の前側二間は柱の間隔が約 2.4mであるが、二間目は約 2.7mと間隔が長くなることから、建物前面の二間分が参拝をするための外陣、その後方が本尊を安置する内陣と考えられる。中世仏堂では、通常内陣は二間以上の広さがあるため、梁間は四間以上あったと考えて良いであろう。建物の規模が五間四方か五間×四間であるかはさらに検討を要するが、Ａ３トレと４トレの境界から土坑を１基確認している(第 13 図)。形状は長軸１m、短軸 75cmの南北に長い不整形で、本堂跡の南から五列目、東から四列目の礎石(第８図 38)の北側約 6.6mの所に位置する。礎石の抜き取り痕との仮定が許されるなら、仮に本堂の四間口と五間口を 2.4m、縁側を 1.8mと仮定すると、調度良い位置関係にあたる。これをもって本堂の規模を断定することはできないが、五間四方であれば、『絳文束書』の記述とよく一致することになる。礎石は地中に埋もれているものも含めて 40 個が確認でき、そのうちの 39 個を第８図～第 10 図に示した。125×75 ㎝程の長大なものから、70×50 ㎝程のやや小型のものまで見られるが、地表面に露出していたものも含め、ほとんどの礎石が破砕したり、被熱により赤く変色(図中の網掛けの部分)しており、中には上面が径 30 ㎝程の円形に赤く被熱した礎石(12・17・32 など)も散見される。『苗木遠山家譜』などに見られる、いわゆる「威徳寺合戦」で焼失したとの伝承との関係がうかがわれる。また、50×45 ㎝前後のやや小型の石で、伝本堂跡の礎石の並びから外れた礎石(第 10 図 49～60)も見られ、本堂の廃絶後に三間×三間程度の小堂が再建された可能性が考えられるが、詳細は第６章で述べたい。

伝本堂跡に設定したトレンチ(Ａ１・２、Ｂ２、Ｃ１、Ｄ２トレ)からは、299 点の遺物が出土している。その内訳を第 13 図に、主なものを第 14 図に示した。１の香炉(華盤)は、全体の器形が分る数少ない遺物の一つである。いわゆる「袴腰型」で、鉄釉が施され、高台は通常の三足ではなく削り出し輪高台である。口縁部は波状に成形された百合口となる。古瀬戸中期後半頃の所産と思われる。２は「細腰型」瓶子の肩部から腰部にかけての破片で、二次被熱のため釉はとんでいる。６点の破片が接合したものであるが、その内の１点は調査で確認できた本堂北端よりも外側(第５図ＴＰ８付近)で表面採集したものである。３は「直腰型」瓶子の胴部の小片、４・５は瓶子皿類、いわゆる「根来型瓶子」の脚部で、灰釉が施されるが二次被熱のために変色している。７は筒型容器、８の小皿は体部が直線的に立ち上がり、口縁部がわずかに外反して厚さを減じて、端部が丸く仕上げられる。外面は口縁部から体部の 1/2 前後まで、内面は全面に灰釉が掛けられる。なお、６は灰釉陶器の長頸瓶と考えられ、Ａ３トレから出土したものであるが、伝本堂跡の梁間が四間以上に広がる可能性が高いと仮定し、本堂出土遺物として紹介した。また、19 の祥符元寶はＣ１トレ(向拝部分)から出土した北宋銭で、1007 年の初鋳である。

② 本堂西建物(第7図、第11～14図)

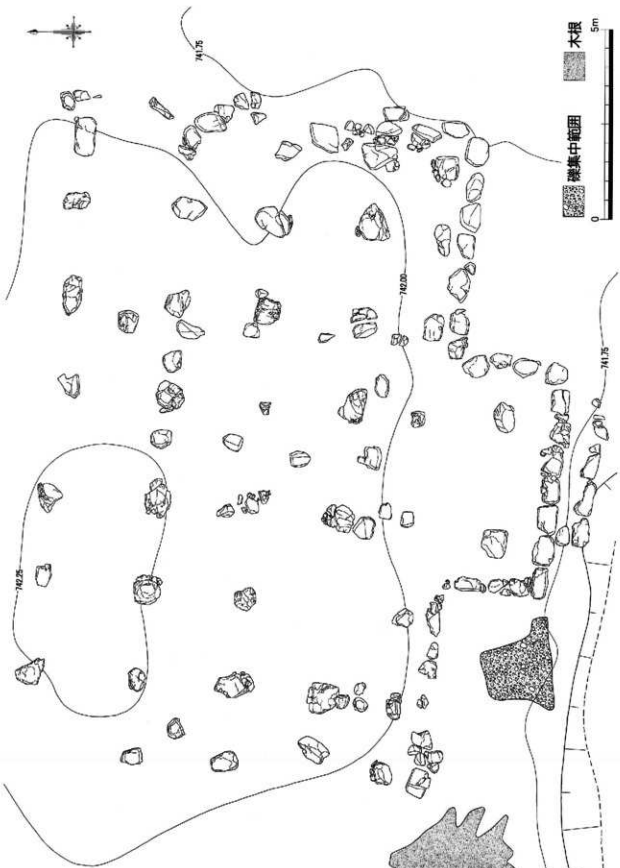
調査前、伝本堂跡の西側に、礎石と思われる石が約20個露出していたが、今回の調査で、桁行二間、梁間四間の建物の周囲に幅1.2m程の縁側が巡り、正面に幅約2.7mの「向拝」が付く構造で、大きさは8.8×10.3m程の建物であったことが明らかになった。礎石は44個中、地中に埋もれているものも含めて42個が確認でき、そのうち40個を第11～13図に示した。伝本堂跡と同様にほとんどが被熱により赤く変色しており、8や14の礎石のように破砕し、痕跡がかろうじて識別できるものも見られる。前から五列目の中央の礎石2個(第11図29・30)が、約80cm後ろに据え付けられていることから、ここに須弥壇があった可能性も考えられる。建物の主軸方位が伝本堂跡とは微妙に異なるが、後述する「軒廊(渡り廊下)」で伝本堂跡とつながれていることなどを考慮し、建立や廃絶の時期に多少の前後関係はあるとしても、基本的には伝本堂跡と同時に存在していたと考えたい。なお、この建物の性格については、現在のところ明確な解答を持ち合わせていないが、大台寺院においては、「常行堂」「法華堂」が本堂に次ぐ重要な仏堂であると言われることから、それに類するものであった可能性が推測される。いずれにせよ、本堂と並んで、大威徳寺の寺院中心部を構成する建物と考えて良いであろう。

本堂西建物に設定したトレンチ(D4・5、F1・2トレ)からは、73点の遺物が出土している。その内訳を第13図に、主なものを第14図に示した。9・10は有耳壺の口縁部および底部である。比較的近接した地点から出土しており、胎土や色調などから同一個体と推測される。古瀬戸後期頃の所産と思われる。11は瓶子の肩部の破片で、灰釉が施されるが二次被熱のために変色している。棒状の工具で唐草状の文様が施される。また12～18に図示した釘類は、いずれも角釘で、頭の形状がL字形のもの(13・14・15・18)とT字形のもの(12・16・17)が見られる。その長さから、6cm前後(2寸)、9cm前後(3寸)、12cm前後(4寸)の3群に分類することができる。

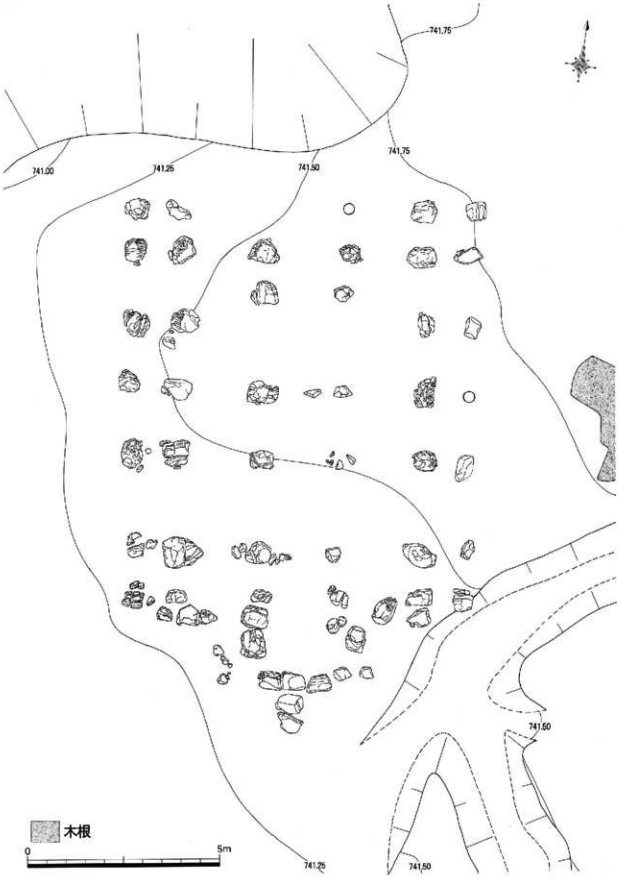
伝本堂跡と本堂西建物の遺物組成については、ほぼ同様の傾向を示すが、どちらも釘類に代表される金属器が占める割合が50%前後と高い点が特徴となる。また、伝本堂跡では、本堂西建物と比べて、大窯以降の比較的新しい時期の遺物が多く含まれるが、これは、両者の廃絶に若干の時期差があるか、もしくは伝本堂跡の建替えがあったことを示唆するものと思われる。

③ 軒廊(渡り廊下)(第15図)

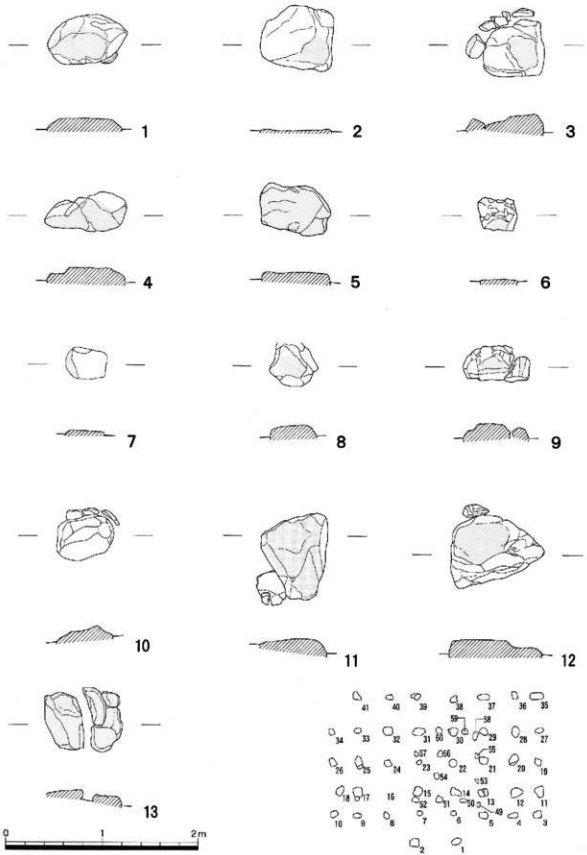
伝本堂跡の西側からは、基壇化粧の石列が確認できなかったことから、本堂正面の石列がそのまま真っ直ぐに本堂西建物まで伸びていたと考えられる。さらに今回の調査で、伝本堂跡と本堂西建物の間から礎石状の石を6個確認した。礎石は本堂正面から西に伸びる石列とほぼ平行して東西方向に二列に据え付けられ、南側から4個、その対岸となる北側から2個が確認できた。南側の礎石列は残存状況も良く、礎石と礎石の間にも40×20cm程の礫が並べられる。北側は両端の二個が確認できただけであるが、これらの礎石は、伝本堂跡の南西隅の縁側と本堂西建物の北東隅の縁側をつなぐ「渡り廊下」状の施設に伴うものと推測され、2つの建物が長さ約6.4m、幅約1.2mの「軒廊」でつながれていたと考えられる。礎石の間隔が、東から1.8m、1.8m、2.8mと等間隔ではないことから、最初から計画的に造られた施設ではなく、二つの建物が建立された後に取り付けられた可能性が推測される。



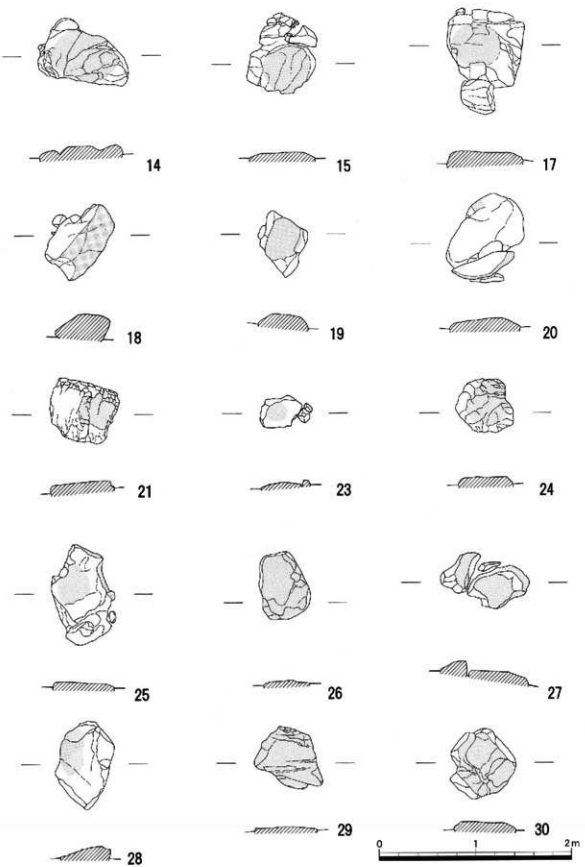
第６図　伝本堂跡平面図



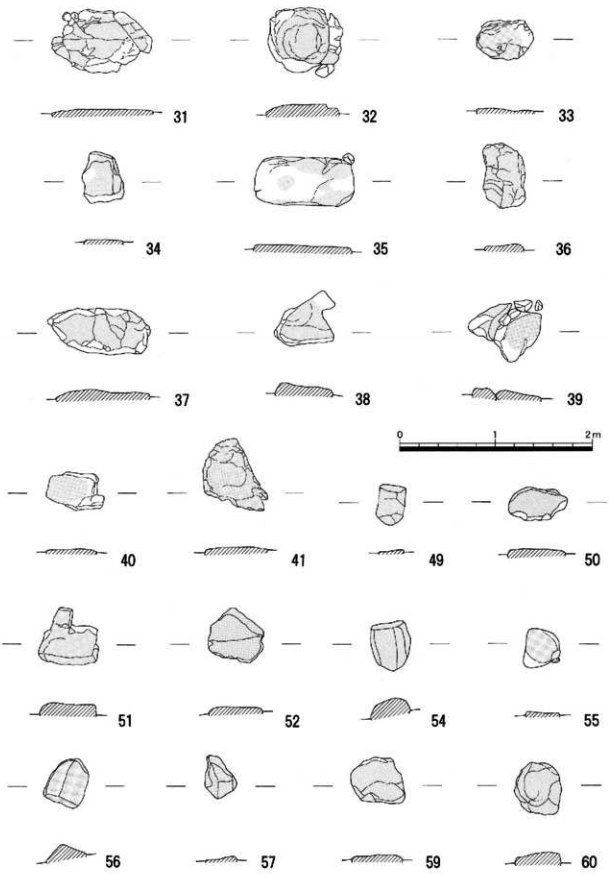
第７図　本堂西建物平面図



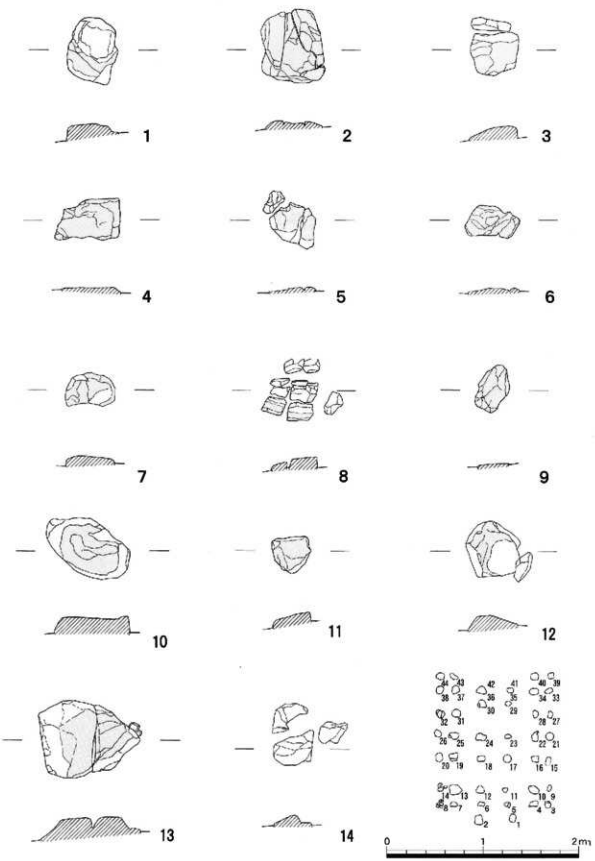
第８図　伝本堂跡礎石（１）



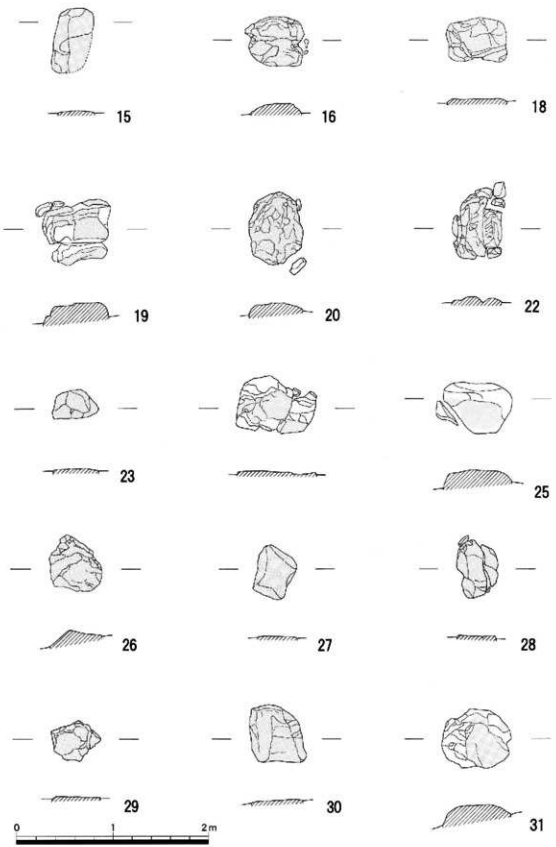
第９図　伝本堂跡礎石（２）



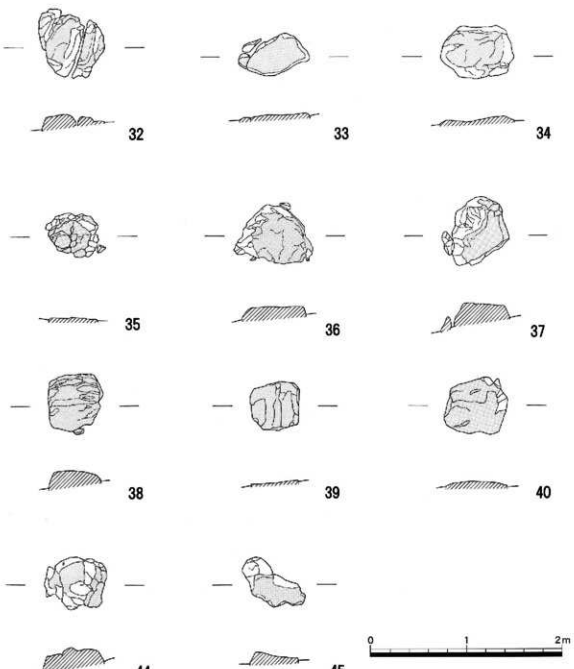
第10図　伝本堂跡礎石（3）

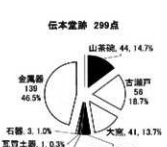


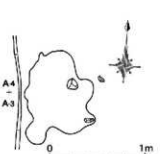
第11図　本堂西建物礎石（1）



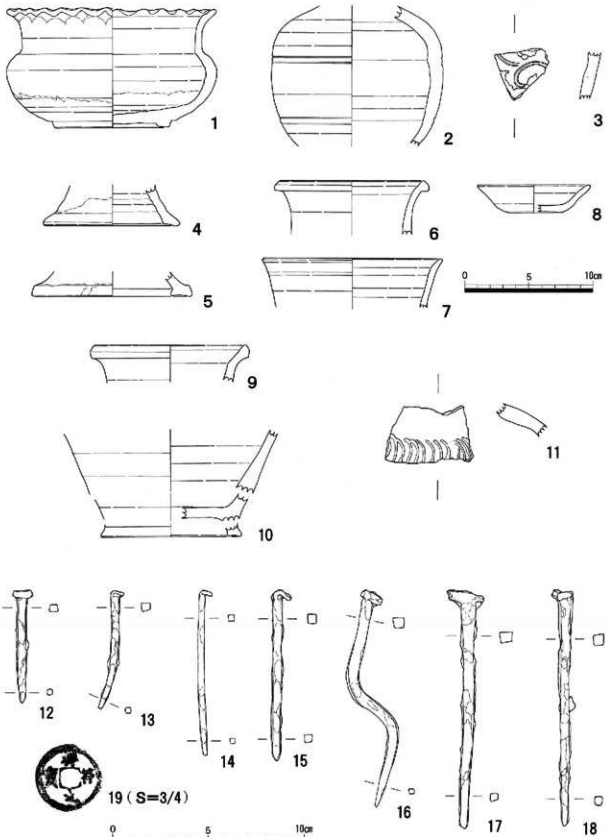
第12図　本堂西建物礎石（2）



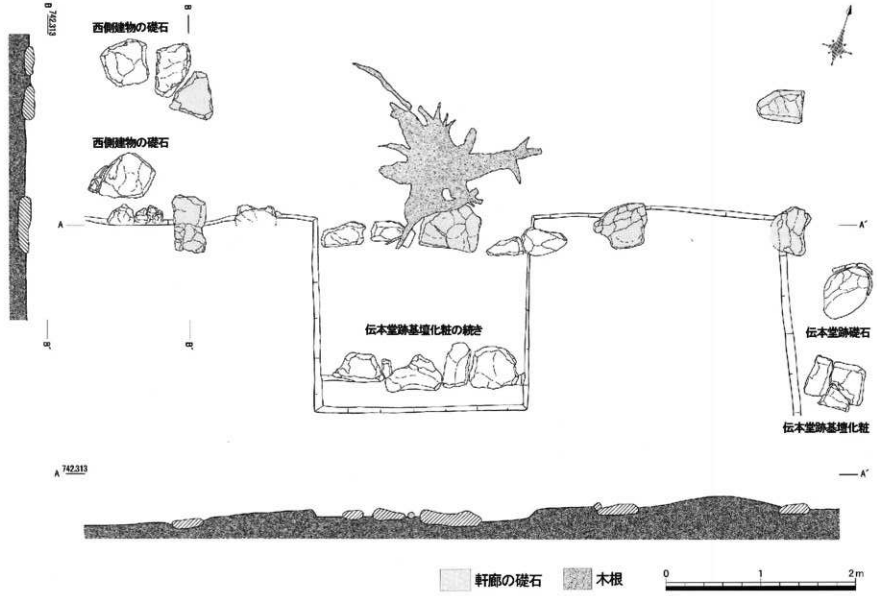




第13図　本堂西建物礎石(3)、出土遺物点数、A3・4トレSK1平面図



第14図　伝本堂跡・本堂西建物出土遺物



第15図　推定軒廊跡平面図

④　ＴＰ５（第 16 図）

ＴＰ５では、本堂東側の基壇化粧の石列の続き約４ｍと、その石列が途中で東方へほぼ直角に曲がることを確認した。基壇化粧には 50×30×15 ㎝程の石が使用されるが、東に曲がってからは 80×50×40 ㎝前後の大きⅡの石が使用される。調査で検出したのは約 3.5ｍであるが、石列は東方の平坦面の西法面まで続いていたと推測される。この東西方向の石列は、伝木堂跡から東へ向かう通路が派生しており、その南端を示すものと思われるが、通路の北端を示すような痕跡は確認できなかった。また、この石列の途中に 40×20 ㎝程の小型の石が用いられた箇所があり、東西方向の通路に直交する形で南北方向の通路もあったと考えられる。

ＴＰ５からは遺物が 156 点出土しているが、ほとんどが図示に耐えない小片であった。20 は古瀬戸の折縁深皿である。外折した口縁部が折り返されて玉縁状に肥厚し、口縁内側の中央付近に断面三角形の稜が設けられる形状で、古瀬戸後Ⅱ期頃の所産と思われる。

⑤　Ｂ４トレ（第 17 図）

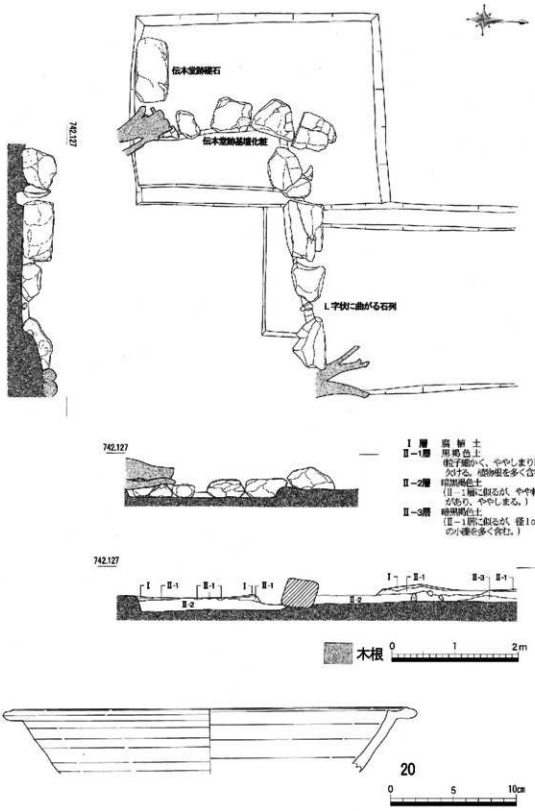
本堂の東方、池跡の西方には 20×15ｍ程の長方形に石列で区画された空間がある。特に西側の寺院中心部との境は 80×50×45㎝ 程の大きⅡの石が用いられ、その西側から幅 75 ㎝、深さ 20 ㎝程の排水溝を確認した。この石列と排水溝が寺院中心部の東端と推測される。また、区画の中からも礎石と思われる石が埋もれていることが確認でき、何らかの建物があった可能性が高いと考える。伝木堂跡を中心に、本堂西建物と左右対称の位置関係にあることから、いわゆる「仏地」的な性格の建物と考えたいが、詳細は今後の調査を待って検討したい。

Ｂ４トレからは 104 点の遺物が出土しているが、いずれも図示が困難な小片であった。山茶碗が占める割合が 77.0％(80 点)と圧倒的に高く、青・白磁が 6.7％(７点)と他のトレンチに比べて目立つ点が注目される。また、排水溝からは 25 点が出土しており、その内訳は灰釉陶器１点,山茶碗 24 点である。図示した遺物のうち、21 は池跡周辺で表採した、22 はＢ３トレから出土した山茶碗・小皿で、21 は底部が下方に突出する。どちらも６～７型式頃の所産と思われる。

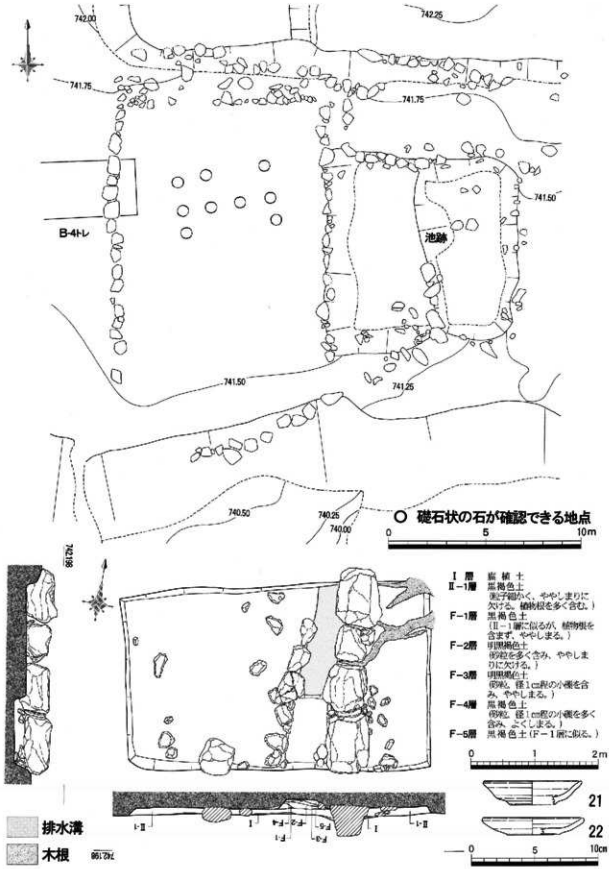
⑥　Ｆ４・５トレ（第 18 図）

木堂西建物の南側から、石段とそれに伴う門跡と思われる礎石を検出した。石段は、本堂西建物のほぼ正面に位置し 70×45 ㎝程の石を三段に積んだもので、その上の平坦面から礎石を４個確認した。正面一間で、木柱の後ろに控え柱の立つ、「薬医門」と考えられ、本柱の間は 2.7ｍを計る。この石段や門は、本堂西建物や寺院中心部への入り口と推測される。

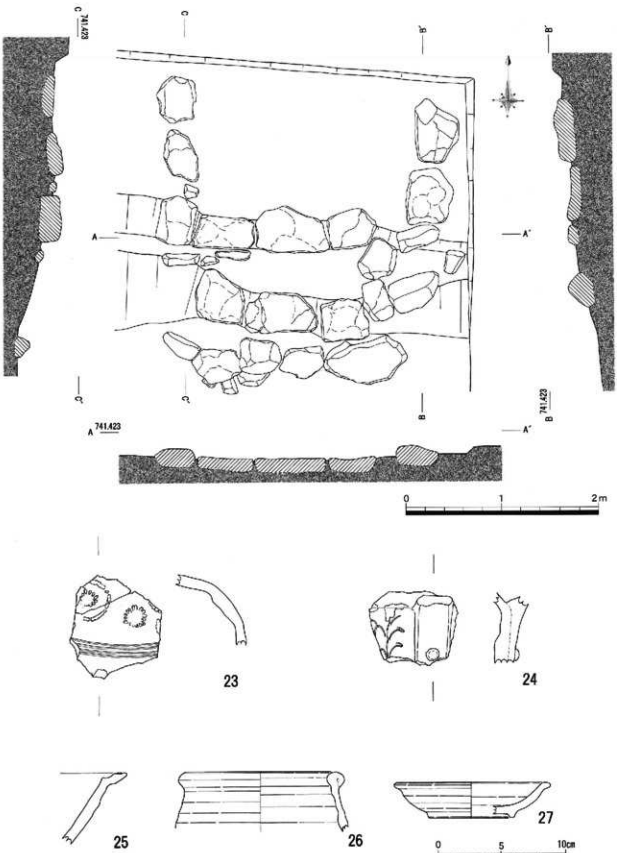
Ｆ４・５トレからは、294 点の遺物が出土している。その主なものを第 18 図に示した。23 は瓶子の肩部の破片で、鉄釉が施され、横方向の沈線と押印による菊花の印花文が描かれる。24 の水注には幅広の帯状の把手の一部が残っており、粘土瘤で鎺のようなもので留めた様子が表現される。肩部に明瞭な稜を持った円筒形の胴部に、ヘラ状の工具で唐草状の文様が施される。25 の折縁深皿は口縁部がほぼ水平方向に外折し、端部が内側に折り返されその内側に段が形成されるもので、古瀬戸後Ⅰ～Ⅱ期頃の所産と考えられる。26 の茶碗は口縁部が内傾して立ち上がり、端部が外側に折り曲げられて玉縁状に丸く仕上げられ、鉄釉が施される。古瀬戸後期頃の所産と考えられる。27 の志野丸皿の体部は丸みをおび、口縁部は外反して端部は丸く仕上げられ、断面台形の削り出し輪高台を持つ。釉は高台まで広く施される。大窯第４段階頃の所産と思われる。



第16図　TP5平・断・立面図、出土遺物



第17図　池跡周辺遺構分布図、B4トレ平・断・立面図、出土遺物



第18図　A区石段平・断面図、出土遺物

⑦　ＴＰ６・Ｇ南拡張トレ(第 19 図)

伝本堂跡の北方は、本堂跡の礎石が残る面よりも 40 ㎝程高い平坦面となっており、その南法面に設定したＧ南拡張トレでは、40×20 ㎝前後の礫を２～３段に積んだ石積を確認した。検出したのは約３ｍの範囲で、基本的に石を縦方向に使用して積まれている。所々石が抜け落ちているが、石積は法面にそって東西に伸び、途中で北方へほぼ直角に曲がる。そのコーナー部分に設定したのがＴＰ６であり、ここでは法面に沿って北に伸びる石列を確認した。Ｇ南拡張トレでの石積とほぼ同じ大きさの石を用い、主に縦方向に使用されているが、ここでは石を積むのではなく、一列に並べただけであった可能性も考えられる。これらの石積や石列によって、伝本堂跡北方の 25×20m程の一角が区画されていたと推測され、寺院中心部との北の境を示すものと考えられる。ただし、この区画内から礎石など建物の明確な痕跡は確認できていない。

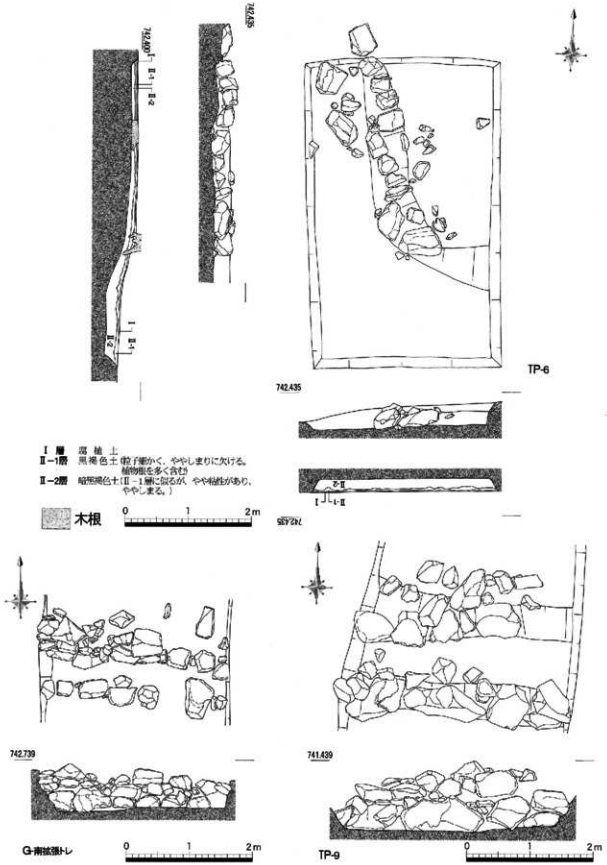
⑧　ＴＰ９、Ｄ６・７トレ・ＴＰ３、ＴＰ１（第 20・21 図）

ＴＰ９では、⑥で述べた石段の東方に続く石積を確認した。途中に幅 60 ㎝程の「犬走り」が設けられるため、階段状に２段に石積が残る形となる。１段目は最大で 55×135㎝程の比較的大きな石を横方向に使って並べ、犬走りの上の２段目は 70×50×20 ㎝程の石を２～３段積み上げたもので、一番下は石を主に横方向に、それから上は主に縦方向に使用しているように見受けられる。この石積の続きやコーナーと思われる部分が、西方のＴＰ１(第 21 図)や西法面に設定したＤ６・７トレ、ＴＰ３(第 22 図)などでも確認でき、伝本堂跡や本堂西建物が建つ平坦面の、南及び西の法面には石積が設けられていたと考えられる。なお、築地塀などの上部施設については、いずれのトレンチからも明確な痕跡を確認することはできなかった。

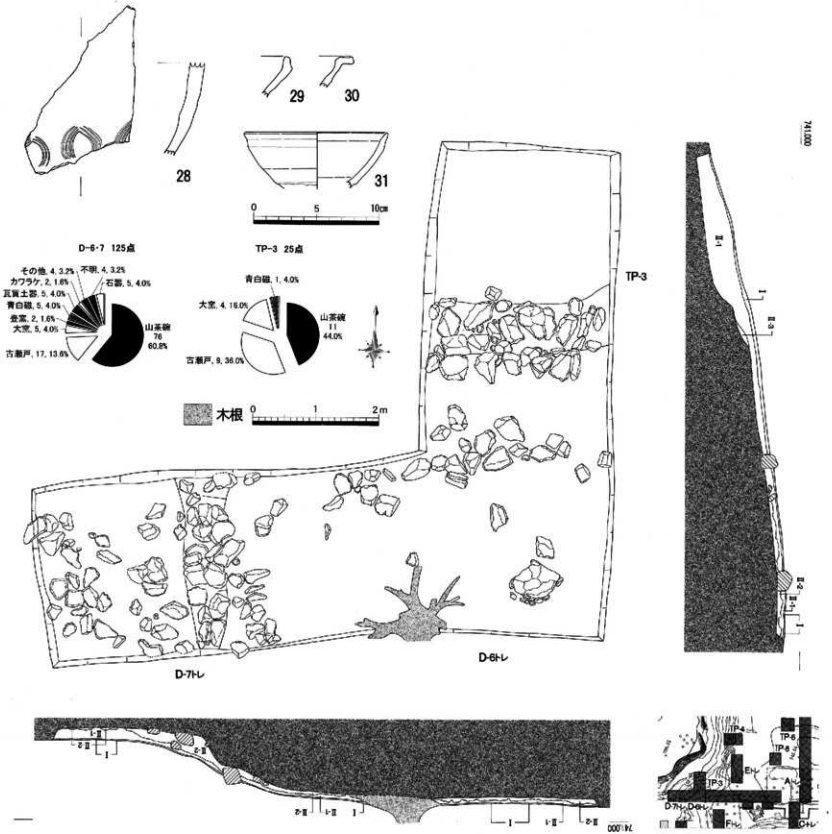
ＴＰ９、Ｄ６・７トレ、ＴＰ３、ＴＰ１からは、223 点の遺物が出土している。その主なものを第 20・21 図に示した。28～33 はいずれも古瀬戸の範疇に入るものである。28 は瓶子の胴部で、灰釉が施され、櫛状の工具で宝珠形の文様が描かれる。29 の擂鉢は口縁部がわずかに肥厚し、断面三角形に上方に伸びる形状で、古瀬戸後Ⅳ新期に、30 の折縁深皿はほぼ水平方向に外折した口縁部の端部が上方にわずかにつまみあげられ、外面に面取りが施される形状で、古瀬戸後Ⅱ～Ⅲ期頃に帰属すると考えられる。31 の天目茶碗は体部に丸みをおび、口唇部のくびれも少ない。古瀬戸中Ⅳ期～後Ⅰ期頃の所産ではないかと思われる。32 は「直腰型」瓶子の底部で、灰釉が施される。33 は擂鉢型小鉢に類する器種と思われる。口縁端部がわずかに外反して丸く仕上げられ、内面のやや低いところに小突起が付けられる形状で、全面に灰釉が施される。34 の端反皿は体部に丸みを持ち、口縁部は外反して端部は丸く仕上げられ、大窯第１～２段階頃の所産と思われる。35 は青磁碗の底部である。

⑨　Ｅトレ(第 22 図)

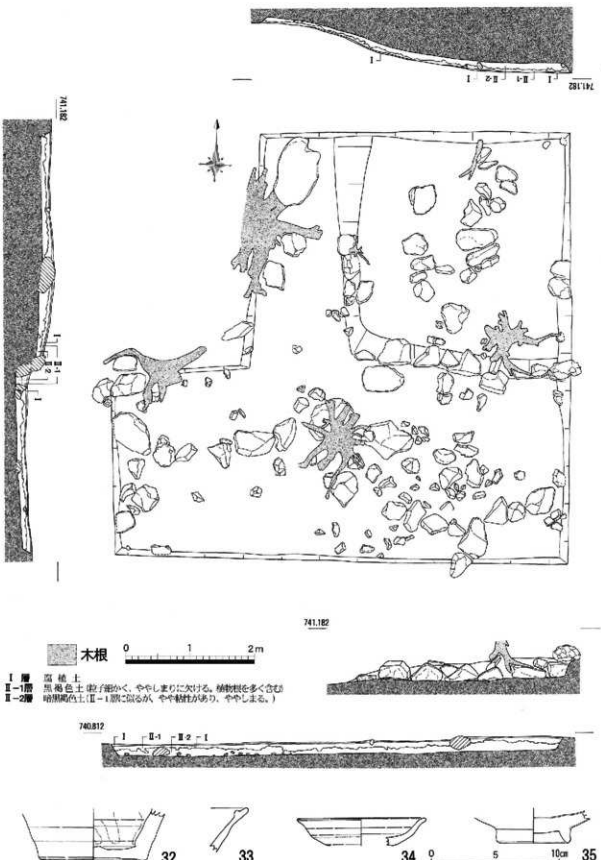
Ｅトレでは、礎石状の石５個(図中の網掛けをした礫)を確認した。石の間隔は、東西方向が約 90 ㎝、南北方向は北から約 105㎝、150㎝を測る。東側は未確認で、中央近くの４個で完結する小規模な祠状の施設であった可能性や、建物に伴うものではない可能性も否定できない。建物の北西隅と仮定すると、伝本堂跡の主軸から約 20° 西に振れることになり、灰釉陶器の多口瓶も出土していることから、伝本堂跡との時期差も想定される。西法面近くで検出した礫が集中する箇所については、築地塀の基礎であった可能性もあるが、確証を得るにはいたっていない。



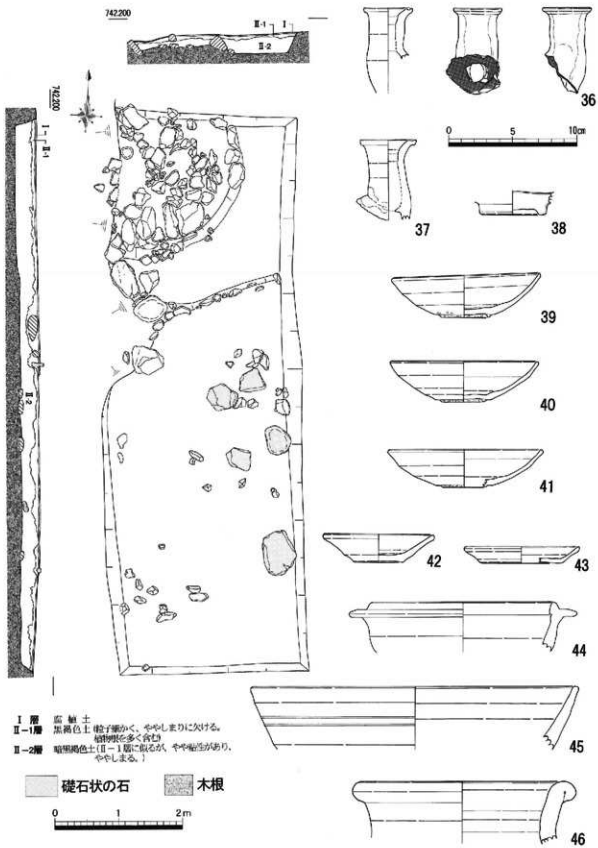
第19図　TP6平・断・立面図、G南拡張トレ平・立面図、TP9平・立面図



第20図　D6・7トレ・TP3平・断面図、出土遺物、出土遺物点数



第21図　TP1平・断・立面図、出土遺物



第22図　Eトレ平・断面図、出土遺物

Eトレからは175点の遺物が出土しており、その主なものを第22図に示した。36・37は灰釉陶器の多口瓶の注口部で、県内では4例目(※)の出土となる。折戸53号窯式期から東山72号窯式期頃の所産と思われるが、口縁端部の形状や口径がやや異なるため、別個体の可能性も考えられる。また、36には肩部との接合部に漆状の付着物が観察され(図中の網掛けの部分)、小破片が接合されているのがわかる。付着物の成分については科学的な分析を待たなければならないが、一度破損したものを「漆接ぎ」によって補修し、伝世されたものと考えられる。38は青磁碗の底部で、高台の内面まで釉が施される。39～45は山茶系陶器、いわゆる山茶碗に帰属するもので、東海地方の中世遺跡では日常雑器として最も数多く出土する一群である。39～41の碗は第10型式に、42の小皿は第6型式に、43の小皿は第9型式に、それぞれ帰属するものと考えられる。44は火舎香炉、45は仏鉢と考えられ、寺院特有の特殊な器種と言えよう。46は甕の口縁部で、頸部が外反して立ち上がり、口縁端部が外方に折り曲げられて断面円形に丸く成形される形状を示す。大窯期の所産と思われる。

⑩ I9トレ・TP7(第23～25図)

伝本堂跡北方に隣接する25×20m程の区画での遺構の有無を確認するため、A8・9トレに加え、Gトレ、Iトレ、TP7を設定した。北端に設定したI9トレや西法面に設定したTP7では石積を確認することができ、この平坦面の南・西・北の法面が石積や石列で補強されていることが分かった。いずれも長軸で30～50cmほどの石を使用し、基本的には縦方向を意識して使用していると見られるが、横方向に使用される石も散見される。特に西方のD区平坦面との比高差は1m前後を計るためか、2段を意識して石が積まれていると見受けられるが、残存状況があまりよくないこともあり、「積む」というよりも「貼る」とか「並べる」と言ったほうがふさわしいとの印象を受ける。結果的に築地塀などの上部施設や、平坦面での建物の痕跡などを確認することはできなかったが、北法面の比高差がわずか30cm前後であるにもかかわらず、石を積み、補強するのは、平坦面に何らかの施設があったことを示すものと考えたい。

I9トレ・TP7にA8・9トレ、I8トレを加えた、B区の北方に設定したトレンチからは、653点という大量の遺物が出土した。その内訳を第25図に、主なものを第25・30図に示した。

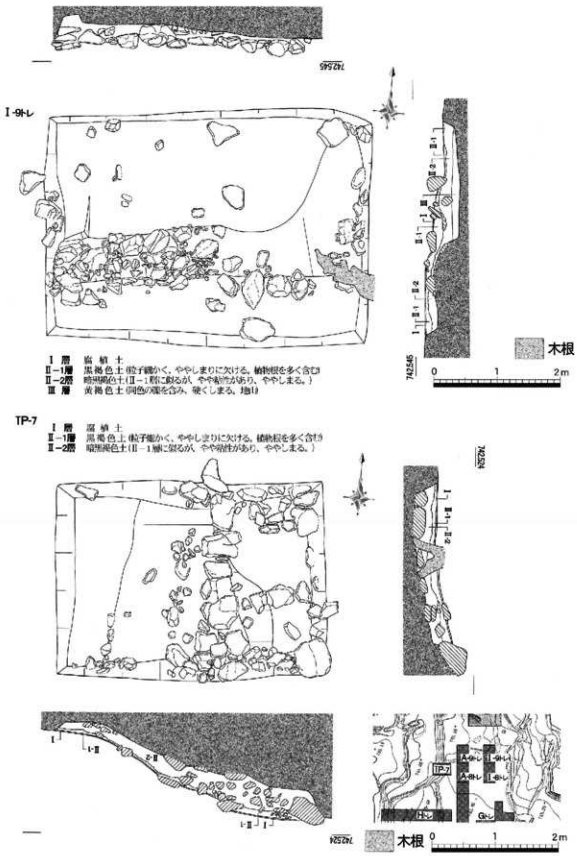
47・48は古瀬戸の平碗である。47の体部は立ち上がりが緩く、口縁部がS字状に緩く屈曲する。48の高台は削り出し輪高台で、径5.2cmを測る。古瀬戸後期頃の所産と思われる。49・50・54・55は擂鉢である。49・54は口縁端部がわずかに外反して丸く仕上げられ、内面のやや低いところに小突起が付けられる形状で、49は指頭により片口に成形される。50は口縁部がわずかに肥厚し、断面三角形に上方に伸びる形状で、古瀬戸後Ⅳ新期に帰属すると思われる。55は内湾気味に立ち上がった口縁部の端部が肥厚し、上方にわずかにつまみ上げられてかすかな突起となり、外面に面取りがされる形状で、17世紀代の所産と思われる。51の天目茶碗は古瀬戸中Ⅳ～後Ⅰ期頃の所産と考えられる。52は縁釉小皿である。53は有耳壺の口縁部と考えられ、端部が外側に折り曲げられて縁帯が形成される。56～72は山茶碗に帰属する一群である。56～65の碗は、56は第7型式、57・58は7～8型式、59・60は8型式、61は9型式、62～64は10型式、65は11型式のうち生田窯を標識とする一群に、それぞれ帰属すると考えられる。66～69の小皿は、66は6型式、67は7型式、68は8型式、69は10型式にそれぞれ帰属すると考えられる。また、66の内面には

煤状の炭化物が付着する。70は火舎香炉、71・72は鉢である。71は口縁部が玉縁状に肥厚し、外面に沈線が一条めぐらされる。72は口縁部が断面台形状に肥厚し、外面に面取りがされる。73は天目茶碗である。口唇部が直立し、端部が大きく外反する形状で、大窯期の所産と思われる。74は古瀬戸の半碗である。76・77は丸皿、78・79は端反皿で、いずれも大窯期に帰属すると考えられる。76・77は薄手の作りで、体部下方は丸みをおび、断面三角形の小さな貼り付け高台を有する。底部内面には菊花の印花文が押印される。78・79は体部中ほどにやや強い稜を持ち、口縁部は大きく外反して端部が丸く仕上げられる。75は折縁皿である。体部は丸みをおび、やや肥厚した口縁部が水平方向に大きく外反し折縁となる。80は青磁の稜花皿である。体部が腰部から外反して立ち上がる、いわゆる「腰折れ」型で、内面に「線彫り」による数条の曲線と蕨手状の文様が描かれる。15世紀頃の所産と考えられる。81は天目茶碗である。内傾気味の口唇部から口縁部が大きく外反する形状で、17世紀前半頃の所産と思われる。82はいわゆる在地系の土師皿(カワラケ)である。内外面の一部に煤状の炭化物が付着することから、灯明皿として使用されたと推測される。85は土器内湾羽釜である。残存率1/12程度の小片であるが、内傾気味に立ち上がる口縁部の、やや斜め前方に鍔が突出するもので、14世紀頃の所産と考えられる。

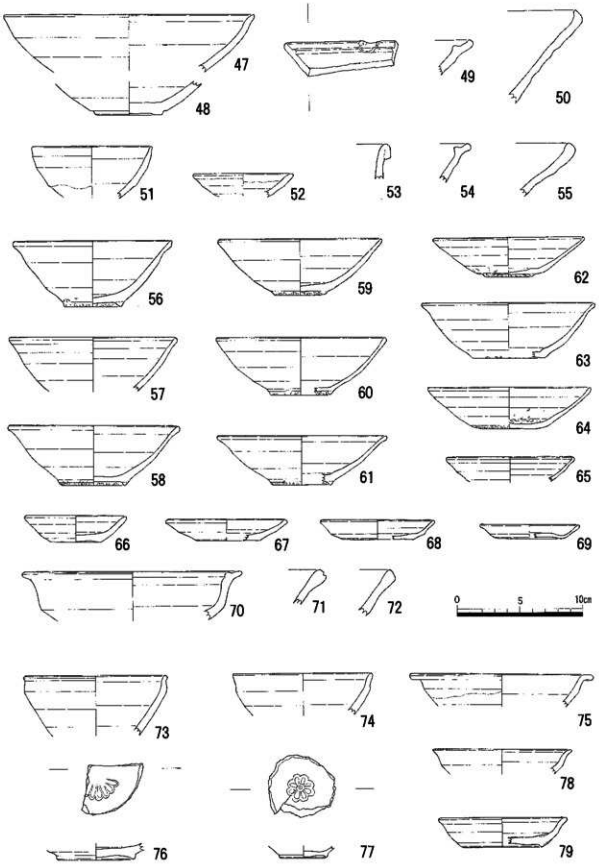
遺物組成は他のトレンチと大きく異なる点は見られないが、大窯期の遺物が若干目立つ傾向が見られる。相当数の遺物がいまだ土中に埋もれているのは間違いないが、出土遺物の中には明らかに同一個体と認定される破片が多く含まれるにもかかわらず、接合作業では際立った成果を上げることができなかった。完形品が埋もれたのではなく、最初から破損品が廃棄されたのではないかとの印象を持つ。寺院の廃絶後に破損した遺物が廃棄されたという推測が許されるなら、寺域を推定する一助になると思われる。

⑪ その他のトレンチ・TP出土遺物・表採遺物(第25図)

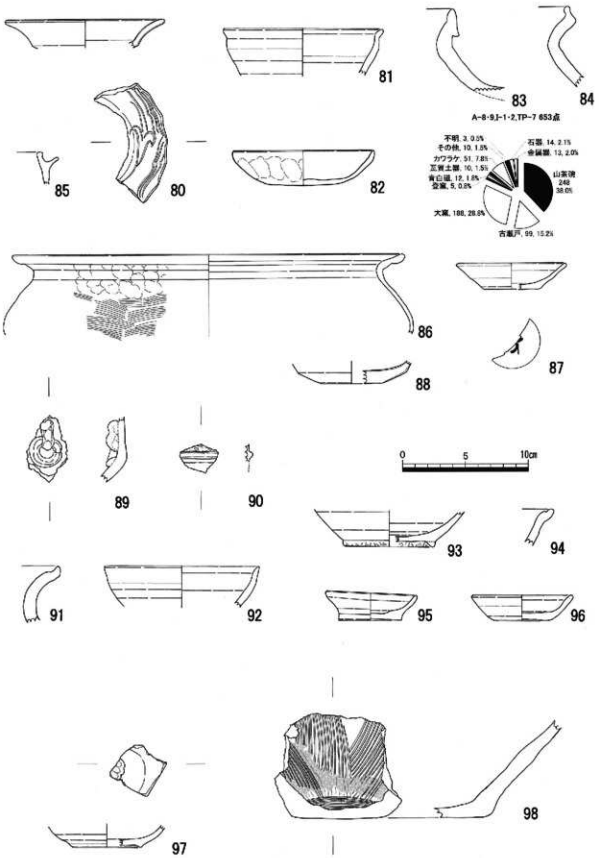
86～87は、Cトレから出土したものである。86は伊勢型鍋である。体部から口縁部にかけての破片で、残存率1/12程度の小片であるが、やや扁平な体部から外傾気味に頸部が立ち上がり、口縁端部が折り返されて肥厚する。体部外面には斜めおよび横方向のハケ調整が施され、頸部には指頭圧痕が残る。尾張地方で一般的に出土するものと同様の形状で、14世紀中頃から後半頃の所産と考えられる。87は6型式に帰属すると考えられる山茶碗・小皿である。底部外面に墨書が残るが、約1/2を欠失しているため文字内容は不明確である。88は無高台の青磁の皿である。89・90はGトレから出土したものである。89は古瀬戸・仏華瓶の口頸部に付けられた丸紐の環耳の部分で、鉄釉が施される。90は2×3cm程度の小片であるが、瓦質の土器で、いわゆる「奈良火鉢」の口縁外面に2条巡らされる凸帯の部分と考えられる。93～96はTP10から出土したものである。いずれも山茶碗の範疇に入るもので、93の碗は6～7型式期に、96の小皿はいわゆる「南部系」のもので、6～7型式期に帰属すると考えられる。95の小皿は底部が下方に柱状に突出する特殊な器形を示すが、胎土や色調などから美濃須衛窯の製品と考えられ、6型式頃に比定できよう。94の鉢は、外反して玉縁状に肥厚した口縁部の内面に、沈線が一条めぐらされる。97・98は表採遺物である。97は大窯期の丸皿で、底部内面には菊花の印花文が押印される。98の悟鉢は、江戸期の所産と考えられるが、網掛け部分は使用のため著しく摩滅した範囲を示す。



第23図　Ｉ９トレ平・断・立面図、TP7平・断面図



第24図　I８・９、A８・９トレ、TP7出土遺物(1)



第25図　Ｉ８・９、Ａ８・９トレ、ＴＰ7出土遺物（2）、出土遺物点数、トレンチ・ＴＰ出土遺物、表採遺物

3　主な成果

今回の調査の成果として、

① 伝本堂跡が残る平坦面の法面から石積や石段などを発見し、伝本堂跡を中心とした東西約50m、南北約40mの範囲が寺院中心部であったことが確認できた。

② 伝本堂跡の西側から 8.8m×10.3m程の礎石建物を発見し、渡り廊下(軒廊)と考えられる施設の礎石が確認でき、この二つの建物から寺院中心部が構成されると考えられる。

② 伝本堂跡の基壇の東側の石列から、直角に曲がる形で東に伸びる石列を確認し、寺院中枢部から東の伝三重塔跡・鐘楼跡などへ続く「参道」に伴うものと推測される。

などが挙げられる。その他に、草刈などの作業により、伝二重塔跡・伝鐘楼跡の建物の礎石の配列がほぼ明らかになり、伝三重塔跡は五間×二間の建物の周りに縁側が巡る構造で、三重塔では有り得ないこと、伝鐘楼跡は三間×四間の建物で、柱の間隔が一定でないため、鐘楼とは考えにくいことなどから、これらの建物が、むしろ『経文末書』の伝える「拝殿」「鎮守」にふさわしいと考えるにいたったが、詳細は次節で述べることにしたい。

特に、今回の調査の目的であった、本堂を中心とする寺院中心部の範囲をほぼ明らかにすることができたことは、寺域東方の一角が大威徳寺の中の「神社信仰の場」であった可能性が高く、さらに両地区を結ぶ「参道」の存在が想定されたことなどとあわせ、これまで漠然としていた大威徳寺が、おぼろげながらもその姿を現してきたと言えよう。伝承にある「三重塔」「鐘楼」などの有無やその位置を確認し、さらに寺院の様相を明らかにしていく上でも、今後の調査につながる成果を得ることができたと考える。また、折戸53号窯式期から東山72号窯式期頃に焼成すると考えられる灰釉陶器・多口瓶が出土し、その近辺で礎石状の石が確認できたことは、前身寺院的な施設の存在を示唆するものであり、寺院創建が伝承よりも古い平安末期にさかのぼる可能性を示すものとして注目される。

注① 「威徳寺合戦」の年代については、千早保之氏(苗木遠山資料館)の詳細な研究があり、氏の教示によると、天文14年(1545)、弘治2年(1556)、永禄3年(1560)、永禄12年(1569)、元亀元年(1570)、元亀3年(1572)などの諸説がある。

注② 八賀晋指導委員会長の教示によると、寺屋敷遺跡(揖斐郡揖斐川町(旧藤橋村)、荘川神社遺跡(高山市荘川町)、西ノ宮遺跡(飛騨市国府町)に次いで4例目となる。

注③ 小野木学氏の教示による。

第２節　平成16年度調査

１　調査の目的と方法

平成16年度の調査は、①寺院中心部の南方および西方に近接する地区での遺構の有無の確認、②伝山門跡から寺院中心部へ至る参道の規模や構造の確認、③寺院の遺構が残っていると推測される場所の確認、を目的に、トレンチによる試掘調査は主に伝本堂跡を中心とした寺院中心部の南方および西方の約4,000㎡を対象とした。トレンチやＴＰの設定や掘削については、前年度の調査に準じた。また、平成11年度作製の地形測量図の範囲を中心に、草刈や倒木の整理等の作業を行い、石列や法面の石積など、寺院に関わる遺構や整地された場所の確認、記録などを行った。その際、Ｅ・Ｆ区を中心に、石段や石列、石積、排水溝などの遺構を各所で確認することができた。試掘調査の成果に加え、これらの草刈などの作業によって確認できた遺構についても本節で報告したい。

最終的に設定したトレンチはＡ～Ｊの11本、テストピットは15ケ所である(第５図)。各トレンチ設定の目的は、以下の通りである。

Ａトレ:寺院中心部南方での遺構の有無を確認する。

Ｂトレ:寺院中心部南方および西南方の史碑跡付近での遺構の有無を確認する。

Ｃトレ:伝山門跡から寺院中心部へ至る参道の規模や構造の確認と寺院中心部南方の 25×26m程の平坦面の東法面での遺構の有無を確認する。

Ｄトレ:寺院中心部南方の平坦面の北法面からその北方の平坦面での遺構の有無を確認する。

Ｅトレ:寺院中心部南方の25×26m程の平坦面での遺構の有無を確認する。

Ｆトレ:寺院中心部南方の25×26m程の平坦面での遺構の有無を確認する。

Ｇトレ:寺院中心部の西に隣接する25×20m程の平坦面での遺構の有無を確認する。

Ｈトレ:寺院中心部南方の平坦面の西方に、Ｌ字形の土塁状の土盛をはさんで隣接する平坦面での遺構の有無を確認する。

Ｉトレ:寺院中心部の西に隣接する25×20m程の平坦面の遺構の有無を確認する。

Ｊトレ:寺院中心部西南方の平坦面西端の石積の確認とその西側の遺構の有無を確認する。

Ｋトレ:寺院中心部の西に隣接する 25×20m程の平坦面および西法面での遺構の有無を確認する。

平成16年度の調査でも、鎌倉・室町時代の山茶碗、古瀬戸、大窯製品を中心に約3,800点の遺物が出土した。その多くが細かく破砕した小片で、遺物の器形を復元できる遺物が少数であるのは前年度と同様である。碗皿類や深皿・擂鉢などの調理具といった日常雑器が中心で、昨年度の調査に比べ、香炉や仏華瓶などの寺院特有の器種がやや少ないとの印象を持つが、白磁有耳壺や青磁の碗皿類など、遺跡の階級性を示す遺物も見られ、小数ながら瓦質の火鉢や茶臼なども出土している。さらに、史碑付近を中心に、17世紀代の遺物が比較的残存状況の良好な状態で一定量出土している点が注目される。古銭類は寛永通宝を２点確認している。遺物は広く遺跡内に分布し、雨天の翌日などは容易に遺物を表面採集することができ、報告する遺物の中にも表面採集による遺物が含まれる。遺物の分類、名称、年代観などは既存の報告・研究成果に依拠しており、基本的に平成15年度調査に従った。よって第１節の１を参照されたい。以下、平成17・18年度についてもこれと同様である。

2　主な遺構と出土遺物

①　A東西トレ・南北トレ、TP1（第26図）

寺院中心部の南に隣接する平坦面は、伝本堂跡などが建つ平坦面よりも約1m低くなる。ここに設定したAトレやTPからは、目立った遺構を確認することはできなかった。したがって、寺院中心部の南方正面の、東西約40m、南北約30mの範囲は、儀式などを行うための広場状の空間であったと考えられる。山中に建てられる寺院は、建物の前後にすぐ山や崖がせまっている場合が多いが、大威徳寺では伝本堂跡の後（北）側にも25×20m程の平坦面が広がっており、寺院中心部の前後に十分な広さの平坦な空間が確保されていたことになる。

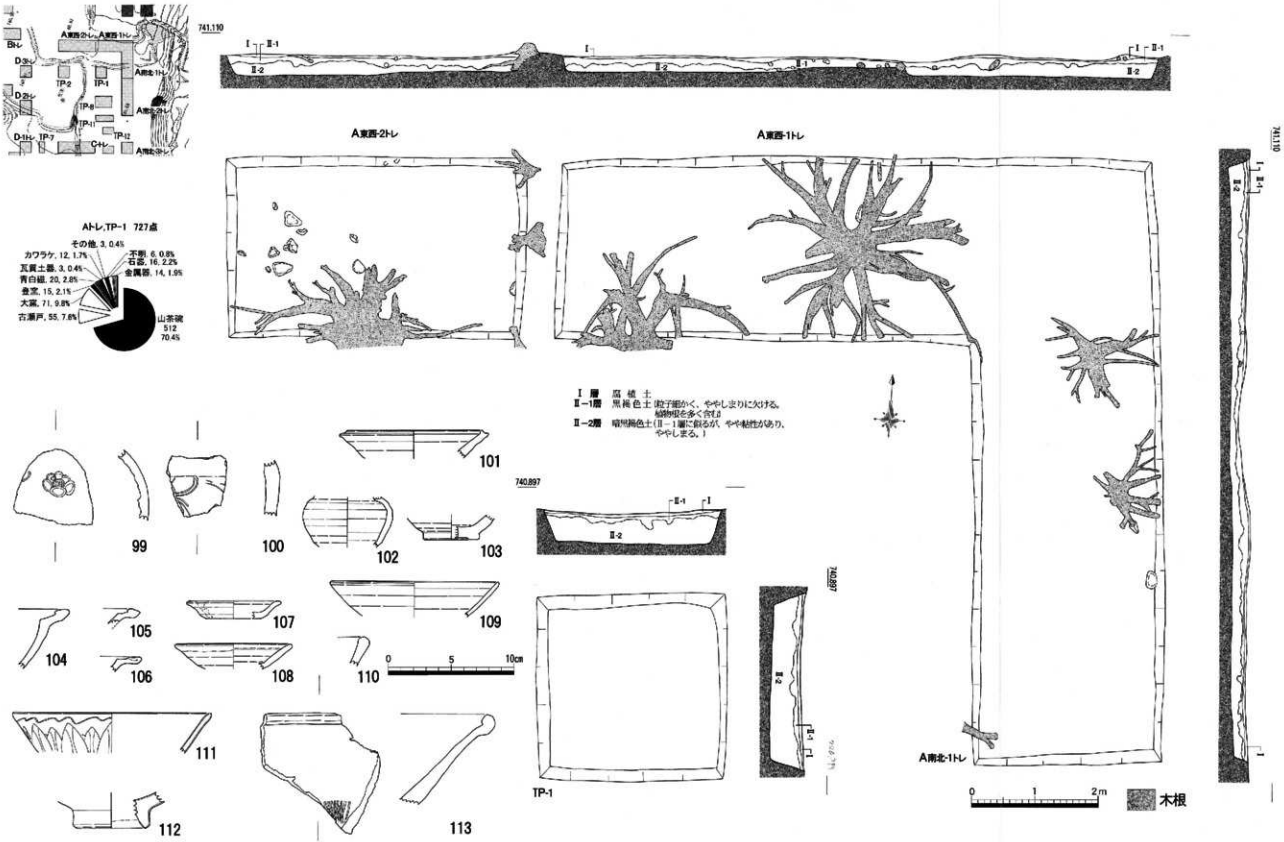
Aトレ・TP1からは、727点という多量の遺物が出土している。その内訳と主なものを第26図に示した。山土遺物の傾向は、山茶碗が2/3近くを占め、古瀬戸と大窯製品がほぼ似た割合で合わせて1/6前後、残りの1/6前後が青・白磁や連房式窯窯などその他の遺物という様相で、これは他のトレンチなどでも見られる、大威徳寺での一般的な遺物組成を示すと思われる。

99・100は古瀬戸の水注である。99は丸みのある胴部に印花による椿花文が捺印される。100は肩部に穀を持った筒型の胴部に、ヘラ状の工具で蕨手状の文様が施される。101は卸皿である。口縁の内側に小さな突起を持ち、端部の上面が浅くくぼむ形状から、古瀬戸後Ⅱ期頃の所産と思われる。102は水滴の胴部と考えられる。丸みを帯びた胴部の外面に灰釉が施される。103は天目茶碗の底部で、幅広の削り出し輪高台を持つ。104～106は折縁深皿である。104・105は口縁部が鋭く外折し、口縁端部が内側に折り返されて玉縁状に肥厚する。106は口縁部がほぼ水平方向に外折し、端部が内側に折り返されてその内側に段が形成される。104・105は古瀬戸中Ⅳ期頃の、106は古瀬戸後Ⅰ～Ⅱ期頃の所産と考えられる。107は端反皿で、無高台の底部外面に糸切り痕が残る。108は緑釉小皿で、口縁部の内外面に鉄釉が施される。109の山茶碗・碗は9～10型式に帰属すると考えられる。110の山茶碗・鉢は口縁部が玉縁状に肥厚し、端部は丸く仕上げられる。111・112は青磁の碗である。111は線彫りによる蓮弁文が施され、B1類に分類できる。112は高い高台の内面まで釉が施される。113の擂鉢は口縁部が肥厚し、内側に折り返されて端部が断面円形に丸く仕上げられる形状で、大窯期の所産と思われる。

②　Bトレと寺院中心部西南方の平坦面（第27・28・29図）

寺院中心部の西南方に設定したB2・3トレのうち、B2トレでは目だった遺構を確認することは出来なかったが、B3トレでは、20×30cmから50×75cm程の石を南北方向に2列に並べた、築地塀の基礎と思われる石列を確認した（第27図）。また、B3トレのすぐ北には昭和36年に地元有志が建立した史碑があり、その西側から築地塀の基礎と思われる石列（第28図）を確認した。石列は幅約1.8m、確認できた長さは約15mである。20×40cm前後の石を2～3段積んで基礎とし、その上に土を突き固めて土塀を築き、板などで屋根を葺いた構造であったと推測される。現状では最も下に積まれた石が確認できるだけだが、約1.5mの間隔で上面が平坦な石が配置されており、土壁を支える「間柱」のようなものが立っていたと考えられる。さらにB3トレから約15m西には、南北方向の石積（石列）も確認しているが、これについては③のJトレの項で述べたい。

これらの所見から、寺院中心部西南方の平坦面は、東・北・西方をコ字型に囲む築地塀と南の一段高くなった平坦面の北法面の石積によって、東西約25m、南北約20mの長方形に区画されて



第26図　A東西１・２、A南北１トレ、TP１平・断面図、出土遺物

いたと考えられ、区画の中から五間四方程の建物跡(第28図「史碑南建物」と仮称)を確認した。平面形は一辺約9.8mの正方形で、礎石は地中に埋もれているものも含め36個中17個を確認できた。

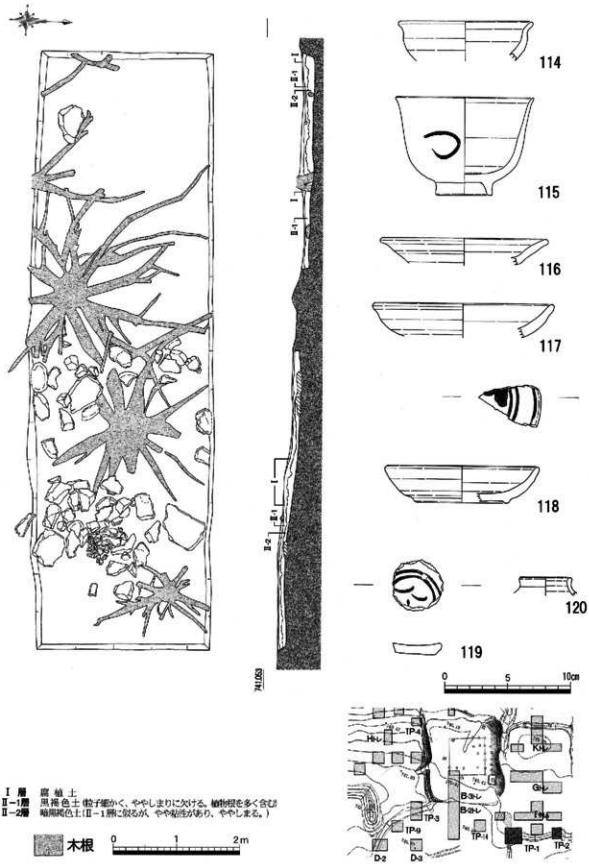
B2トレからは100点、B3トレからは76点の遺物が出土しており、さらに史碑周辺からは256点の遺物を表採している。その主なものを第27～29図に、その内訳を29図に示した。

114～120は、B3トレから出土したものである。114の天目茶碗は、丸みをおびた体部から口縁端部が外反する形状を示す。115の端反碗は、高台裏も含めた内外面の全面に長石釉が施され、外面には鉄絵具により、「つ」字形の文様が描かれる。116の端反皿には灰釉が、117の丸皿には長石釉が施される。118の鉄絵皿は断面台形の貼り付け高台を持ち、高台の裏側まで全面に長石釉が施される。これらの遺物はいずれも17世紀代に帰属すると考えられる。119の陶製円盤は、鉄絵皿の底部を転用したものである。120は茶入れと考えられ、鉄釉が施される。

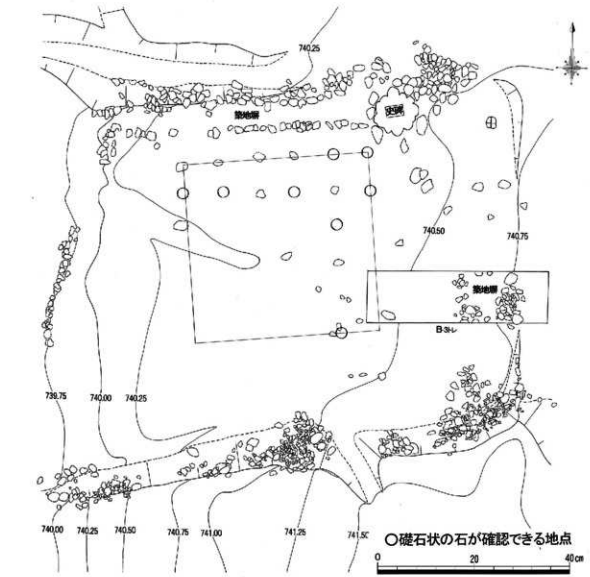
121～132、139～141は、史碑西の築地塀跡を中心に、この区画内から表採したものである。121～124の天目茶碗は、いずれも体部の立ち上がりが強く、121は長い口縁部がほぼ直立し、端部がわずかに外反する形状で、122～124は口縁部がやや内傾して端部が外反する形状を示し、17世紀前半の所産と考えられる。125は丸碗、126・127は端反皿である。なお、これらの遺物については、過日、愛知県陶磁資料館・井上喜久男氏が来跡された折に実見していただき、おおむね17世紀の前半、寛文年間(1661～72)までに帰属し、元禄期(1688～1703)までドがるものではないとの所見をいただいた。128は鉄絵皿である。129の擂鉢は口縁部がS字形に緩く屈曲し、内面に断面半円形の幅広の凸帯がめぐらされ、端部は面取りがされる形状で、擂目は11条を基本とする。連房式登窯期の所産と考えられる。網掛けした部分は使用により著しく摩滅した範囲である。130・131は寛永通宝である。江戸時代を通じて300～400億枚が鋳造されたと言われ、最も一般的な貨幣である。131は約1/2を欠失しているが、どちらも「寶」の字の貝面末尾が「ス」字状となり、130は「寛」の字の12画と13画の頭がくっつくことから、いわゆる「古寛永」の範疇に入るもので、1636～59年に鋳造されたと考えられる。132は茶臼の下臼の受皿端部の破片で、安山岩を素材とする。139は古瀬戸の碗型鉢と考えられる。140・141の山茶碗・小皿は、いずれも7～8型式に帰属すると考えられる。

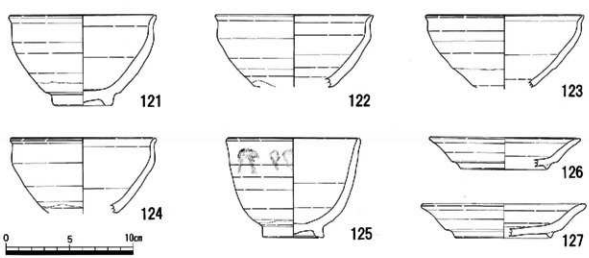
133～138はB2トレから出土したものである。133は卸皿で、無高台の底部内面には棒状の工具で13×10の格子状に卸目が施される。134は折縁深皿あるいは直縁大皿の底部で、古瀬戸後期の所産と考えられる。135・136の山茶碗・碗は、いずれも7～8型式に帰属すると考えられる。137は大窯期の端反皿、138は志野丸皿で、17世紀前半頃の所産と考えられる。

出土遺物について特筆すべき事は、B2トレとB3トレでは、遺物の組成が劇的に異なることである。B2トレでは、山茶碗が半数以上を占め、古瀬戸と大窯製品がほぼ同じ割合で約1/3を占めるという、Aトレなどに見られる、大威徳寺での一般的な遺物組成を示すのに対し、B3トレでは山茶碗の占める割合が極端に低くなり、代わって大窯製品と連房式登窯期の、比較的新しい時期の遺物が半数以上を占めている。さらに史碑周辺で表採した遺物の組成を見ても、山茶碗の占める割合が若干大きくなるが、基本的にはB3トレに近い遺物組成を示している。これらの遺物の年代観は、寺院中心部西南方の25×20m程の区画内で確認した史碑南建物が、江戸初期までドがる可能性を示唆していると推測される。

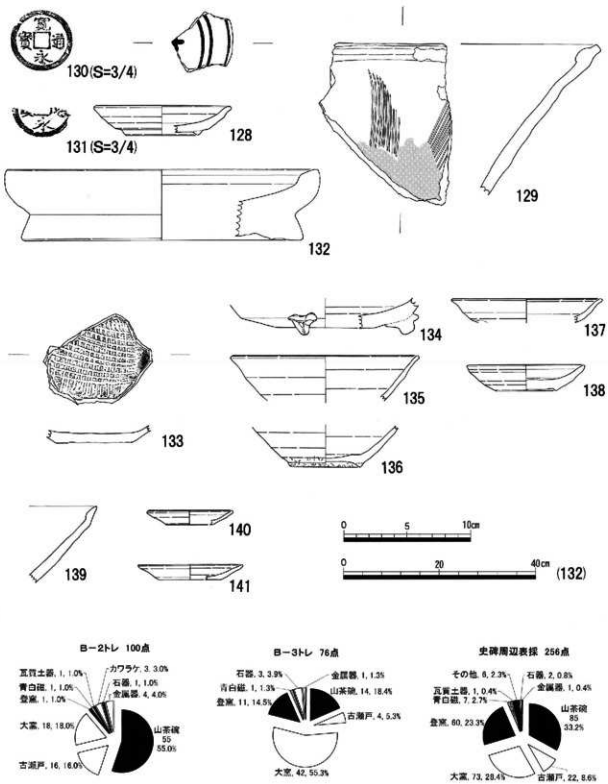


第27図　B3トレ平・断面図、出土遺物





第28図　史碑周辺遺構分布図、史碑周辺表採遺物（1）



第29図　史碑周辺表採遺物（2）、B2トレ出土遺物、遺物点数

③　Jトレ（第30図）

②で述べた寺院中心部西南方の平坦面の西端に位置する石積は、主軸方位がややN東に傾き、築地塀の対岸となる石列も未確認であるが、20×30cmから30×50cm程の石を2～3段に積んだもので、最下段は横方向を基本とし、2段目より上は縦方向を意識して構築されていると見られる。さらにJトレでは土坑2基、Pit11基を検出しているが、用途や建物に伴うものかどうかなど、詳細は不明である。また、J北トレを中心に、焼土を含む範囲が不定形に広がる部分を確認できたが、やはり詳細を明らかにするにはいたっていない。

Jトレからは、115点の遺物が出土している。その主なものと内訳を第30図に示した。遺物の組成は概ね史碑周辺での表採遺物の組成に似るが、連房式登窯期の遺物が少なく、その分古瀬戸の占める割合がやや高くなる。

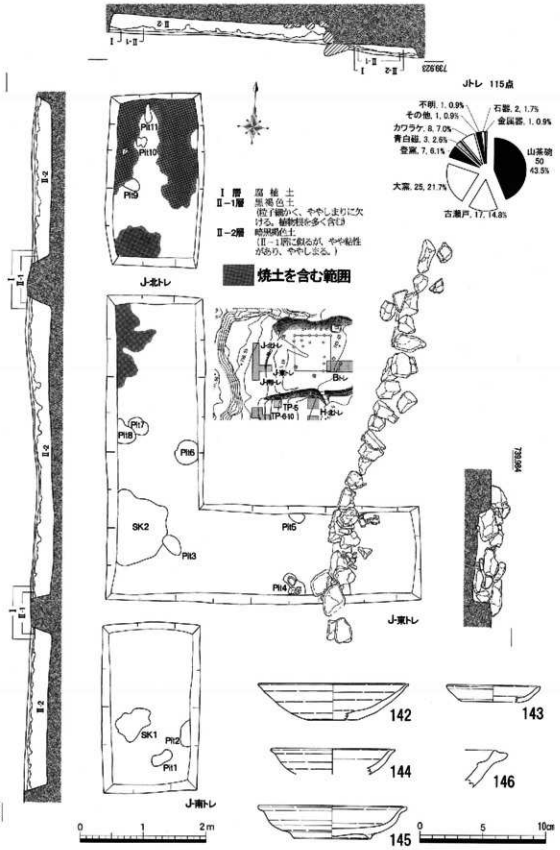
142の山茶碗・碗は器高も低く無高台であるが、底部内面が浅くくぼむため、10型式に帰属すると考えられる。143の山茶碗・小皿は7～8型式に帰属すると考えられる。144・145の端反皿は丸みをおびた体部から口縁部が大きく外反する形状で、145は体部中程に緩い稜を持つ。大窯第1段階後半から第2段階前半頃の所産と思われる。146の擂鉢は外反する口縁部の内面とそのやや下方の2ヶ所に断面三角形の突帯がめぐらされ、幅1cm程の口縁の上面が浅くくぼむ。

④　TP3・TP9・D2トレ（第31図）

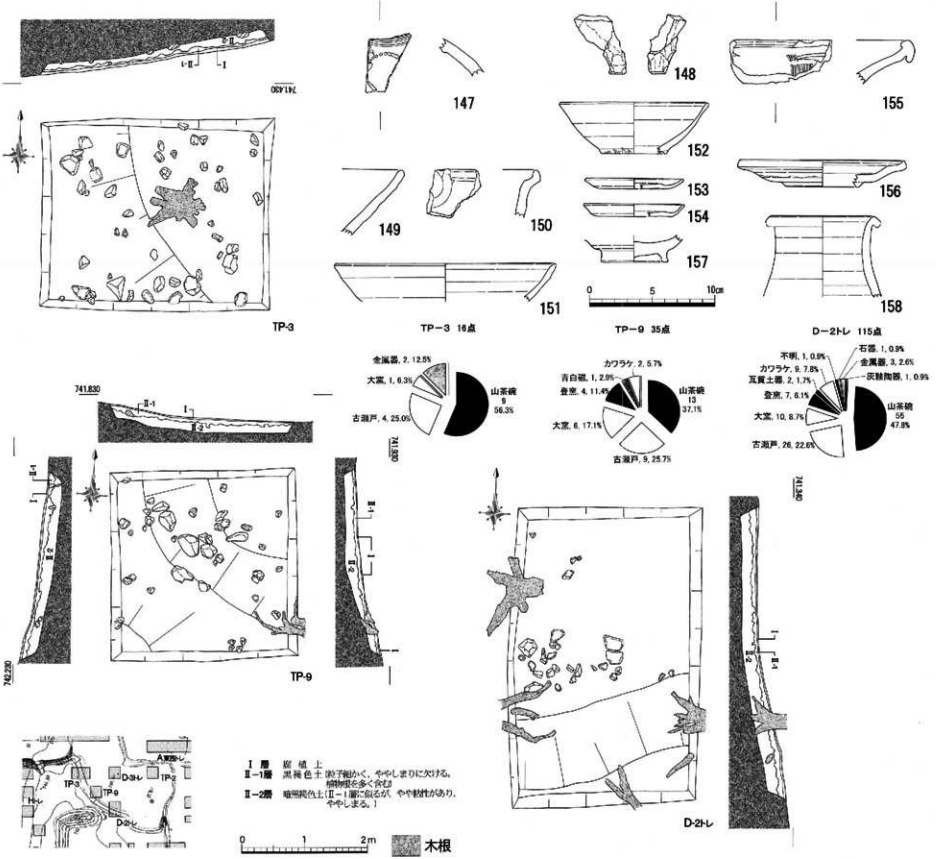
寺院中心部の南方には、1m程低くなった広場状の空間をはさんで寺院中心部と同じくらいの標高の平坦面が東西に広がっている。TP3・TP9・D2トレは、この平坦面の北法面の遺構（石積）の有無を確認するために設定したトレンチであるが、いずれのトレンチでも法面の周辺に礫が散在し、かつては貼り石状の石積があった可能性を感じさせるが、明確な遺構として認識するにはいたらなかった。

TP3からは16点、TP9からは35点、D2トレからは115点の遺物が出土している。その主なものと、それぞれの内訳を第31図に示した。出土点数に開きがあるが、TP3とD2トレの遺物組成は比較的よく似る。TP9は大窯製品の割合が高い分、山茶碗の割合がやや低くなる。

147～151は、古瀬戸の範疇に入るものである。147は瓶子の肩部付近の破片で、鉄釉が施され、横方向の沈線と押印による菊花の印花文が描かれる。148は脚付きの深皿の脚部分と考えられる。149は碗型鉢で、後Ⅱ～Ⅲ期頃の所産と考えられる。150の柄付片口は口縁部が水平方向に外折し、端部が断面三角形に上方に伸びる形状で、中Ⅲ期頃の所産と思われる。151は平碗である。152の山茶碗・碗は第9～10型式、153・154の山茶碗・小皿は8～9型式に帰属すると考えられる。155の擂鉢は被熱のため破損が著しいが、口縁端部が丸みをおびて上方に伸び、さらに下方にもわずかに垂れて幅1.5cm程の縁帯を形成する形状で、大窯第2段階頃の所産と思われる。156は折縁皿である。断面三角形の小型の貼り付け高台を持ち、丸みをおびた体部から水平方向に口縁部が外折れし、端部は直立して断面形は三角形となる。17世紀前半頃の所産と考えられる。157の天目茶碗はやや厚手の作りで、高台脇に明瞭な稜を持ち、外に開き気味に断面台形の削り出し輪高台を持つ。158は白磁有耳壺である。頸部から口縁部にかけての破片で、口縁端部が破損しているが、断面形は隅丸の三角形であったと推測される。やや長めの頸部が内傾気味に立ち上がり、細身で肩に稜が立った形状と推測される。元代(13世紀)頃の所産と思われる。



第30図　Jトレ平・断・立面図、出土遺物、遺物点数



第31図　TP3・TP9・D２トレ平・断面図、出土遺物、遺物点数

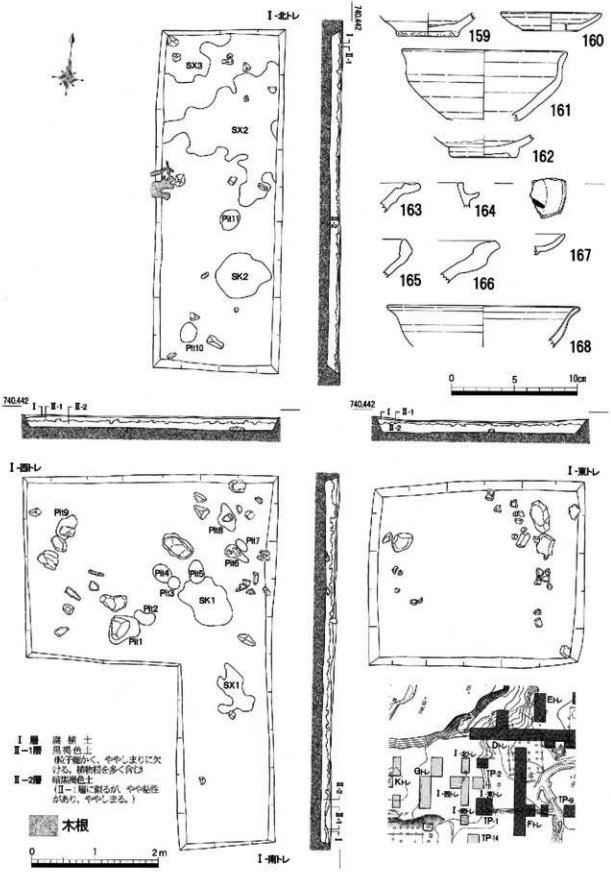
⑤ Gトレ・Iトレ・Kトレ(第32・33図)

寺院中心部の西に隣接する東西約25m、南北約 20mの平坦面は、寺院中心部に近いことから、何らかの施設の存在が予測されたが、平坦面のほぼ中央に設定したGトレでは、目立った遺構を確認することはできなかった。Iトレ(第32図)では、I西・北トレからSK2基、Pit1基、SX3基を検出している。Pitについては、石がからんだものも散見される(Pit1・9など)が、建物跡に伴う遺構と認定するにはいたらなかった。SXはその平面形や埋土などから、風倒木によるものと推測される。また西端近くのKトレでも、平坦面での遺構の有無については同様であるが、平坦面の西法面から石積 (第33図)を確認した。下方の平坦面との比高差は約60cmを測り、40×20 cm前後の石を「積む」というよりも「貼る」といった構造で、所々抜け落ちており、残存状況は必ずしも良好ではない。裏込めの礫も確認できなかった。

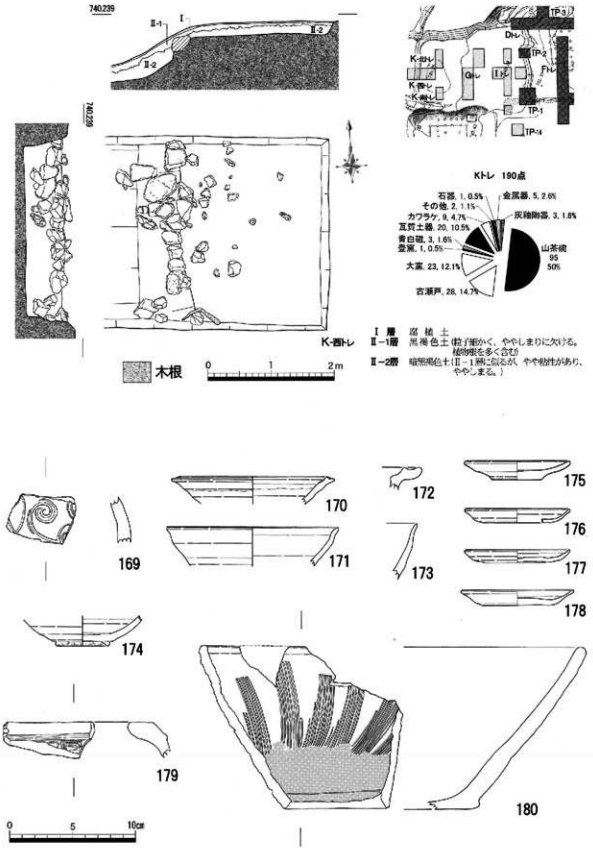
Gトレでは106点、Iトレでは120点、Kトレでは190点の遺物が出土している。いずれも山茶碗が過半数を占めるが、Kトレから灰釉陶器が3点出土しており、201 の灰釉陶器・碗もKトレ付近で表採している。Gトレからは図示に耐える遺物が得られなかったため、Iトレ出土遺物の主なものを第32図に、Kトレ出土遺物の内訳とその主なものを第33図に示した。

159～168はIトレから出土したものである。159の山茶碗・碗は8～9型式に、160の山茶碗・小皿は7～8型式に帰属すると考えられる。161 の天目茶碗は長い口唇部がほぼ直立し、端部が外反する形状で、17 世紀前半の所産と考えられる。162 は丸碗の底部で、やはり 17 世紀前半に帰属すると思われる。163 は折縁深皿で、ほぼ水平方向に外折した口縁部の端部が内側に折り返され、その内側に段が形成され口縁部の上面が浅くくぼむ。古瀬戸後Ⅱ期頃の所産と考えられる。164 は土器内湾羽釜である。85 と同様に残存率 1/12 程度の小片であるが、内傾気味に立ち上がる口縁部に、やや斜め上方に鍔が突出するもので、14 世紀頃の所産と思われる。165・166 は擂鉢である。165 は肥厚した口縁端部が断面三角形に上方に伸びる形状で、古瀬戸の範疇に入るものと思われる。166 は厚手の作りで、S字状に緩く屈曲する口縁部の内側に断面半円形の幅広の突帯がめぐらされる形状で、連房式登窯期のものと思われる。167 は鉄絵皿で、17 世紀前半の所産と考えられる。168 の青磁碗は丸みをおびた体部から玉縁状に肥厚した口縁部が外反する形状で、D類に分類される。

169～180はKトレから出土したものである。169は水注の破片と思われるが、器の内面にまで灰釉が掛かる。ヘラ状の工具で蕨手形の渦巻きが措かれる。170 の卸皿、171 の平碗は、どちらも古瀬戸後期の所産と考えられる。172 の折縁深皿は水平方向に外折した口縁部の端部が内側に折り返されて肥厚し、その内側に段が形成される。174 の山茶碗・碗は第9型式に、175～176 の山茶碗・小皿のうち、175は底部が下方に突出する形状で5～6型式に、176・177は8～9型式に、178は7型式に帰属すると考えられる。179はいわゆる「奈良火鉢」の口縁部である。平面形が円形で、体部が内湾して口縁部を内側に引き出して幅のある平坦な面を作る浅鉢形の形状で、口縁部近くの体部外面に巡らされる二条の凸帯の間には雷文のスタンプが捺印されている。14 世紀後半から 15 世紀前半頃の所産と考えられる。180 の擂鉢は体部がほぼ直線的に立ち上がり、そのまま口縁端部が丸く仕上げられる形状で、胎土や色調などから常滑産ではないかと思われる。擂目は8～9条を単位とし、網掛けした部分は使用により著しく摩滅した範囲である。



第32図　Ｉトレ平・断面図、出土遺物



第33図　Kトレ平・断・立面図、出土遺物、遺物点数

⑥ D1トレ・Eトレ・Fトレ、Cトレ（第34・35図）

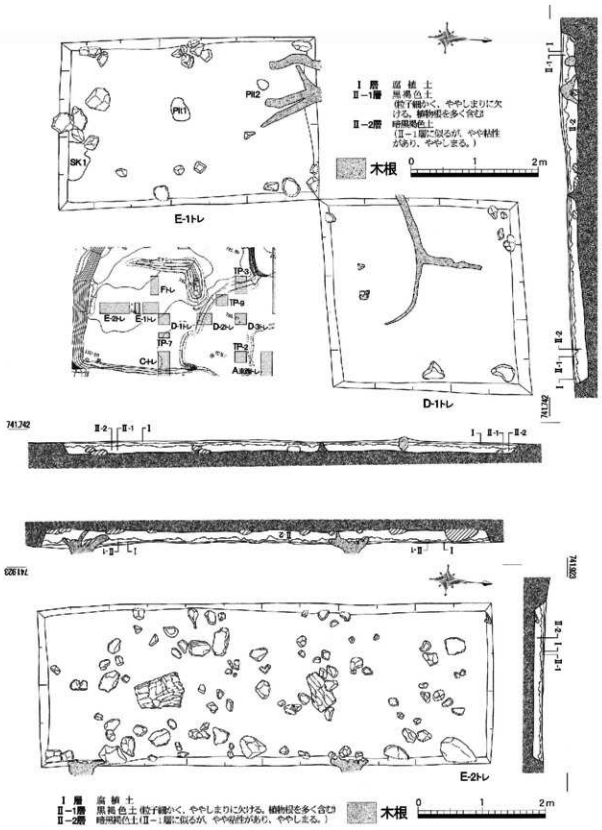
寺院中心部南方の平坦面は、L字形の土壇状の土盛によって東西約25m、南北約26mの方形に区画され、伝山門跡の西側から階段状に3段に造成された平坦面の最上段となっている。比高差は南方の2段目の平坦面とは約2,5m、北方の広場とは約1mを計る。この3段目の平坦面での遺構の有無を確認するため、これらのトレンチを設定した。E1トレからは土坑1基、Pit2基を確認し、E2トレでは礎石の可能性がありそうな石も検出したが、建物に伴うものと推定するにはいたっていない。東の法面に設定したCトレでは、石積（図版3－⑦）を確認した。石積は拳大から20×60cm程の長大な石まで、様々な法量の素材が用いられる。石を「積む」と言うよりも「貼る」と言ったほうが良い構造で、石の置き方にも縦横の明確な使い分けは見られないが、この法面を補強する施設であり、伝山門跡からの参道の西限を示すものと思われる。

D1トレ、Eトレ、Fトレからは182点の遺物が出土しており、それぞれの内訳とその主なものを第35図の181～190に示した。またCトレからは138点の遺物が出土しており、その内訳と主なものを第35図の192～196に示した。

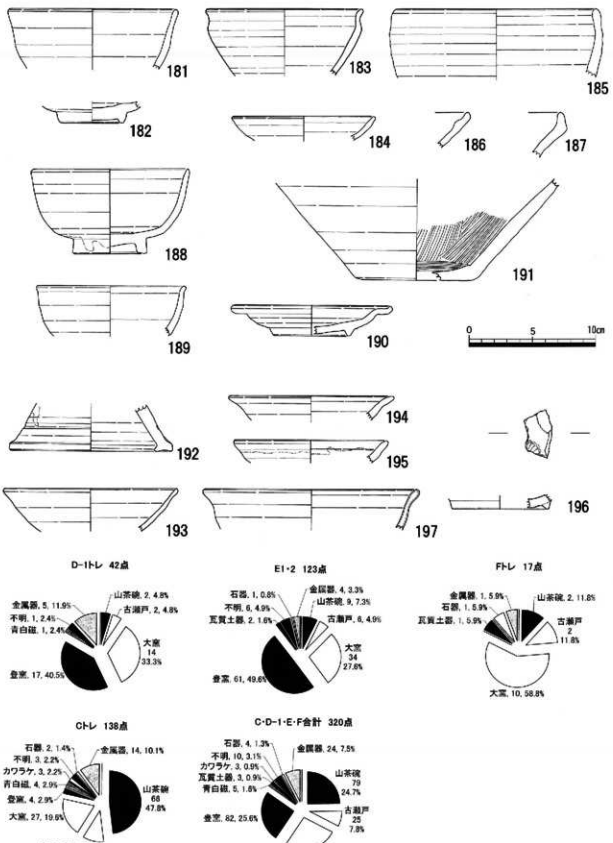
181・182は丸碗である。出土地点が近接しており、胎土や釉の色調などから同一個体である可能性が考えられる。183は天目茶碗である。口唇部がやや内傾して端部が外反する形状を示し、17世紀前半の所産と考えられる。184の丸皿は大窯期の所産と思われる。185は内湾して立ち上がる胴部から、そのまま口縁部が内傾気味に立ち上がり、端部が丸くおさめられる形状で、内外面に鉄釉が施される。186・187・191は擂鉢である。186は口縁端部が丸く仕上げられ、内面のやや低い所に小突起が付けられる形状で、187は肥厚した口縁端部が断面三角形に上方へ伸びる形状を示す。どちらも古瀬戸の範疇に入ると考えられる。191の擂目は14条を単位とし、密に施される。188の丸碗はいわゆる「尾呂茶碗」の範疇に入るもので、17世紀末の所産と思われる。189の天目茶碗は丸みをおびた体部から続く口唇部がほぼ直立し、口縁端部が短く外反する形状で、17世紀中頃から後半の所産と思われる。190は折縁皿である。形状は156に似るが断面台形の貼り付け高台をもち、黄瀬戸釉が施される。17世紀前半から中頃の所産と考えられる。

192は瓶子皿類、いわゆる「根来型瓶子」の脚部で、灰釉が施される。195は緑釉小皿で、どちらも古瀬戸後期の所産と思われる。193の山茶碗・碗は9～10型式に帰属すると考えられる。194の端反皿は、17世紀前半頃の所産と思われる。196の丸皿は、大窯期の所産と考えられ、底部内面に菊花の印花文が押印される。197の青磁碗は、168と同様に丸みをおびた体部から玉縁状に肥厚した口縁部が外反する形状で、D類に分類される。

D1トレ、Eトレ、Fトレでは、遺物の出土点数に開きもあるが、どのトレンチも山茶碗と古瀬戸が占める割合が1/4以下と低く、大窯及び連房式登窯期の遺物が大半を占める点が遺物組成の特徴である。釘に代表される金属器の比率が5％前後（Cトレでは10.1％）と、Aトレ(1.9％)など、山だった遺構が確認できなかったトレンチよりも高い割合を占める点が注目される。伝本堂跡・本堂西建物では、釘類が出土遺物の半数近くを占めることは前節で触れたが、建物があれば当然釘が使用されるわけで、多く出土すればそれだけ建物があった可能性を高めるものと考えたい。釘の出土量だけで建物の存在を判断できるものではないが、ここは何らかの建物があったとの推測が許されるなら、史碑南建物に近い時期のものである可能性が高いと考える。



第34図　D1・E1トレ平・断面図、E2トレ平・断面図



第35図　D1・E・F・Cトレ出土遺物、遺物点数

⑦　ＴＰ８・ＴＰ13(第 36 図)

寺院中心部南の広場状空間の南方は、さらに幅 40m程の平坦面となって、伝山門跡へと続いていく。平坦面の西側は先述の一段高い平坦面の東法面となり、東方の一段低い所にあるＩ区との比高差は 2.5m前後を測る。伝山門跡から寺院中心部へ至る参道の規模や構造の確認を目的に、Ａ南北３トレ、Ｃトレなどを設定した(第 36 図)。常識的に見て、西方の一段高い平坦面の法面が参道の西限と考えられるが、参道の東西の端を示す明確な痕跡を確認することはできなかった。

ＴＰ８では土坑１基、Ｐit１基、ＳＸ１基に加え、南北方向の溝状の遺構を確認している(第 36 図)。ＳＸはその平面形や埋土などから、風倒木によるものと推測されるが、ＳＫ１とＰit１については、その性格を明らかにするにはいたっていない。溝状遺構については、ＴＰ８の南に設定したＴＰ11・15 などでもプランの続きを確認することができたが、南に行くに従い、西の法面との間隔は狭くなる。幅 20～35 cm、ＴＰ８での深さは 30cm を測る。埋土が均質で、水が流れたことによって堆積したとは考えにくい。埋土からの遺物に恵まれず、遺構の性格を明らかにするにはいたっていない。また、ＴＰ11・13 などから、幅１m前後。高さ 25 cm前後の、南北方向に伸びる土盛を検出しているが、ＴＰ12 では確認できなかった。

ＴＰ８・11・12・13・15 からは 70 点の遺物が出土している。その大半が山茶碗で、いずれも図示に耐えない小片である。南に行くほど出土数が少なくなる傾向が見られる。

⑧　Ｈトレ、ＴＰ６・10(第 37 図)

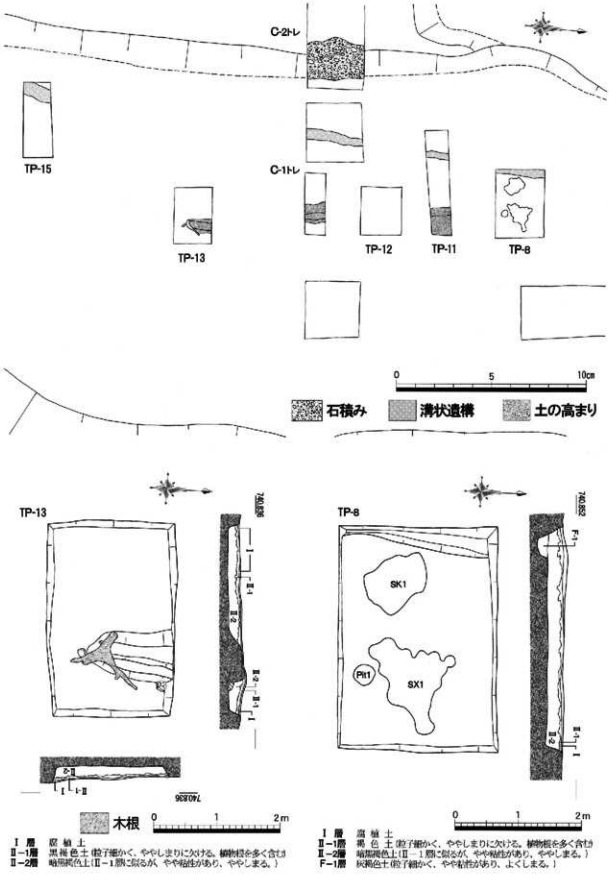
寺院中心部南方の平坦面を区画するＬ字形の土塁状の土盛の西方は、緩い斜面となって西へ下っていき、その東の端と西の端では比高差は約 2.5mを計る。この緩斜面での遺構の有無を確認するため、Ｈトレ・ＴＰ５などを設定(第５図)したが、結果的に目立った遺構を確認することはできなかった。山土遺物も 30 点と、質・量ともに貧弱な結果であった。

なお、ＴＰ６・10 からは、土坑１基を確認している(第 37 図)。検出できた範囲は長軸 3.35m、短軸 1.35m、深さ 26 cmを計り、底は比較的平坦である。埋土に焼け土や炭化物を多く含むため、何かを焼いた施設と思われるが、断ち割りした部分から出土遺物に恵まれなかったこともあり、遺構の年代や性格を明らかにするにはいたっていない。

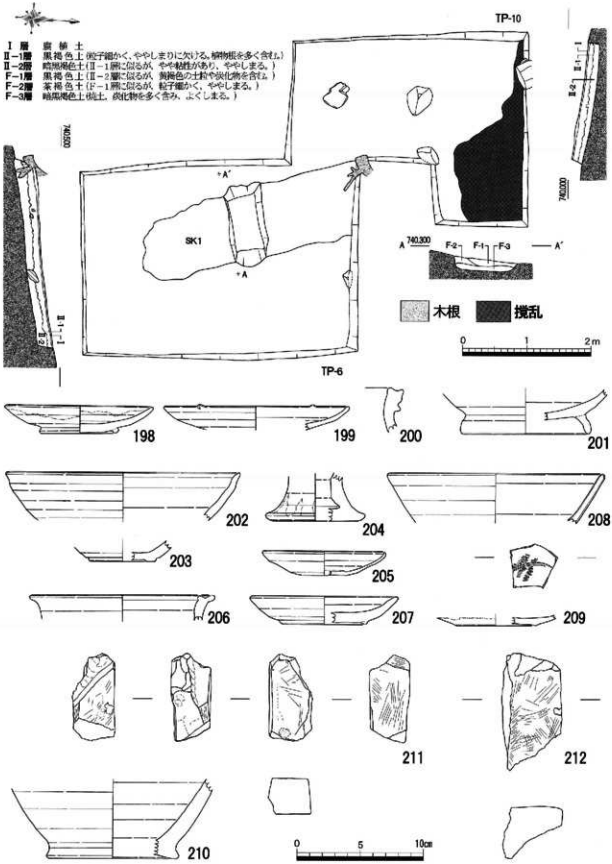
ＴＰ６・10 からは 37 点の遺物が出土しており、その主なものを 198～200 に示した。198 は灰釉陶器の皿である。底部が下方に突出し、断面方形の小型の二日月高台が貼り付けられる。199 は灰釉陶器の輪花皿である。198 は東山 72 号窯式から百代寺窯式期頃の頃、199 は百代寺窯式期頃の所産と思われる。200 は甕の口縁部で、大窯期に帰属すると考えられる。

⑨　Ｅ区参道南の平坦面(第 38 図・39 図)

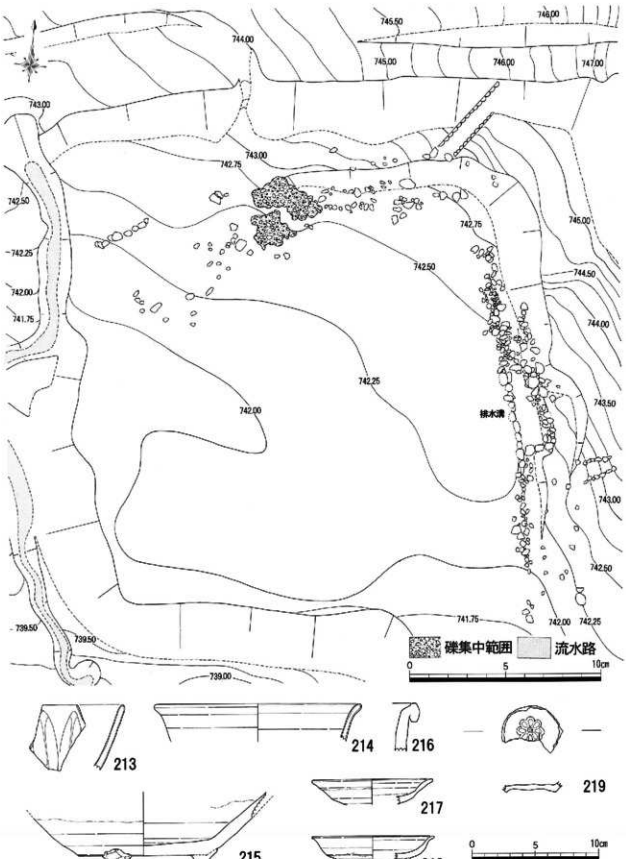
伝本堂跡北東隅のＬ字形に曲がる石列から東へ続く、幅５m、長さ 30m程の細長い平坦面が寺院中心部から伝二重塔跡へいたる参道と推測される。その南側、伝三重塔跡の西下には約 25m四方の平坦面があり、現地形からみて、南西方の 1/2 近くが山側を削った土を盛って造成されたと推測される。この平坦面の北・東側の法面の下場に沿って、両岸に石を積んだ幅１m程の溝がＬ字状にめぐらされていることを確認した。東方の法面側の溝の途中には 1.6×4.6m程の長方形に石を組んだ部分があり、「手洗い場」のような施設があったと思われる。ここから南は溝の幅が約 40 cmと狭くなる。平坦面での建物の有無については未確認である。



第36図　推定参道周辺遺構分布図、TP8・TP13平・断面図



第37図　TP6・TP10平・断面図、出土遺物、トレンチ・TP出土遺物



第38図　E区排水溝周辺遺構分布図、表採遺物

排水溝周辺を中心に、この平坦面では230点の遺物を表採している。その主なものを第38図に、内訳を39図に示した。遺物組成としては、他のトレンチと大きく異なる点はないが、青磁や大薬製品に残存率の良好な遺物が見られ、結果的に多く図示することになった。

213・214は青磁の碗である。213は線彫りによる蓮弁文が施され、B1類に、214は丸みをおびた体部から玉縁状に肥厚した口縁部が外反する形状で、D類にそれぞれ分類される。215は折縁深皿あるいは直縁大皿の底部で、古瀬戸後期の所産と考えられる。216は甕の口縁部で、外折した口縁部が「コ」形に肥圧して、断面は長円形となる。217は緑釉小皿である。口縁部の内面は全面に、外面は約1/2に鉄釉が施される。218は端反皿、219は丸皿である。いずれも薄手の作りで、断面三角形の小さな付け高台を有し、219の底部内面には菊花の印花文が押印される。大窯第2段階頃に帰属すると思われる。

また、推定参道の北方では、参道の北法面に積まれた石積や土塁状の石列などで囲まれた、東西15m、南北20m程の方形の区画（図版4－⑦）や、推定参道のほぼ中間地点からは、参道に直交して北方へ伸びる、両側に石列や土塁状の高まりを伴う幅2.8m程の通路状の遺構（図版4－⑧）などを確認した。さらに北方の別荘分譲地の廃屋の東方では9×20m程の範囲に礫が密集している。何かの遺構である可能性もあるが、他の地区では容易に遺物が表面採集できるのに対し、ここでは全く遺物が採集できないことなどから、人為的な遺構である可能性は低いと考えられる。

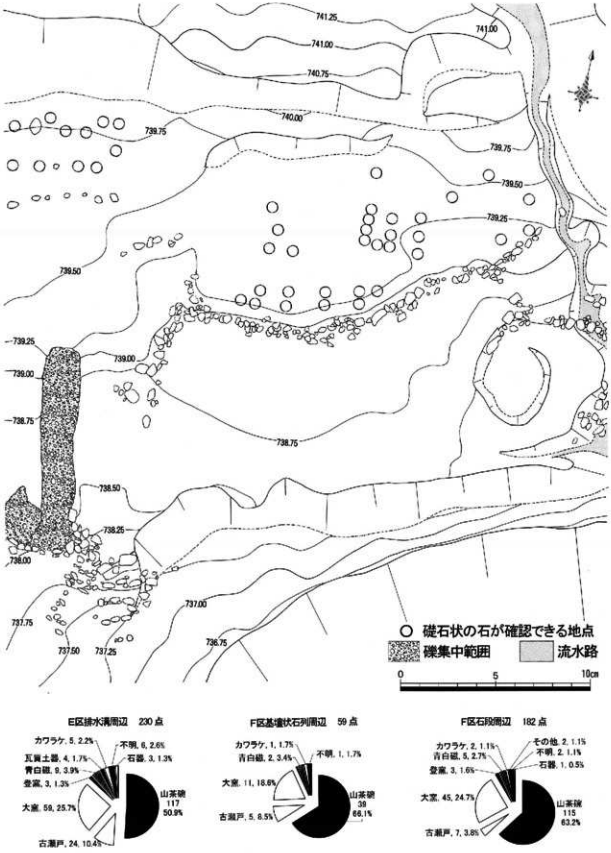
⑩　F区基壇状の石列と石段（第39図、第40図、第41図）

寺院中心部東南方の一段低くなった、80×35m程の三角形の平坦面（F区）では、秩父杉切株の北側から南東方向に伸びる、幅2.8m程の両側に石を並べた通路状の遺構（図版5－①）を確認した。これは寺院中心部からこの平坦面へ降りるための通路と推測される。さらにF区の北東隅では基壇状に石が積まれた区画を確認した。10×20cmから50×90cm石を2段程度積んだもので、緩い弧を描くように、東西20m、南北13m程の範囲を区画している。区画の中からは、礎石状の石が埋もれていることを確認している。また、西方に近接して5.5×4.5m程の建物跡と思われる礎石状の石の列や、F区を細かく区画する石列や土塁状の高まりなどを各所で確認した。

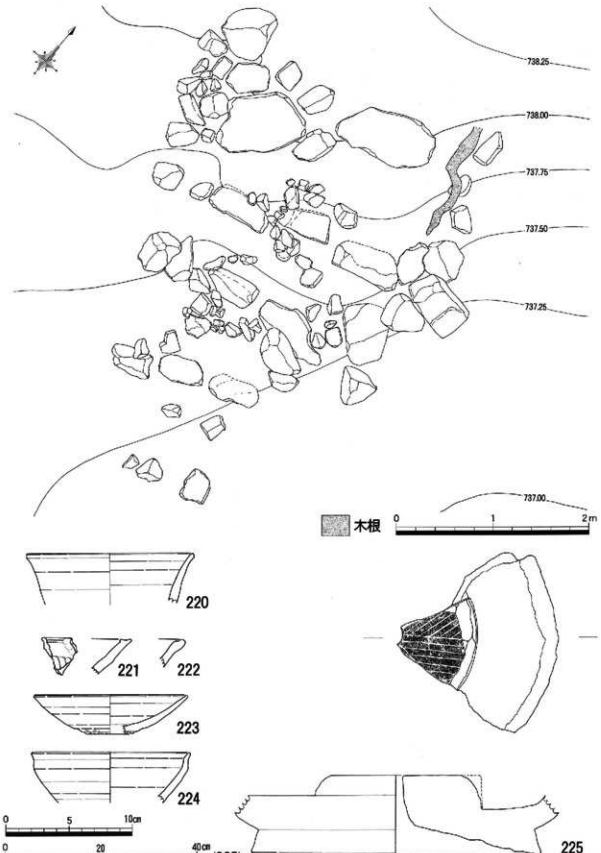
また、この平坦面の南端では30×50cmから100×60cm程の石を4段に積んだ石段（第40図）を確認した。最上段に積まれた石が最も大きく、62×95cmと52×106cmを図り、下段に行くにしたがい、石の法量が小さくなる。石段の上と下での比高差は約75cmを計る。宗猷寺が所蔵する大威徳寺関係の古文書に『威徳寺跡図』があるが、この図には寺院中心部の南東側から般若谷を渡って加子母小郷へいたる道が記されており、この石段もこの道と関係のある施設と思われる。

第4図に示したように、F区では453点の遺物を表採している。そのうち基壇状石列周辺及び石段周辺で採集した遺物の内訳を第39図に、その主なものを第40図に示した。

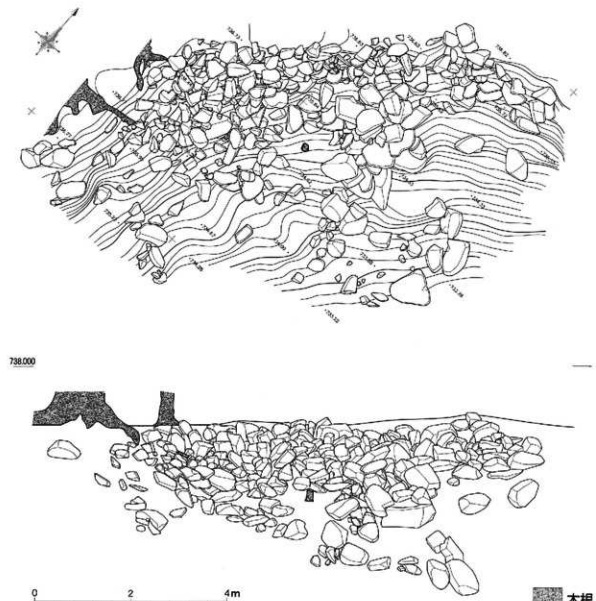
220は古瀬戸の筒型容器で、灰釉が施される。221は卸皿で、どちらも古瀬戸後期の所産と考えられる。222・223は山茶碗の範疇に入るもので、222の鉢は外反して玉縁状に肥厚する口縁部の内側に沈線が一条めぐらされる。223の碗は10型式に帰属すると考えられる。224の天目茶碗は長めの口唇部がほぼ直立し、端部が外反する形状で、17世紀前半の所産と考えられる。225は茶臼の下臼である。安山岩を素材とし、受皿の端部を欠失しているが、擂面の約1/6が残る。8分画7溝で、ふくみがなく擂面はほぼ平坦で、芯木孔は円形で径1.8cmと推測される。

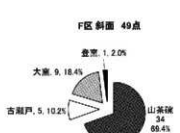


第39図　F区遺構分布図、E・F区遺物点数



第40図　F区石段平面図、F区表採遺物





第41図　F区斜面石積平・立面図、F区斜面遺物点数

⑪ 伝山門跡と東法面の石列(第 42・44 図)

伝山門跡(第 44 図)は寺跡の最も南に位置し、寺院中心部から約 120m離れている。基壇の規模は東西約 14m、南北約 8.5mを計る。南側(正面)には 70×50×20 cm程の石を積んだ石段が2段残り、正面と左右側面の三面には伝本堂跡と同様に基壇化粧が施されていたと考えられる。礎石は 12 個全てが確認でき、その配置から、正面二間、側面二間で中央に観音開きの扉を持つ「八脚門」で、8.4×4.8m程の規模の建物であったと考えられる。両側の空間には仁王像が安置されていたと思われ、『経文末書』にある「二王堂」と推定される。

また、山門跡の北側は幅 10m程の平坦面となり、北方の寺院中心部へと緩やかに上りながら続いていく。この平坦面の東法面から、80×50cm前後の比較的大きな石を並べた石列(第 42 図・図版8－⑧)を、長さ約 10mにわたって確認した。石列は浅い溝状の遺構をはさんで、山門跡東端の馬塁の石積へ続いていたと推測され、山門から寺院中心部への参道の東端を示すと考えられる。また山門跡の北側から西隣の平坦面との法面に沿って、「L」字形に浅い溝がめぐり、それが幅約2m、長さ約 15mにわたって上塁状のわずかな土の高まりを形成し、参道の西端を示すと思われる。この間の幅10m前後の空間が参道として機能していたと考えられる。

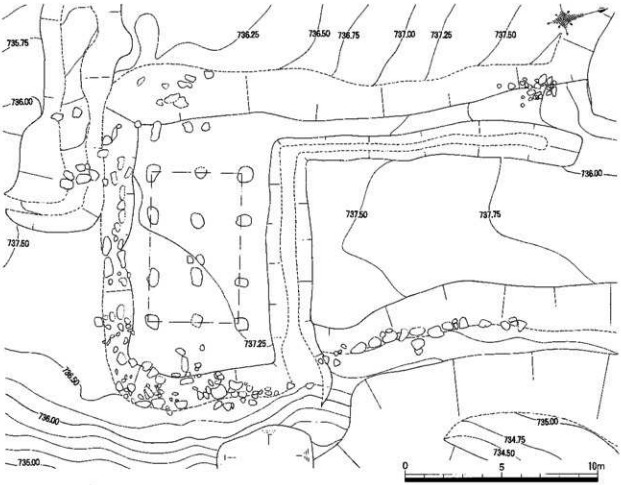
伝山門跡の西方には、参道に沿って 25m四方前後の平坦面が3段の階段状に並んでいる。一番南の山門跡の西方に隣接する平坦面は、北東から南西方向へと比較的きつく傾斜し、比較差は約 3.5mを計る。ここに建物があった可能性は微妙であるが、2段目の平坦面では南および北の法面に石積が部分的に残り、参道に沿って築地状の土塁や石積、石列などが見られる。平坦面のほぼ中央には、60×45 cm前後の礫を並べたL字形の石列も残ることから、何らかの施設があったことはほぼ間違いないと考えられる。

第4図に示したように、山門跡周辺のH区では 87 点の遺物を表採している。いずれも図示に耐えない小片であるが、遺物組成は他の地区やトレンチとほぼ同様である。

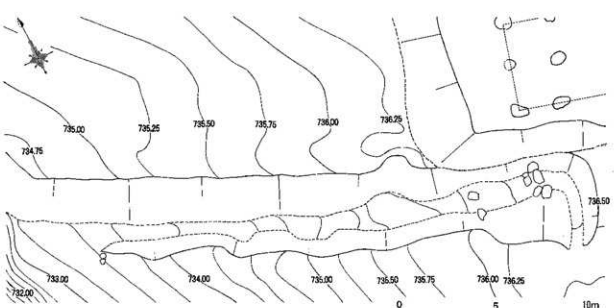
⑫ 伝三重塔跡と西法面の石積(第 45・47 図)

伝本堂跡東方の尾根斜面を 25×10m程の郭状に整地した場所に位置し、寺院中心部からは約 100m離れている。今回、草刈などの作業により石積の配置をほぼ確認することができた。桁行五間、梁間二間の西向きの建物の周囲に縁側か庇が巡る構造で、大きさは 13×6.5m程であったことが明らかになり、ここに三重塔があった可能性は全くなくなった。礎石は 33 個が確認できた。このような構造の建物は類例に乏しいが、先にも触れた宗猷寺所蔵の「威徳寺跡図」には、「石壇」「鎮守屋敷」などの記載があり、『経文末書』にある「拝殿」ではないかと考えられる。

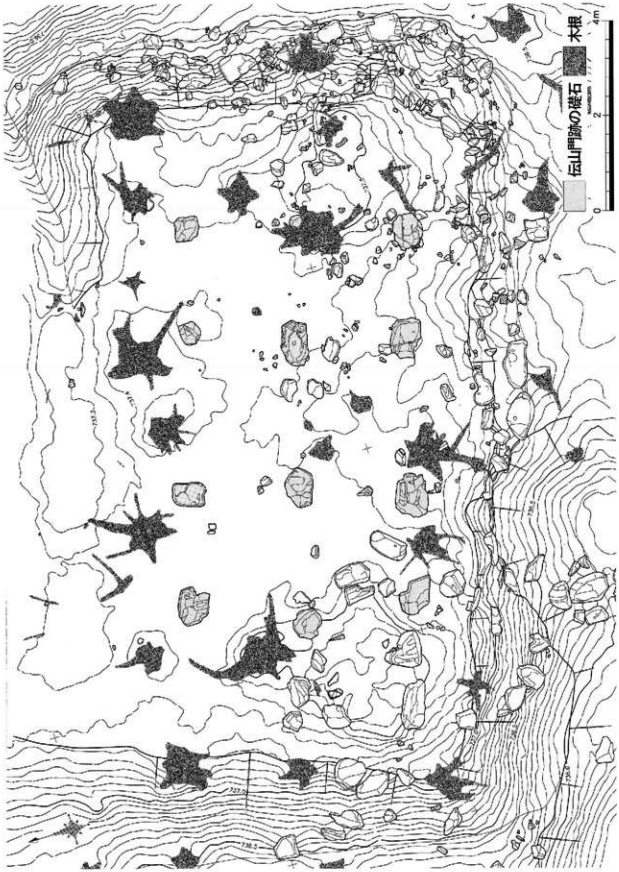
伝三重塔跡の西下には、⑨で触れた排水溝のある平坦面が位置し、比高差は約8mを計る。斜面の途中に犬走り状の平坦面があり、その上方の高さ約4m、長さ約 10mにわたって石積が築かれている(第 45 図)。人頭大から 70×40 cm程の石を用いた、本遺跡では最も大規模な遺構である。切り石を使わない、いわゆる「野面積み」によって築かれているが、コーナーの処理も未熟で、明確な角を持たず、技術的には稚拙であるとの印象はまぬがれない。年代観については、江戸東京博物館・斎藤慎一氏が来跡されたおりに、15 世紀頃のものではないかとの所見をいただいた。氏の教示に従えば、飛騨地方でも古い時期に築かれた石積ということになる。



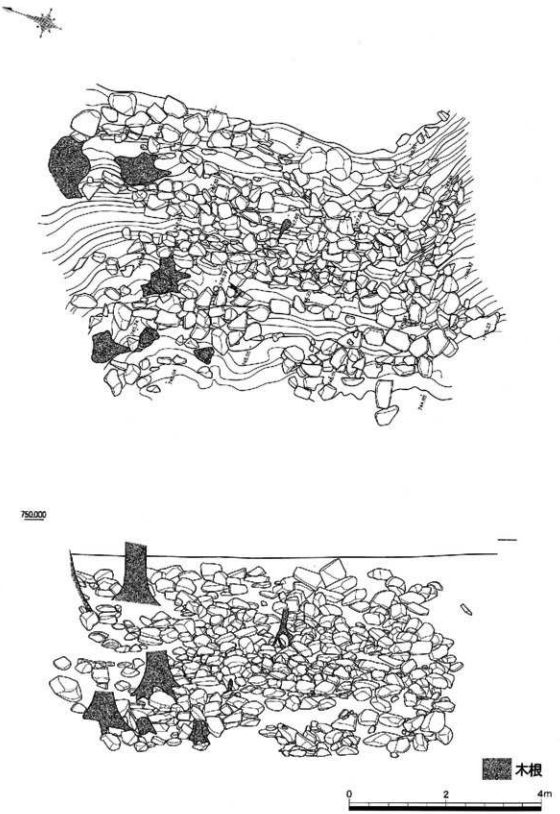
第42図　伝山門跡周辺遺構分布図



第43図　伝山門跡南堀状遺構平面図



第44図　伝山門跡平面図



第45図　伝三重塔痕西斜面石積平・立面図

⑬ 伝鐘楼跡(第46図)

伝鐘楼跡は伝三重塔跡のある尾根頂部に位置し、比高差は約8mを計る。寺域の中では最も高所に位置することになり、鐘楼を建てるにはふさわしい地でもあるが、今回、享刻などの作業により桁行五間、梁間四間の西向きの建物跡と、その西側に人頭大から40×20cm程の礫をL字状の並べた石列を確認した。礎石の中には、元位置から動いているものも見られるが、梁間方向の礎石の間隔は、前から1.50m、0.90m、1.35m、1.35mを、桁行方向の礎石の間隔は、北から0.90m、1.50m、1.50m、1.50m、0.90mと推定され、通常の鐘楼とは異なる礎石の配置を見せる。建物の性格についてはさらに検討を要するが、三間×二間の建物の前と左右の三方向に縁側が付き、正面の庇が長く伸びる、神社建築に多い「流造り」の建物ではなかったかと考えている[8]。西法面の裏下にある伝三重塔跡との建物主軸も微妙に異なるが、『経文末書』にある「鎮守」であったと思われ、この辺りが大威徳寺の中の「神社信仰」の場であったと考えたい。

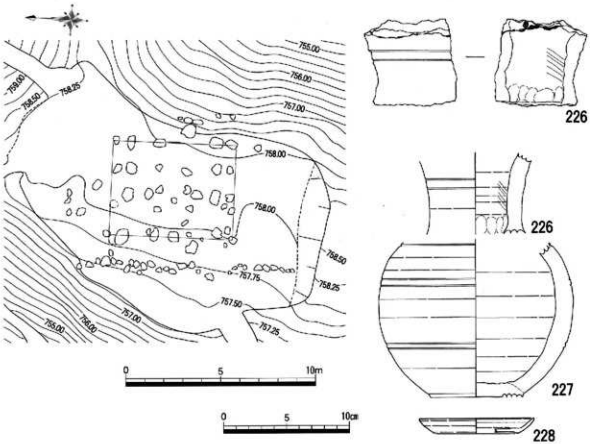
伝三重塔跡を中心とするI区から5点、伝鐘楼跡を中心とするJ区から16点と、散的には多くないが、遺物を表採している。その主なものを第46図に、第4図にはI区とJ両区を合わせた内訳を示した。

226・227は長頸瓶と考えられる。接合関係は確認できないが、近接した場所から採集しており、胎土や色調、焼成などから見て同一個体と推測される。厚手の作りで、丸みをおびた体部から頸部が外反して立ち上がる形状であったと推測される。頸部である227には、昨年出土した多口瓶と同様に「漆接ぎ」によって補修されたと見られる箇所が観察される。228の山茶碗・小皿は8～9型式に帰属すると考えられる。

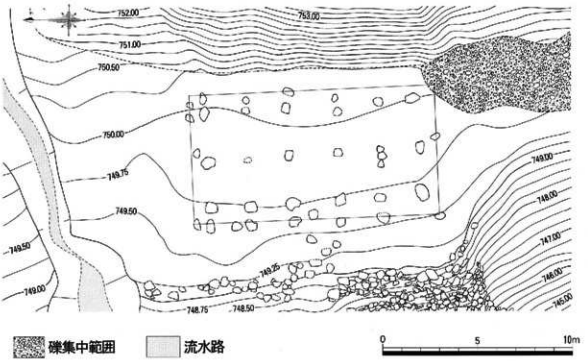
⑭ その他の遺構、トレンチ・TP出土遺物、表採遺物(第37図・第48図)

寺院中心部北西方のD区では、南北に長い弓型の平坦面が2～3段の階段状に並んでおり、法面に積まれた石積や両岸を石で積んだ幅1m程の排水溝(第48図)などを確認した。D区では建物跡の明確な痕跡は確認できていないが、247点の遺物を表採しており、この平坦面にも何らかの施設があったことはほぼ間違いないと考えられる。

201は灰釉陶器の碗である。底部の破片で、やや形の崩れた三日月高台の外側に緩い稜をもつ。折戸53号窯式期から東山72号窯式期頃の所産と思われる。202・203は古瀬戸・平碗である。202の体部は立ち上がりが緩く、口唇部がS字状に緩く屈曲する。203は削り出し輪高台で、どちらも古瀬戸後期頃の所産と思われる。204は仏華瓶の底部である。いわゆる「尊式華瓶」に分類されるもので、古瀬戸後I～II期頃の所産と思われる。205・206は山茶碗の範疇に入るものである。205の碗は11型式のうち、生田窯を標識とする一群に帰属すると考えられる。206は火舎香炉と考えられる。207の志野丸皿は、断面三角形の小さな貼り付け高台を持つ。17世紀前半の所産と思われる。208は青磁の無文の直口碗で、E類に分類できる。209は青磁の無高台の皿で、底部内面に線彫りによる文様が施される。210は鉢類の底部である。胎土は青色がかった色調で、径3mm前後の砂粒を多く含む。幅1.5cm程の断面三角形の低い貼り付け高台を持つ。211・212は砥石で、211は磨面が四面に残る。

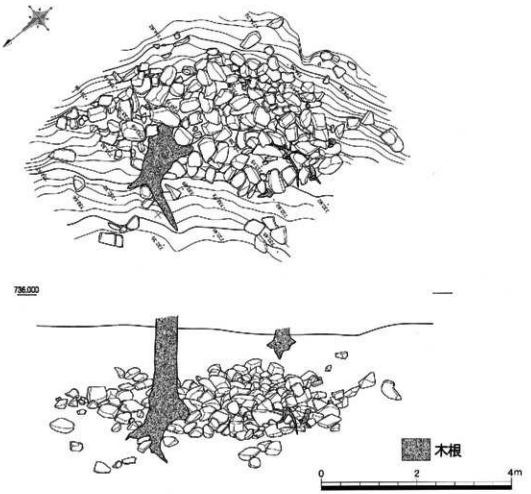


第46図　伝鐘楼跡遺構分布図、表採遺物



第47図　伝三重塔跡遺構分布図

第48図　D区排水溝周辺遺構分布図



第49図　D区西斜面石積平・立面図

3　主な成果

今回の調査の成果として、

① 寺院中心部の西南方に近接して、築地塀等に囲まれた五間四方の建物跡を確認した。

② 寺院中心部の南に隣接する地区では目立った遺構は確認できず、東西約40m、南北約30mの範囲は広場状の空間であったと考えられる。

③ 伝山門跡の北方で、東方の法面から石列を確認し、山門から寺院中心部へ幅10m近い規模の参道が続いていたと推測される。

④ 寺院中心部の北東・東・西に近接する平坦面では、石段や通路状の石列、排水溝、法面に積んだ石積などを確認した。さらに平成11年度に作成した地形測量図の範囲外からも人の手が加えられた痕跡が各所に見られ、広範囲に遺構が分布することが確認できた。

といった点が挙げられる。寺院中心部の西および南方に近接する地区での遺構の有無をある程度明らかにすることができた。その結果、寺院中心部の南正面は広場となり、伝山門跡から寺院中心部へと、幅10m程の参道が続き、山門跡北西方の階段状の平坦面や広場の西側などに坊院が並んでいたと推測されるなど、大威徳寺の空間構成をさらに明らかにすることができたと考える。さらに草刈などにより、寺院に関わる遺構が当初の予想以上に広範囲におよぶことも確認できた。それと同時に、平成11年度に作製した地形測量図の範囲外にも遺構の分布がおよび、それらの遺構や草木に埋もれていた微妙な地形が、必ずしも測量図に反映されていないという課題も明らかになってきた。

また、昨年度の多口瓶に続き、今年度の調査で出土した灰釉陶器は、出土量は極めて少数であるが、寺院の創建時期を考える上で、平安期にさかのぼる可能性を示唆する一群である。さらに、史跡周辺を中心に、江戸初期の遺物が一定量出土し、昨年の調査で得られた資料を含めて、多口瓶を最古に17世紀の末頃までほぼ連続した時期の遺物が出土したことになる。また、伊勢型鍋と土器内湾羽釜の組み合わせは、鎌倉から室町にかけての東海地方における煮沸具の一般的なあり方に共通するもので、今まで空白であった飛騨地方の中世前半の煮沸具の様相について、貴重な資料を提供することができたと考える。

注① 神戸大学助教授・黒田龍二氏が来跡された際、総柱の建物と仮定すると、仏像や厨子を納めるには礎石の間隔が狭く、建物が小さすぎると思われ、仏堂とするよりも神社建築と考えた方が良いかもしれないとの、所見・感想をいただいた。

第３節　平成17年度調査

１　調査の目的と方法

平成17年度の調査は、①寺域の推定を目的に、寺院の北端を示す遺構の有無の確認を目指して、トレンチによる試掘調査は主に北方の別荘分譲地や水田部を対象とした。トレンチやＴＰの設定や掘削については、原則として前年度の調査に準じたが、別荘分譲地内に設定したＤ～Ｆトレや、水田部に設定したＴＰ１・２については、現地形や地表に露出する石などを考慮してトレンチを設定した。また、平成16年度までの調査により、平成11年度に作製した地形測量図の範囲外にも寺院に関わる遺構が分布することが明らかとなり、新しく確認できた遺構を地形測量図に反映させるために、対象範囲を広げて遺跡の地形測量を行った。なお、地形測量の範囲は12,000㎡である。それに伴い、５月から７月にかけては、主に新しく広げた地形測量対象区の草刈や倒木の整理等の作業を行い、石列や法面の石積など寺院に関わると考えられる遺構や整地された場所の確認、記録などを行った。８・９月の地形測量実施後、９月12日からトレンチによる試掘調査を実施した。

最終的に設定したトレンチはＡ～Ｆの５本、テストピットは２ケ所である（第５図）。各トレンチ設定の目的は、以下の通りである。

Ａトレ：寺院中心部北方での遺構の有無、特に寺域の北の区画となる遺構の有無を確認する。
Ｂトレ：寺院中心部北方での遺構の有無、特に寺域の北の区画となる遺構の有無を確認する。
Ｃトレ：寺院中心部北方での遺構の有無、特に寺域の北の区画となる遺構の有無を確認する。
Ｄトレ：寺院中心部北方の、別荘分譲地内での遺構の有無を確認する。
Ｅトレ：寺院中心部北方の、別荘分譲地内での遺構の有無を確認する。
Ｆトレ：寺院中心部北方の、別荘分譲地内での遺構の有無を確認する。

平成17年度の調査では、約1,300点の遺物が出土した。トレンチからの出土は少なく、全体の90%以上が表採遺物であり、報告する遺物の中にも表面採集による遺物が含まれる。トレンチからの出土遺物の中には、白磁の碗なども含まれるが、結果的にはこれまでの調査と比べて、質・量ともに貧弱な結果に終わった。また、Ａ～Ｃトレより北の別荘分譲地では、表面採集はもとより、設定したＤ～Ｆトレからは遺物が１点も出土しなかった。その一方で、林畑谷左岸の奥部（第５図古瀬戸遺物表採地点）から、古瀬戸中期頃の遺物をまとまって表採し、ここに中世墓が存在した可能性を想定させるにいたった。現在までに有耳壺・瓶子・折縁深皿など、約80点を採集しているが、個体数としては数個体と推測される。このため、第４図に見るようにＫ区表採遺物の遺物組成を、他の区と比べて異質なものとしているが、古瀬戸集中区からの遺物を差し引いた遺物の組成（第４図・Ｋ区表採②グラフ）は他の地区とほぼ同様である。なお、遺物の分類、名称、年代観などについては、第１節の１を参照されたい。また、珠洲窯製品については、『中世須恵器の研究』（吉岡康暢 1994）を参考とした。

2　主な遺構と出土遺物

①　A・B・Cトレ(第50・51図)

平成15年度調査のA９・Ｉ９トレ北方に近接する、北から南へと傾斜する斜面に設定したトレンチで、南方のＡ１・Ｂトレから溝状遺構２条、土塀の基礎状の上の高まりなどを確認した。土層の切り合いの関係から、Ｂトレの北東隅あたりから南北方向に流れる溝の方が新しいと考えられ、寺院廃絶後の自然流路ではないかと推測される。トレンチ南壁の中ほどから西北方へ流れていたと思われる溝は、両側を土塀の基礎状の上の高まりと石列ではさまれており、Ⅱ－４層が土塀の基礎状の高まりを構築する土層と思われることから、寺院に伴う施設と考えたい。

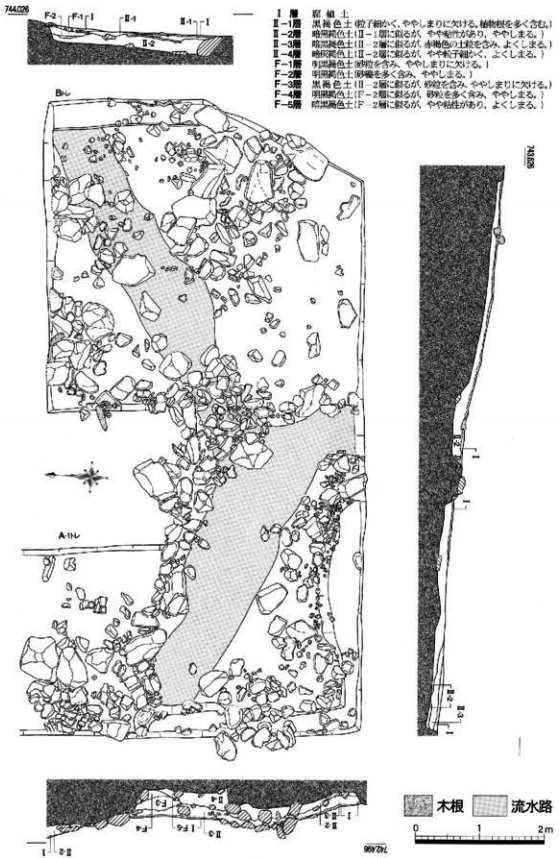
Ｃトレでは石積(第51図)を確認している。高さは約80㎝を計り、最下段の基礎の部分と最上段には60～80㎝前後の比較的大きな石を使用し、その間には20～40㎝前後の、やや小さめの石が２～３段積まれる。部分的に崩れた箇所もあり、寺院中心部の建物の主軸とも異なるが、現地形の法面に沿って、北西から南東方向へ、約30mは続いていたと見受けられる。周辺の地形や、Ｃトレより北に設定したトレンチからは遺物が全く確認できないこともあり、この石積が寺院北方の区画であったと考えたい。

Ａ～Ｃトレからは83点の遺物が出土している。その主なものを第53図229～240に示した。最も南のＡＩ・Ｂトレから大半の60点が出土しており、北のトレンチへ行くほど出土数が減る傾向が見られる。遺物組成は山茶碗が43.5%と、他のトレンチに比べてやや比率が低く、その分古瀬戸の割合が36.1%とやや高く、この２種類で全体の約80%を占める。また、江戸時代の連房式登窯期の遺物が1.2%と少なく、鎌倉前期から室町後期まで、ちょうど大威徳寺が存続していたと伝えられる時期に一致すると考えられる遺物が主体を占める。

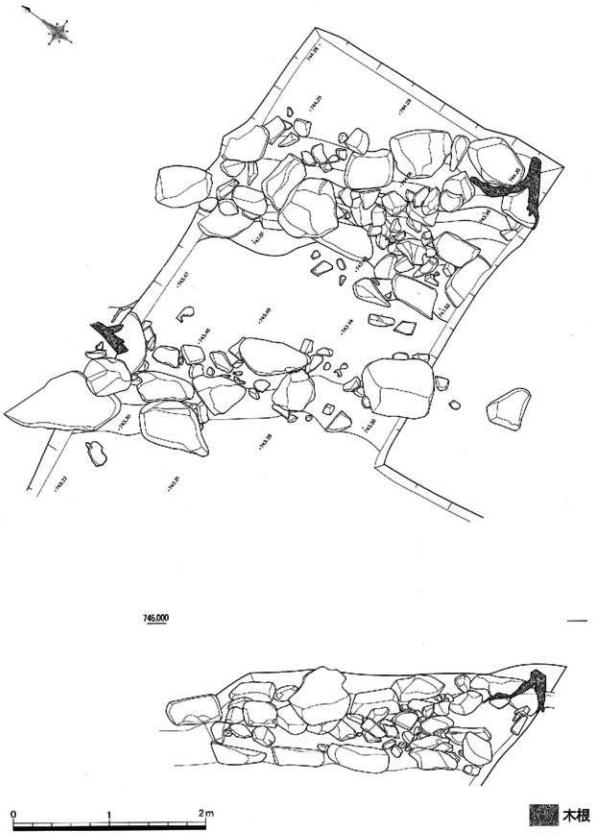
229は底部目皿である。底部の破片で、1/3程度が残っている。底部外面には彫りの深い卸目が格子状に刻まれ、高台が剥離した部分には回転糸切痕が残る。古瀬戸中期頃の所産ではないかと思われる。230は平碗である。体部の立ち上がりが緩く、口唇部がＳ字状に緩く屈曲する。231は折縁深皿である。水平方向に外折した口縁部が内側に折り返され、内面に段が形成される形状を示す。232～235は山茶碗・碗である。232～234は第９～10型式に、235は第11型式のうち、脇之島窯を標識とする一群に帰属すると考えられる。236～238は天目茶碗である。236は、体部の丸みが少なく、口唇部がややくびれ、端部が丸くおさめられる形状で、237はほぼ直立する口唇部の中央がわずかにくびれる形状を示す。どちらも古瀬戸後Ⅱ期頃の所産と思われる。238は口唇部がほぼ直立し端部が短く外折する形状で、大窯第２段階頃の所産と思われる。239は平碗の高台部である。240は白磁の碗である。口縁部を外反させ端部を水平にするもので、体部内面上位に浅い沈線がめぐらされる形状で、Ⅵ類に分類される。

②　D～Fトレ(第52図)

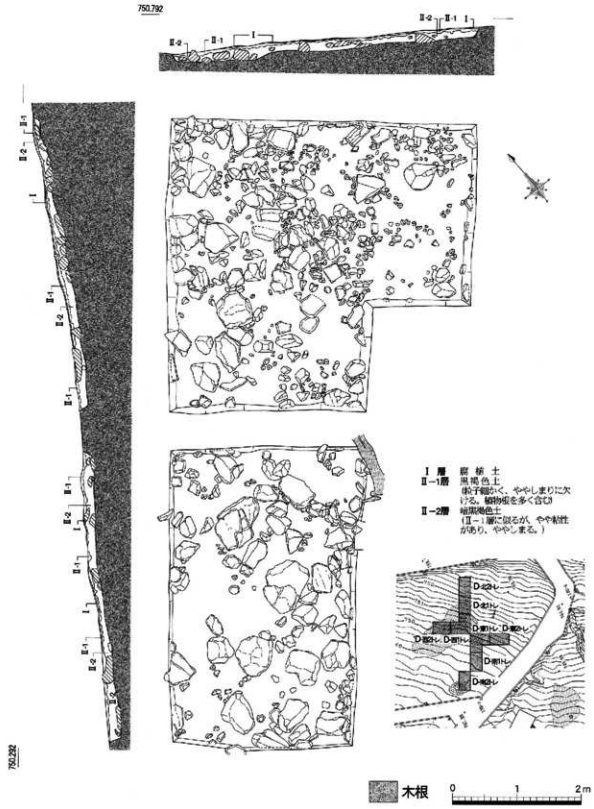
別荘分譲地内に設定したDからFの各トレンチからは、礫を多く確認している。様相は第52図に示したD東１・南１トレと大同小異で、見方によれば人為的なものと見えなくもないが、いずれも石の配置や縦横方向の使い分けなどに意図的なものが感じられず、遺物が全く出土しないこともあり、遺構と判定するにはいたらなかった。また、水田部に設定したＴＰ１・２からも、目だった遺構や遺物は確認できなかった。



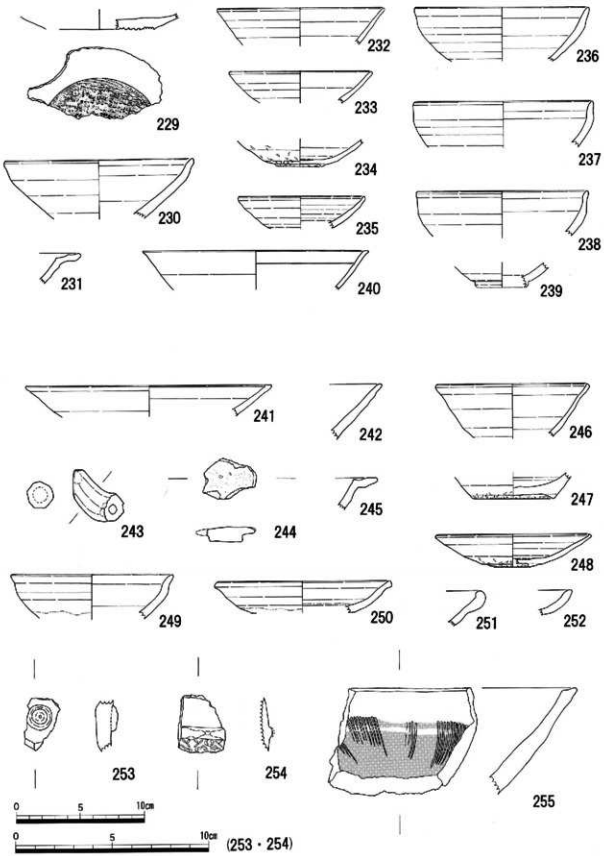
第50図　A1・Bトレ平・断面図



第51図　Cトレ石積平・立面図



第52図　D東１・南トレ平・断面図



第53図　トレンチ出土遺物、表採遺物

③ 林畑谷左岸の斜面（図版６・７）

寺院の両側を流れる通称林畑谷の両岸については、大雨のたびに谷が氾濫し、北方の別荘分譲地から流れ込む水路が流れを変え、極めて低湿であるため、寺院に伴う仏堂や僧坊などがあった可能性は低いと考えられる。しかし、地形測量に先立ち、草刈や倒木の整理などを行ったところ、通路を思わせる石列(図版６－⑥)や石積、排水路の護岸と思われる石積(図版６－⑦)、人頭大の石を並べた敷石状の集石（図版６－⑧）などの遺構が散在し、斜面の最南端からは、時期・用途は全く不明であるが、円形に石を組んだ水場状の遺構(図版７－①)も確認している。明確な建物跡などは確認できなかったが、この斜面の相当範囲に人の手が加わった痕跡が見られ、さらにこの斜面の南端は尾根の北側がＬ字形に削平され、土塁状の形状を示している(図版７－②)。ちょうど米搗平から清水坂を上がってきた現道が、急角度に曲がって寺域内へと入っていくあたりで、ここに参道なども含めた広い意味での寺域の南端を想定することも可能と考えられる。しかし、地元地権者の話によると、戦後この辺りを畑として使用した時期もあるとのことで、これらの遺構の性格・年代観などについてはさらに慎重に検討する必要がある。先に引用した高山宗猷寺所蔵の「威徳寺跡図」には、林畑谷を渡ってから谷沿いに左岸斜面を北上し、寺院中心部の北側へ入っていく道も記されており、西麓の御厩野の集落から寺院中心部へ、あるいはこの斜面の北東にあったと思われる墓域(古瀬戸遺物表採地点)へ行くためのアクセスを確保する空間ではなかったかと思われる。

④ 古瀬戸遺物採集地点と表採遺物(第55図、図版９－⑮)

林畑谷左岸の緩斜面の北端、別荘分譲地内で最も南に残る水田の南法面の下方から、古瀬戸中期頃を中心とした遺物をまとまって表採した（第４・64図)。採集地点のすぐ下方を流水路が流れるため、法面にあった土坑などの遺構が流水路で削られ、遺物が露出したものと想像される。法面には拳大から人頭大の礫が散在しているが、墓に伴うと思われる集石や土坑の掘り方など、明確な遺構の痕跡は確認できない。しかし、表採遺物の大半が蔵骨器として使用される器種で、ここに中世墓があった可能性は高く、寺域の北および西端を考える上での手がかりとなると考える。

採集した遺物80点のうち、古瀬戸の範疇に入るものは75点である。確認できた器種は、瓶子（２個体以上)、有耳壺（１個体以上)、折縁深皿（１個体以上)、擂鉢（１個体以上)で、数個体はあったと考えられる。その主なものを、第55図の263～268に図示した。

263～265は「直腰型」瓶子と考えられる。263は口縁部直下に断面三角形の凸帯がめぐる、いわゆる「二重口縁」の形状を示し、口頸部には蓮弁状の文様が、肩部から下には唐草状の文様が施される。264は肩部付近の破片で、胎土や釉の色調などから、263と同一個体と考えられる。265は胴部の破片で、竹管状の工具で平行沈線と径６㎜程の円形の文様が施される。266～268は有耳壺である。266の口縁部は頸部が外反して立ち上がり、口縁端部が外側に折り返されて肥厚し、その下端を断面三角形の小突起状に外側に引き出す形状を示す。267の耳部には、小突線がほぼ等間隔に４条配される。268は付け高台で、ハ字状に外に開いて貼り付けられ、接地部分が上方に浅くくぼむ。269は折縁深皿である。口縁端部が内側に折り返されて肥厚し、さらに端部を上方につまみ上げて断面三角形の小突起を形成する。

⑤ 表採遺物（第53図）

241～245・249は、古瀬戸の範疇に入るものである。241は卸皿で古瀬戸後期の、242は碗型鉢で古瀬戸後Ⅱ期頃の所産と思われる。243は水注の注口部で、外面は八角形に面取りされ、注口穴の径は0.7×0.9㎝を測る。244は蓋と考えられる。天上部全面に灰釉が施され、台部外面には糸切痕が残る。245は折縁深皿で、口縁部がほぼ水平方向に外折れし、端部が内側に折り返され、その内側に段が形成される形状で、古瀬戸後Ⅱ期頃の所産と思われる。249の平碗は口縁部がS字状に屈曲する形状で、古瀬戸後Ⅱ～Ⅲ期頃の所産と思われる。246～248は山茶碗・碗で、246は7～8型式に、247は6型式に、248は10型式に、それぞれ帰属すると考えられる。250は折縁皿で、丸みをおびた体部からわずかに外反する口縁部の端部がかすかに上方につまみ上げられる形状を示す。251の擂鉢は、肥厚した端部の上方が断面半円形に上方へ折り曲げられる形状で、17世紀中頃の所産と思われる。252は土師器(カワラケ)の小片で、灯明皿に使用されたものと考えられる。253は古瀬戸独特の装飾文様である、貼花による同心円文が施された土器片である。器形の推定は困難であるが、広口の壺状の器の頸部付近の破片ではないかと思われる。254はいわゆる「奈良火鉢」である。口縁外面にめぐらされる突線部分で、内側には花菱状の文様が捺印されている。255は珠洲窯産の片口鉢である。擂目は11条を単位とし、口縁部の形状は吉岡分類の水平口縁のb9類に類すると考えられ、Ⅳ2期(14世紀後半)頃の所産と考えられる。図中の網掛けの部分は、使用により著しく摩滅した範囲である。

⑥ 寺域の区画と考えられる遺構（第64図、図版8・9）

これまでの調査で、各所で寺院の区画と考えられる石段や石列、石積、堀状のくぼみや階段状に尾根を整地したと考えられる場所などを確認できた。一部にこれまでに報告した遺構も含まれるが、以下にそれらの遺構と推定される寺域について記しておきたい。なお○で囲んだ数字は、第64図中の○付きの数字と一致し、その位置を示すものである。

○寺院北方の区画と考えられる石積み(第64図－①)

今年度の調査で確認した。詳細は本項①を参照されたい。

○寺院東方の尾根(第64図－②・③)

伝鐘楼跡が建つ南向きの尾根は、西側をL字状に削平して伝三重塔跡が建つ平坦面が造成され(第64図－②、図版8－②)る。尾根は土塁状に削り残され、東側は自然の地形のまま緩若谷へ急傾斜で落ち込んでいく。さらに、伝鐘楼跡から約50m南に下った所に3m四方程の平坦面が設けられ(第64図－③、図版8－③)、ここで尾根の南端はほぼ直角に西へ曲がって、F区で確認した石積や石列へと続いていく。土塁を思わせるこの尾根筋が、寺院の東および南の端になると考えられる。

○加子母方面への出入り口と考えられる石段と石積（第64図－④・⑤・⑥・⑦）

寺院中心部の南東に近接するF区では、石段(第64図－④、第40図、図版8－⑤)、法面に積まれた石積(第64図－⑤、図版8－④)、谷筋を埋めたと見られる石積(第64図－⑥、図版8－⑥)、階段状に整地された尾根(第64図－⑦、図版8－⑦)などを確認した。石段については、先に前項⑩で触れた通りである。門の跡などは確認できないが、加子母小郷方面への出入り口にあたると考えられる。さらに石段の東方、基壇状の石列の南正面に位置する法面には、長さ約20mにわた

って石積が残り、法面の下場にそって幅 1.5～3m前後の犬走り状の通路が東方へ続いている。石積は所々崩れているが、20×30 cmから 40×80 cm程の石を4～5段程度積んだもので、一番下の基礎と最上段に比較的大きな石が配されるのは、①の寺院北方の区画と考えられる石積と同様である。さらに犬走り状の通路の東側(谷側)には、谷筋を埋め、その土留めに積んだと推測される石積(第64図－⑥、第41図、図版8－⑥)が残る。石積は所々崩れており、やはり「積む」というよりも「貼る」と言った方がふさわしい状態である。このような谷を埋めたと思われる痕跡は、他にも2ヶ所で確認でき、F区は大規模に尾根を削り、谷を埋めるなどして造成されたと見られる。さらに、石段の東南尾根は階段状に整地され、この尾根をトると、伝山門跡から南に続く参道へ合流することになり、高山宗猷寺所蔵の「威徳寺跡図」に見る、加子母小郷へいたる小道が、この尾根上(注6)にあったと考えられる。

○寺域東端及び参道の区画と考えられる石列(第64図－⑧)

平成16年度の調査では、伝山門跡北側の東法面から、参道の東端を示すと同時に寺域東端を示すのではないかと思われる石列を確認している(第64図－⑧、第42図、図版8－⑧)。石列の下は幅 1.5m前後の犬走り状の平坦地となり、ここに寺院東の端を想定した。その東方は自然の地形のまま、般若谷へと続いていく。石列については、前項⑪を参照されたい。

○寺院南方の区画と考えられる堀状のくぼみ(第64図－⑨)

平成17年度の調査で、伝山門跡の南側、山門跡のすぐ西に近接する平坦面の南法面の下方が、幅約2m、長さ約25mにわたって、堀状にくぼんでいることを確認した(第43図、図版9－⑨)。深さは現状で約 40 cmを計る。山門から南の参道は、蛇行しながら60m程南にトり、東に曲がって舞台峠方面へと続き、途中でF区石段の東南尾根上の小道と合流する。参道をはさんだ東側からは、堀状の施設は確認できなかった。

○寺院西方と法面の石積み(第64図－⑩・⑪)

山門跡の西方(G区)は中世城館の「腰曲輪(こしくるわ)」状の弓形の平坦面が2～3段の階段状に築かれ、その南及び西の法面は急斜面となって林畑谷左岸へ落ち込んでいき(第64図－⑩、図版9－⑩)、比高差は最大で40m以上を測る。特に寺院中心部西方の、林畑谷左岸斜面との法面には石が積まれていたようで、部分的に石積が残る場所(第64図－⑪・第49図、図版9－⑪)も見られる。現況は「貼り石」といった方がふさわしい状態で、⑥の谷筋を埋めたと見られる石積などと同様である。法面上の平坦面では遺物の散布もあまり多くない。林畑谷左岸の様相については、本項③で触れたが、きわめて低湿で、坊院などが存在した可能性は低いと考えられることから、狭い意味での寺域(寺院に関わる遺構が密に残る範囲)としての南及び西の境をこの法面に設定した。

寺域の北方については、なお検討の余地を多分に残すが、以上のような所見を基に、寺院に関わる遺構が密に残る、狭い意味での寺域をくくったのが、第64図の太線の枠内である。伝本堂跡を中心とした南北約200m、東西約150mの範囲で、自然の地形の影響を受けたためか、やや不恰好な不定形の形状を示す。また、周辺の集落への参道なども含めて、寺院にかかわる遺構が残る、広い意味での寺域については、林畑谷と般若谷にはさまれた、南北 330m 以上、東西 200～330m程の範囲で、地形測量図の範囲にほぼ一致するが、北側については、第64図の太線の枠外まではそれほど広がらないと予測される。

3　主な成果

今回の調査の成果として、

① 寺院中心部の北方で、寺域の北端の区画と考えられる石積を確認することができた。

② さらに昨年度までに確認した寺域の区画と思われる遺構などを基に、寺域(寺院に関わる遺構が密に分布する範囲)を、伝本堂跡を中心とした南北約 200m、東西約 150m の範囲と推定するにいたった。

③ 林畑谷左岸斜面及び寺院東方の斜面からも、各所で人の手が加わった痕跡を確認することができ、周辺の集落への参道も含めた寺院の検討が可能になった。

④ 林畑谷左岸の北奥部で古瀬戸の瓶子など、蔵骨器と考えられる遺物を採集し、この周辺に中世墓のあった可能性が高くなった。

といった点が挙げられる。前年度までの調査で、寺院の東・南・西方においては、寺域の区画と思われる遺構を確認できていたが、今回の調査では、Cトレから寺院の北方を区画すると思われる石積を確認し、寺域の四方を推定することが可能となった。さらに林畑谷左岸やF区東南方の丘陵部からも石列や階段状に尾根を整地した箇所が確認でき、山麓の集落への参道なども含めた寺域の検討も可能となり、前項⑥で述べたように寺域を想定するにいたった。これによって、調査当初からの「寺院の範囲確認」という目的を、ほぼ達成することができたと考える。

また、林畑谷左岸北奥で採集した古瀬戸遺物については、明確な遺構や五輪塔など石製表飾類なども確認できず、ここに墓域があったか否かは慎重に検討する必要があるかが、採集した遺物の大半が蔵骨器に用いられる器種であり、ここに中世墓があった可能性は高く、寺院の空間構成や寺域の北および西方を考える上での大きな手がかりを与えるものと考える。

注① 第 64 図では、尾根上の通路の幅を特定できないため、便宜上尾根頂部全体に網をかけたが、実際に通路として機能していたのは、網を掛けた範囲の一部と思われる。これは、林畑谷左岸においても同様である。

第４節　平成 18 年度調査

１　調査の目的と方法

昨年度の調査では、寺院中心部の北方約 60mの辺りで寺域の北端と思われる石積を確認し、日常的に僧侶が修行をする範囲としての、狭い意味での寺域（寺院に関わる遺構が密に残る範囲）をほぼ推定するにいたった。しかし、寺院中心部の東に近接するＥ区においては、寺院の北限を示す遺構は未確認であり、寺域の推定にさらに正確をきすため、Ｅ区北方を中心にトレンチによる試掘調査を行い、寺域の北の区画となる遺構の有無を確認した。さらに、寺院中心部から林畑谷を渡った北西方約 110mのところにある、五輪塔や宝篋印塔などの石造物集積地において、作業中に偶然蔵骨器を発見し、ここに中世墓があったことが明らかになった。そこで集積地の現況の実測を行うとともに、集積地の西北方の斜面を中心に再度周辺の草刈や踏査を行い、中世墓などの遺構の有無を確認した。その結果、石造物集積地から北へ 80m程離れた地点で、中世墓に伴うと考えられる集石を確認し、蔵骨器と推測される土器片を採集した。採集した遺物は 39 点で、そのうち蔵骨器と考えられるのは 34 点を数え、瓶子や有耳壺など、数個体あると推測される。試掘調査や踏査などの屋外作業を９月 25 日まで行い、10 月からは整理作業・報告書作成を行った。加えて、大威徳寺の関連遺物ということで、現集積地に祀られている石造物（内２基は昭和 40 年代に作製されたもの）の実測を行った。

トレンチやＴＰの設定については、主に現地形や地表に露出する石などを考慮して設定し、掘削は人力によって行った。最終的に設定したトレンチはＡ・Ｂの２本、テストピットは１ケ所である（第５図）。トレンチ設定の目的は、以下の通りである。

Ａトレ：Ｅ区北方の廃屋西方の平坦面において、昨年度に確認した寺域北方の区画と考えられる石積に続くような遺構の有無を確認する。

Ｂトレ：長命の泉付近における、寺域の北の区画となるような遺構の有無を確認する。

平成 18 年度の調査では、約 500 点の遺物を採集している。トレンチからの出土遺物は 30 点に満たないが、その内訳を下記の第３表に示した。結果的に、出土遺物の大半が表採遺物ということになり、報告する遺物の中にも表面採集による遺物が含まれる。出土遺物の概要については、これまでの調査と同様であるが、青・白磁などの貿易陶磁や、香炉・華瓶などの仏具については、昨年度の調査以上に恵まれなかった。なお、遺物の分類、名称、年代観などについては、第１節の１を参照されたい。

第３表　平成 18 年度設定トレンチ出土遺物点数

種別 / トレンチ	山茶碗	古瀬戸	大窯	登窯	青白磁	瓦質土器	カワラケ	その他	不明	石器	金属器	合計
Ａ－１トレ	11	2										13
Ａ－２トレ		2										2
Ａ－３トレ	3		2									5
Ａ－４トレ		1						1				2
Ａ－５トレ	2										1	3
ＴＰ１	1	1				1						3
Ｂ－２トレ							1					1
合　計	17	6	2			1	1	1			1	29

2　主な遺構と出土遺物

①　Aトレ(第54図)

寺院中心部の北東方、推定参道の北側に3段に階段状に築かれた長方形の平坦面に設定したトレンチで、寺院の北端と推定できる明確な遺構は確認できなかったが、A4トレの南方では築地塀の基礎状の集石を、A3トレの南方では基壇状に地山を削って平坦面を作り出していることなどを確認した。基礎状の集石は、確認できた範囲で東西約1.5m、幅約1.0mにすぎないが、高さは最大で約0.3mを計る。集石の東方は推定参道から枝分かれした道路上の遺構の右列に続くと見られるが、西方については不明確である。しかし、法面の上場に沿って西に伸びるとの推測が許されるなら、昨年度の調査で確認した寺院北端の区画と考えられる石積の東方につながるような位置関係にあり、寺院の北端を示す遺構である可能性を否定するものではないと考えたい。

先に触れたように、トレンチから出土した遺物は29点に過ぎず、質量ともに貧弱な結果であったが、そのうちの主な物を、第54図に示した。

256～261は、Aトレ及びTP1から出土したものである。256は古瀬戸の折縁深皿である。口縁部がほぼ水平方向に外折して尖り気味に厚さを減じ、端部が内側に折り返されてその内側に段が形成される形状を示す。古瀬戸後期の所産と考えられる。257～260は山茶碗の範疇に入るもので、257の碗は10型式に、258の碗は9～10型式に帰属すると考えられる。また、259の小皿は第7型式に、260の小皿は9～10型式に帰属すると考えられる。261は「奈良火鉢」の口縁部であるが、外面の文様については摩滅が著しく、詳細は不明である。

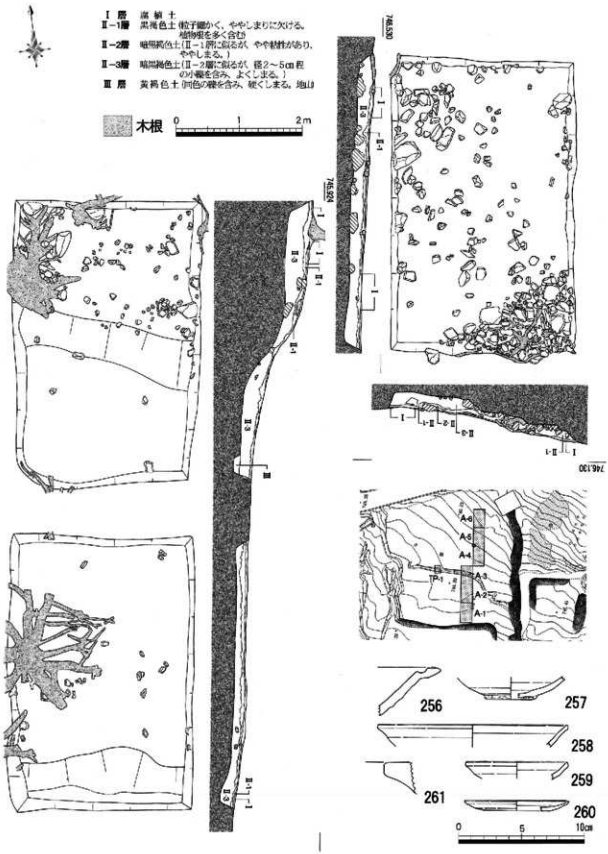
②　Bトレ(第55図)

伝三重塔跡の西方、長命の泉の南方に続く斜面に設定したBトレでは、各トレンチから礫が数多く出土しているが、いずれも石の配置や縦横方向の使い分けなどに意図的なものが感じられず、遺構と判定するにはいたらなかった。あるいは、参道から分かれて、寺域内の湧水点(長命の泉)へ行くための通路状の空間であった可能性も推測されるが、明らかにするにはいたっていない。

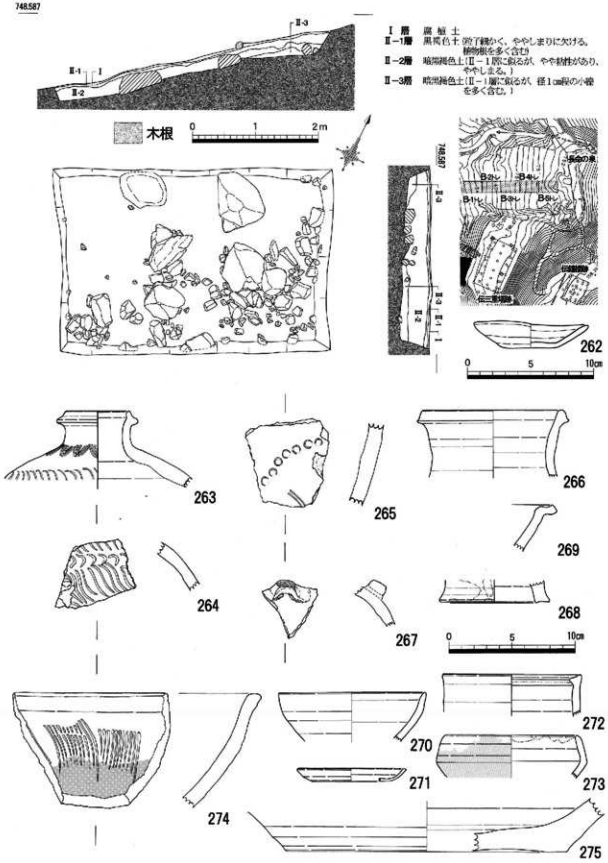
Bトレでは、B2トレから土師皿(カワラケ)が1点だけ出土している(第55図・262)。いわゆる「京都系土師器」の範疇に入るもので、腰部の内面がわずかにくぼみ、体部は外反気味に立ち上がり、口縁部はかすかに肥厚し、端部は厚さを減じて丸く仕上げられる。内面及び体部外面にはナデ調整が施される。底部の中央が上方にわずかに突出する、「へそ皿」に類するもので、内・外面には煤が付着しており、灯明皿として使用されていたと考えられる。

③　表採遺物(第55図)

270は天目茶碗である。口縁部がS字状に緩く屈曲し、大窯第3段階頃の所産ではないかと思われる。271の山茶碗・小皿は9～10型式に帰属すると考えられる。272は筒型の香炉で、灰釉が施される。17世紀前半から中頃の所産と考えられる。273は口縁部が「く」字状に内傾し、外面は無釉であるが内面には灰釉が施される。外面(図中の網掛け部分)に煤状の炭化物が付着するため、煮炊きに用いられた鍋釜に類する器種と思われる。274は珠洲窯産の片口鉢である。擂口は11条を単位とし、口縁部は基部でくびれ鬼状に肥厚した端面がくぼむ形状を示し、吉岡分類のd4類に類すると考えられ、第Ⅴ期(15世紀前半)頃の所産と考えられる。図中の網掛けの部分は、使用により著しく摩滅した範囲である。275は無釉の甕の底部で、外面には糸切痕が残る。



第54図　A2～4トレ平・断面図、出土遺物



第55図　B2トレ平・断面図、出土遺物、表採遺物

④ 石造物集積地（第 56 図）

西麓の御嶽野から遺跡にいたる途中、道路に面して 15×10m程の三角形に整地された場所があり、現在、五輪塔や宝篋印塔などの石造物 12 基が祀られている。地元の人によると、これらは昭和 40 年代に周辺に散在していたものを合祀したとのことで、今回、ここで作業中に偶然蔵骨器を発見した（第 56 図）。墓の上部はすでに削平されており、集石の有無など、上部構造についてはよく分からないが、100×50 cm程の隅丸の長方形の土坑を掘り、穴の壁面に石が置かれる形状ではないかと推測される。現在地表に残る石列や石段について、道沿いの石列や石段は道路の造成時に、他の石列も昭和 40 年代の合祀の際に築かれた可能性もあり、今回発見した中世墓との関係は不明であるが、ここに中世墓があったことはほぼ間違いないと言えよう。

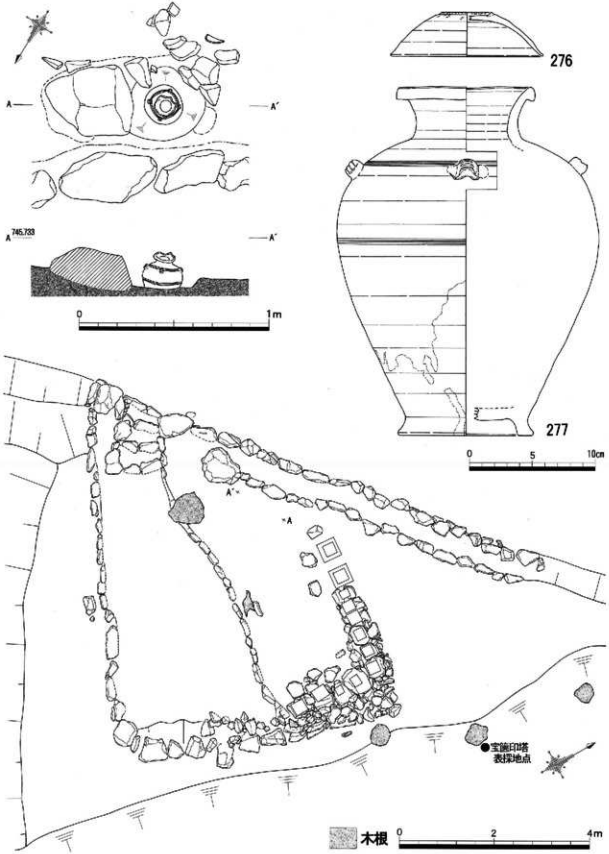
『中世墓資料集成　－中部・東海編－』(2005)よると、中世墓として飛騨地方では、上町D遺跡(飛騨市古川町)、杉崎廃寺(同)に次いで三例目の発見となるが、本格的な蔵骨器を伴う墓としては、飛騨地方で初めての発見となる。

蔵骨器（第 56 図 277）は古瀬戸の四耳壺を転用したもので、「ハ」字形に外へ開く付け高台を持ち、焼成後に底部に 1.0×1.4 cm程の穴が穿孔される。体部は直線的に立ち上がり、肩部は丸みをおびる。口縁部は外反して立ち上がり、端部が外側に折り返され、下端が尖った縁帯を形成する。耳部には小突線がほぼ等間隔に４条配され、耳部直上と肩部下方の２ヶ所に、櫛状の工具による平行沈線が４～5 条めぐらされる。古瀬戸後Ⅱ期頃の所産と考えられる。蔵骨器内の土砂には相当量の火葬骨が含まれていた。276 の山茶椀・碗は８片が接合したものであるが、破片は蔵骨器内の土砂や、近辺から採集したもので、蔵骨器の蓋として使用されたと考えられる。10 型式に帰属すると考えられ、蔵骨器の年代観とほぼ一致することになる。

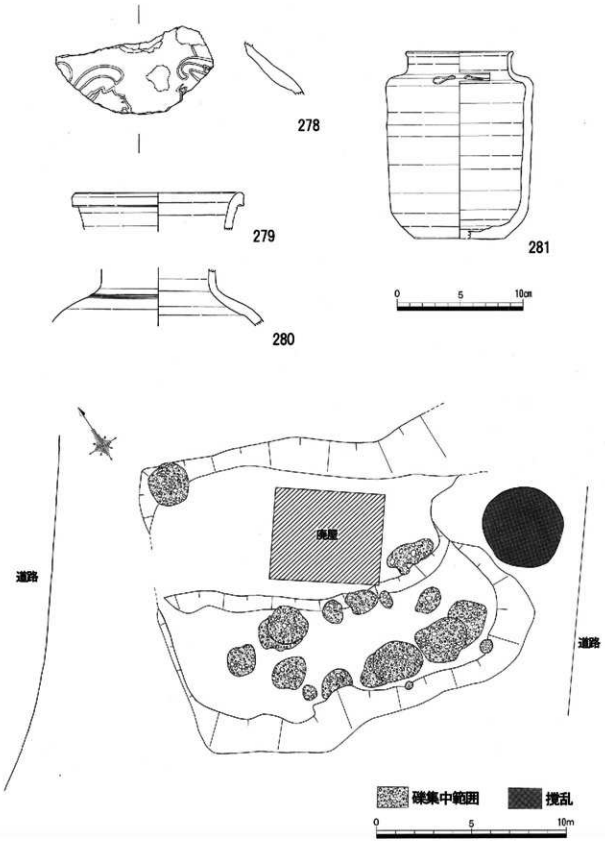
⑤ 礫集中地区と表採遺物（第 57 図）

現石造物集積地と道をはさんだ西側は、かつて別荘として分譲され、廃屋も何軒か散在する。集石を確認したのは、現石造物集積地から道沿いに北へ約 80m行った所で、廃屋の南に一段下がった前庭の部分にあたる。拳大から人頭大の石が 0.6×1.0mから 2.1×2.6m程の不定形に密集しており、中には１m前後の石を方形に配置したと思われる部分も見られる。集石の切りあいも想定され、プランの検出も不十分であるが、このような集石が 10 基前後はあると予測される。

これまでに 35 点の遺物を採集しており、その主なものを第 57 図 278～281 に示した。278 は瓶子の肩部である。口縁部は欠失しているが、棒状の工具で簾手状の文様と綿雲状の文様が描かれる。古瀬戸中期の後半頃の所産ではないかと思われる。279・280 は有耳壺で、胎土や釉の色調などから同一個体である可能性が考えられる。279 の口縁部は頸部が外反気味に立ち上がり、口縁端部が外側に折り返されて縁帯部を形成し、その下端を外側にわずかに引き出す形状を示す。280 は口頸部との接合部近くに櫛状の工具による平行沈線が３～４条めぐらされる。281 は有耳の広口壺である。無釉で、筒型の胴部から、口の広い口縁部が内傾気味に短く立ち上がり、端部が外反して玉縁状に丸く肥厚する。肩部には粘土紐による耳が２ヶ所に付けられる。類例に乏しい異型の形状を示し、時代や産地の推定には苦慮するが、胎土や色調などから、美濃須衛窯産で、いわゆる山茶碗の生産と平行する時期の所産ではないかと思われる。



第56図　石造物集積地平面図、蔵骨器発見状況と蔵骨器



第57図　礫集中地区略測図、表採遺物

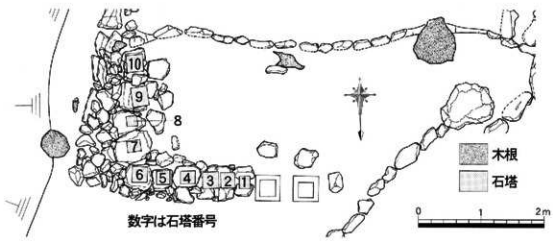
3　石造物

伝本堂跡地から北西側へ直線距離で約 110m行ったところに、宝篋印塔と五輪塔が集積され祀られている。地元の人によると、これらの石造物は別の場所から移設したもので、移設した際に現在みえる基壇状の区画を作ったということである。平成 18 年度調査にあわせて大威徳寺跡関連遺物として石造物の実測を行った。実測方法は、祀られている石造物を組みはずし机上で行い、実測後は祀られていた状態に戻した。集積地においては、宝篋印塔と五輪塔がバラバラに組み合わせられ、本来の組み合わせを成していないが、便宜的に正面西側から順に石塔番号をつけることとする（第 58 図）。なお、西端の２基の五輪塔・宝篋印塔については、昭和 40 年代に地元の有志で石塔を造立したものであるので実測の対象外とし、そのすぐ東隣の石塔から番号をつけた。よって石塔数は 10 を数える。第 59・60 図に図示した各部材の石塔番号の帰属は、第 27 表の石造物観察表を参考されたい。また、石塔－５及び石塔－８の五輪塔火輪の下に組まれている石造物状の石材は、石造物でないと判断し実測を行っていない。

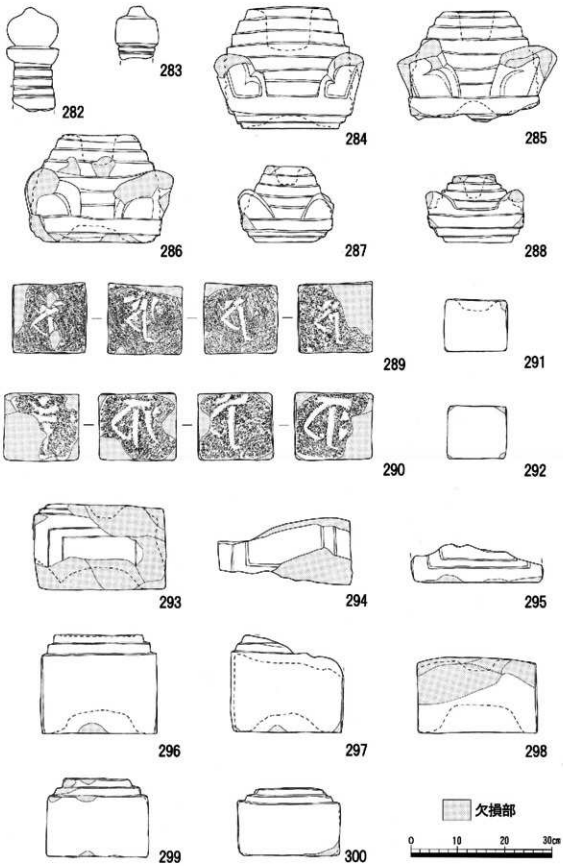
実測総数は 33 点で、そのうち１点（284）は周辺清掃中に石造物集積地東側斜面から表採した（第 56 図参照）。石造物は宝篋印塔、組み合わせ式五輪塔、基壇に分けられる。以下、部位ごとに詳述する。

宝篋印塔（第 59 図）

宝篋印塔は相輪、笠、塔身、基礎で構成される石塔で、実測点数は相輪２点、笠５点、塔身４点、基礎８点を数える。相輪（282・283）は、宝篋印塔の一番上の部材で、宝珠、請花、九輪、請花、伏鉢で構成される。282 は九輪の半分以下が欠損している。283 は宝珠の下の請花が省略されている。笠（284～288）は、相輪の下に組まれる部材で、露盤と４隅にある隅飾突起で構成される。隅飾突起はどれも比較的外側に反っている。隅飾り内側に輪郭を巡らすもの（284～286）とそうでないもの（287・288）があり、前者が比較的大型で、後者は小型で露盤の段数が略されている。塔身は４点で、289・290 は四面に梵字が陰刻されている。291 は上面に凹状加工が見られ、その平面形は隅丸方形である。293～300 は宝篋印塔の基礎で、塔身のすぐ下の部材である。上面は２段の段状加工を施しており、いわゆる関東系の様相を示す。内側に二重に輪郭をもつもの（293～295）と、底面に凹状加工が施されているもの（293・296～298）がある。293・298 は上面に塔身と組むためのほぞ穴を持つ。



第58図　石塔配置図


282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
欠損部
0
10
20
30cm

第59図　宝篋印塔

五輪塔（第 60 図）

五輪塔は組み合わせ式で、空風輪、火輪、水輪、地輪から構成される。実測点数は火輪 6 点、水輪 6 点、地輪 3 点で、空風輪はなく、梵字が刻まれたものはない。

火輪は五輪塔の笠にあたる部材で、上面に空風輪と組むためのほぞ穴を持つ。301 は底面に水輪と組むためのほぞ穴を持ち、302 は底面内側に段がつき凹状加工が見られる。水輪は塔身にあたる部材で、307 は底面に地輪と組むためのほぞを持つ。308・309 は上面および底面を若干凹状に加工している。地輪は基礎にあたる部材で、310 は全面を調整している。311・312 は底面に粗い加工痕があり、調整を行っていない。

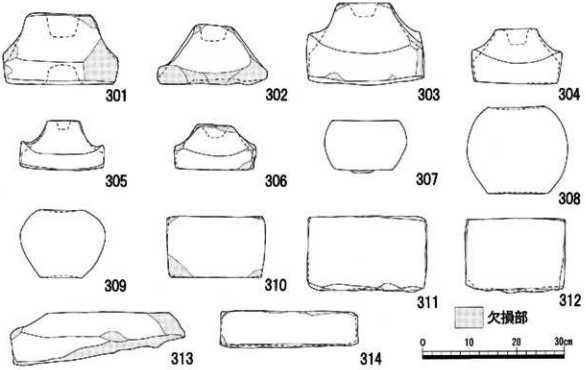
石造物基壇（第 60 図）

313・314 は石造物の基壇である。313 は底部が欠損しているが、四隅に軒先状の加工が見られる。

今回実測した石造物は、年紀の入ったものが存在しないが、各部材において簡素化が随所に見られることから、室町後期以降のものと考えられる。石材については、安山岩系製のものと花崗岩製がみられるが、安山岩系の石材が全体の約 90%を占める。塔別にみると、宝篋印塔は 100%安山岩系の石材が使用されており、五輪塔については 75%を占める。

現段階で考えられる造立塔数は、それぞれの部材の最大数があてられ、宝篋印塔の基礎、五輪塔の火輪の数がそれにあたる。五輪塔については石材についても加味し、少なくとも宝篋印塔 8 基、五輪塔 8 基が造立されていたこととなる。今後の調査によって実際に造立された塔数に近づいていくことが期待される。

移設前に造立されていたという伝承地の立地から考えても、大威徳寺関連の石造物とみられ、大威徳寺が滅失して以後も大切に伝えられ，祀られていた状況がうかがえる。



第60図　組み合わせ式五輪塔・基壇

4　主な成果

今回の調査では、寺院の区画を示すような明確な遺構は確認できなかったが、位置関係から見て、昨年確認した寺院北端と考えられる石積につながる可能性を持った、築地塀の基礎状の集石や、基壇状に地山を削りだした部分を確認することができ、何らかの施設があった可能性を明らかにすることができた。ただ、第3表に見るように、A1からA5トレまで、全てのトレンチから遺物は出土しているが、その半数近くは一番南のA1トレから出土しており、北に行くほど遺物が少なくなる傾向が看取され、A4・5トレでは明確な遺構を確認することもできなかった。出土遺物についても質量ともの貧弱な現状ではあるが、これらのことを考慮すると、階段状に3段に築かれた平坦面の3段目から北方は、寺院に関する遺構が希薄であると考えざるを得ず、ここに寺院の区画を想定するにいたった。

また、現石造物集積地から蔵骨器を発見し、さらにそこから80m程北に行った所から、中世墓に伴うと思われる集石を10ケ所近く確認できたことにより、林畑谷の西側の相当範囲に中世墓が展開することが明らかになった。さらに集石を確認した平坦面には、「五輪石平」という通称名があり、地元の人の話によると、現在地に移される前に五輪塔などの石造物が祀られていた場所と言われており、『飛騨下呂　図録』(下呂町史編纂委員会 1980)に紹介される蔵骨器も、この東側の道路を工事中に出土したとの話もある。また、この平坦面の北上方の平坦面はかつて公園であったらしく、遊具の残骸も残っている。『大威徳寺史蹟と其の関連を探る(総集編)』(今井精一 1986)には、「五輪塔～　現在道わきに移し十三基(内2基は新しい)以前この地西北、七・八十米上み、現児童遊園地の下方二箇所にありしを十余年前、散逸を防ぎ管理上現地に移せり」とあり、石造物がかつて公園の下にあったという記述とも一致する。したがって、図版10－⑥に示した石造物の古写真もこの地を撮影したものと考えられる。通常、寺院本体が墓域を超えて外に広がることは考えにくく、林畑谷が寺院の西限になると考えられる。なお、今井氏の記述によると、五輪塔は「十三基」とあり、現状の「十二基」とは矛盾が生じるが、今年度の調査中に現集積地の東法面(谷側)から宝篋印塔の笠の部分を採集しており(第56図)、現地には半分地中に埋もれた相輪も見られることから、あるいはこれらがその一基であったとも思われる。

第４章　大威徳寺跡関連遺物について

第１節　採集遺物について

大威徳寺に関して、これまでに本格的な発掘調査が行われたことはないが、地元の御嶽野を中心に、寺跡から採集されたと伝えられる遺物が何点か知られている。それらについては、「史跡大威徳寺の最新事情」(小池三次1999)に紹介されている。それによると、幕末から明治にかけて寺域の一部が桑畑として開墾され、懸仏の聖観音菩薩坐像や石臼破片三点などが出土したとのことで、懸仏は現在下呂市の文化財に指定され、御嶽野地内の阿弥陀寺に保管されている。その後昭和20年代に遺跡に隣接する観音平に入植した家が何世帯かあり、開墾作業中に懸仏の一部と考えられる観音菩薩立像や山茶碗や古瀬戸・瓶子などの土器類が何点か採集されている。観音菩薩立像は先述の懸仏と共に阿弥陀寺に保管されており、土器類や石臼は、地元の地権者の何人かが所蔵している。今回、報告書を作成するにあたり、所有者のご好意によりこれらの遺物を実見・実測する機会に恵まれた。その主なものを第61図(1)～(15)に紹介した。

実測図に示した遺物のうち、土器類はいずれも口縁部か底部の小片で、全体の器形を復元するにはいたらなかった。法量、年代観などは第４表に示した。(1)(2)の灰釉陶器の碗と段皿は、必ずしも寺院特有の器種ではないが、大威徳寺の前身寺院の存在、もしくは創建が平安時代にさかのぼる可能性を示唆するものとして興味深い。出土地点も明確ではないが、現所有者の話によると、これらの遺物を譲り受けた入植者の開拓地は、寺院中心部からさらに 500m程北に行ったところにあったとのことである。(3)～(6)は古瀬戸の範疇に入るもので、(3)は、直腰型の瓶子である。胴部には厳手状の文様と楕円形の綿雲状の文様が施される。(4)(5)の器種判定は困難であるが、(4)を水注、(5)を口広有耳壺とした。どちらも一般の集落では比較的稀な器種で、特に(5)は(3)の瓶子とともに、蔵骨器として使用された可能性も考えられる。(6)の仏供は教育委員会が所蔵するもので、以前に池跡付近から採集されたものである。いわゆる仏飯具で、寺院に特有の器種と言えよう。(7)～(11)の山茶碗・碗は、いずれも東濃産で、13世紀前半から15世紀前半まで、ほぼ連続した時期の窯式に帰属すると考えられ、伝承が伝える大威徳寺が存続す

第４表　大威徳寺跡採集遺物観察表

番号	種別	器種	法量(単位 cm) 口径	底径	器高	年代観	備考
(1)	灰釉陶器	碗	－	8.6	－	黒笹90号窯～折戸53号窯式期	東濃産
(2)	灰釉陶器	段皿	14.2	－	－	黒笹90号窯～折戸53号窯式期	東濃産
(3)	古瀬戸	瓶子	－	10.4	－	古瀬戸中Ⅳ～後Ⅰ期	灰釉
(4)	古瀬戸	水注(?)	－	6.2	－	古瀬戸後Ⅰ～Ⅱ期	灰釉
(5)	古瀬戸	口広有耳壺(?)	－	9.9	－	古瀬戸後Ⅲ期	灰釉
(6)	古瀬戸	仏供	－	4.4	－	古瀬戸中Ⅳ～後Ⅰ期	無釉
(7)	山茶碗	碗	13.4	－	－	第７型式	
(8)	山茶碗	碗	10.4	－	－	第８型式	
(9)	山茶碗	碗	12.2	－	－	第９型式	
(10)	山茶碗	碗	12.4	－	－	第９型式	
(11)	山茶碗	碗	－	3.0	－	第10型式	

る時期と一致することになる。(12)の古銭・洪武通宝は、伝山門跡北の参道付近で表採されたもので、縁の一部が欠けているが、銭径は2.32×(2.06)cm、孔の大きさは0.06×0.58cm、厚さ0.09cmを測る。背面には「一銭」の文字が鋳出される。洪武通宝は元を倒して明を建国した朱元璋(太祖・洪武帝)が改元と同時に鋳造した貨幣で、初鋳は1368年である。室町時代には大量に輸入され、広く流通すると同時に、国内でも模鋳された。(13)～(15)は茶臼である。(13)の上臼はほぼ完形で、上径18.6cm、下径17.4cm、高さ11.2cmで、上面のくぼみは径12.8cm、深さは2.3cmを計る。供給口は円形で、2.7×2.8cmを計る。挽き手は横打込み式で、2ヶ所に深さ2.9cmの菱形の打込みが彫られ、周囲に菱形の装飾が施される。下面は含みがほとんど無く平坦で、8分画7溝の目は周縁まではおよばないと見受けられる。(14)の下臼は受け皿の周縁部を失っている。上径18.6cm、下径29.0cm、高さ10.8cmを計る。全体的に摩滅が著しいが、最初から擂目が刻まれない、いわゆる「目なし臼」で、擂面はほぼ平坦である。芯木孔は円形で、2.0×2.1cmを計る。下面のえぐりはあまり大きくない。(15)の下臼も受け皿の周縁部を失っており、上径19.2cm、下径26.6cm、高さ11.7cmを計る。擂面はほぼ平坦で、8分画8～9溝で、溝は周縁まできられており、中世の茶臼に見られる特徴を備える。芯木孔は方形で、2.0×2.1cmを計る。下面のえぐりは(14)よりもかなり大きい。これらは安山岩系の石を素材としているが、(14)と(15)では石質が異なり、「目の有無」「芯木孔の形」「えぐりの程度」など、相違点が多く、異なる工人の手によるものと考えられる。

なお、加子母小郷の大杉地蔵尊にも、大威徳寺で使用されたと伝えられる香時計や一升枡など、若干の遺物が所蔵されている。

第2節　阿弥陀寺所蔵懸仏について

下呂市御厩野阿弥陀寺所蔵の懸仏(下呂市指定文化財)は、約200年前に村人が大威徳寺跡で作業中に発見し、大威徳寺の十二坊の一つである「西の坊」の系譜を引くといわれる阿弥陀寺におさめられたと伝えられる。像高は25cmを測る。発見されたときには既に円板の部分は失われており、光背と岩座は後世の補修によるもので、その時の鍍金(金メッキ)のため往時の面影は失われている。年代観などについて、平成17年度に京都国立博物館・久保智康氏に来市の労をとっていただき、調査・指導をいただいた。その時にいただいた所見の概要を以下に記しておきたい。

○大きさから見て、独尊の懸仏であったと考えられる。後補の際に付けられた光背が屈曲しているため、左肩のあたりに亀裂が見られるが、仏像本体は製作当時の姿をとどめている可能性が高い。後世の鍍金が厚く施されているため、細かい造作まで観察できないのが残念であるが、恐らくは「毛彫り」の技法によって作成されたと推測され、一部に本来の鍍金の痕が黒く変色している部分も見られる。

○以前、写真で見た印象よりもかなり像が「扁平」な作りである。懸仏は、平安時代前半期の鏡に像形を線刻りした「鏡像」に始まり、11世紀初頃(平安時代後半)の、銅版を打ち出して作った半肉彫りのレリーフ像を鏡面に打ちつける段階を経て、13世紀(鎌倉時代)に入ると丸彫りに近い尊像を取り付けるようになるという変遷をたどることから、この像を鎌倉期まで下げる必要は無いと考えられる。

○さらに、宝冠の化仏や瓔珞の表現が崩れておらず、きちんと作られている点や、蓮華座の蓮弁も大振りで、細かい装飾が施されない点なども古い(平安時代の)要素である。やや目が釣りあがり、顔が若干厳しい表情をしている所に鎌倉時代の作風も見受けられるが、12世紀(平安時代末期)の作と考えるのがより穏当であると思われる。

○左手に蓮華の蕾を持ち、右手の三本の指で軽く摘む姿は、比叡山延暦寺横川中堂本尊の聖観音立像(平安時代・国重文)と同形式で、立像と坐像の違いはあるが、天台系の仏像と考えて良い。これをもって延暦寺との直接的な関係を即断することはできないが、作風も丁寧であり、地元で製作されたというよりも中央(京都)で作られたものが持ち込まれたものと考えた方が良いであろう。あるいは、京都との太いパイプをもった僧侶がいた可能性も推測される。

○北陸では、古代に創建された山岳寺院の本尊は薬師如来・十一面観音・聖観音が多く、大威徳明王が本尊であることに違和感は禁じられない。本尊が大威徳明王であるという伝承を信じれば、これが本堂に懸けられていたとは考えにくい。懸仏は神仏混交の影響を受けたものであり、聖観音を本地とするものに白山(別山)や熊野神社が挙げられる。寺域のどこから出土したかが分かれば、もう少し立入った議論もできるが、鎮守に白山や熊野があったとの記録(『経文末書』)もあり、これらの信仰と結びつけて考えたほうが良いかもしれない。

○多口瓶等、平安期の灰釉陶器も少数ながら出土しているとのことで、文献資料に乏しい現状を考慮すると、この懸仏の持つ意味は極めて重要で、寺院の創建を12世紀にさかのぼらせる根拠のひとつとなると思われる。北陸では、古代(9世紀頃)に創建された山岳寺院の多くは、12～13世紀頃に大きな分岐点があり、それを切り抜けた寺院が規模を拡大して中・近世以降まで存続し、そうでない寺院が廃絶していく傾向が見られる。大威徳寺の創建については、まだまだ検討が必要であろうが、12世紀以前に創建された寺院が、13世紀の鎌倉期に規模が拡大され、中世以降に存続していったと考えても、大きな矛盾はないと思われる。

また、昭和20年代以降に発見されたとされる観音菩薩立像については、以下のような理由から、大威徳寺と結びつけて考えることは危険であるとの所見をいただいた。

○被熱による表面の損傷が著しいため断定はできないが、形状などから見て、懸仏ではなく厨子などに入れられていた小仏像で、本来は光背が付いていたと見受けられる。仏像本体は真鍮、台座は銅で作られ、それが溶接されており、台座の裏側だけに緑青が浮いているのはそのためである。真鍮製の仏像が作られるのは、早くても江戸期以降のことで、これが鎌倉期までさかのぼる可能性はまず無いといえる。

○頭上が高く尖がって作られるのは、宝冠をかぶっているというよりも、タイなどの東南アジアの仏像によく見られる、頭髪を高く結い上げた姿形と考えられ、国産ではなく、東南アジアで製作されたものではないかと思われる。第二次世界大戦後に、開拓地で発見されたとのことで、あるいは東南アジアに出兵された方が守仏としていたものが持ち帰られ、何かのきっかけでここに埋もれたといった経緯も推測もされる。

総じて、阿弥陀寺所蔵の懸仏・聖観音菩薩坐像については、後世の鍍金や山上地点がわからないのが残念であるが、全国的に見ても古い時期の遺物と考えられ、文化財としての価値も高く、大威徳寺を考える上で極めて重要な遺物であると、高い評価をいただいた。

第３節　高山市宗猷寺所蔵大威徳寺関連古文書について

寛永九年(1632)に建立された宗猷寺には、大威徳寺に関する古文書類約 20 点(巻末文献リスト参照)が一括して保管されており、そのうち主要なもの 13 点が、『飛騨下呂　資料Ⅱ』(下呂町史編集委員会 1986) に収められている。また、境内の観音堂には大威徳寺に祀られていたと伝えられる薬師如来像(阿閦如来か?)、観音菩薩像、地蔵菩薩像の３体の仏像が安置されている。

平成 17 年度に、岐阜大学・早川万年指導委員および同大学朴澤直秀氏にご足労いただき、宗猷寺が所蔵する大威徳寺関連の古文書の調査を行った。その時にいただいた所見の概要を、以下に記しておきたい。

○宗猷寺では、先代の頃から大威徳寺に関する古文書類を一括して別箱に保管しているため、大威徳寺に関する史料がどのような文書と一緒に、どのような状態で残されていたかといった、文書の保管状況がはっきりせず、必ずしも良好な状態とは言えない。しかし、大威徳寺に関連する史料が皆無である現状を考慮すると、貴重な史料であることには変わりはない。ただ、他の史料によって内容を検証することがほぼ不可能と考えられるため、史料の取り扱い・評価には、通常以上に慎重に行う必要がある。

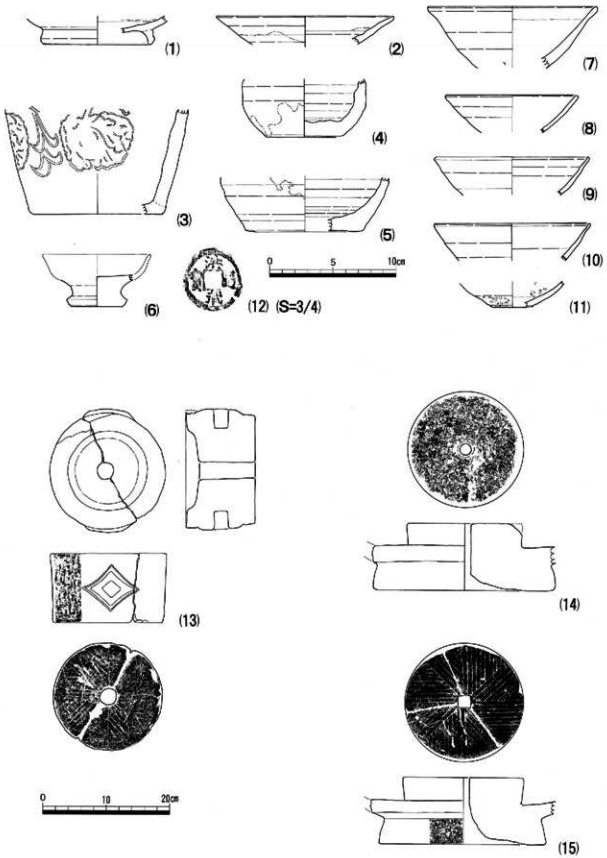
○実見した関連史料について、主要なものは既に『飛騨下呂　資料編Ⅱ』に引用されているようである。古文書の内容は、元禄検地以前から明治四年に地元に払い下げられるまで、江戸期を通じて一貫して野尻の駒場にあった土地が宗猷寺の扣地(寺領)であったことを示すものである。

○古代もしくは中世に廃絶した寺院の寺領を、近世にはいってから自分の寺院と関係があったと主張し、寺領(除地＝納税が免除される土地)として取り込んでいくことは決して珍しいことではない。しかし、浄土真宗などの他の宗派が盛んな土地に進出していくわけではなく、同じ臨済宗妙心寺派の禅昌寺の勢力下である竹原で、宗猷寺が遠く離れた野尻のわずかばかりの土地にこだわった理由については、検討が必要であろう。

○大威徳寺が宗猷寺の末寺であったことから、宗猷寺が所蔵する他の末寺(吉城郡門城寺、薬師寺など)の関連史料の中に、大威徳寺に関する記述が残っている可能性は否定できない。ただし、すべての古文書を調査するような本格的な調査を仮に下呂市で実施しようとするなら、相応の配慮が必要である。

結局、今回の調査では残念ながら特に新しい知見を得ることはできず、両先生からは今後、新史料の発見は難しいのではないかとの感想もいただいたが、江戸時代初期の大威徳寺の動向を考える上で、基本的な史料となることには変わりはないと言えよう。

また同寺が所蔵する「威徳寺跡図」は、寺院中心部の東方に「石塩」「鎮守屋敷」「鎮守尾」などの記述があり、現況とよく一致する部分が見られる。寺院の空間構成を復元する上で、貴重な情報を提供してくれるものと考える。「威徳寺跡図」が製作された年代は不詳であるが、同寺が所蔵する古文書のうち、元禄六～十二年(1693～99)に書かれた『竹原郷大威徳寺旧地除地仰付一件』の中で、元禄七年に第七世住持であった繁潭が検地奉行所にあてた嘆願書である『乍恐奉願口上書』(以下『口上書』と略する)には、「則寺跡之図並上中上候」の記述が見られることから、元禄七年当時の状況を伝えるものと考えたい。



第61図　大威徳寺跡関連遺物

第５章　大威徳寺関連地名について

はじめに

「地名」とは、文字どおりその土地(場所)に付けられた名称であるが、当時の人々が、そこをどのような場所として認識していたかを示すものでもあり、特定の景観や遺跡との係わりから調査・検討することは、その景観や遺跡を理解する上で、非常に効果的であると考えられている。特に、中世以降の地名が現在まで数多く残ることは、多くの研究者が指摘する所であり[1]、遺跡の周辺に点在する関連地名の地道な調査により、遺跡の実態解明に大きな成果をあげている遺跡も少なくない[2]。大威徳寺が所在する下呂市御厩野の小字の下にも、古来言い習わされてきた通称名(孫字)が数多く残っている。このたび、大威徳寺の範囲確認調査にあたり、教育委員会より地名調査の依頼を受け、古老の聞き取りや御厩野区所有の『検査絵図写』(明治24年調整・大正2年写)等の調査により、80以上の孫字を確認することができた。その中には、もちろん寺院とは関係の無いと思われる名称も含まれるが、これまでの調査成果を報告するものである。

先行研究について

地名から大威徳寺を考察した研究は少ないが、地元御厩野の郷土史家である故渡辺政治(真砂路)氏は、その著述の中で、大威徳寺の十二坊のうちの一つに数えられる西の坊の系譜を引くと伝えられる阿弥陀寺周辺に残る、「門前」「寺渡瀬」などの地名に加え、「ボタ(坊田)」「西のボタ(西の坊田)」「的場」「木戸場」などが寺院に関する地名ではないかとされている。また、字大平地内に残る地名である「山越渡(ヤゴエンド)」は、すなわち「山越堂」のことであり、ちょうど木曽への交通の要衝である鞍懸峠(1,408m)の登り口に位置することから、ここに仏堂があったのではないかとされている。また、御厩野出身の教育者で、遺跡の指定管理者であった故今井精一氏は、大威徳寺に関する遺跡として「鎮守尾(鎮西尾)」「米搗(精)平」「西ケ平(西観音平)」などの地名に加え、「秩父杉大株」「鐘掛松株」「鎌倉銀杏株」など、大威徳寺に関わる古木について触れられている。

地名調査の成果

現在、御厩野に残る小字名については、『益田郡誌』(1916)、『飛騨下呂　図録編』(1980)などの先行研究があり、その実態はほぼ明らかになっていると言えよう(第63図)。それらに加え、区所有の『飛騨国益田郡竹原郷御厩野村山畑屋敷御検地水帳』(以下『元禄検地帳』と略す)を参考に小字名を一覧表にし、これまでに確認した通称名を加筆したのが第５～７表であり、寺院に関係があると思われる地名を地図上に落としたのが、第62・63図である。

『元禄検地帳』では99の小字名が、『益田郡誌』では123の小字名が記されており、『元禄検地帳』に記載があって、『益田郡誌』に記載がない地名が17、その反対に『益田郡誌』のみに記載される地名が41見られるが、その多くは、現在の御厩野区周辺の山林部に位置する字名である。検地帳は本来農地や宅地を記録したものであるため、大威徳寺の所在する字威徳寺や、周辺の字米搗平、直路鮫岩谷、茶木畑、小山畑などの山林部について記載がないのはいたしかたないとしても、大威徳寺跡について、高山宗猷寺の抱として、第７表中の注①のような記載が見られるこ

とは、宗教寺に残る古文書の内容と矛盾するものではなく、発掘調査で明らかになってきたとされる、江戸時代初期の大威徳寺の動向を立証する記載としても、注目に値すると言えよう。また、村絵として『元禄検地帳』に記載のある「札立野」「的場」「弓立」などのうち、「弓立」は『益田郡誌』に記載はないが、「的場」が「大威徳寺の僧兵が弓の練習をした場所である」との説[注5]があることを考慮すると、それに類する地名として大変興味深いものと考える。

大威徳寺に関わる地名として、①堂塔・参道などの寺院の施設に関するもの。②寺院を維持・管理するための田畑、いわゆる「仏神田」に関するもの。③街道など、交通路に関するもの、④市場や職人集団に関するもの。などに分類が可能であろう。上記の分類に従えば、①の例として「門畑」「門前」「寺渡瀬」「木戸場」「的場」「弓立」「山越渡(山越堂)」「鎮守尾」「米搗平」「五輪石平」「西ケ平(西観音平)」「本堂」「本堂北ノ沢」「清水坂」などを、②の例として「ボタ(坊田)」「西のボタ」「ボタ下」「庚申畑」「茶木畑」などを、③の例として「道添」「道下」「札立野」「高札畑」などを、④の例として、「カジヤ」「カジヤハバ」「カジヤ垣内」「紙屋田」「紙屋薙」「糸屋」「釜土」などを挙げることができよう。また、「南」の小字名については、ここに「南」という屋号の旧家があり、かつて大威徳寺に野菜や米を納めており、その代償として茶釜を拝領したといった言い伝えが残っていることから、ここに紹介した。

字威徳寺地内に残る「鎮守尾」「五輪石平」「西ケ平(西観音平)」「本堂」「本堂北ノ沢」「切塞」などの、大威徳寺に関わると考えられる通称名のうち、「五輪石平」は、現在の石造物集積地から80m程北に行ったところの通称名であるが、平成18年度の調査で、蔵骨器が表採され、中世墓と思われる礫の集中区が確認された場所に一致する。また、今井精一氏の著作によると、現在地に集積されている五輪塔や宝篋印塔も、昭和40年代の中頃までにこの地に祀られていたとあり、『検査絵図写』にも五輪塔などの位置が記されていることから、保存会会員の小池が所蔵する古写真(図版10−⑥)もこの場所を撮影したことが明らかになった。また、「切塞(きりふさぎ)」は、文字どおり「尾根を『切』って谷を『塞』ぐ」の意で、大規模な造成工事を連想させる。地名が残る寺院中心部東南方の丘陵地には、谷筋を埋めたと考えられる石積(第41図)や加子母小郷方面への石段(第40図)、尾根を階段状に整地した場所などが見られ、まさに地名にふさわしいと言えよう。

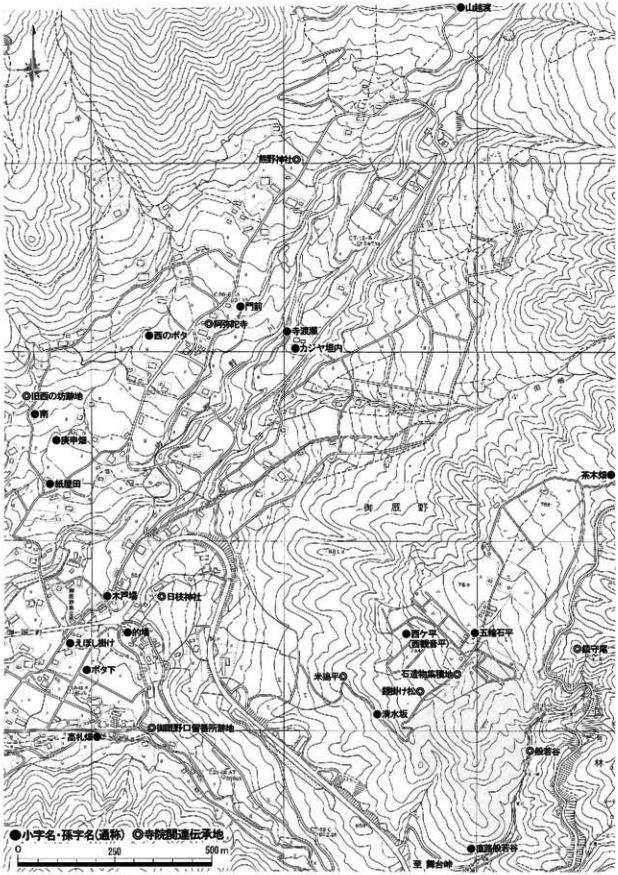
最後に　−今後の課題−

今回、地元御嶺野に残る地名を調査することで、われわれが生活する御嶺野の歴史を物語る貴重な資料を発掘することができ、歴史の重みを再認識することができた。さらに、ささやかでも大威徳寺の解明に資することができたかと思うと、史跡保存会としても喜びは一入である。その一方で、先学諸氏の多くが物故者となられ、「あの人が健在ならば」と思うことしきりであった。このような調査に「終わり」というものはなく、今後も継続的に調査を続け、さらに資料が蓄積された所で、より専門的な見地から検討ができればと考えるところである。

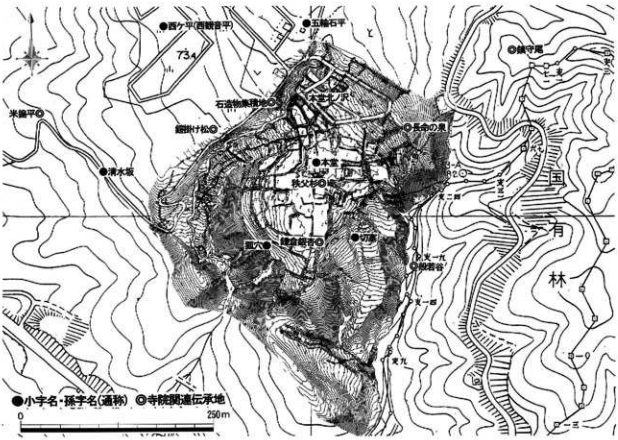
注① 服部英雄『環境にさぐる中世』(洋人物往来社1995)、同『地名の歴史学』(角川書店2000)など

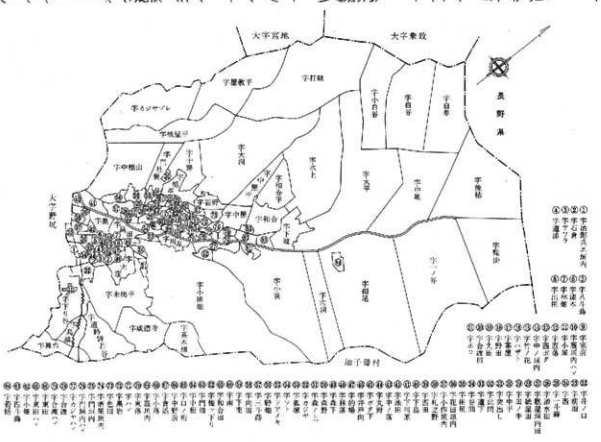
注② 愛媛県鬼北町「等妙寺Ⅰ、福井市「朝倉氏遺跡」など

注③ 今井精一(1986)、渡辺政治(1959)などによる。



第62図　大威徳寺関連地名図(1)





第63図　大威徳寺関連地名図(2)、御厩野字限図

第５表　御厩野区内小字名一覧表（１）

番号	『元禄検地帳』	『益田郡誌』	小字区内通称	備考
1	下嶋	下島		
2	池田	池田		
3	谷間	谷間	高札畑	
4	西田	西田		
5	花山かいと	花田垣内		
6	田の尻	田ノ尻		
7	札立野	札立野		
8	道下	道下		
9	小作かいと	小作垣内		
10	小作かいと東			
11	小作かいと下			
12	道の下			
13	次郎兵衛かいと	次郎兵衛垣内		
14	此間	此ノ間		
15	沼			
16	ほた下	圃田下		
17	中の落	中落		
18		下り谷	スズケ洞　口三ケ洞　中三ケ洞　奥二ケ洞	
19	あわら	沫良		
20	八升まき	八升蒔		
21	丸野	丸野		
22	漆本	漆本	えぼし掛け	
23	石くら	石倉		
24	前田			
25	道そえ	道添		
26	林落	林落		
27	嶋	島		
28	嶋田	島田	木戸場　下渡瀬	
29	林畑	林畑		
30	出田	山田		
31	家の前	家前		
32	的場	的場		
33	いと向	井戸向		
34		大窪		
35	森下	森下		
36		厩垣内ハバ		
37		森ノ上		
38		狐塚		
39	まやがいと	厩垣内		
40		森野		
41		川原		
42	東落	東落		
43	東落中			
44		はば		
45		かじやはば		
46		門垣内はば		
47	こや	小屋		
48	西落	西落		
49	はば下			
50	西のほた	西ノ圃田		

第６表　御厩野区内小字名一覧表（２）

番号	『元禄検地帳』	『益田郡誌』	小字区内通称	備考
51	中野			
52	中のかいと	中ノ垣内		
53	かぢや	かじや		
54	寺垣内			
55	見座			
56	林			
57	門がいと	門垣内	門前　寺渡瀬　堀田	
58	合渡	合渡		
59		合渡はば		
60	東山	東田		
61	さげど	下渡		
62		東山はば		
63	小畑	こばた		
64	四斗まき	四斗蒔		
65	酒やがいと	酒屋垣内		
66	酒屋林			
67	くろいわ	黒岩		
68	茶や	茶屋		
69	合渡田	合渡田		
70	西	西		
71	竹のはな	竹の花		
72	はざと	はざど		
73	小おち	小落		
74	野山	野田		
75	六升まき			
76	ほこ	ほこ		
77	中けた	中桁		
78	丸田	丸田		
79	いのロ	井の口		
80	壱斗まき	一斗蒔		
81	中のまえ	中の前		
82	谷畑			
83	前畑	前畑		
84	梅のドり	梅の下り		
85	門畑	門畑		
86	清水田	清水田		
87	田の中	田の中		
88	そと	そと		
89		厩垣内田		
90	三斗まき	三斗蒔		
91	度々めき	どとめき		
92	かみやた	紙屋山		
93	下川原	下川原		
94	野畑	野畑		
95	南	南		
96		和合平		
97		水上	出し　御厩様	
98		十路	観音様	
99		門社洞		
100		大平	浅井九郎林上　くまおせ　蛇抜け 山越渡 豊口　風穴　久左薙	

第７表　御厩野区内小字名一覧表（３）

番号	『元禄検地帳』	『益田郡誌』	小字区内通称	備考
101		中平		
102	中ねやま	中根山	ホサノ谷　松尾　釜土　コナベアダ	
103		かしやぞれ	カギ平(カゲ平)　長洞　ショウバン様	
100		紙屋平	兵蔵薙　ノドクビ　次郎占杉　大岩野　大曲 一の渡瀬	
104		屋敷平	笹平　坂の尻　馬止　平沢(ヒラサオ) 宗七洞　ヌケト洞	
105	うちこし	打越	金兵衛薙　仁兵衛薙　仁平薙　仁平薙目向 紙屋薙　灰小屋　補鳥場　坂の尻 中屋鳥家　八郎兵衛薙	
106		白草	丸山	
107	向田	向田		
108	和合田	和合田	小鳥沢	
109	杤本	杤本		
110	上野			
111	下南	下南		
112	口のけた	口の桁		
113	色山	色田		
114	くらそへ	倉添		
115	上岩野			
116		岩野		
117	大ほら	大洞		
118		中屋平	せんだ洞	
119	中や	中屋		
120	和合	和合		
121		懸掛		
122	若杤	若杤		
123		小白谷		
124		中尾	稗蒔平　箱岩	
125		一の谷	風穴	
126	穴洞	穴洞	小穴洞	
127		白谷		
128		焼杭		
129		細尾	高畑　平岩　カラタニ　欅木場	
130		小笹	炭芝　カクラ	
131		小田畑	ハンコ原　オカモリ　中坂　上坂　藤山 正九郎道　苗木落　小左次薙　登尾 タル洞　かじやがいと	
132		米搗平	小草場　切ケ洞　アレハタ　金助薙　林畑	
133		烏越		
134		茶木畑		
135		高野般若谷		
136		突出し		
137		威徳寺	鎮守尾　五輪石平　切寒　本堂 清水坂　西ケ平　本堂北ノ沢 長兵衛薙　金助薙　檜鳥家　狐穴	注①
138		舞台		
139	弓立			村抱

注①「大威徳寺跡　…　荒場拾六間・拾弐間　六畝壱弐歩　灘郷高山　宗猷寺抱
同　所　一　山内　五町壱反五畝歩　同断　同寺抱」の記載有

第６章　まとめ

第１節　建物について

伝本堂跡をはじめ、今回の調査に入る前から礎石が露出している場所が何カ所か知られており、それぞれの名称についても『経文末書』に基づいて比定されている。本報告書においても、基本的には従来の呼称を使用したが、調査によってその性格が明らかになってきた建物跡も少なくない。以下に、今回の調査で確認できた礎石建物について、若干の検討を加えてみたい。

まず、基準となったと考えられる尺度について、建物規模や礎石間の寸法などを一覧表にしたのが第８表である。一覧して明らかなように、今回の調査で規模などを確認した礎石建物のほとんどが、一尺＝30cmを単位としており、これを大威徳寺の基本尺度と考えて良いであろう。その一方で、寺院中心部の南西の平坦面で確認した「史碑南建物」だけが、基準となる寸法が異なる。第３章で触れたように、この建物の周辺は17世紀代の遺物が比較的密に分布する場所であり、ここに時期差を設定することも可能であろうが、詳細は「史碑南建物」の全様が明らかになった時点で再検討したい。

いわゆる寺院建築については、しばしば「仏地的建物」（金堂・塔など寺院内での中心的な位置を占める規模の大きな建物）と「僧地的建物」（講堂・食堂・僧坊・鐘楼・経蔵などの付随的な位置にある規模の小さな建物）に分類されることがある[注1]。また、中世密教系寺院の建築として、本堂・塔・門の三棟が最も重んぜられたらしく、これに続く建物が鐘楼・境内仏堂および鎮守堂と言われ、規模や形式にも一定の企画めいた共通性があることも指摘されている[注2]。『経文末書』は、これらの建物が大威徳寺にもあったことを伝えており、仏地と僧地の別で言えば、本堂、三重塔、地蔵堂、大黒堂、二王堂を仏地的建物に、講堂、鐘楼堂、鎮守、拝殿を僧地的建物に当てることができるであろう。以下に、こういった視点から、各建物の性格について考えてみたい。

まず、寺域のほぼ中央に位置する伝本堂跡は、確認できた建物のなかで最も規模の大きい建物であり、内陣と外陣に区別されていると考えられる。現段階で最も本堂にふさわしい遺構で、『経文末書』の伝える本堂と考えて良いであろう。正面五間の建物の廃絶後に小堂が再建された可能性については先にも触れたが、詳細は本章第２節で検討したい。

第８表　大威徳寺跡礎石建物規模一覧表

番号	地区	建　物　名	確認できた規模	平 面 プ ラ ン	確 認 で き た 間 尺	基準尺
1	A	伝本堂跡（仮旧本堂）	15.90m×　9.30m以上	五間×三間以上	180cm、240cm、270cm	30 cm
2	A	伝本堂跡（仮新本堂）	2.70m×　2.40m	三間×二間	120cm、180cm、	30 cm
3	A	本堂西建物	8.80m×10.30m	二間×四間	120cm、150cm、210cm、240cm	30 cm
4	A	軒廊	6.40m×　1.20m	―	180cm、280cm	30 cm
5	I	伝三重塔跡	12.90m×　6.60m	五間×二間	90cm、210cm、270cm	30 cm
6	J	伝鐘楼跡	6.30m×　5.10m	五間×四間	90cm、135cm、150cm	30 cm
7	II	伝山門跡	8.40m×　4.80m	三間×二間	240cm、360cm	30 cm
8	C	史碑南建物	9.90m×　9.90m	五間×五間	198cm	33 cm
9	A	薬医門	2.70m×　0.60m	間口一間	60cm、270cm	30 cm
10	A	ドトレ・礎石列	1.00m×　3.00m	一間以上×二間以上	90cm、105cm、150cm	30 cm

本堂西建物は、いわゆる「境内仏堂」に類するものに該当するであろうが、伝本堂跡と軒廊で繋がれていたと考えられ、本堂に次ぐ重要な建物であったと言えよう。天台宗ならば「常行堂」、真言宗ならば「御影堂」がその候補として挙げられるが、大威徳寺は天台宗と言われており、それを重視すれば「常行堂」であった可能性が高い。建物の構造が、本当に「常行」ができたか慎重に検討する必要があるが、兵庫県鶴林寺の常行堂も三間×四間であり、来跡の上ご指導をいただいた、久保智康氏・春古真哉氏からは、常行ができない構造ではないとの所見をいただいた。これらのことから、伝本堂跡・本堂西建物・軒廊・薬医門など、A区で確認した建物が、「仏地的建物」として寺院中心部を構成していたと考えて良いであろう。なお、A区Eトレで確認した礎石列については、積極的に評価すれば、ここに前身寺院的な施設を想定することも可能であろうが、今後の調査によりその全貌が明らかになった時点で検討したい。

伝山門跡については、礎石の配置を見る限り、両側に仁王像を安置できる構造で、門以外の建物である可能性は考えられない。しかし、寺院の境界としての山門(仁王門)は、通常、豊橋市財賀寺のように平地と山地の境に建てられ、本堂まで延々と石段を登ることになる場合が多く、大威徳寺のように、本堂と山門がほぼ同じ標高に位置するのはむしろ不自然とも言える。従って、伝山門跡はあくまでも寺院中心部への入り口としての門であり、寺域と俗地との境界を示す山門が、もっと下の周辺の集落に近い場所にあった可能性もある。ただ、これまでに何度か周辺の踏査を行ったが、その候補地を推定するにはいたっていない。

伝三重塔跡、伝鐘楼跡については、礎石の配置などから『経文末書』の伝える「拝殿」「鎮守」の可能性が高いことは既に第3章第2節で述べたが、本章第3節でさらに検討してみたい。なお、伝三重塔跡は、中央の三間口が約2.7mと、両側(約2.1m)よりも間隔が広くなっており、建物の中央が馬道となる、いわゆる「割拝殿」であった可能性も考えられる。ただ、伝三重塔跡を「拝殿」とするには規模が大きいため、舞などの儀式を執り行ったり、修行のために参竜する「長床」のような施設ではないかとの指摘もある[注3]が、神戸大学・黒田龍二氏が来跡された際、伝鐘楼跡を神社建築と、伝三重塔跡を拝殿と考えても、大きな矛盾は無いであろうとの感想・所見をいただいた。また、滋賀県立大学・菅谷文則氏からは、大威徳寺跡のように拝殿のすぐ後ろの高所に本殿が建てられる例として、上醍醐の清瀧宮などがあるとの教示をいただいた。

これらの他に、礎石が埋もれていると考えられる場所として、寺院中心部の東方に近接する石列の区画内、F区北東隅の基壇状石列内とその西側などが挙げられる。いずれも、礎石の有無も含めて詳細は未確認であるが、前者は伝本堂跡を中心に、本堂西建物と左右対称の位置関係にあることから、仏地的な施設であったと考えたい。また、後者については、現段階では僧地的な施設ではなかったかとの印象を持つにすぎない。全くの思いつきであるが、愛媛県鬼北町等妙寺では、寺院中心部の南東方の一段下がった平坦面に、鐘楼と坊院がセットで建てられており、その麓には最寄りの集落が広がっている。F区で確認した基壇状の石列内の建物とその西側の建物も、これと同様の位置関係を示し、興味深いものを感ずるが、これをもってこの建物の性格を判断できるものではない。

なお、『経文末書』が伝える、三重塔や講堂の位置については、伝本堂跡の北や北東に隣接する平坦面にもとめるのが穏当と思われるが、今後の調査を持って検討したい。

第２節　伝本堂跡とその建替について

中世仏堂の規模に関する研究に、笹生衛氏の「考古学から見た中世社寺」（笹生衛1997）があるが、氏は桁行の規模によって、第１グループ（20m以上）、第２グループ（12～９m）、第３グループ（７～５m）の３グループに分類されている（第９表）。最も規模の大きい第１グループは、奥州藤原氏、鎌倉幕府将軍家、鎌倉幕府執権が建立の主体となった寺院で、当時の寺院としては第一級の特殊な寺院と言えよう。第２グループは中世寺院の中では一般的な規模とされ、浄水寺、横町遺跡、日向廃寺などは内外陣の区画も明確で、かなり大規模な仏教的儀式を執り行うことができたと推測されている。また第３グループは「寺院」というよりも、「堂」の域を出ないものとされる。15.9mを計る大威徳寺は、第１グループと第２グループの中間に位置することになるが、縁側の約3.6mを差し引くと12.3mとなり、第２グループの範疇に含めるのが妥当であろう。伝承にある源頼朝発願とするには、少し規模が小さいのではないかといった所であろうか。

伝本堂跡の廃絶後に小堂が再建された可能性については、これまでに再三述べてきたが、第65図に見るように、視覚的な礎石の平面分布から、正面五間の建物（旧本堂と仮称）の軸線（図中の破線）と異なる礎石の並びが見られ、概ね図中の実線のような礎石の配置が復元される。三間四方程度の小堂（以下新本堂と仮称）で、柱の間隔は約180cmを基本とし、一番東の東西方向の間隔が約120cmと60cm程短いため、あるいは三間×二間の建物の前面（東側）に縁側が付く、東向きの建物であった可能性も考えられる。また、礎石の法量についても、旧本堂が60×90cm前後に、新本堂が40×50cm前後に分布の中心が見られ、意図的に大きさの異なる礎石を使い分けていた状況がうかがわれる。ただ、第８～10図に見るように、石の焼け非焼けの区別や絶対高などについては、特記すべき違いは見られなかった。建物の前後関係については、旧本堂も新本堂も礎石ａを共通して用いている。礎石ａの法量は71×121cmを測り、新本堂の礎石とは著しい差が見られるため、もともと旧本堂に使用されていた礎石と考えられる。従って、新本堂を建てる際に、廃絶した旧本堂の礎石を再利用したもので、さらに想像をたくましくすれば、礎石ａを基準として新しく礎石を補充し、規模を縮小して新本堂を再建したと考えるのも可能であろう。

第９表　中世寺院の中心仏堂の規模比較表

グループ	寺院・遺跡	年　代	桁　行	梁　行	造建主体（墟越）など
第１	毛越寺	12世紀後半	29.00m	22.20m	奥州藤原氏
第１	永福寺	12世紀後半	24.12m	22.40m	鎌倉幕府将軍家
第１	極楽寺	13世紀後半	23.40m	—	鎌倉幕府執権
第２	浄水寺	12世紀後半	12.00m	10.80m	上層在庁官人・開発領主
第２	横町遺跡	12世紀後半	12.00m	9.79m	上層在庁官人・開発領主
第２	慈光寺跡	13世紀前半	10.00m	10.00m	
第２	日向廃寺	12世紀後半	9.18m	9.79m	常陸平氏・多気氏
第３	宝積寺館跡	14世紀	約 8.00m	約 8.00m	国人・竹俣氏
第３	神宮寺遺跡	13世紀前半	6.90m	6.50m	
第３	金剛寺跡	12世紀	6.80m	—	
第３	下内館遺	14世紀	5.00m	5.00m	
第２？	大威徳寺跡	13世紀前半	15.90m	9.30m以	伝鎌倉幕府将軍家（源頼朝）

「考古学から見た中世社寺」（笹生衛1997）より

高山市に所在する宗猷寺は、市内で唯一臨済宗妙心寺派に属する禅宗寺院である。寛永九年(1632)、金森重頼・重勝の兄弟が父の菩提をとむらうために建立した寺院で、開山となった南叟和尚は飛騨市国府町の安国寺を再興している。その宗猷寺には、大威徳寺から移されたと伝えられる仏像３体のほか、大威徳寺に関する古文書類約20点が一括して保管されている。宗猷寺と大威徳寺の関係について、『飛騨国中案内』(巻末史料集13参照)は次のように伝えている。

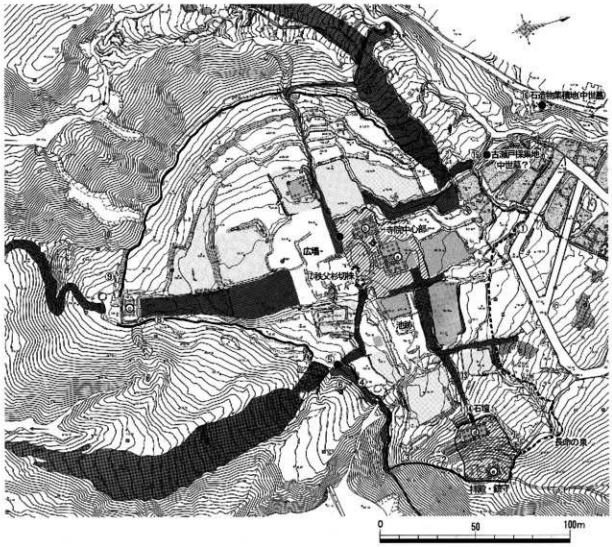
「大威徳寺の寺内に普門院の僧侶が一人暮らしていたが、普門院が大破したので、野尻村小馬場の大威徳寺境外地に一時居住し、のちに高山に出た。その僧侶が所持していた書物を宗猷寺の住持郷丹長老に預けたまま亡くなったため、残された書物はそのまま宗猷寺の什物となった。そして大威徳寺の跡地と小馬場の境外地も宗猷寺抱地(寺領)となった。その大威徳寺の僧侶は七十数年前までは生存しており、寺の形も少しは残っていた」

『飛騨国中案内』が書かれるのは延享三年(1746)のことなので、その七十数年前である寛文十一年(1671)頃までは、普門院の僧も生きており、「寺の形」も残っていたことになる。なお、『飛州志』が伝える宗猷寺の歴代住持の中に「郷丹」という人名は見られないが、第七世住持であった「叢潭」のことと考えられる。

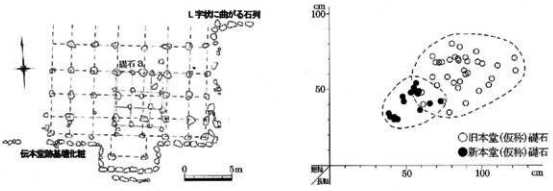
また、元禄七年(1694)に書かれた『口上書』は、その叢潭が検地奉行所にあてた嘆願書で、開山南叟和尚が大威徳寺の再興を当時の領主金森重頼に願い出て、弟子の玄琢を派遣して寺跡に小庵を建てたが、経済的な事情から結局再興は頓挫してしまうこと、この時から大威徳寺が宗猷寺の末寺となったが、再興が進まないため現在(元禄七年当時)寺跡は荒地となってしまっていること、寺は十四・五年前頃(延宝七年・1679年頃)まではあったことなどが記されている。

重頼は慶安三年(1650)に死去するため、南叟が弟子を派遣して大威徳寺を再興しようとするのは、寛永九年(1632)から慶安三年(1650)の間、17世紀の第２四半期と考えられる。天正十三年(1585)の飛騨大地震の後、約50年間、大威徳寺がどのような状態であったかは推測の域をでるものではないが、『飛騨国中案内』に見る普門院の僧侶のように、まだ若干の僧侶が寺内に留まっており、完全に廃絶するのは『口上書』などが伝えるように、天和・定享期(1681～87)頃と考えて、大きな問題は無いと思われる。

さらにこれまでの調査では、寛永通宝をはじめ、17世紀前半頃の碗・皿類が比較的残存状況の良好な状態で一定量出土している。そのうちの主なものについては、愛知県陶磁資料館・井上喜久男氏に実見いただき、概ね寛文年間(1661～72)までに帰属し、元禄年間(1668～1703)までは下がらないとの所見をいただいている。これらの発掘で得られた成果は、『口上書』が伝える大威徳寺再建の動きと矛盾するものではない。伝本堂跡から出土した遺物に、新しい時期の遺物が含まれることは第３章でもふれたが、該期の遺物が多く分布するのは、C区の史碑南方の区画や、寺院中心部南方の平坦面で、必ずしも伝本堂跡に限ったものではない。伝本堂跡に想定される新本堂を南叟が建てた小庵とするにはまだ相当の手続きを踏まなければならないが、これまでの調査で確認できた遺構や遺物、文献史料などから、今まで飛騨大地震で廃絶したと伝えられていた大威徳寺であるが、延宝年間(1673～80)頃までは寺域内にも僧侶が居住し、寺院の体裁をとどめていたと考えてよいであろう。



第64図　大威徳寺跡構造模式図



第65図　伝本堂跡礎石配置図、計測グラフ

第３節　宗猷寺所蔵「威徳寺跡図」に見る大威徳寺

宗猷寺が所蔵する「威徳寺跡図」（図版10－①）については、『飛騨下呂　図録』（下呂町史編纂委員会1980）などに写真が紹介されているが、寡聞にして、積極的に資料として扱った研究を目にしたことがない。平成17年度の調査で実物を実見し、扱いによっては非常に有益な資料であると考える。以下に、「威徳寺跡図」から見る大威徳寺について若干の検討を加えてみたい。

寺跡図は東を上にして描かれており、四方に東西南北の文字が書かれる。谷筋は青色、道は赤色で着色され、「御林山見廻道」［小郷ヨリ新道］「林畑谷」などの注記が記される。図の中央のあたりに左から右（北から南）へ流れる「般若谷」と「林畑谷」が上下に描かれ、その真ん中、やや左よりのところに、「鳳慈尾山大威徳寺跡」の文字が書かれている。本堂跡などの記述は見られないが、文字のすぐ左に木が二本描かれる。「大杭」と注記がされることから、これは「秩父杉」を指すと考えられる。すぐ左（北東方）に「竹藪」があり、これは池跡の北側、寺院中心部から伝三重塔跡へいたる推定参道の周辺に残る竹藪を指すと思われる。いずれにせよ、この大杭と竹藪の中間あたりを現在の仏木堂跡、寺院の中心部と考えて良いであろう。

寺跡図の左下に見られる「往古寺坂道」は、御厩野から寺跡へ登る現道をさし、現在の鐘掛松跡のあたりで三方向に枝分かれし、そのうちの一本が林畑谷を渡って寺院中心部へと入って行く。特に谷を渡ってから２方向に別れ、一方は大杭の前へ、もう一方は本堂の北方へと続いており、あるいは前述した、林畑谷の左岸の緩斜面を通る通路を指すとも思われる。「杭ヨリ林畑谷ハ壱町二拾八間」とあり、現在の単位になおすと約178mとなる。秩父杉から林畑谷までは直線距離で135m前後であるが、史碑西の溝状の通路を通り、右に曲がって林畑谷に下りるルートを使ったとすると、その距離は約180mとなり、非常に近い値となる。寺跡図に記された記述の信憑性については慎重に検討する必要があるが、比較的正確な情報を伝えてくれると考えるゆえんである。

竹藪の東側に、通路から枝分かれして、魚の骨のような図と「石堤」の文字、さらにその先（東）の小山に「鎮守屋敷」「鎮守尾」の文字が見られる。16年度概報では、「檀」を「櫓」と読み、E区北方の礫の密集地帯との関連を考えたが、改めて実物を見て、正確には「檀」であると考える。従って、この「石檀」は現在伝三重塔跡へ上がる参道に残る「石段」のことで、「鎮守尾」は伝鐘楼跡東方の尾根上にある、現在も「鎮守尾」の地名が残る場所を指すと考えられる。よって、この図が描かれた当時は、伝三重塔跡・伝鐘楼跡を「鎮守屋敷」と呼称していたと推測され、ここに「鎮守」に関わる施設があったことがうかがわれる。この記述によって、伝三重塔跡・伝鐘楼跡が、「拝殿」や「鎮守本殿」であった可能性がさらに高くなったと言えるであろう。また、寺院中心部の南方に描かれる「銀杏木」は、いわゆる「鎌倉銀杏」のことで、そこから南に伸びる小道は山門跡へと至る参道と、山門跡から舞台峠の方へ降りていく蛇行した道を指すと考えられる。加えて第３章第２節で触れた、F区の石段と小郷への参道の関係など、寺院の構造や周囲の集落へいたる参道などを復元する、貴重な手掛りを与えてくれる資料と考えるところである。

なお、「威徳寺跡図」の年代観について、名古屋市立大学・吉田一彦氏、同朋大学・脊古真哉氏が来跡のおり、写真ではあるが高覧の供し、指導をいただいた。その結果、絵図そのものは幕末期に描かれたものと見られるが、描かれた情報については、元禄当時の状況を伝える可能性を否定するものではない、との所見をいただいた。

第４節　大威徳寺の寺域と空間構成

寺域の区画となると考えられる遺構については、第３章第３節で触れたが、その結果、狭い意味（寺院に関わる遺構が密に残る範囲）としての寺域を、仏本堂跡を中心とした南北約200m、東西約150mの範囲（第64図の太線枠内の範囲）と推定するにいたった。さらに広い意味での寺域（寺院にかかわる遺構が残る範囲）を南北330m以上、東西約200～330m、西方の林畑谷と東方の般若谷に挟まれた、おおよそ現地形測量図の範囲と推定している。さらに林畑谷の右岸で確認できた中世墓や「鎮守尾」「米搗平」などの寺院関連伝承地まで含めれば、より範囲は広くなることになる。ここでは、狭い意味での寺域を中心に、大威徳寺の空間構成について検討してみたい。

寺域内の各所に造成された平坦面は、寺院中心部付近や山門跡からの参道脇に階段状に築かれた平坦面などのように、「方形あるいは長方形を意識して区画・整地」されたと推測される一群と、G区のように、「地形に沿って、いわゆる中世城館の腰曲輪状に整地」された一群に分類できる。前者には「仏地」的な施設に加え、坊院などの「僧地」的な施設の存在が想定される。後者については、遺物の散布もあまり多くなく、坊院などの有無については今後の調査の結果を待たなければならないが、越前平泉寺では坊院が建てられた尾根の先端部には細長い曲輪状の平坦面が見られ、そこからも日常雑器が出土することから、坊院の跡であった可能性が高いとされている[5][6]。いずれにせよ、現地形から見て、この曲輪状の平坦面を寺域に含めることに抵抗は無く、結果的に寺院の南から西方にかけては、自然の地形がそのまま円形に寺域の中に取り込まれ、一見不自然な形状を示すことになる。ただ、円形の地形を寺域に取り入れる例は、奈良県成長寺などにも見られ、さらに『三経指帰』によると、空海が高野山をえらんだのは「八葉蓮弁」の地形によるとされ、決して皆無ではないが、珍しい例とされる[7]。

いわゆる「山林寺院」の空間構成について考察した論文に「古代山林寺院の空間構成」（久保智康2001）などがある。主に奈良・平安時代の山林寺院を対象とした久保氏の研究を、鎌倉時代創建の伝承を持つ大威徳寺にそのまま援用できるかどうかは、賛否の分かれるところであろう。ただ、岐阜県史が指摘するように、岐阜県内の天台・真言系寺院のほとんどが平安時代までに建立されていることや、大威徳寺からの出土遺物に少量ではあるが多口瓶などの灰釉陶器が存在すること、さらに前章で触れた阿弥陀寺所蔵の懸仏の年代観などを考慮すると、大威徳寺もしくはその前身寺院の創建が、平安時代後半にまでさかのぼる可能性も皆無ではない。そこで、久保氏の指摘する視点から大威徳寺を概観してみたい。

久保氏は、「仏地と僧地の位置関係」「聖地と俗地の位置関係」の二つの視点で空間構成を検討されている。一般的に、「仏地的建物」が寺域平坦面群の最奥に営まれ、「僧地的建物」は同一平坦面の前面や谷寄り、もしくは下方の平坦面に展開すること。「仏地的建物」の前面に「空間地を広くとる場合」と「さほど広く取らない場合」があること。仏堂前の広狭の背景は、①各寺院で勤修された法儀の違い、②地形利用のあり方によると考えられること。などを指摘され、総じて、仏地的堂舎が最奥の高位の場所に置かれ、「その脇、谷寄り、下方の中小平坦面」へと、僧地的性格が強くなるにつれて、寺地への取り付きからみて「手前前方」に展開していくとされている。

また、「聖地と俗地の位置関係」については、山間に寺院が営まれるのは、そこが「浄処」であると認識されるからであり、寺域が「浄処」であることが地形・環境上保障されれば、俗地と

の距離的な隔絶性はさほど問題にならず、むしろ１～３km程度のケースが多いこと。山から平坦部に出た山麓部に、関係性の深い寺社や墓地が営まれ、「山の聖地(山林寺院)―里の聖地(寺社・墓地)―俗地(境域の住む集落)」という位置関係が見られること。などを指摘されている。以上のような久保氏の指摘に基づき、大威徳寺の空間構成について考えてみたい。

まず「仏地と僧地の位置関係」から見た場合、伝本堂跡と本堂西建物を中心とした一角が、「仏地」として寺院の中心であったことはほぼ確実であり、伝本堂跡を中心に、東、北東、北の各方に近接して「仏地的」な施設があったと推測される。そうすると、寺域平坦面群の最奥の高位の場所というわけではないが、寺域のほぼ中心に位置することになり、大筋で久保氏のいう空間構成と一致すると思われる。

一方、「僧地的」施設がどの程度の展開を見せるかはさらに検討を要するが、伝三重塔跡・伝鐘楼跡に「拝殿」「鎮守」との性格を付与することが可能となり、ここに大威徳寺の中での神社信仰の場としての「僧地的」施設が想定できる。さらに寺院中心部から伝三重塔跡などへ至る参道両脇の方形の区画や平坦面、史跡の西から林畑谷へ至る溝状の通路の両側、伝山門からの参道の西に階段状に築かれた方形の平坦面などに、坊院などの「僧地的」施設の存在が予測される。これらのことから、寺院中心部を中心に放射状に参道が広がり、寺域中心部の仏地的空間の東、南、西方を取り巻くように僧地的施設が展開していたと推定される。なお、本堂前面の空間地については、大威徳寺では東西約40m、南北約30mと、非常に広い空間が確保されている。それは、大威徳寺は山間部に位置しながらも、他の遺跡と比べて平坦面に恵まれており、本尊とされる大威徳明王に関わる修法の内容よりも、いわゆる地形利用のあり方に起因したものと思われる。

次に「聖地と俗地の位置関係」の視点から見ると、寺院中心部から西麓の御厩野集落まで直線距離で約１km、同じく東麓の加子母小郷集落まで0.8kmと、比較的近接しているが、東西を林畑谷と般若谷に挟まれ、北方は低湿地で通行困難であったと言われる大威徳寺は、それなりに俗地と隔絶しており、「浄処」としてふさわしい条件を備えると言えよう。さらに興味深いのは、御厩野集落から大威徳寺に上がる、いわゆる威徳寺道の登り口に日枝神社が、小郷集落からの登り口に水無神社があることで、これは久保氏の言う「里の聖地」に該当するものと考えられる。ただし、日枝神社も水無神社もその創建は明らかではなく、前者は承平五年(935年)創立の伝承を持つが、棟札などからたどれる最古の記録はどちらも江戸時代中頃である。

また、密教系寺院においては、「清水寺」の名前が示すように、しばしば清冽な水がある場所に寺院が建立される。水は霊水として尊重され、閼伽や飲料水としても不可欠なもので、奇岩・霊木などとともに、寺院建立の「よりどころ」となる場合が多い。大威徳寺に関して奇岩・霊木の類は知られていないが、寺域内に「長命の泉」や池跡と伝えられる場所も残り、これらが寺院建立の「よりどころ」となったと思われる。『飛州志』や『飛騨国中案内』が伝えるところの大威徳寺創建の伝承も、こういった立地に由来すると思われる。さらに、「池から竜が現れ、大威徳明王に姿を変える」という創建説話は、これらの水に関わる竜神や聖なる池に対する信仰か、あるいは白山信仰の縁起から引用された可能性も考えられ、寺院の創建以前からこの地にあった、本元的な信仰(竜神信仰や白山信仰)に、本尊として据えられた大威徳明王を結びつけたものと考えることも可能であろう。

第５節　大威徳寺の寺領について

大威徳寺の寺領については、慶俊が書き残したところの『経文末書』が、唯一の史料と言える。文中に出てくる地名の多くが遺跡の周辺に実在することは、『飛騨下呂　通史・民俗』(下呂町史編集委員会1990)をはじめ、多くの先学が指摘するところであり、かなり大胆な推測に基づくものではあるが、平成16年度の概報でその復元を試みた。

『経文末書』の記載について、『飛騨下呂　通史・民俗』は、「寺領としては少なすぎるから、あるいはこれは多田坊の領地であったのかもしれない」としており、『斐太後風土記』(常田礼彦1873)にいたっては、「僅かなる寺領田　町　段歩、永廿貫文地ばかりの施入にては、僧侶等甚以て貧しく乏しくて、托鉢乞食すべき市坊もなく、餓寒へて如何なる憂目に逢つらむ」とし、『記述の信憑性までも疑っている。これは明らかに寺領本体である御厩野と野尻を見落とし、境外の乗政や小郷にある寺田のみを評価したものと思われるが、いずれにしても、これだけの大寺院を維持するには、寺領が少なすぎるというのが、衆目の一致するところのようである。

中世竹原郷の石高を記した確かな記録はないが、慶長18年(1613)の『竹原郷右高帳』(第10表)によると、御厩野は228.845石、宮地は360.750石とある。当時は野尻と宮地が一緒であるため、野尻の石高は明記されないが、元禄検地時の野尻と宮地の石高比がおおよそ１：２であることから120石程と換算して、228.845＋120≒350石。境外のプラスαを加算しても、せいぜい400石程度と考えられる。さらに鎌倉・室町時代においては、これよりも生産高を割り引いて考える必要があろう。『経文末書』によると、大威徳寺の寺領は「守護不入」であり、室町幕府への納税を免除されていたと考えられるが、農作物、特に米で見るかぎり、やはり「少ない」と言わざるを得ないようである。しかし、この地に大規模な寺院が存在したことは事実であり、そこに「寺領からの収入」に加え、大威徳寺を支えた収入源を想定する必要が生じることになる。

通常、寺社の収入源を考える場合、寺領の他に祈祷や布教を通した信者からの支援、すなわちお布施を獲得することが考えられる。このようなお布施を集める勢力範囲を「檀那場」などと呼ぶようであるが、白山信仰を例にとると、「御師」と呼ばれる人が社寺と檀那(信者)の間にたち、祈祷や白山登拝の世話などを引き受けていた。近世に人ると檀那場を回る御師たちは、御札や御守りなどを檀那に贈り、檀那からはお初穂やお布施を受け、寺坊経営の財源としていた。中世においてこういった用語を用いることが適切かどうかはひとまず置くとして、大威徳寺も檀那場のような場所を持っていたことは想像に難くなく、少なくとも寺領のあった乗政や西上田、加子母小郷などは、このような檀那場であったと考えて良いであろう。慶長十年(1605)の「実蔵坊飛騨檀那日録」によると、白山信仰の檀那は下原郷(現下呂市金山)に多くあったようだが、旧町域の竹原・上原・中原の各地区にも白山神社があり、この地域一帯に広く浸透していたと考えられる。

第10表　竹原郷村別石高変遷表

	慶長18年(1613)石高帳	元禄７年(1694)検地帳	天命８年(1788)差出明細帳
乗　政	390.334石	440.067石	562.549石
宮　地	360.750石	180.087石	223.902石
野　尻	—	94.911石	116.518石
御厩野	228.845石	140.988石	167.032石

『飛騨下呂　通史・民俗』(下呂町史編纂委員会1990)より

もちろん、中世の大威徳寺の檀那場と近世の白山信仰、長滝寺の檀那場を同様に扱うことはできないが、大威徳寺が白山信仰の拠点である長滝寺と深く結びついていたであろうことは既成の事実として定着しており、大威徳寺の末寺であったとの伝承を持つ常楽寺や蟠龍寺などがある東白川村や、法禅寺のある中津川市加子母なども含め、旧下呂町を中心に、南飛騨から美濃地方にかけてのかなりの範囲に大威徳寺の影響が及んでいたと考えて大きな問題は無いと思われる。

次に、常識的に考えて「山林資源」をあげることができる。現在も、中津川市加子母から付知にかけての一帯は良材の産地として著名であるが、『わかりやすい岐阜県史』(岐阜県2001)には、室町中期の文安四年(1447)に、京都の南禅寺仏殿造営のための材木が飛騨から京都へ運ばれたことを示す史料が紹介されており、室町期には「美濃や飛騨が有力な良材の産地として注目」されていたことがうかがわれる。さらに、「(室町)幕府が直接関与した事業のほかに、商品として美濃・飛騨の材木や板類が供給されていたことは十分予想されることである」ともしている。よって、大威徳寺の収入源の一つに山林資源を加えることは可能であろうが、材木を切り出して市場に出すには膨大な労働力を必要とし、それをいかにして確保したかが問題となる。中世においては米など作物で納める税に加えて使役で収める税もあり、当時の寺領内の住民が負担したと考えるのが自然と思われるが、天明八年(1788)ですら490人程度であった御厩野・野尻の人口を考えると、はたして鎌倉・室町時代にどれだけ使役に徴用できたか、さらに検討を要するところである。

さらに、米以外の「換金作物」、例えば麻や竹原紙の原料となる楮、繭や生糸などが考えられる。『飛騨下呂 通史・民俗』には、「飛騨ではすでに鎌倉時代には紙生産が始まり、(略) 禁中で重宝がられるほどの高級紙を漉くまでに発達したといわれる」とある。御厩野地内には「紙屋平」「紙屋田」などの地名も残り、また、下呂市上原の和川白山神社に残る応永十九年(1412)銘の印版大般若経の奥書には、「門和佐」を「門麻」と表記した例が見られるが、この「麻」が文字通り作物の麻を指すとする説もあり、興味深いものがある。しかし、これらの作物の生産の実態が分かってくるのは、せいぜい江戸時代の中頃で、中世にどれだけ普及していたか、やはり慎重に検討しなければならないであろう。

先に引用した『わかりやすい岐阜県史』には、「琵琶湖に設けられた延暦寺の関を通過する際に(木材に打たれた)刻印の有無が確かめられている」ともあり、延暦寺が琵琶湖に関所を設け、関銭を徴収していたことをうかがわせる。大威徳寺は濃飛の国境である舞台峠の北方約1kmの所に位置し、寺領内に舞台峠とそれを通る、いわゆる「南北街道」が含まれていたと推測される。つまり、東濃と飛騨の間を運ばれる物資は、必ず大威徳寺の寺領を通らなければならないことになり、小野正敏指導委員は、大威徳寺を「国境の関寺」と呼び、寺社が交通の要所に関所を設け関銭を徴収した例は決して珍しくないとの教示もいただいた。大威徳寺が関所を構えていた確証はないが、近世には御厩野に口留番所が置かれ、『飛州誌』が引用するところの「禅昌寺文書」の中には、東濃(岩村)から飛騨(萩原)へ魚や瀬戸物などがもたらされたことを示す史料も見られる。大威徳寺跡から出土する山茶碗や古瀬戸など、遺物の多くが東濃や瀬戸で生産されたと考えられることなどからも、相当数の物資が舞台峠を行き来していたと考えて良いであろう。先の延暦寺の例もあり、大威徳寺も舞台峠の近辺に関所を構えることで南北街道を通る物流を管理し、徴収した関銭を経済基盤の一つとしていたと考えることは、ある意味合理的な解釈と思われる。

第６節　調査の現状と今後の課題

これまでの調査で、伝本堂跡を中心とする寺院中心部の範囲や構造をほぼ明らかにすることができた。さらには東方の伝三重塔跡や伝鐘楼跡などが、大威徳寺の中の神社信仰の場であったと考えられることなど、その空間構成の一端を復元することが可能になり（第64図）、これまで謎に包まれていた大威徳寺跡の様相が、わずかながらも具体的に浮かびあがってきた。さらに調査の目的である寺院の範囲確認についても、寺域の範囲をほぼ推定することができ、最低限の成果を挙げることはできたと考えるところである。その一方で、平成18年度の調査では、寺域西方の林畑谷右岸の相当範囲に麻城が展開することが明らかとなり、その範囲の確認という、大きな課題を残すこととなった。

さらに寺院の沿革について、その廃絶時期などについては次第に明らかになってきたが、創建については、平安期にさかのぼる可能性を見出しながらも、断定するにはいたっていない。寺院の創建を、源頼朝・文覚上人とすることについては、文覚が頼朝の援助を受け京都の神護寺や東寺など、真言宗の寺院を再興したことが下敷きになっていると考えられ、必ずしも歴史的事実を伝えているとは考えない方が良いであろう。その一方で、『絵文末書』が伝える大威徳寺の鎮守「伊豆・箕根・熊野・白山」のうち、伊豆・箕根・熊野は文覚上人ときわめて関係の深い神社であり、そこに伝承にある文覚の登場を見出すことができるとの指摘もある[注5]。いずれにせよ、確実な文献史料が皆無な状態で解明は極めて困難であるが、その創建の時期も含め、さらなる検討が必要であろう。しかし、早川指導委員をはじめご指導いただいた諸先生方からは、大威徳寺に直接結びつく新史料の発見はあまり期待できないであろうとのご意見・ご感想が多い。

また、大威徳寺の宗派についても、現在天台宗が定説となっているが、通常、五大明王は京都の東寺や大覚寺、醍醐寺など、真言宗寺院に安置されることが多く、天正13年の飛騨大地震後、慶俊が身を寄せた長瀧寺阿名院は、長瀧寺のなかでも真言色の強い坊院であるとされる[注6]。本山と末寺の関係など何らかの関係のある寺院間の場合、中央の寺の縁起が地方の寺院の縁起に取り入れられることも少なくない。本尊や寺号が大威徳明王であるとされることなどからも、ある時期大威徳寺が神護寺など真言宗の系列下にあった可能性が指摘されている[注6]。あるいは『斐太後風土記』は、和泉（現岸和田市）の大威徳寺は、「本坊真言・穀屋天台」であったと記しており、下呂の大威徳寺も両宗が並存していた時期があったことも推測される。なお、大威徳寺の山号については、富山大学・鈴木景二氏から、下記のような大変興味深いご教示をいただいた。

山号の「鳳憩尾山」は、『飛州志』に「傍至尾」とも書くように、「ぼうじ」尾という音の読み方に本義があり、それに良い意味を持った別の漢字を宛てたとみられる。「ぼうじ」は、おそらく境界の表示を示す「傍示」であると推測され、「尾」は「尾根」の意味であるから、「ぼうじびさん」の山号は、「境の尾根に位置する」ことを意味し、大威徳寺が国境に位置することに対応することになる。

大威徳寺の末寺については第２章で、また関連遺物などについては、その一部を第４章に挙げたが、特に周辺地域に残る平安仏について、『岐阜県史　通史編　古代』（岐阜県1971）では、旧益田郡内に残る平安時代の仏像彫刻として、下呂市金山町祖師野八幡神社の十一面観音菩薩、同森水無八幡神社の神像、同萩原町羽根観音堂の十一面観音・二天像・薬師如来像が紹介されてい

る。また星野直哉氏は、当遺跡に近い中津川市加子母桑原に所在する法禅寺に11世紀前半の薬師如来坐像が残ることを報告されている(星野直哉2000)。さらに、文化庁・奥健夫氏からは、下呂市金山町中切の長龍寺が所蔵する伝釈迦如来坐像(鎌倉時代)の調査記録および写真について、ご高配を賜った。なお氏の調査記録によると、同寺の観音堂に安置される観音菩薩像も、鎌倉中期頃の作と見られるとのことである。

周辺の行場としての滝や奇岩怪石については、現在までにその可能性のある場所として、「拝殿山」や御厩野地内にある「箱岩」、野尻地内にある「不動滝」、中津川市加子母小郷にある「鶏岩(函岩)」などを確認している。史跡保存会や加子母郷土史研究会の会員諸氏など、地元の歴史・文化財に明るい方々からの聞き取りは続けているが、今後新しい知見の追加と、既知の場所からの可視範囲の確認などの現地調査が必要となろう。

濃飛両国の国境である舞台峠やいわゆる「南北街道」に近いことが、大威徳寺の価値を高めると考えられることは、多くの先学の指摘する所である。南北街道については、すでに昭和59年に県教委によって調査がされ、『歴史の道調査報告書　南北街道』(以下『報告書』と略す)として、その道筋や関連の遺構・遺物などが報告されている。紹介されている遺構や遺物の多くは、近世以降のものである。現在、『報告書』以上の情報は持ち合わせていないが、この南北街道も地元では「鎌倉街道」と呼ばれ、鎌倉や鎌倉幕府とのつながりをうかがわせる伝承や遺構として、舞台峠や御厩野の地名の由来、寺域内にあったとされる源頼朝の「鐙掛け松」や「鞍掛け松」「秩父杉」「鎌倉銀杏」「和田桜」などの古木や、小郷地内には「大杉地蔵尊」「加子母大杉(国指定天然記念物)」「鎌倉石」などがあり、野尻地内には旧街道沿いに「鎌倉井戸」が残っているとのことである。なお、舞台峠の名前の由来については、広く一般に知られるところであるが、舞を披露してもてなしたのが源頼家であったり、北条時頼であったりとまちまちなのは、大威徳寺に参拝する武将があまりにも多かったためとも言われる。『報告書』も「御厩野に源頼朝が文覚上人に命じて大威徳寺を建立させたことも、この街道に少なからぬ影響を与えたと思われる」としているが、その具体的な影響についても、さらなる検討が必要となろう。

そして何よりも、試掘調査で得られた知見にこれらの関連遺物や文献・地名などの調査の成果を加え、より広い視野で総合的かつ専門的に大威徳寺を評価することが、これからの最も重要な課題と考える。

この4年の調査にひとまずの区切りをつけるにあたり、これまでの成果や得られた知見、今後の課題などについて記した。文献や関連遺物の調査に終わりはないとは言え、まさに「日暮れて、道遠し」の状況で、担当者としての力量の無さをつくづく実感する所である。

今後も下呂市として継続的に調査・研究を続けていく予定であり、今まで謎に包まれていた大威徳寺の様相がさらに明らかになることを期待するとともに、これまで色々とご指導・ご助言をいただいた、国・県の担当部局、指導委員を初めとした諸先生方、さらには調査に色々と便宜を図っていただいた(株)中島工務店や地元地権者の皆様、そして長年遺跡の保護に尽力されてきた史跡保存会や発掘の苦楽をともにした作業員の皆さんなど、お世話になった皆様に心から感謝し、更なるご協力とご指導をお願いして結びとしたい。

注① 上原真人(2000)、久保智康(2001)など

注② 伊藤延男『日本の美術№108 鎌倉建築』(至文堂1982)、同「寺院建築の遺構」(『新版考古学講座8 特論(上)』雄山閣1961)など

注③ 脊古真哉氏の教示による

注④ 仏像の年代観については、久保智康氏・脊古真哉氏が来跡の際に、写真をご覧いただいたところ、地蔵菩薩立像は鎌倉期の作である可能性があるが、他の2体は江戸期の作に見受けられるとの感想をいただいた。

注⑤ 宝珍慎一郎氏(勝山市教育委員会)の教示による。

注⑥ 菅谷文則氏の教示による。

注⑦ 『飛騨下呂 通史民俗』(下呂町史編纂委員会1990)所載の表21「江戸時代町域人口の増加率」から転載した。

注⑧ 『飛騨下呂 史料Ⅰ』(下呂町史編纂委員会1986)には、「門麻村 形部」「門麻四郎左近」などの奥書の記載が報告されている。

注⑨ 2004年11月13日に、現中津川市加子母小郷で行われた、平安・鎌倉郷土史研究会主催による郷土史講演会、「濃飛国境の古代寺院 大威徳寺が語りかけるもの」講演会資料(講師齊藤慎一氏)による。

注⑩ 相原精二氏の教示による。

注⑪ 脊古真哉氏・古田 一彦氏の教示による

注⑫ 鈴木景二氏・脊古真哉氏らの教示による。

【参考文献】

相原精二 『鳳凰尾山大威徳寺史跡についての試論 山岳修験道と鉱物資源の観点から「大威徳寺の創建が文覚上人である」の可能性を探る』(私刊) 2006

井上喜久男 『尾張陶磁』 ニュー・サイエンス社 1992

今井精一 『郷土史研究シリーズ其の15 大威徳寺史』(私刊) 1986

上原真人 「山岳寺院の考古学・総説(講演会要旨)」『第3回摂河泉古代寺院考古学フォーラム』摂河泉古代寺院研究会 2000

上村満義 『飛騨国中案内』 1746(1974復刻)

加子母村誌編纂委員会 『加子母村誌』 1972

角竹喜登 「大威徳寺址」『岐阜県史跡名称天然記念物調査報告書 第10輯』岐阜県内務部 1941

金山町誌編纂委員会 『金山町誌』 1975

川勝政太郎 『石造美術概説』 1935

岐阜県 『岐阜県史 通史編 中世』 1969

岐阜県 『岐阜県史 通史編 古代』 1971

岐阜県 『わかりやすい岐阜県史』 2001

岐阜県教育委員会 『歴史の道調査報告書 南北街道』 1983

岐阜県益田郡萩原町川西村誌編纂委員会 『続川西村誌』 1959

鬼北町教育委員会 「等妙寺跡 ―平成11年度～平成16年度学術調査に伴う埋蔵文化財調査報告書―」2005

久保智康 「国府をめぐる山林寺院の展開」『朝日百科日本の国宝別冊 国宝と歴史の旅3 神護寺薬師如来像の世界』朝日新聞社 1999

久保智康　「古代山林寺院の空間構成」『古代』第100号　2001
下呂町史編纂委員会『飛騨下呂　図録』　1980
下呂町史編纂委員会『飛騨下呂　史料Ⅱ』　1986
下呂町史編纂委員会『飛騨下呂　通史民俗』　1990
下呂町文化財審議会・下呂町教育委員会　『下呂町の文化財』　2004
下呂町教育委員会　『岐阜県指定史跡風慈尾山大威徳寺跡平成15年度範囲確認調査概要報告書』　2004
下呂市教育委員会　『岐阜県指定史跡風慈尾山大威徳寺跡平成16年度範囲確認調査概要報告書』　2005
小池三次　「史跡大威徳寺の最新事情」『飛騨春秋』通巻第465号　飛騨郷土史学会　1999
国立歴史民俗博物館『日本出土の貿易陶磁　東日本編』　1994
湖西市教育委員会　『大地波峠廃寺　平成元年度～平成６年度』1990～1995
小島幸男　『図説　飛騨の歴史』岐阜県の歴史シリーズ（６）　1987
桑谷正道　『飛騨の街道』　飛騨運輸株式会社　1972
琴南町教育委員会　『中寺廃寺　平成16年度、平成17年度』　2005・2006
齋藤孝正　『須恵器集成図録　第３巻　東日本編Ⅰ』雄山閣　1995
笹生衛　「考古学から見た中世社寺」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告第８集』1997
高井良夫　『下呂遺跡発掘調査報告書』　下呂町教育委員会　1985
竹原郷土誌研究会　『竹原郷土誌』　1991
中世土器研究会　『概説　中世の土器・陶磁器』 真陽社　1995
中世焼資料集成研究会　『中世焼資料集成　－中部・東海編－』　2005
富山礼彦　『斐太後風土記』1873（1968、雄山閣より復刻）
中野効四郎　「大威徳寺跡」『岐阜県指定文化財調査報告書第６巻』岐阜県教育委員会　1963
長谷川忠崇　『飛州志』　1745（1969復刻）
東白川村誌編纂委員会　『新修東白川村誌　通史編』　1982
飛騨地学研究会　『20億年のドラマ―飛騨の大地をさぐる―』　1988
藤沢良祐　「本業焼きの研究(1)～(3)」『瀬戸市歴史民俗博物館　研究紀要Ⅵ～Ⅷ』瀬戸市歴史民俗博物館 1987～89
藤沢良祐　「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要　第３号』三重県埋蔵文化財センター　1994
藤沢良祐　「中世瀬戸窯の動態」および「付編　古瀬戸編年表」『(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要第５輯』1997
藤沢良祐　「瀬戸・美濃大窯製品の生産と流通　－研究の現状と課題－」『「瀬戸大窯とその時代」シンポジウム・講演会　戦国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品　－東アジアの視点から－　資料集』(財)瀬戸市埋蔵文化財センター　2001
藤沢良祐　「瀬戸・美濃登窯製品の生産と流通」『江戸時代のやきもの　－生産と流通－　記念講演会・シンポジウム資料集』(財)瀬戸市埋蔵文化財センター　2006
平凡社　『岐阜県の地名』日本歴史地名体系21巻　1989
星野直哉　「11世紀前半彫刻に関する考察　～岐阜県下における新出作例二件について～」『飛騨春秋』通巻第479号　2000
益田郡役所　『益田郡誌』1916(1970復刻)
御厩野区所蔵『飛騨国益田郡竹原郷御厩野村田畑屋敷御検地水帳』
御厩野区所蔵『検査絵図写』　1891調整・1913写
吉岡康暢　『中世須恵器の研究』吉川弘文館　1994
渡辺政治　「鳳慈尾山大威徳寺」『飛騨春秋』通巻第31号　飛騨郷土史学会　1959

第11表　遺物観察表（1）

挿図番号	器種	出土地点（層位）	法量(cm) 口径	底径	器高	整形・調整	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	古瀬戸 香炉(?)型	AK・AL トレ I・II層	16.0	8.8	9.5	鉄釉、口縁百今は、削り出し輪高台	密	良	褐灰色 灰　色	ﾌﾗｸﾞ3/12 底部～4/12	古瀬戸中期後半 二次被熱
2	古瀬戸 瓶　子	AEC,D,H-AE II層・表採	--			III類、灰釉？肩部下、体部中程に横方向の平行沈線	密	良	暗灰黄色	計測不能	古瀬戸後期 仏本堂プラン外 表採遺物と接合
3	古瀬戸 瓶　子	AK・AL トレ II　層	—	—	—	II類？、灰釉、ヘラ状工具による垂手状の文様	密	良	にぶい黄色 オリーブ灰色	計測不能	古瀬戸中期？
4	古瀬戸 瓶　子	AE・DE トレ II　層	—	10.4	—	III類、灰釉	密	良	灰褐色 オリーブ灰色	底部～4/12	古瀬戸後期 二次被熱
5	古瀬戸 瓶　子	AK・AL トレ II　層	—	12.2	—	III類、灰釉	密	良	灰黄色 オリーブ灰色	底部=1/12	古瀬戸後期 二次被熱
6	灰釉陶器 長頸瓶	AK・AL トレ II　層	11.2	—	—	灰釉	密	良	灰白色 オリーブ灰色	口縁=1/12	二次被熱
7	古瀬戸 施釉容器	AK・AL トレ II　層	13.8	—	—	灰釉	密	良	にぶい褐色 オリーブ灰色	口縁～1/12	古瀬戸後期
8	古瀬戸 小　皿	AE・DE トレ II　層	8.6	4.2	2.2	内面全面に灰釉 底部外面糸切り	密 径1mm以下のチャート・長石を少量含む	良	にぶい黄橙 オリーブ灰	口縁～4/12 底部=4/12	
9	古瀬戸 有耳壺	AK・FI トレ II　層	11.8	—	—	灰釉	密	良	灰白色	口縁～5/12	古瀬戸後期 二次被熱 10と同一個体？
10	古瀬戸 有耳壺	AE・FI トレ II　層	--	5.9		灰釉	密	良	黄灰色	頸部=2/12	古瀬戸後期 二次被熱 9と同　個体？
11	古瀬戸 瓶　子	AK・FI トレ II　層	—	—	—	灰釉、櫛状工具による唐草状の文様	密	良	灰黄色 オリーブ灰色	計測不能	二次被熱
20	古瀬戸 折縁深皿	AE・TP5 II　層	31.6	--	—	灰釉	密	良	灰黄色 にぶい黄色	口縁=3/12	古瀬戸後II期
21	山茶碗 小　皿	E　区 表　採	7.6	3.6	1.9	底部下方に突出	密	良	褐灰色	口縁=1/12 底部=1/12	6～7型式
22	山茶碗 小　皿	AE・BI トレ II　層	7.6	4.0	1.8	底部外面板目状圧痕	密 径1mm以下の黒斑を含む	良	灰白色	口縁～1/12 底部=2/12	6～7型式
23	古瀬戸 瓶　子	AE・FI トレ II　層	--	--		II類？、鉄釉、横方向の平行沈線と菊花の印花文	密	良	灰白色 黒褐色	測定不能	古瀬戸中期
24	古瀬戸 水　注	AE・FI トレ II　層	—	—	—	灰釉、ヘラ状工具による唐草状の文様	密	良	淡黄橙色 オリーブ黒	測定不能	古瀬戸中期
25	古瀬戸 折縁深皿	AE・CE トレ II　層	18.5		-	灰釉	密	良	灰黄色 にぶい黄色	口縁=2/12	古瀬戸後I ～II期
26	古瀬戸 茶　壺	AK・EJ トレ II　層	11.6			鉄釉	密 径1mm以下のチャート少量含む	良	にぶい黄色 暗褐色	口縁～3/12	古瀬戸後IV期
27	大　窯 志野丸皿	AK・FI トレ II　層	11.8	6.8	3.8	長石釉	密 径1mm以下の黒斑を含む	やや良	にぶい黄色 淡橙褐色	口縁～7/12 底部=11/12	大窯第4段階
28	古瀬戸 瓶　子	AE・TP3 II層				II類、灰釉、櫛状工具による宝珠形の文様	密	良	灰黄色 ｵﾘｰﾌﾞ黒	計測不能	古瀬戸中期

第12表　遺物観察表(2)

挿図番号	器種	出土遺構(層位)	法量(cm) 口径	底径	器高	整形・調整	胎土	焼成	色調	残存率	備考
29	古瀬戸 擂鉢	AK・D6トレ II 層	−	−		施釉	密	良	灰黄褐色 暗灰色	計測不能	古瀬戸後IV新期 二次被熱
30	古瀬戸 折縁深皿	AK・D6トレ II 層	−		−	灰釉	密	良	褐灰色 黄灰色	計測不能	古瀬戸後II ～III期 二次被熱
31	古瀬戸 天目茶碗	AK・TP3 II 層	11.3	−		鉄釉	密	良	灰黄褐色 黒　色	口径=2/12	古瀬戸中IV ～後I期
32	古瀬戸 瓶　子	AK・TP1 II 層	−	8.1	−	II類、灰釉	密	良	にぶい黄色 オリーブ色	底径=6/12	
33	古瀬戸 種壺小壺	AK・TP1 II 層	−	−	−	灰釉	密	良	灰黄褐色 灰オリーブ色	計測不能	古瀬戸後期
34	大　窯 端反皿	AK・TP1 II 層	9.8	−	−	灰釉、内面中位、外面体部 2/3	密、径1mm以下のチャート・黒雲母を少量含む	良	浅黄色 灰オリーブ色	口径=2/12	大窯第1～2段階
35	青　磁 碗	AK・TP1 II 層	−	5.3			密	良	灰黄色 オリーブ灰色	底径=6/12	
36	灰釉陶器 多口瓶	AK・E3トレ II 層	3.7	−	−	注口部、灰釉（漬掛け）により補修	密、径1mm以下のチャート・長石を少量含む	良	灰黄色 灰　色	口径=12/12	053～H72号竪式遺構37と同一個体？
37	灰釉陶器 多口瓶	AK・E3トレ II 層	4.4	−	−	注口部、灰釉	密、径1mm以下のチャート・長石を少量含む	良	灰黄色 灰　色	口径=12/12	053～H72号竪式遺構36と同一個体？
38	青　磁 碗	AK・E3トレ II 層	−	4.8	−		密	良	灰白色 オリーブ灰色	底径=8/12	
39	山茶碗 碗	AK・E3トレ II 層	11.5	3.6	3.6	底部外面糸切り、内面浅くくぼむ	密	良	灰黄色	口径=5/12 器高=11/12	10型式
40	山茶碗 碗	AK・E3トレ II 層	11.4	3.1	3.3	底部外面糸切り、内面浅くくぼむ	密	良	灰黄色	口径=4/12 底径=12/12	10型式
41	山茶碗 碗	AK・E3トレ II 層	11.8	3.3	2.9	底部内面浅くくぼむ	密	良	灰黄色	口径=3/12 底径=1/12	10型式、 外面煤状の炭化物付着
42	山茶碗 小　皿	AK・E3トレ II 層	8.6	3.8	2.2	底部外面糸切り、板目状圧痕、	密 径1mm以下のチャート・長石を少量含む	良	にぶい橙色 にぶい橙色	口径=5/12 底径=7/12	6型式 内面降灰
43	山茶碗 小　皿	AK・E3トレ II 層	8.8	6.4	1.3	底部外面糸切り、内面指圧痕	密、径1mm以下の雲母・黒雲を少量含む	良	灰黄色	口径=2/12 底径=3/12	9型式
44	山茶碗 火舎香炉	AK・E3トレ II 層	14.2	−	−		密、径1mm以下のチャート・黒雲を少量含む	良	にぶい橙色	口径=1/12	
45	山茶碗 仏　鉢	AK・E3トレ II 層	25.3	−		外面口縁下方に平行沈線	やや粗 径1mm以下のチャート・長石・石英を含む	良	にぶい橙色	口径=3/12	
46	中世陶器 壺	AK・E3トレ II 層	16.0	−	−		やや密 径1mm以下のチャート・長石・石英を含む	良	にぶい褐色 暗褐色	口径=3/12	
47	古瀬戸 平　碗	BK・I9トレ II 層	19.6	−	−	灰釉	やや密 径2mm以下のチャート・長石を含む	良	にぶい橙色 にぶい黄色	口径=1/12	古瀬戸後期
48	古瀬戸 平　碗	BK・I9トレ II 層	−	5.2		灰釉、削り出し輪高台	やや粗 径1mm以下のチャート・長石・黒雲を含む	良	にぶい黄色 浅黄色	底径=7/12	古瀬戸後期

第13表　遺物観察表(3)

挿図番号	器種	出土遺構(層位)	法量(cm) 口径	底径	器高	整形・調整	胎土	焼成	色調	残存率	備考
49	古瀬戸 擂鉢	3区・A9ン II層	−	−	−	鉢軸、口縁部を指頭により片口に成形	密 径1mm以下の黒斑を含む	良	浅黄橙色 にぶい黄橙色	計測不能	古瀬戸後IV新期
50	古瀬戸 擂鉢	B4・A9ン I層	−	−	−	鉢軸	密	良	にぶい黄橙色 黒褐色	計測不能	古瀬戸後IV新期
51	古瀬戸 天目茶碗	B8・A8ン II層	9.4	−	−	鉄軸	密 径1mm以下のチャート・長石を少量含む	良	にぶい黄橙色 黒色	口縁＝1/12	古瀬戸中IV～後I期
52	古瀬戸 鉢軸小皿	B8・A9ン II層	7.8			灰軸	密 径1mm以下のチャート・長石・黒斑を少量含む	良	灰黄色 オリーブ色	口縁＝1/12	古瀬戸後期
53	古瀬戸 有耳壺	B8・A9ン II層	−	−	−	灰軸	密	良	にぶい黄橙色	計測不能	古瀬戸後期
54	古瀬戸 擂鉢	B4・I8ン II層				鉢軸	密	良	橙色 にぶい橙色	計測不能	古瀬戸後IV新期
55	瀬戸美濃 擂鉢	3区・A9ン II層	32.0	−	−	鉢軸	密	良	褐灰黄色 暗赤褐色	口縁＝2/12	17世紀代？
56	山茶碗 碗	B区・I9トン II層	12.4	4.4	5.2	底部外面糸切り、板目状圧痕、内面指圧痕	密 径1mm以下のチャート・長石・赤色砂粒含む	良	灰白色	口径＝2/12 底径＝8/12	7型式
57	山茶碗 碗	B区・I9トン II層	13.0	−	−		密 径1mm以下の黒斑を少量含む	良	灰黄色	口縁＝2/12	7～8型式
58	山茶碗 碗	B4・C7ト II層	13.4	4.9	4.8	底部外面糸切り、板目状圧痕、内面指ナデ	密 径1mm以下の黒斑を少量含む	良	灰黄褐色	口縁＝4/12 底部＝6/12	7～8型式 内面漆状の付着物
59	山茶碗 碗	B区・I9ト II層	12.6	4.0	4.5	底部外面糸切り、内面指圧痕	密 径1mm以下の黒斑を少量含む	良	黄灰色	口縁＝1/12 底部＝5/12	8型式
60	山茶碗 碗	B8・A9トレ II層	13.2	4.7	4.6	底部外面糸切り、	密 径1mm以下のチャート・長石を少量含む	良	にぶい黄橙色	口縁＝3/12 底部＝2/12	8型式
61	山茶碗 碗	B区・A9トレ II層	13.2	4.7	3.9	底部外面糸切り、	密 径1mm以下のチャート・長石・黒斑を少量含む	良	にぶい黄色	口縁＝1/12 底部＝3/12	9型式
62	山茶碗 碗	3区・I9トレ II層	11.8	3.6	3.1	底部外面糸切り、内面浅くくぼむ	密 径1mm以下のチャート・長石を少量含む	良	褐灰色	口縁＝2/12 底部＝2/12	10型式
63	山茶碗 碗	B4・I9トレ II層	13.6	5.6	4.5	無高台、底部外面糸切り、内面浅くくぼむ	密 径1mm以下の黒斑を少量含む	良	淡黄色	口縁＝2/12 底部＝3/12	10型式 内面漆状の付着物
64	山茶碗 碗	B区・A9トレ II層	12.8	4.0	3.3	無高台、底部外面糸切り、内面中央に小突起	密 径1mm以下のチャート・長石・赤色砂粒含む	良	灰黄色	口縁＝3/12 底部＝6/12	10型式
65	山茶碗 碗	B区・I9トレ I層	9.8	−	−	内面渦巻き状のロクロ目	密	良	褐灰色	口縁＝1/12	11型式(生田)
66	山茶碗 小皿	B8・A8トレ II層	7.8	3.8	2.1	底部外面糸切り	やや密 径1mm以下のチャート・長石・黒斑を少量含む	やや良	暗灰黄色	口縁＝2/12 底部＝4/12	6型式 内面煤状の付着物
67	山茶碗 小皿	B区・I8トレ II層	9.4	5.0	1.7	底部外面糸切り、内面指圧痕	密	やや軟	淡黄色	口縁＝1/12 底部＝3/12	7型式
68	山茶碗 小皿	B区・A8ン II層	8.8	5.6	1.5	底部外面糸切り、板目状圧痕、内面指圧痕	密 径1mm以下のチャート・長石を少量含む	良	灰白色	口縁＝2/12 底部＝2/12	8型式

第14表　遺物観察表（4）

掲図番号	器種	出土遺構（層位）	法量(cm) 口径	底径	器高	整形・調整	胎土	焼成	色調	残存率	備考
69	山茶碗 小皿	D区・A9トレ II層	7.8	5.1	1.1	底部外面糸切り、内面腰部がややくぼむ	密 径1mm以下のチャート・長石・黒雲母少量含む	良	灰黄色	口径=1/12 底径=6/12	10型式
70	山茶碗 火舎香炉	B区・I9トレ II層	17.2	—	—		密 径1mm以下のチャート・長石・石英を少量含む	良	黄灰色 灰色	L色=2/12	
71	山茶碗 鉢	D区・A9トレ II層	—	—	—	口縁部玉縁状に肥厚、端部外面に沈線	やや密 径1mm以下のチャート・長石・石英・黒雲母含む	良	明黄褐色	計測不能	
72	山茶碗 鉢	B区・I9トレ II層	—	—	—	口縁断面台形に肥厚	密 径1mm以下のチャート・長石・石英・黒雲母多く含む	良	灰白色	計測不能	
73	大窯 天目茶碗	D区・A9トレ II層	11.0	—	—	鉄釉	やや密 径1mm以下のチャート・長石・石英・黒雲母含む	良	にぶい橙色 赤褐色	口径=1/12	大窯第4段階
74	古瀬戸 半　碗	B区・I9トレ II層	15.6	—	—	灰釉	やや密 径1mm以下のチャート・長石・石英を少量含む	良	淡黄色 オリーブ灰色	口径=2/12	古瀬戸後期
75	大窯 折縁皿	D区・A9トレ II層	14.0	—	—	灰釉	密 径1mm以下のチャート・長石・石英を少量含む	良	浅黄色 オリーブ灰色	口径=5/12	大窯期？
76	大窯 丸皿	B区・A9トレ II層	—	3.0	—	灰釉、貼り付け高台、底部内面に菊花の印花文	やや密 径1mm以下のチャート・長石・石英・雲母を含む	良	にぶい黄橙色 オリーブ灰色	底径=4/12	大窯第2段階
77	大窯 丸皿	B区・I9トレ II層	—	3.6	—	灰釉、貼り付け高台、底部内面に菊花の印花文	やや密 径1mm以下のチャート・長石・石英、黒雲母を含む	良	浅黄橙色 オリーブ灰色	3/4残=11/12	大窯第2段階
78	大窯 端反皿	B区・I9トレ II層	10.8	—	—	灰釉、体部外面中央にやや強い稜	密 径1mm以下のチャート・長石を少量含む	良	明黄褐色 灰白色	口径=2/12	大窯第1段階79と同一個体？
79	大窯 端反皿	B区・I9トレ II層	10.0	—	—	灰釉、体部外面中央にやや強い稜	密 径1mm以下のチャート・長石を少量含む	良	灰黄褐色 オリーブ灰色	口径=2/12	大窯第1段階78と同一個体？
80	青磁 稜花皿	D区・A8トレ II層	12.4	—	—	「線彫り」による数条の曲線と簡手状の文様	密	良	にぶい黄色 緑灰色	口径=3/12	15世紀
81	連房式登窯 大日茶碗	B区・I8トレ II層	12.4	—	—	鉄釉	密 径1mm以下のチャート・長石・黒雲母含む	良	黄灰色 暗褐色	口径=1/12	重1段階乗3小窯
82	土師器 土師皿	B・A9トレ II層	11.2	5.2	2.8	口縁部内面ヨコナデ、体部外面底部回転糸切、底部中央ナデ後に突出	やや密 径1mm以下のチャート・長石を少量含む	やや軟	浅黄橙色	L径=5/12 底径=11/12	内外面煤状の付着物
83	中世陶器 甕	B区・I9トレ II層	—	—	—		密 径1mm以下のチャート・長石・石英・黒雲母含む	良	黄灰色 にぶい橙色	計測不能	大窯期？ 中津川産？
84	中世陶器 甕	B区・A9トレ II層	—	—	—		やや密 径1mm以下のチャート・石英・石英・黒雲母含む	良	青灰色	計測不能	大窯期？
85	土師器 内湾羽釜	B区・A9トレ II層	—	—	—	口縁端部面取り、内面ヨコナデ	やや密 径1mm以下のチャート・長石を少量含む	やや良	淡黄色	計測不能	14世紀
86	土師器 伊勢型鍋	A区・C3トレ II層	15.4	—	—	体部外面横及び斜方向ハケ目、胴部開閉中旗	やや密 径1mm以下のチャート・長石を多く含む	やや良	にぶい橙色	口径=1/12	外面煤付着 14世紀中頃 ～後半
87	山茶碗 小皿	A区・C3トレ II層	8.6	4.4	2.1	底部外面糸切り、内面指圧痕	密 径1mm以下のチャート・長石・石英を含む	良	灰白色	口径=4/12 3/4残=7/12	6型式 底部外面墨書
88	青磁 皿	A区・C5トレ II層	—	4.8	—	無高台、底部外面鎬酷	密	良	灰色 緑灰色	底径=1/12	

第15表　遺物観察表(5)

挿図番号	器種	出土遺構(位置)	法量(cm) 口径	底径	器高	整形・調整	胎土	焼成	色調	残存率	備考
89	古瀬戸 仏華瓶	AE・G層トレ II 層	－	－	－	鉄釉	密 径1mm以下のチャート・長石・石英・黒鉱を含む	良	灰黄褐色 黒　色	計測不能	古瀬戸中期？
90	瓦質土器 奈良火鉢	AE・G層トレ II 層	－	…	…		やや密 径1mm以下のチャート・長石・石英を含む	やや良	灰白色	計測不能	渥美V類 14世紀後半 ～15世紀前半
91	大　甕 壺	AX・TP2 II 層	－	－	－		やや密 径1mm以下のチャート・長石・石英・黒鉱を含む	良	褐色灰色 暗赤褐色	計測不能	大窯期？
92	大　窯 天目茶碗	AR・TP4 II 層	10.8	…	－	鉄釉	やや密 径1mm以下のチャート・石石・黒鉱を含む	良	にぶい黄橙 褐灰褐色	口縁＝1/12	大窯第3段階？
93	山茶碗 碗	AR・TP10 II 層	－	7.0	－	底部外面糸切り、板目状圧痕、内面摩圧痕	密 径1mm以下のチャート・長石・黒鉱を少量含む	良	灰黄色	底部～6/12	6～7型式
94	山茶碗 鉢	AR・TP10 II 層	－	…	－	口縁部玉縁状に肥厚し内面に沈線	やや密 径1mm以下のチャート・長石・黒鉱を多く含む	良	灰黄色	計測不能	
95	山茶碗 小　皿	AR・TP10 II 層	6.9	4.9	2.4	底部柱状に下方へ突出、外面糸切り	密 径1mm以下のチャート・長石・石英・黒鉱を含む	良	橙　色 オリーブ灰色	口径=12/12 底径=12/12	6型式 美濃須衛窯産、内外面降灰
96	山茶碗 小　皿	AX・TP10 II 層	7.8	4.4	2.0	底部外面糸切り、内面指ナデ	やや粗 径1mm以下のチャート・長石・石英を含む	やや良	にぶい黄橙	口径＝4/12 底径=12/12	6～7型式 南部系
97	大　窯 丸　皿	A 区 表　採	…	5.4	－	灰釉、貼り付け高台、底部内面に菊花の印花文	やや粗 径1mm以下のチャート・長石・珪石・黒鉱を少量含む	良	灰黄色 浅黄色	底＝2/12	大窯第2段階
98	連続意匠 擂　鉢	A 区 表　採	－	10.8	…	施釉　櫛目 16～16条を単位	やや密 径1mm以下のチャート・長石・石英を含む	やや良	にぶい橙色 黒褐色	底＝4/12	江戸中期？
99	古瀬戸 水　注	CK・TP1 II 層	－	－	－	灰釉、特花の印花文	密 径1mm以下のチャート・長石・黒鉱を少量含む	良	にぶい橙色 オリーブ灰色	計測不能	古瀬戸中期？
100	古瀬戸 水　注	CK・土壌ｾﾝﾄﾘ II 層	－	－	－	灰釉、ヘラ状工具による櫛手状の文様	密 径1mm以下のチャート・長石を少量含む	良	淡黄褐色 オリーブ灰色	計測不能	古瀬戸中期？
101	古瀬戸 卸　皿	CK・土壌ｾﾝﾄﾘ II 層	10.6	…	－	灰釉	密 径1mm以下のチャート・長石・黒鉱を少量含む	良	灰黄色 灰オリーブ色	口径＝1/12	古瀬戸後II期
102	古瀬戸 水　滴	CK・土壌ｾﾝﾄﾘ II 層	－	－	－	灰釉	密 径1mm以下のチャート・長石・黒鉱を少量含む	良	灰黄褐色 オリーブ黒色	計測不能	
103	古瀬戸 天目茶碗	CK・土壌ｾﾝﾄﾘ II 層	－	4.2		鉄釉、削り出し輪高台	密 径1mm以下のチャート・石石・黒鉱を少量含む	良	にぶい黄橙 黒　色	底径＝6/12	古瀬戸後期？
104	古瀬戸 折縁深皿	CK・土壌ｾﾝﾄﾘ II 層		－	－	灰釉	密 径1mm以下のチャート・石石・黒鉱を少量含む	良	灰黄褐色 オリーブ黒色	計測不能	古瀬戸中IV期
105	古瀬戸 折縁深皿	CK・土壌ｾﾝﾄﾘ II 層	－	－	－	灰釉	やや密 径1mm以下のチャート・長石・石英・黒鉱を含む	やや良	橙　色 浅黄橙色	計測不能	古瀬戸中IV期
106	古瀬戸 折縁深皿	CK・土壌ｾﾝﾄﾘ II 層	－	－		灰釉	密 径1mm以下のチャート・長石・黒鉱を少量含む	良	灰灰色 オリーブ灰色	計測不能	古瀬戸後I ～II期
107	大　窯 端反皿	CK・土壌ｾﾝﾄﾘ II 層	7.2	4.4	1.9	灰釉、無高台、底部外面糸切り、	密 径1mm以下のチャート・長石・黒鉱を少量含む	良	灰白色 オリーブ灰色	口径＝1/12 底径＝2/12	大窯第1段階？
108	古瀬戸 緑釉小皿	CK・土壌ｾﾝﾄﾘ II 層	9.1	－	－	鉄釉	やや密 径1mm以下のチャート・長石・石英・黒鉱を含む	良	黄灰色 暗褐色	口径＝1/12	古瀬戸後IV期

第16表　遺物観察表(6)

挿図番号	器種	出土遺構(層位)	法量(cm) 口径	底径	器高	整形・調整	胎土	焼成	色調	残存率	備考
109	山茶碗 碗	CE・城1トレ II層	13.2		—		密 径1mm以下のチャート・長石・黒雲母を少量含む	良	内:灰黄色	口縁～1/12	9～10世紀
110	山茶碗 碗	CK・EE2トレ II層	—	—	—	口縁部断面台形に肥厚	やや密 径1mm以下のチャート・長石・黒雲母を多く含む	良	灰白色	計測不能	内外面降灰
111	青磁 碗	CE・城1トレ II層	16.6	—	—	線彫りによる蓮弁文	密	良	青灰色 釉外:灰色	口縁～1/12	B1類
112	青磁 碗	CK・EE2トレ II層		5.4	—	高台内面1/2に施釉	密	良	内:緑灰色 明緑灰色	底面=3/12	
113	大窯 擂鉢	CE・城1トレ II層	—		—	施釉	やや密 径1mm以下のチャート・長石・石英を多く含む	良	内:暗褐色	計測不能	大窯第1段階?
114	連房式登窯 大日茶碗	CK・B3トレ II 層	10.4	—	—	鉄釉	密 径1mm以下のチャート・スポを少量含む	良	黄灰色 暗褐色	口縁～1/12	第II系連房7小室?
115	連房式登窯 端反碗	CE・D3トレ II 層	10.8	4.3	7.8	内外全面に長石釉、体部外面に「つ」字状の文様	密 径1mm以下のチャート・長石・石英・黒雲母含む	良	内:灰褐色 外:灰褐色 浅黄橙色	口縁～1/12 底部=12/12	第I段階第3小室～第4小期
116	連房式登窯 端反皿	CK・B3トレ II 層	13.0	—		灰釉	密 径1mm以下のチャート・石英・石英・黒雲母含む	良	褐灰色 オリーブ灰色	口縁～2/12	第I段階第2小室～第3小期
117	連房式登窯 丸皿	CE・D3トレ II 層	14.0	—	—	長石釉	やや密 径1mm以下のチャート・長石・石英・黒雲母含む	良	浅黄橙色 灰白色	口縁～1/12	第I段階第3小期
118	連房式登窯 鉄絵皿	CE・B3トレ II 層	11.8	7.2	2.9	長石釉	密 径1mm以下のチャート、長石・黒雲母を少量含む	良	灰黄色 灰白色	口縁～1/12 底面=1/12	第I段階第2小期
119	連房式登窯 御蔵内皿	CK・D3トレ II 層	長径 4.1	短径 3.8	器厚 0.8	志野・鉄絵皿底部を転用	やや密 径1mm以下のチャート・長石・石英・黒雲母を含む	良	内:白濁 浅黄色	—	17世紀前半?
120	古瀬戸 茶入れ	CE・B3トレ II 層	4.0	—	—	鉄釉	密 径1mm以下のチャート、長石・石英・黒雲母を含む	良	内:黒褐色 黒 色	口縁～3/12	古瀬戸後期?
121	連房式登窯 天目茶碗	C 区 表 採	11.2	4.4	7.2	鉄釉	密 径1mm以下のチャート・スポ・石英・黒雲母含む	良	褐灰色 黒褐色	口縁～2/12 底部=12/12	第I段階第2小期
122	連房式登窯 天目茶碗	C 区 表 採	12.2		—	鉄釉	密 径1mm以下のチャート・長石・石英・黒雲母少量含む	良	灰黄色 黒 色	口縁～1/12	第I段階第2小期～第3小期
123	連房式登窯 天目茶碗	C 区 表 採	12.4	—	—	鉄釉、高台脇鉄化粧?	密 径1mm以下のチャート、長石・石英・黒雲母を含む	良	灰白色 黒 色	口縁～2/12	第I段階第2小室～第3小期
124	連房式登窯 天目茶碗	C 区 表 採	11.2	—	—	鉄釉	密 径1mm以下のチャート・スポ・石英・黒雲母少量含む	良	黄灰色 黒褐色	口縁～3/12	第I段階第2小期～第3小期
125	連房式登窯 丸碗	C 区 表 採	10.4	4.7	7.9	柿釉、鉄釉による斑文	密 径1mm以下のチャート・スポを少量含む	良	灰白色 褐 色	口縁～2/12 底部=12/12	第I段階第3小期～第4小期
126	連房式登窯 端反皿	C 区 表 採	11.8	6.8	2.6	灰釉、貼り付け高台	やや密 径1mm以下のチャート・長石・石英・黒雲母含む	やや良	内:灰褐色 外:灰褐色	口縁～1/12 底面～2/12	第I段階第2小室～第3小期
127	連房式登窯 端反皿	C 区 表 採	12.6	7.4	2.7	灰釉、貼り付け高台、底部内面にピン痕2箇所	密 径1mm以下のチャート・スポ・石英・黒雲母を含む	良	褐灰色 オリーブ灰色	口縁～2/12 底面=6/12	第I系第2小期～第3小室
128	連房式登窯 鉄絵皿	C 区 表 採	10.4	5.6	2.3	長石釉	やや密 径1mm以下のチャート・長石・石英・黒雲母含む	良	浅黄橙色 灰白色	口縁=1/12 底面=3/12	第I段階第2小期

第17表　遺物観察表(7)

挿図番号	器種	出土遺構(層位)	法量(cm) 口径	底径	器高	整形・調整	胎土	焼成	色調	残存率	備考
129	須恵式須恵 擂鉢	C区 表採	−	−	−	櫛状工具による擂目11条を基本	やや密 径1mm以下のチャート・赤か・赤褐・黒粒を多く含む	やや良	にぶい褐色 暗褐色	計測不能	17世紀代?
133	古瀬戸 卸皿	C区・D2トレ II層	−	5.9	−	灰釉、無高台、底部外面糸切り、13×10の格子状に刻印	密 径1mm以下のチャート・長石を少量含む	やや良	浅黄橙色 明褐橙色	底−7/12	
134	古瀬戸 折縁大皿?	C区・D2トレ II層	−	7.6	−	粘土塊による脚を付ける	密 径1mm以下のチャート・長石を少量含む	やや良	灰白色	底−3/12	
135	山茶碗 碗	C区・D2トレ II層	14.4	−	−		密 径1mm以下のチャート・赤石・黒粒を少量含む	良	灰白色	口−2/12	7〜8型式 内面煤状の付着物
136	山茶碗 碗	C区・D2トレ II層	−	5.4		底部外面糸切り、板目状圧痕、内面摺目痕	やや密 径1mm以下のチャート・長石・石英・黒粒を含む	良	灰白色	底−5/12	7〜8型式
137	大窯 端反皿	C2・E2トレ II層	11.6	−	−	灰釉	密 径1mm以下のチャート・赤石・黒粒を少量含む	良	灰黄色 釉オリーブ褐	口−3/12	大窯第1段階
138	須恵式瓶類 丸瓶	C区・D2トレ II層	9.0	4.6	2.1	長石釉	密 径1mm以下のチャート・赤か・赤褐・黒粒を少量含む	良	灰黄褐色 灰白色	口底−5/12 底底−6/12	第1段階第3小期
139	古瀬戸 瓶型鉢	C区 表採	−	−	−	灰釉	密 径1mm以下のチャート・長石・頁・黒粒を少量含む	良	にぶい黄橙 浅黄色	計測不能	古瀬戸後IV期
140	山茶碗 小皿	C区 表採	6.4	3.6	1.1		密 径1mm以下のチャート・長石・黒粒を含む	良	褐灰色	口底−1/12 高底−1/12	7〜8型式
141	山茶碗 小皿	C区 表採	8.0	4.8	1.2	底部外面糸切り	密 径1mm以下のチャート・石英・黒粒を少量含む	良	褐灰色	口底−2/12 底底−4/12	7〜8型式
142	山茶碗 碗	C区・J南トレ II層	11.8	3.8	2.9	無高台、底部内面荒くくぼむ	密 径1mm以下のチャート・赤石・黒粒を少量含む	良	明褐灰色	口底−2/12 底底−5/12	10型式
143	山茶碗 小皿	C区・J北トレ II層	7.4	4.6	1.3		密 径2mm以下のチャート・長石・黒粒を含む	良	灰白色	口−1/12 底−2/12	7〜8型式
144	大窯 端反皿	C区・J北トレ II層	9.6	−	−	灰釉	やや密 径1mm以下のチャート・長石・赤褐を含む	やや良	浅黄橙色 浅黄色	口−1/12	大窯第1段階後半 〜第2段階前半
145	大窯 端反皿	C区・J東トレ II層	11.6	6.0	2.6	灰釉、貼り付け高台	やや粗 径1mm以下のチャート・長石・黒粒を含む	やや良	にぶい橙色 オリーブ灰	口底−2/12 上底−5/12	大窯第1段階後半 〜第2段階前半
146	須恵式壺類 擂鉢	C区・J北トレ II層	−	−	−	鉄釉	やや密 径1mm以下のチャート・長石・黒粒を含む	やや良	にぶい橙色 黒褐色	計測不能	
147	古瀬戸 瓶子	C区・TP3 II層	−	−	−	鉄釉、半行沈線と菊花形の印花文	密 径1mm以下のチャート・長石を少量含む	良	灰白色 黒褐色	計測不能	II期? 古瀬戸中期?
148	古瀬戸 深皿	C区・TP3 II層	−	−	−	灰釉、型脚	密 径1mm以下のチャート・長石・黒粒を含む	良	にぶい黄橙 オリーブ灰	計測不能	
149	古瀬戸 瓶型鉢	C区・D3トレ II層	−	−	−	灰釉	密 径1mm以下のチャート・長石・黒粒を含む	良	浅黄色 オリーブ黒	計測不能	古瀬戸後III〜IV期
150	古瀬戸 柄付片口	C区・C2ベン II層	−	−	−	灰釉	密 径1mm以下のチャート・石英・長石を含む	良	浅黄橙色 オリーブ黒	計測不能	古瀬戸中III期
151	古瀬戸 平碗	C区・D2トレ II層	17.4	−	−	灰釉	密 径1mm以下のチャート・長石・黒粒を少量含む	良	灰白色 オリーブ灰	口底−1/12	古瀬戸後IV新期

第18表　遺物観察表(8)

挿図番号	器種	出土遺構(層位)	法量(cm) 口径	底径	器高	整形・調整	胎土	焼成	色調	残存率	備考
152	山茶碗 碗	CF・TP3 II層	11.6	5.0	4.1	底部内面浅くくぼむ	密 径1mm以下のチャート・長石・黒粒を少量含む	良	褐灰色	口縁＝1/12 計 底号＝2/12	9～10型式
153	山茶碗 小皿	CE・D2トレ II層	7.6	5.4	0.8	底部外面糸切り、板目状圧痕、内面指圧痕	密 径1mm以下のチャート・長石・黒粒を含む	良	灰白色	口縁＝4/12 底縁＝4/12	8～9型式
154	山茶碗 小皿	CF・D2トレ II層	7.8	6.0	1.0	底部外面糸切り、内面指圧痕	密 径1mm以下のチャート・長石・黒粒を含む	良	黄灰色	上層＝3/12 底縁＝4/12	8～9型式
155	大窯 擂鉢	CE・TP9 II層	—	—	—	錆釉、擂目7条以上を基本	やや密 径1mm以下のチャート・長石・黒粒を含む	やや良	灰黄色 にぶい黄褐	計測不能	大窯第2段階～次被熱
156	大窯 折縁皿	CF・TP9 II層	13.0	5.8	2.1	灰釉、貼り付け高台	密 径1mm以下のチャート・長石・黒粒を含む	良	浅黄橙色 オリーブ黒	口縁＝2/12 底号＝2/12	大窯第4段階末
157	連房式登窯 天目茶碗	CE・D2トレ II層	—	5.2	—	鉄釉、削り出し輪高台	やや密 径1mm以下のチャート・長石・黒粒を少量含む	やや良	淡黄色 黒色	底縁＝6/12	第1段階3小期～第4小期
158	山皿 有耳壺	CE・D2トレ II層	8.3	—	—		密	良	灰黄色 灰白色	口縁＝1/12	13世紀
159	山茶碗 碗	CE・TP9 II層	—	4.7	—	底部外面糸切り、板目状圧痕、内面指圧痕	やや密 径1mm以下のチャート・長石・黒粒を少量含む	やや良	褐灰色	底縁＝7/12	8～9型式
160	山茶碗 小皿	CE・D2トレ II層	7.8	4.5	1.5	底部外面糸切り、板目状圧痕、内面指圧痕	密 径1mm以下のチャート・長石・黒粒を少量含む	良	灰色	口片＝4/12 底号＝4/12	7～8型式
161	連房式登窯 天目茶碗	CE・D2トレ II層	13.0	—	—	鉄釉	やや密 径1mm以下のチャート・長石・黒粒を含む	良	灰色 暗褐色	口縁＝1/12 底片	第1段階第2小期～第3小期
162	連房式登窯 丸碗	CE・D2トレ II層	—	5.2		鉄釉、削り出し輪高台	やや密 径1mm以下のチャート・長石・黒粒を含む	良	にぶい黄色 暗褐色	底縁-12/12	17世紀前半？
163	古瀬戸 折縁深皿	CE・D2トレ II層	—	—	—	灰釉	密 径1mm以下のチャート・赤色・黒粒を少量含む	良	褐灰色 オリーブ黒	計測不能	古瀬戸後II期二次被熱
164	土師器 内湾鉢釜	CE・D2トレ II層	—	—	—	口縁内外面ヨコナデ、端部面取り	やや密 径1mm以下のチャート・赤色・黒粒を含む	やや良	浅黄橙色	計測不能	14世紀
165	古瀬戸 擂鉢	CE・D4トレ II層	—	—		錆釉	やや密 径1mm以下のチャート・長石・黒粒を含む	やや良	にぶい橙色 暗赤褐色	計測不能	古瀬戸後IV期
166	連房式登窯 擂鉢	CE・D2トレ II層	—	—	—	錆釉	やや密 径3mm以下のチャート・長石・黒粒を多く含む	良	にぶい橙色 暗赤褐色	計測不能	
167	連房式登窯 鉄絵皿	CE・D4トレ II層	—	—	—	長石釉	やや密 径1mm以下のチャート・長石・黒粒を少量含む	良	にぶい黄色 灰黄色	計測不能	第1段階第3小期
168	青磁 碗	CE・D4トレ II層	15.0	—		蓮弁文、内外面無文	密	良	灰色 オリーブ灰	口縁-1/12 底	D類
169	古瀬戸 水注？	CE・D4トレ II層	—		—	内外面灰釉、ヘラ状工具による扇子形の沈線文	やや密 径1mm以下のチャート・長石・黒粒を少量含む	良	にぶい黄橙色 浅黄色	計測不能	古瀬戸中期？
170	古瀬戸 卸皿	CH・E2トレ II層	11.6	—	—	灰釉	密 径1mm以下のチャート・長石を少量含む	良	灰黄色 灰オリーブ色	口縁-1/12	古瀬戸後I～II期
171	古瀬戸 平碗	CE・E5トレ II層	13.4	—		灰釉	密 径1mm以下のチャート・長石・黒粒を少量含む	良	にぶい橙色 オリーブ灰	口縁-1/12 底片	古瀬戸後II～III期

第19表　遺物観察表(9)

挿図番号	器種	出土遺構(上位)	法量(cm) 口径	底径	器高	整形・調整	胎土	焼成	色調	残存率	備考
172	古瀬戸 折縁深皿	C区・E-1トレ II層				灰釉	やや密 径1mm以下のチャート・赤石を少量含む	やや良	にぶい橙色 灰白色	計測不能	古瀬戸後II期
173	連房式登窯 端反碗	C区・E-1トレ II層	—	—	—	灰釉	密 径1mm以下のチャート・長石を少量含む	良	灰黄色 オリーブ黒色	計測不能	
174	山茶碗 碗	C区・E-1トレ II層	—	4.1		底部外面糸切り、板目状圧痕、内面指圧痕	密 径1mm以下のチャート・長石・黒雲母を少量含む	やや良	淡黄色	底部-11/12	第9型式
175	山茶碗 小皿	C区・E-1トレ II層	8.2	3.8	1.5	底部外面下方に突け、糸切り、放射状押圧、内面指ナデ	密 径1mm以下のチャート・長石・黒雲母を少量含む	やや良	灰白色	口縁=6/12 底部=6/12	5～6型式 内面降灰
176	山茶碗 小皿	C区・E-3トレ II層	8.2	5.4	1.1	底部外面糸切り	密 径1mm以下のチャート・長石・黒雲母を少量含む	良	灰黄色	口縁=2/12 底部=2/12	8～9型式
177	山茶碗 小皿	C区・E-3トレ II層	8.2	5.0	1.0	底部外面糸切り、籾殻内面及び底部内面強くくぼむ	密	良	灰白色	口縁=2/12 底部=3/12	8～9型式
178	山茶碗 小皿	C区・E-3トレ II層	8.6	5.4	1.2	底部外面糸切り、板目状圧痕、内面指圧痕	密 径1mm以下のチャート、長石、黒雲母を少量含む	良	褐灰色	口縁=3/12 底部=12/12	7型式
179	瓦質土器 奈良火鉢	C区・E-3トレ II層		—	—	凸帯内に雷文の押印	密 径1mm以下のチャート、長石・赤石を少量含む	やや軟	黒色	計測不能	鎌倉V期 14世紀後半 ～15世紀前半
180	連房式登窯 擂鉢	C区・E-3トレ II層	—	—	—	鉄釉、擂目8～9条を単位	やや密 径1mm以下のチャート・長石・石英を含む	やや良	橙色 にぶい橙色	計測不能	常滑窯? 江戸期?
181	連房式登窯 丸碗	C区・D-1トレ II層	12.8	—	—	鉄釉	やや密 径1mm以下のチャート・長石・黒雲母を含む	良	灰黄色 暗褐色	口縁-1/12	17世紀前半 182と同一個体?
182	連房式登窯 丸碗	C区・C-3トレ II層	—	4.8	—	鉄釉、削り出し輪高台	やや密 径1mm以下のチャート・長石・黒雲母を含む	良	灰黄色 暗赤褐色	底部-6/12	17世紀前半 181と同一個体?
183	連房式登窯 天目茶碗	C区・C-3トレ II層	12.2			鉄釉	やや密 径1mm以下のチャート・赤石・黒雲母を少量含む	やや良	灰黄色 黒色	口径=1/12 高台	第I段階第2小期
184	大窯 皿	C区・E-2トレ II層	11.0	—	—	灰釉	密 径1mm以下のチャート・長石を少量含む	良	淡黄色 淡黄色	口径=1/12	大窯第3段階
185	大窯? 鉢?	C区・E-2トレ II層	15.6	—	—	鉄釉	やや密 径1mm以下のチャート・文石・黒雲母を含む	良	にぶい褐色 黒褐色	口縁-2/12	
186	古瀬戸 擂鉢	C区・E-3トレ II層	—	—	—	緑釉	密 径1mmのチャート・長石・石英・黒雲母を含む	良	灰黄褐色 褐灰色	計測不能	古瀬戸後IV期
187	古瀬戸 擂鉢	C区・F-1トレ II層	—	—	—	緑釉	やや密 径1mm以下のチャート・長石・黒雲母を含む	やや良	黄橙色 黒褐色	計測不能	古瀬戸後IV期
188	連房式登窯 丸碗	C区・F-1トレ II層	12.3	5.7	6.9	灰釉	密 径1mm以下のチャート・文石・黒雲母を少量含む	良	灰白色 オリーブ褐色	口縁=4/12 底部-12/12	尾呂茶碗 第2段階第3小期
189	連房式登窯 天目茶碗	C区・F-1トレ II層	11.4			鉄釉	やや密 径1mm以下のチャート・赤石・黒雲母を含む	良	灰色 黒褐色	口径=1/12	第I段階第3小期 ～第4小期
190	連房式登窯 折縁皿	C区・F-1トレ II層	12.4	6.0	2.4	瀬戸焼、貼り付け高台	やや密 径1mm以下のチャート・文石・黒雲母を含む	良	淡黄色 淡黄色	口縁=4/12 底部=4/12	17世紀前半
191	連房式登窯 擂鉢	C区・E-3トレ II層	—	8.2	—	緑釉、擂目14条を単位	やや密 径1mm以下のチャート・赤石・黒雲母を含む	やや良	浅黄色 暗褐色	底部=6/12	

第20表　遺物観察表(10)

挿図番号	器種	出土遺構(層位)	法量(cm) 口径	底径	器高	整形・調整	胎土	焼成	色調	残存率	備考
192	古瀬戸 瓶子	CE・C1トレ II 層	—	12.4	—	皿類、灰釉	密 径1mm以下のチャート・長石・砂粒・黒粒を少量含む	良	褐灰色 オリーブ灰色	底部1/12	古瀬戸後期 二次被熱
193	山茶碗 碗	CE・C1トレ II 層	13.4	—	—		密 径1mm以下のチャート・長石・黒粒を少量含む	良	灰白色	口縁1/12	9～10型式
194	瀬戸美濃 端反皿	CE・C1トレ II 層	12.8	—	—	灰釉	やや密 径1mm以下のチャート・長石・黒粒を少量含む	やや良	淡黄色 浅黄色	口縁1/12	第1段階第2小期 ～第3小期
195	古瀬戸 緑釉小皿	C4・C1トレ II 層	12.0	—	—	灰釉	やや密 径1mm以下のチャート・長石・黒粒を含む	良	口縁:緑釉 灰白色	口縁1/12	古瀬戸後Ⅲ～Ⅳ期
196	大窯 丸皿	CE・C1トレ II 層	—	7.4	—	灰釉、貼り付け高台、底部内面に菊花の印花文	やや密 径1mm以下のチャート・長石・黒粒を含む	やや良	口縁:緑釉 オリーブ色	底部2/12	大窯第2段階
197	青磁 碗	CE・C1トレ II 層	16.6	…	—	端反碗、内外面無文	密	良	灰色 オリーブ灰色	口縁1/12 評	D類
198	灰釉陶器 皿	CE・TP10 II 層	11.6	5.9	2.3	底部外面回転ヘラ削り、内外面回転ナデ	密 径1mm以下のチャート・長石・黒粒を少量含む	やや良	灰白色	口縁～1/12 底部～1/12	H72～77代守恵式期
199	灰釉陶器 輪花皿	CE・TP10 II 層	14.5	—		内外面回転ナデ	密 径1mm以下のチャート・長石・黒粒を少量含む	良	灰白色 浅黄色	口縁～3/12	西代守恵式期
200	中世陶器 壺	CE・TP10 II 層	—	—	—		密 径1mm以下のチャート・長石を少量含む	やや良	口縁:褐色 褐　色	計測不能	大窯頃?
201	灰釉陶器 碗	C 区 表 採	—	10.0	…	底部外面糸切り、内面回転ナデ	密 径5mm以下のチャート・長石・黒粒を含む	良	黄灰色	底部2/12	053～H72守恵式期
202	古瀬戸 平 碗	B 区 表 採	18.2	—	—	灰釉	密 径1mm以下のチャート・長石・黒粒を少量含む	良	口縁:褐色 オリーブ灰	口縁1/12	古瀬戸後Ⅲ期
203	古瀬戸 平 碗	B 区 表 採	—	5.2	—	灰釉、削り出し輪高台	密 径1mm以下のチャート・長石・黒粒を少量含む	やや良	口縁:褐色 オリーブ灰	底部5/12	古瀬戸後Ⅲ期?
204	古瀬戸 仏華瓶	CE・TP14 II 層	—	6.8	…	草式華瓶、灰釉 底部外面糸切り	密 径1mm以下のチャート・長石・黒粒を多く含む	良	灰黄色 オリーブ灰	底部～5/12	古瀬戸後期
205	山茶碗 碗	C 区 表 採	9.4	3.4	1.9	底部外面糸切り、内面ロクロ目顕著に残る	密	良	灰　色	口縁～2/12 底部～6/12	11型式(生田)
206	山茶碗 大舎香炉	D 区 表 採	14.4	—	—		密 径1mm以下のチャート・長石・黒粒を含む	良	黄灰色	口縁1/12	
207	瀬戸美濃 志野丸皿	K 区 表 採	11.3	6.4	2.2	長石釉	やや密 径1mm以下のチャート・長石・黒粒を少量含む	やや良	口縁:褐色 浅黄橙色	口縁～2/12 底部～4/12	第1段階第2小期 ～第3小期
208	青磁 碗	A 区 表 採	16.8	—	—	内外面無文、直口碗	密	良	灰白色 オリーブ灰	口縁1/12 評	E類
209	青磁 皿	A 区 表 採	—	6.2	—	蓮台、底部外面及び腰部外面露胎、底部内面に輪状による文様	密	良	灰白色 緑オリーブ色	底部3/12	
210	山茶碗? 鉢	CE・TP4 II 層	—	10.0	—	外面ヨコナデ、内面使用により摩滅	やや粗 径5mm以下のチャート・長石・穴を多く含む	やや良	灰　色	底部～2/12	珠洲窯産?
213	青磁 碗	E 区 表 採	—	—	—	外面線彫りによる蓮弁文	密	良	灰白色 オリーブ灰	計測不能	B1類

第21表　遺物観察表(11)

挿図番号	器種	出土遺構(層位)	法量(cm) 口径	底径	器高	整形・調整	胎土	焼成	色調	残存率	備考
214	青磁 碗	E区 表採	15.4	…	—	内外面無文、端反碗	密	良	灰白色 オリーブ灰	口½－2/12	D類
215	古瀬戸 折縁皿?	E区 表採	—	10.0	—	灰釉、鉄釉による銹、外面回転ヘラ削り、内面回転ナデ	密 径1mm以下のチャート・長石・黒雲母少量含む	良	灰白色 オリーブ灰	底½＝5/12	
216	中世陶器 甕	E区 表採	—		—		密 径1mm以下のチャート・長石・黒雲母を含む	良	灰色	計測不能	大窯期?
217	古瀬戸 緑釉小皿	E区 表採	9.2	—	—	鉄釉	やや密 径1mm以下のチャート・長石・石英・黒雲母少量含む	やや良	灰色 緑灰色	口½－1/12	古瀬戸後Ⅳ期
218	大窯 端反皿	E区 表採	9.4	5.6	2.0	灰釉、貼り付け高台	やや密 径1mm以下のチャート・長石・黒雲母少量含む	やや良	灰白色 灰白色	口½－1/12 底½＝3/12	大窯第1～第2段階
219	大窯 丸皿	E区 表採	—	3.8	—	灰釉・貼り付け高台、底部内面に菊花の印花文	密 径1mm以下のチャート・長石・黒雲母少量含む	やや良	灰白色 オリーブ灰	底½＝8/12	大窯第2段階
220	古瀬戸 筒型容器	F区 表採	12.9		—	灰釉	やや密 径1mm以下のチャート・長石・黒雲母を含む	良	灰白色 浅黄色	口½－1/12	古瀬戸後期
221	古瀬戸 鉢 皿	F区 表採	—	—	—	灰釉、片口	密 径1mm以下のチャート・長石・黒雲母を含む	良	灰白色 オリーブ灰	計測不能	古瀬戸後Ⅱ～Ⅲ期
222	山茶碗 鉢	F区 表採	—	—		口縁部下端状に肥厚、内面に沈線	やや密 径3mm以下のチャート・長石・石英・黒雲母を含む	やや良	黄灰色	計測不能	
223	山茶碗 碗	F区 表採	11.7	3.6	3.1	底部内面浅くくぼむ	密 径1mm以下のチャート・長石・雲母を少量含む	良	灰黄色	口径＝1/12 底径＝1/12	10型式
224	瀬戸式壺 大日茶碗	F区 表採	12.2	—	—	鉄釉	やや密 径1mm以下のチャート・長石・黒雲母少量含む	良	明褐灰色 黒色	口径＝3/12	第1段階第2小別
226	山茶碗? 長頸瓶	J区 表採	—	…	…	「漆接ぎ」により補修	やや粗 径3mm以下のチャート・長石・石英を含む	やや良	灰黄褐色	計測不能	227と同一個体?
227	山茶碗? 長頸瓶	J区 表採	—	—	—		やや粗 径3mm以下のチャート・長石・石英を含む	やや良	灰黄褐色	計測不能	226と同一個体?
228	山茶碗 小皿	J区 表採	9.0	6.4	1.2	底部外面糸切り、内面指圧痕	密 径1mm以下のチャート・長石・黒雲母少量含む	良	灰白色	口縁＝2/12 底縁＝1/12	8～9型式
229	古瀬戸 底卸目皿	DK・A3トレ Ⅱ層	—	8.2	—	灰釉、	密 径1mm以下のチャート・石英・黒雲母少量含む	良	灰白色 オリーブ灰	底½＝6/12	
230	古瀬戸 平碗	BK・A1トレ Ⅱ層	14.4	—	—	灰釉	密 径1mm以下のチャート・石英を少量含む	良	灰白色 オリーブ灰	口½－2/12	古瀬戸後Ⅲ期
231	古瀬戸 折縁深皿	BK・A1トレ Ⅱ層	24.8	—		灰釉	やや密 径1mm以下のチャート・長石・黒雲母少量含む	良	黄灰色 オリーブ灰	口縁＝1/12	古瀬戸後Ⅱ～Ⅲ期
232	山茶碗 碗	BK・Bトレ Ⅱ層	12.8	…	—		密 径1mm以下のチャート・長石・雲母を少量含む	良	淡黄色	口縁＝1/12	9～10型式
233	山茶碗 碗	BK・Bトレ Ⅱ層	11.0	—	—		やや密 径1mm以下のチャート・長石・雲母を少量含む	良	黄灰色	口縁－1/12	9～10型式
234	山茶碗 碗	BK・A1トレ Ⅱ層	—	3.5	…	底部外面糸切り、内面浅くくぼみ、指圧痕残る	やや密 径1mm以下のチャート・長石・黒雲母少量含む	良	灰白色	底縁＝5/12	9～10型式

第22表　遺物観察表(12)

挿図番号	器種	出土遺構(層位)	法量(cm) 口径	底径	器高	整形・調整	胎土	焼成	色調	残存率	備考
235	山茶碗 碗	D区・A1トレ II 層	9.6	—		内面ロクロ目が顕著に残る	やや粗 径1mm以下のチャート・長石・黒粒を少量含む	やや軟	灰白色	口縁=2/12	11型式(猿之鼻)
236	古瀬戸 天目茶碗	B区・B1トレ II 層	13.4		—	鉄釉	やや密 径1mm以下のチャート・長石を少量含む	やや良	褐色 黒色	口径=1/12	古瀬戸後II期
237	古瀬戸 天目茶碗	B区・B1トレ I 層	13.8	—	—	鉄釉	密 径1mm以下のチャート・長石・黒粒を少量含む	良	にぶい黄色 黒色	口縁=1/12 肩	古瀬戸後II期
238	大　窯 天目茶碗	B区・A1トレ I 層	13.2		—	鉄釉	密 径1mm以下のチャート・長石・石英を少量含む	良	灰黄色 暗褐色	口径=1/12 肩	大窯第2段階
239	古瀬戸 平　碗	D区・A5トレ II 層	—	3.8	—	灰釉	やや粗 径1mm以下のチャート・長石を含む	やや良	にぶい橙色 灰白色	底縁=2/12	
240	白　磁 碗	B区・B1トレ II 層	17.4		—	無文、体部内面上部に浅い沈線	密	良	灰白色 灰白色	口径=1/12	VII類、12世紀?
241	古瀬戸 卸　皿	A 区 表　採	19.4	—	—	灰釉	やや密 径1mm以下のチャート・長石・黒粒を含む	良	にぶい橙色 灰白色	口縁=1/12	古瀬戸後II～III期 二次被熱
242	古瀬戸 碗型鉢	A 区 表　採	—	—		灰釉	やや密 径1mm以下のチャート・長石・黒粒を含む	やや良	浅黄色 浅黄色	計測不能	古瀬戸後II期
243	古瀬戸 水　注	K 区 表　採	—	—	—	注口部、外面8角形に面取り、灰釉	やや密 径1mm以下のチャート・長石を少量含む	良	黄褐色 明オリーブ灰	計測不能	
244	古瀬戸 壺	A 区 表　採	上径 2.8	下径 2.3	器厚 1.1	台部外面糸切り、天井部灰釉	やや密 径1mm以下のチャート・長石・黒粒を含む	良	にぶい橙色 灰オリーブ色	—	
245	古瀬戸 折縁深皿	K 区 表　採	33.6		—	灰釉	密 径1mm以下のチャート・長石・黒粒を少量含む	良	浅黄色 オリーブ黄	口径=1/12	古瀬戸後II期
246	山茶碗 碗	I 区 表　採	11.6	—	—		密 径1mm以下のチャート・長石・黒粒を少量含む	良	灰白色	口縁=2/12	7～8型式
247	山茶碗 碗	K 区 表　採	—	6.3	—	底部外面糸切り、板目状圧痕、内面指圧痕	やや密 径1mm以下のチャート・長石・石英・黒粒を含む	良	灰白色	底径=12/12	6型式
248	山茶碗 碗	D 区 表　採	12.0	2.7	2.6	底部外面糸切り、内面浅くくぼむ	密 径1mm以下のチャート・長石を少量含む	良	褐灰色	口縁=2/12 底縁=6/12	10型式
249	古瀬戸 平　碗	K 区 表　採	12.4	—	—	灰釉	やや粗 径1mm以下のチャート・長石・珪・黒粒を含む	良	灰黄色 浅黄色	口縁=1/12	古瀬戸後II～III期
250	瀬戸式皿型 折縁皿	C 区 表　採	13.4	—		施釉　底部内面露胎?	やや粗 径1mm以下のチャート・長石・石英を含む	やや良	にぶい黄橙 褐　色	口縁=1/12	17世紀前半?
251	瀬戸系陶器 擂　鉢	D 区 表　採	—		—	施釉	密 径1mm以下のチャート・長石を含む	やや良	にぶい黄橙 明褐灰色	計測不能	17世紀中頃
252	土師器 土師器皿	A 区 表　採	—	—	—		密 径1mm以下のチャート・長石を少量含む	やや良	にぶい黄色	計測不能	内外面煤状の付着物、灯明皿?
253	古瀬戸 器種不明	A 区 表　採	—	—		灰釉、貼花による同心円の装飾	密 径1mm以下のチャート・長石・珪・黒粒を含む	良	にぶい黄橙 オリーブ灰	計測不能	山口窯か?
254	丸底土器 奈良火鉢	A 区 表　採			—	凸帯内に花菱文の格印	やや粗 径1mm以下のチャート・長石を含む	やや良	暗灰色	計測不能	浅鉢V類 14 世紀後半～15 世紀前半

第23表　遺物観察表(13)

挿図番号	器種	出土遺構(層位)	法量(cm) 口径	底径	器高	整形・調整	胎土	焼成	色調	残存率	備考
255	須恵系輸入陶磁器 片口鉢	K区 表採	−	−	−	水平口縁(b9類) 描目10～11条を基本	やや疎 径3mm以下のチャート・砂石・石英を少量含む	やや良	灰色	計測不能	14世紀後半
256	古瀬戸 折縁深皿	E地・A2トレ II層	−	−	−	灰釉	やや疎 径1mm以下のチャート・石英・黒粒を少量含む	良	淡黄色 オリーブ黄色	計測不能	古瀬戸後Ⅱ～Ⅲ期
257	山茶碗 碗	E地・A3トレ II層	−	3.7	−	底部外面糸切り、内面残くぼむ	密 径1mm以下のチャート・石英・黒粒を少量含む	良	灰白色	底径＝4/12	10型式
258	山茶碗 碗	E3・A1ベルト II層	14.8	−	−		密 径1mm以下のチャート・長石・黒粒を少量含む	良	灰黄色	口縁＝1/12	9～10型式
259	山茶碗 小皿	E地・A3トレ II層	7.7	−	−		密 径1mm以下のチャート・石英・黒粒を含む	良	灰白色	口縁＝1/12	7型式
260	山茶碗 小皿	E3・A5トレ II層	8.2	5.2	0.8	底部外面糸切り	密 径1mm以下のチャート・石英を少量含む	良	灰白色	口縁＝1/12 底径＝1/12	9～10型式
261	瓦質土器 奈良火鉢	E地・TP. I層	−	−	−		密 径1mm以下のチャート・長石・石英を含む	やや軟	灰白色	計測不能	浅鉢V類 14世紀後半 ～15世紀前半
262	土師器 土師器皿	E地・B2トレ II層	9.0	4.1	2.2	内面及び体部外面ナデ、底部中央がわずかに突出	やや密	やや良	にぶい橙色	口縁-12/12 底径-12/12	京都系、内外面煤状の付着物、灯明皿
263	古瀬戸 瓶子	K区 (遺構番号不明) 表採	5.0	−	−	灰釉、II類、胴部に櫛描状の文様	密 径1mm以下のチャート・長石・黒粒を少量含む	良	灰白色 オリーブ黒	口縁＝4/12	古瀬戸中Ⅰ～Ⅱ期 二次被熱？ 264と同一個体？
264	古瀬戸 瓶子	K区 (遺構番号不明) 表採	−		−	灰釉、II類、胴部に櫛描状の文様	密 径1mm以下のチャート・長石・黒粒を少量含む	良	灰白色 オリーブ黒	計測不能	古瀬戸中期 二次被熱？ 263と同一個体？
265	古瀬戸 瓶子	K区 (遺構番号不明) 表採	−	−		灰釉、胴部に竹管状の工具による平行沈線と円文	密 径1mm以下のチャート・長石を少量含む	良	灰白色 灰白色	計測不能	古瀬戸中期
266	古瀬戸 有耳壺	K区 (遺構番号不明) 表採	10.9	−	−	灰釉	密 径1mm以下のチャート・長石を少量含む	良	灰白色 灰オリーブ色	口縁＝3/12	古瀬戸中Ⅲ期
267	古瀬戸 有耳壺	K区 (遺構番号不明) 表採	−	−	−	灰釉、耳部に小突線4条	密 径1mm以下のチャート・長石を少量含む	良	灰白色 灰オリーブ色	計測不能	古瀬戸中期？
268	古瀬戸 有耳壺	K区 (遺構番号不明) 表採	−	8.6	−	灰釉	密 径1mm以下のチャート・石英を少量含む	良	灰白色 オリーブ灰色	底径＝3/12	古瀬戸中期？
269	古瀬戸 折縁深皿	K区 (遺構番号不明) 表採	−	−	−	灰釉	密 径1mm以下のチャート・長石を少量含む	良	灰白色 浅黄色	計測不能	古瀬戸中Ⅳ期？
270	大窯 大皿茶碗	C区 表採	11.6	−	−	鉄釉	やや疎 径1mm以下のチャート・長石・黒粒を少量含む	良	浅黄色 黄褐色	口縁＝1/12	大窯第3段階？
271	山茶碗 小皿	F区 表採	8.2	6.4	1.0	底部外面糸切り	密 径1mm以下のチャート・長石・黒粒を少量含む	良	灰白色	口縁＝3/12 底径＝3/12	9～10型式
272	連房式登窯 香炉	G区 表採	−	−	−	筒型、灰釉	やや密 径1mm以下のチャート・長石・石英を含む	良	にぶい褐色 オリーブ灰色	計測不能	17世紀前半 ～中頃
273	連房式登窯 器種不明	K区 表採	10.4	−	−	内面鉄釉、外面無釉、	密 径1mm以下のチャート・長石を少量含む	良	にぶい褐色 オリーブ色	口縁＝4/12	外面煤状の付着物、錆に触する器種か
274	珠洲系製品 片口鉢	C区 表採	−	−	−	口縁形態d1類、擂目10～11条を基本	やや疎 径3mm以下のチャート・長石・石英を多く含む	やや良	灰色	計測不能	15世紀前半

第24表　遺物観察表(14)

挿図番号	器種	出土遺構(層位)	法量(cm) 口径	底径	器高	整形・調整	胎土	焼成	色調	残存率	備考
275	中世陶器 鉢	E区 表採	-	22.0	-	無釉、底部外面糸切り	やや密 径1mm以下のチャート・長石・石英・黒雲母(少)	やや良	黄灰色	底1/3-3/12	大窯期?
276	山茶碗 碗	古墳整理 (II層)	11.8	3.6	3.5	底部外面糸切り、内面渦状ナデ	やや密 径1mm以下のチャート・長石・黒雲母を含む	やや良	灰黄色	口縁1/4/12 底部1/6/12	10世紀
277	古瀬戸 四耳壺	古墳整理 (II層)	10.5	10.6	27.6	灰釉、底部穿孔	やや密 径1mm以下のチャート・長石を含む	良	灰色 釉一部灰黄色	口縁1/12/12 底部1/12/12	古瀬戸後II期
278	古瀬戸 瓶子	包含層・攪乱 表採	-	-	-	II類?灰釉、格状工具による扇手状と綾杉状の文様	密 径1mm以下のチャート・長石・黒雲母を含む	良	灰白色 釉オリーブ色	計測不能	古瀬戸III~IV期?
279	古瀬戸 有耳壺	包含層・攪乱 表採	13.0	-	-	灰釉	やや密 径1mm以下のチャート・石英を少量含む	良	浅黄色 浅黄色	口縁1/12/12	古瀬戸中Ⅲ期 280と同一個体?
280	古瀬戸 有耳壺	包含層・攪乱 表採		-	-	灰釉、頸部下方に平行沈線	やや密 径1mm以下のチャート・長石を少量含む	良	浅黄色 オリーブ黄	計測不能	古瀬戸中期 279と同一個体?
281	山茶碗? 有耳壺	包含層・攪乱 表採	8.4	7.2	14.8	無釉、底部内面に窯壁付着	密 径1mm以下のチャート・長石・黒雲母を含む	良	褐灰色	口縁1/12/12 底部1/12/12	美濃須衛窯産?

第25表　金属器(鉄釘)観察表

挿図番号	器種	出土遺構	層位	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	頭の形状	残存率	備考
12	角釘	伝本堂跡	II層	6.4	0.4	0.4	T型	ほぼ完形	
13	角釘	伝本堂跡	II層	5.9	0.4	0.4	L型	ほぼ完形	
14	角釘	本堂由縁物	II層	8.9	0.3	0.3	L型	ほぼ完形	赤色の顔料付着
15	角釘	伝本堂跡	II層	9.1	0.4	0.5	L型	ほぼ完形	
16	角釘	伝本堂跡	II層	12.3	0.6	0.5	T型	ほぼ完形	赤色の顔料付着
17	角釘	伝本堂跡	II層	12.5	0.6	0.5	T型	ほぼ完形	
18	角釘	伝本堂跡	II層	12.5	0.5	0.6	L型	ほぼ完形	

第26表　銭貨観察表

挿図番号	銭貨名	出土遺構	層位	法量 径(cm)	孔径(cm)	厚さ(cm)	初鋳年代	備考
19	祥符元寶	伝本堂跡	II層	2.40×2.30	0.60×0.60	0.12	1007年	
130	寛永通寶	C区	表採	2.40×2.40	0.55×0.52	0.16	1636年	古寛永
131	寛永通寶	C区	表採	(1.30)×(2.30)	-×(0.50)	0.14	1636年	古寛永、残存率約2/5

第27表　石造物物観察表

挿図番号	石造物	部位	法量(cm) 高さ	法量(cm) 幅	残存率	石材	石塔番号	備考
282	宝篋印塔	相輪	(22.0)	(10.8)	2／3	安山岩系?	石塔—10	
283	宝篋印塔	相輪	(11.3)	(9.2)	1／3	安山岩系?	石塔…9	
284	宝篋印塔	笠	25.7	31.7	1/3程完形	安山岩系?	表採	表採地点は第56図参照
285	宝篋印塔	笠	23.3	(33.6)	4／5	安山岩系?	石塔—10	
286	宝篋印塔	笠	22.8	31.2	4／5	安山岩系?	石塔　9	
287	宝篋印塔	笠	16.3	(20.2)	1/3程完形	安山岩系?	石塔—7	
288	宝篋印塔	笠	14.3	20.7	1/3程完形	安山岩系?	石塔—3	
289	宝篋印塔	塔身	15.0	15.8	3／4	安山岩系?	石塔—6	四面梵字あり
290	宝篋印塔	塔身	14.3	16.0	1/3程完形	安山岩系?	石塔—7	四面梵字あり
291	宝篋印塔	塔身	11.1	13.4	完形	安山岩系?	石塔—3	
292	宝篋印塔	塔身	11.3	12.6	1/3程完形	安山岩系?	石塔—4	
293	宝篋印塔	基礎	18.2	28.1	2／3	安山岩系?	石塔　4	
294	宝篋印塔	基礎	(14.1)	(28.6)	1／3	安山岩系?	石塔…9	
295	宝篋印塔	基礎	(8.1)	(27.9)	1／5	安山岩系?	石塔—9	
296	宝篋印塔	基礎	21.1	24.8	1/3程完形	安山岩系?	石塔—7	
297	宝篋印塔	基礎	20.4	23.9	2／3	安山岩系?	石塔—5	
298	宝篋印塔	基礎	(16.1)	25.4	3／4	安山岩系?	石塔—6	
299	宝篋印塔	基礎	16.5	20.6	1/3程完形	安山岩系?	石塔—1	
300	宝篋印塔	基礎	14.3	21.8	一部欠損	安山岩系?	石塔—3	
301	五輪塔	火輪	15.1	24.3	4／5	安山岩系?	石塔—6	
302	五輪塔	火輪	12.8	(23.2)	2／3	安山岩系?	石塔—8	
303	五輪塔	火輪	17.5	20.9	1/3程完形	安山岩系?	石塔—1	
304	五輪塔	火輪	11.6	19.1	完形	安山岩系?	石塔—5	
305	五輪塔	火輪	10.6	17.8	完形	安山岩系?	石塔…2	
306	五輪塔	火輪	9.7	17.3	1/3程完形	安山岩系?	石塔—4	
307	五輪塔	水輪	11.1	17.3	完形	花崗岩	石塔…2	
308	五輪塔	水輪	18.4	21.2	完形	花崗岩	石塔—9	
309	五輪塔	水輪	14.3	17.9	完形	安山岩系?	石塔—1	
310	五輪塔	地輪	13.0	21.0	1/3程完形	花崗岩	石塔…6	
311	五輪塔	地輪	16.0	25.3	完形	安山岩系?	石塔—2	
312	五輪塔	地輪	15.8	21.3	完形	安山岩系?	石塔—2	
313	石造物	基壇	(11.1)	(37.0)	1／3	安山岩系?	石塔—10	
314	石造物	基壇	7.9	29.2	完形	花崗岩	石塔—3	

鳳慈尾山大威徳寺関係史料リスト

番号	史料名	記録者など	時代	西暦	備考
1	万福寺蔵阿弥陀経後書	大威徳寺住侶良玄	天正７年	1579	現存せず。『飛州志』が引用
2	濃州長瀧寺阿名院所在経文末書	慶俊	天正15年	1587	現存せず。『飛州志』・『竹原鳳慈尾山大威徳寺略記』が引用
3	和川白山神社蔵大般若波羅蜜多経箱墨書銘	多聞慶俊	慶長18年	1613	『飛騨下呂』史料Ⅱ・124
4	竹原郷田畑高帳（写）	宮地村・次郎八	寛文９年	1669	『飛騨下呂』史料Ⅰ・８
5	大威徳寺竹原郷旧地除地仰付一件証文之事	宗猷寺	元禄６年	1693	『飛騨下呂』史料Ⅱ・89
6	大威徳寺竹原郷旧地除地仰付一件乍恐奉願口上書	宗猷寺・鷲潭	元禄７年	1694	『飛騨下呂』史料Ⅱ・89 大威徳寺の由来書きあり
7	大威徳寺竹原郷旧地除地仰付一件飛州御検地御奉行所	御厩野村肝煎他	元禄８年	1695	『飛騨下呂』史料Ⅱ・89
8	大威徳寺竹原郷旧地除地仰付一件宗猷寺領所御竿請帳写	野尻村組頭他	元禄８年	1695	『飛騨下呂』史料Ⅱ・89
9	大威徳寺竹原郷旧地除地仰付一件仕上証文之事	宗猷寺	元禄12年	1699	『飛騨下呂』史料Ⅱ・89
10	大威徳寺旧地荒所打起願・同請証文奉願口上書	宗猷寺	享保４年	1719	『飛騨下呂』史料Ⅱ・90
11	大威徳寺旧地荒所打起願・同請証文差上申証文之事	宗猷寺	享保４年	1719	『飛騨下呂』史料Ⅱ・90
12	飛州志	長谷川忠崇	延享２年	1745	文政12年（1829）に校訂・浄書
13	飛騨国中案内	上村満義	延享３年	1746	
14	竹原鳳慈尾山大威徳寺略記	宗猷寺・北州	文化年間	19世紀初	『飛騨下呂』史料Ⅱ・88 北州和尚（？～1811）
15	大威徳寺旧地にて小庵取立願	宗猷寺	文政９年	1826	『飛騨下呂』史料Ⅱ・91
16	大威徳寺ほか宗猷寺末書上	宗猷寺	安政３年	1856	『飛騨下呂』史料Ⅱ・92
17	宗猷寺末寺書上	宗猷寺	安政３年	1856	『高山市史』下巻　末寺の中に「竹原郷野尻村大威徳寺」あり
18	大威徳寺跡宗猷寺境山林反別其外書上帳	宗猷寺	明治４年	1871	『飛騨下呂』史料Ⅱ・93
19	大威徳寺旧地従前通り宗猷寺所持仰付願	宗猷寺	明治４年	1871	『飛騨下呂』史料Ⅱ・94
20	宗猷寺所持大威徳寺旧地譲渡一件覚	野尻村今井柳蔵他	明治４年	1871	『飛騨下呂』史料Ⅱ・95
21	宗猷寺所持大威徳寺旧地譲渡一件御田地譲渡証文之事	宗猷寺他	明治４年	1871	『飛騨下呂』史料Ⅱ・95
22	斐田後風土記	富田礼彦	明治６年	1873	

（2006年５月10日作成）

一、万福寺蔵阿弥陀経後書　《天正七年》

南贍部州飛騨國竹原傍至尾山大威德寺住侶良玄現世安穩後生善所出離生死證大菩提無疑于時天正七年己卯四月日寶光坊良玄（按ズルニ良玄ハ大威德寺ノ後當寺ニ住ス猶濃古部ニ載ス）

『飛州志』

二、濃州長瀧寺阿名院所在経文末書　《天正一五年》

本堂丈間五間四方地藏堂大黑堂講堂鎭守拜殿鐘樓堂三重塔二王堂坊數十二坊東坊多聞坊南坊竹林坊西坊聖林坊吉祥坊北坊寶光坊池坊滿月坊福成寺○本尊ハ大威德明王塔ハ大日如來鎭守ハ伊豆宮根熊野白山四所也寺領門前和泉橋ヲ境北ハ加賀ナシ谷通リ尾ヲ境東ハクラカケ白山ノ尾舞臺西ハ野尻山境（按ズルニ和泉橋以下地名悉ク寺跡ノ近邊ニアリテ今モ稱之）守護不入也乘政之內寺領之田一町一反（按ズルニ益田郡乘政村アリ）上田之內ホキダチニ十貫（按ズルニ同郡上田村アリホキダチ同村ノ字ニアリ十貫トアルハ永ノ數也何ト云フニ同ジ古代ノ法ナリ）跡津大ゴウリニ十貫（按ズルニ同郡跡津村ヲゴウニ大般若田二反（按ズルニヲゴウハ同郡小川村アリ大ゴウリ未考）天正十五年丁亥林鐘下旬慶俊記之以上

『飛州志』

三、和川白山神社蔵大般若波羅蜜多経箱墨書銘　《慶長一八年》

（箱蓋表書）
飛州和川
大般若経　陸百巻
白山御宝前

（同蓋裏書）
先箱蓋古成此間書附落候て如斯候以上
作　申割損メヲ再興
申也作者巧与三郎令寄進申候
（寫）
旦那則正村人祈禱坊主多聞慶俊
本願也
慶長十八癸丑正月吉日
白山御宝前　奉施入所也
○

（別箱蓋裏書）
此蓋損候ニ附捨直シ申候
寛政七卯甲八月吉日

『飛騨下呂』史料I

四、竹原郷田畑高帳（写）　《寛文九年》

一田方五反拾四歩　　中
内壱反五畝　　下
同三反壱畝拾四歩　　下々
同四畝　　（下中）
一畑方壱反四畝
田畑合六反四畝拾四歩

一田方壱反六畝拾四歩　　但安国寺領ニまやの村
内八畝田也　　高畑山　大威徳寺
一畑方壱反壱畝弐拾九歩
田畑合弐反八畝七歩

〆

『飛騨下呂』史料Ⅱ

五、大威徳寺竹原郷旧地除地仰付一件証文之事　《元禄六年》

一高山宗猷寺事、地頭物成之内米壱石九斗七升八勺益田郡竹原郷之内野尻村より取来候、依之跡々之通被下置候様ニ奉願候所、去申ノ御物成之内壱石八斗弐合一勺当分御渡被成慥請取申候、御公儀御窺相済次第何分ニも御指図次第可仕候、為其証文指上申候、仍如件

元禄六年
酉ノ七月八日　　宗猷寺（印）
伊奈半十郎様

『飛騨下呂』史料Ⅱ

六、大威徳寺竹原郷旧地除地仰付一件乍恐奉願口上書　《元禄七年》

一飛州益田郡竹原郷御厩野村鳳慈尾山大威徳寺は頼朝公御建立之地ニて御座候由、本尊は大威徳明王と申ニ付、児ニて在之候由、其時代ニは七堂伽藍ニて繁栄仕候由、今以堂塔伽藍之場跡御座候、頼朝公従鎌倉御取寄被為植候ニて大杉木弐本、桜木壱本御座候、於尓今鎌倉杉桜と申伝候、和田秩父寄進之由ニて鎌杏木弐本今何も寺之南方ニ有之候、其外厳谷々谷、鉾守ヶ尾、三町之馬場、舞台所と申伝候其跡御座候、右舞台所は頼朝公御能被仰付上覧之所ニて御座候由、御厩野村は諸大名馬繋之場所ニて、於尓今文字を御厩野と書伝候由、加様ニ証跡有之候得共、其節之記録等も無御座候故不分明候、所之者申伝候趣ニて御座候事

一右大威徳寺、中頃飛州乱逆之時分賊徒等焼払申由、其以後も飛州落居不仕候故、再興難成退転之地ニ罷成候由、其後金森家領知罷成経年ヲ候処、宗猷寺之開山南叟和尚右之古跡を伝聞、時之領主金森出雲守法名真竜院殿ヘ訴、再興仕、則小庵を取立、門弟玄琢と申僧を差遣住職申付置候処、貧地故寺相続難仕、玄琢出奔仕候ニ付、其時より宗猷寺末寺、相極メ中候、然共玄琢出奔以後修復等も不仕候ニ付て、今程荒地ニ罷成有之候、夫故寺号山号を宗猷寺籍帳ニ載置申候事

一右威徳寺跡之程荒地ニ罷成御座候、元来古跡之儀ニ御座候、宗猷寺支配故今度御検地ニ付願上申候、前々之通当寺控之地ニ被仰付被下候ハヽ難有可奉存候、以時節小庵をも取立申度奉存候、則寺跡之図差上申上候、以上

飛州大野郡高山
元禄七甲戌年十一月三日　　真竜山宗猷寺　　驚潭　寺印

『飛騨下呂』史料Ⅱ

七、大威徳寺竹原郷旧地除地仰付一件

飛州御検地御奉行所　《元禄八年》

覚

大威徳寺跡
一荒場　拾六間　六畝拾弐歩
同所
一山内五町壱反五畝歩

同断　同　寺抱

右之趣御検地ニ付て大威徳寺跡先規之通御除地ニ相違無御座候、以上

元禄八乙亥年二月　竹原郷御検見村肝煎　平左衛門　印

高遠高山　宗猷寺様

『飛騨下呂』史料Ⅱ

八、大威徳寺竹原郷旧地除地仰付一件

宗猷寺領所御竿請帳写　《元禄八年》

	こまんば		高山宗猷寺蔵
同所	拾四間	中畑弐拾八歩	文七
弐間			
同所	拾七間	中田六畝七歩	同断　同人
拾壱間			
同所	弐拾七間	中田九畝歩	同断　同人
拾間			
同所	弐拾弐間半	中田四畝弐拾六歩	同断　同人
六間半			
同所	弐拾七間	上田六畝弐拾三歩	同断　同人
七間半			
同所	拾六間半	中田六畝弐歩	同断　同人
拾壱間			
同所	弐拾弐間	上田壱反壱畝拾歩	同断　同人
拾五間半			
同所	拾間半	中田弐畝弐拾九歩	同断　同人
八間半			
同所	五半間	上畑弐拾八歩	同断　同人
五間			
同所	拾三間半	中畑三畝拾八歩	民断　同人
八間			
同所	拾間半	上畑壱畝七歩	同断　同人
六間半			
同所	拾壱間半	下畑弐畝九歩	同断　同人
六間			
同所	拾六間半	下畑壱畝拾三歩	同断　同人
五間半			
同所	拾壱間半	下田壱畝五歩	同断　同人
五間			
同所	拾壱間半	下々畑壱畝拾歩	同断　同人
六間半			
	こまんば		高山宗猷寺蔵
	六間半	屋敷壱畝九歩	文七

上田ノ弐反八畝四歩
中田ノ弐反九畝四歩
下田ノ壱畝五歩
三口合四反八畝拾三歩
上畑ノ弐畝五歩
中畑ノ四畝拾六歩
下畑ノ四畝弐拾七歩
下々畑ノ壱畝九歩
四口合壱反弐畝弐拾七歩
都合六反六歩
外ニ屋敷歩壱畝九歩

右之通今度御検地被遊候、寺領所ニ田畑御竿請水帳之通相違無御座候、以上

元禄八乙亥年二月廿二日　竹原郷野尻村肝煎　宗右衛門　印
同　許煎　市郎左衛門　印

高山
宗猷寺様

『飛騨下呂』史料Ⅱ

七、大威徳寺竹原郷旧地除地仰付一件

飛州御検地御奉行所　《元禄八年》

覚

大威徳寺跡　拾六間　六畝拾弐歩　瀧郷高山　宗猷寺抱
一荒場　拾弐間　同断　同　寺抱
同所
一山内五町壱反五畝歩
右之趣御検地ニ付て大威徳寺跡先規之通御除地ニ相違無御座候、以上

元禄八乙亥年二月　竹原郷御屋敷村計煎　平左衛門　印
瀧郷高山　宗猷寺様

『飛騨下呂』史料Ⅱ

八、大威徳寺竹原郷旧地除地仰付一件

宗猷寺領所御竿請帳写　《元禄八年》

（こまんば）
拾四間　弐間　中畑弐拾八歩　高山宗猷寺蔵抱　文　七
同所　拾七間　拾壱間　中田六畝七歩　同断　同　人
瀧郷　弐拾七間　拾壱間　中田九畝歩　同断　同　人
同所　弐拾弐間半　六間半　中田四畝弐拾六歩　同断　同　人
同所　弐拾七間半　上田六畝弐拾三歩　同断　同　人
同所　拾六間半　拾壱間　中田六畝弐歩　同断　同　人
同所　弐拾弐間　拾五間半　上田壱反壱畝拾壱歩　同断　同　人
同所　拾弐間半　八間半　中田弐畝弐拾九歩　同断　同　人
同所　五平間　五間　上畑弐拾八歩　同断　同　人

（こまんば）
同所　拾三間半　八間　中畑三畝拾八歩　同断　同　人
同所　拾間半　六間半　上畑壱畝七歩　同断　同　人
同所　拾壱間半　六間　下畑弐畝九歩　同断　同　人
同所　八間半　五間　下畑壱畝拾三歩　同断　同　人
同所　七間　五間　下田壱畝五歩　同断　同　人
同所　拾壱間半　六間半　下々畑壱畝拾歩　同断　同　人
（こまんば）
六間半　屋敷壱畝九歩　高山宗猷寺蔵抱　文　七

上田ノ弐反八畝四歩
中田ノ弐反九畝四歩
下田ノ壱畝五歩
三口　合四反八畝拾三歩
上畑ノ弐畝五歩
中畑ノ四畝六歩
下畑ノ四畝弐拾七歩
下々畑ノ壱畝九歩
四口合壱反弐畝弐拾七歩
都合六反六歩
外ニ屋敷歩壱畝九歩
右之通今度御検地被遊、寺領所ニ田畑御竿請水帳之通相違無御座候、以上

元禄八乙亥年二月廿二日　竹原郷野尻村組頭　宗右衛門　印
同　計煎　市郎右衛門　印
高山　宗猷寺様

『飛騨下呂』史料Ⅱ

鳳慈尾山大威徳寺跡【七四】

或曰鳳慈尾作修至尾

同郡竹原郷御厩野村ニアリ國說曰當山ハ古鎌倉右大將家御願ノ旨アリテ大伽藍ヲ草創シタマフベシトテ其地ヲ諸州ニタヅネ求メラル于時永雅上人其命ヲ奉ジテ永雅傳說未詳或文覺上人トモ云ヘリ普ク國々ヲ巡リテ當州ニ來リ此山上ニ至ル山溪寂莫トシテ心モスメル折カラ山頭ノ池中頻ニ鳴動シテ大龍顯レ出ヅ于時永雅願ハクハ其眞容ヲ拜セン事ヲ祈念セシニ大龍忽小童ノ尊容ト變ジ牛ニ乘ジテ出現シ永雅ニ告タマフ事アリ則其尊容ヲ寫シ留テ大威德明王ト稱ス右大將家其靈地タル事ヲ感ジタマヒテ本堂講堂ヲハジメ其外堂塔頭十二坊ヲ建ラレ彼尊像ヲ安置シタマフ處ノ靈場是ナリ則明王出現ノ池其外鎌倉銀杏秩父杉ナンド、稱スルモノ今モ山上ニ存ズ是等諸侯ノ寄附トシテ各其地ヨリ移シ植ラレタルトナリナラビニ御厩野ノ號モ諸侯群參ノ時麓ニ馬ヲ繫シアリサマヲ稱シテ山下ノ地名トスト云フ其後州内兵亂久シクシテ修補ヲ加フル事モ叶ハズ自寺坊荒廢ニ及ビタリシニ剩天正年中地震ノ爲ニ破ラレテ一宇モ全カラズ飛州大地震ハ天正十三年己亥十一月廿九日也此時再建ノ力盡僧侶他邦ニ離散シテ悉ク廢絶スト云以上以按ズルニ其十二坊ノ一數多門坊ノ住僧慶俊ト云ヲ沙門濃洲長瀧寺ニ行テ其塔頭阿名院ニ住セリ彼院ノ經文末書ニ舊寺ノ事ヲ誌セシモノアリ故ニ次ニ載ス今阿名院ニ存在スル處ノ書ヲ以テ寫之猶此外ニモ有ベケレドモ詳ナラズハ不及又長瀧寺ハ美濃州郡上郡長瀧ニアリ往古泰澄大師開闢ノ名藍也則阿名院所在經文末書曰本堂丈間五間四方地藏堂大黑堂講堂鎭守拜殿鐘樓堂三重塔二王堂坊數十二坊東坊多聞坊南坊竹林坊西坊聖林坊北坊寶光坊池坊滿月坊福成寺○本尊ハ大威德明王塔ハ大日如來鎭守ハ伊豆箕根熊野白山四所也寺領門前和泉橋ヲ境北ハ加賀ナシ谷通リ尾ヲ境東ハクラカケ白山ノ尾舞臺西ハ野尻山境按ズルニ和泉橋以下地名濃ノ寺跡ノ近邊ニアリテ今モ稱之守護不入也乘政之內寺領之田一町一反按ズルニ鎧田郡乘政村アリ上田之內ホキグチニ十貫按ズルニ同郡上田村アリホキグチ同村ノ字ニアリ十貫ハ永ノ數也何石ト云フニ同ジ古代ノ法ナリ跡津大ゴウリニ十貫按ズルニ同郡跡津村アリ大ゴウハ同郡小川村ナルカ天正十五年丁亥林鐘下旬慶俊記之以上

乗政村より宮地村へ　十町餘

【乗政村】高四百三十八石九斗六升三合、内田高三百四十一石八升四合、畑高九十七石八斗七升九合、此反別三十九町九畝二十六歩、内二十六町九反十三歩田方、十二町一反九畝十三歩畑方なり、平地にて地面よき所なり、上田十五・中十三・下十一・下々八、上畑十一・中九・下七・下々四、屋敷十一の位、高に四ッ九毛餘、家數大・小百二軒あり、内一軒寺、是は中呂村禪昌寺末寺にて【慈雲院】といふ、社僧なり。宮森あり、此社地の内に【慈雲院】あり、則【八幡宮】地一町一反歩、境内十五歩、高一石一斗四合、此反別一町五反三畝十九歩、是は八幡宮社領なり、但境外なり、開基年數不相知候、金森法印公より先の領主三木忠右衛門より除地なり【神明宮】此境内三反三畝十歩あり、此森の内栗の名木一本あり、元は一本にて末は九本に相分る見事なる木なり。外に【白山權現宮】あり、山の峯に有之候故、社地の反別無之旨村方の者申之、此村に【古城跡】あり、城主は三木忠衛門といふ武士居城なり、是は三木久庵の弟なり。當村に【米蔵】一ヶ所あり、高三斗四升八合、此反別二畝十五歩あり、是は竹原收納組の百姓より普請等もいたし候郷蔵なり。此次、谷川越にて板橋一ヶ所あり、字【嵐の】といふ、橋長七間、巾八尺あり、乗政村の内字三ッ石ヶ洞といふ所より、小阪郷の内大洞村へ直道あり、前方小阪郷に記し置く通りなり。下呂湯之島村より乗政村迄二里有之馬次場なり、谷川の所迄也。此所にも板橋あり、宮地村の内なり。

宮地村より野尻村へ　半里餘

【宮地村】高百七十八石六斗八升一合、内田高百二十五石四斗一升五合、畑高五十三石五斗四升八合、此反別十九町一反五畝二十九歩、内十一町三反四畝二十九歩田方、七町八反一畝歩畑方なり、平地にて地面よく、乗政村同様に相見る、上田十四・中十二・下十・下々七、上畑十・中八・下六・下々三、屋敷十之位、高に四ッ七分八厘、家數大・小五十軒、内一軒寺、中呂村禪昌寺末寺にて【金鍚山地蔵寺】といふ、境内六反三畝十六歩、境内山林一反八畝六歩、高一石三斗九升一合境外なり、開基は永祿三申年なり。宮森あり【若宮八幡】此境内五反五畝歩あり【神明宮】境内一反五畝歩【大日如來】此境内八畝十二歩、外【觀音堂】地七歩あり、宮地村より川西の方へ行く道あり、是は下原郷の内夏燒村へ行く道なり。又此川はたより右手へつき川通り行は、小川村の内大淵へ出る。此間一里程有之、道並に民家あり、字【ちくご】といふ、宮地村の内なり。宮地村の内に【古城跡】あり、城主は三木三右衛門といふ武士居城なり、是も三木休庵の弟なり、當村に板橋一ヶ所あり、字【高橋】といふ、橋長七間、巾八尺、引渡橋二ヶ所あり、内一ヶ所は字【かわい】といふ、橋長七間、巾一尺五寸、一ヶ所は字【あらた】といふ、橋長八間、巾一

尺五寸あり。宮地より野尻迄の間平地にて道吉し。

野尻村より御厩野村へ　半里程

【野尻村】高八十九石四斗八升六合、内田高五十六石四斗八升一合、畑高三十三石五合、此反別十三町八反二畝二十六歩、内七町一反三畝十九歩田方、六町六反九畝七歩畑方なり、平地にて地面は當分の所なり、上田十一・中九・下七・下々四、上畑九・中七・下五・下々二、屋敷九之位、高に四ッ八厘内々、家数大・小三十四軒あり。寺無し。といへども、御厩野村の内【松尾山威徳寺】といふ、院内に普門院の住僧一人久敷存生にて罷在、七十五年程以前まで此僧存生にて罷在、普門院及大破、野尻村の内に大威徳寺之境外の田畑有之、字【小馬場】といふ所扣地故、此小馬場に右の僧罷在候處に、如何なる了簡にて候哉、高山へ罷出、宗猷寺の住持郷丹長老の代に、普門院の沙門所持の書物、郷丹長老に預置、沙門は空しく相成候故にや、宗猷寺の重物と罷成、其後元禄年中の節、飛州検地有之、高五石四斗二升五合之分、高山宗猷寺の扣地に罷成候、此譯は大方のもの證に不存候、いらざる事なれども記し置き候。外に宮森あり【白山權現宮】此境内一反二畝歩、道並谷川越板橋一ヶ所あり、字【和泉橋】といふ、橋長六間半、巾七尺五寸、此次引渡橋一ヶ所あり、字【田中渡瀬】といふ、但竹原川通なり、橋長七間、巾一尺五寸あり。扨野尻村より蛇之尾村へ行道二筋あり。内一筋は字【不動洞】といふ、此間一里あり、此道は牛馬の通路ならす歩行人ならては通不申候、今一筋は字【大鹿野】通といふ、此道は美濃・飛騨の境の尾通之内を少の間通候、是はよき道なり。此間一里餘有之、野尻村より御厩野村迄の内平地にて道吉し。

御厩野村より國境木迄　十三町

【御厩野村】高百四十石六斗三升八合、内田高百七石九斗四升三合、畑高三十二石六斗九升五合、此反別十九町三反二十二歩、内十三町二反九畝二十八歩田方、六町二十四歩畑方なり、平地にて候へとも奥御厩野といふ所は坂懸成所にて野尻村同様の土地なり、上田十一・中九・下七・下々四・谷田二、上畑九・中七・下五・下々二・砂一、屋敷九之位、高に五ッ四厘三毛、高の内六斗二升七合、此反別三反一畝十歩、十助分縄違永引あり、家数大・小六十三軒、内一軒寺あり、中呂村禅昌寺末寺にて【岩屋山阿彌陀寺】といふ、此境内九畝九歩、高三斗四升九合是は境外なり、開基年數不相知候、金森法印公より除地なり。宮森あり【山王權現宮】此境内八反三畝十歩、【熊野權現宮】此境内五反八畝十歩、熊野鳥井森一反二畝歩あり、當村に【口留御番所】一ヶ所あり、高六升六合、此反別二十二歩あり、板橋二ヶ所あり、内一ヶ所は字【治郎兵衛垣内】竹原川通、橋長二間半、巾五尺、一ヶ所は字【御番所外】といふ、橋長五間半、巾五尺、外に引渡橋一ヶ所、字【大畑】といふ、橋長十三間、巾一尺五寸、御厩野村より東南に

相當山上に平かなる所あり、古城跡の樣に相見候處なり【威徳寺】といふ寺の舊跡なり、此寺は往昔賴朝公の御治世の節聞學上人開基のよし、勿論開基の譯聞傳居候へども、事長き故此所に略之、此所に寺院以上十三坊有しとかや、本寺は松尾山大威德寺と號す、是則、賴朝公御造立被爲遊候のよし、其砌に賴朝公・賴家卿御入來も被爲遊候樣にも申傳へ候へ共、實說無覺束事に候、境内に櫻の木二本、銀杏の木一本以上三本有之、一說には賴家卿、秩父の重忠、和田の義盛此三本を被植置候とも申傳るなり、七十六七年以前迄は寺形も少々相殘り、又は鎭守の前堂に大なる鰐口抔も其頃迄有之候、皆々荒果て舊跡計なり。猪本道筋國境の所は字【舞臺】といふ、昔し此所へ鎌倉より賴家卿御來駕有之、此所にして猿樂を御上覽有しとかや、此舞臺の所より威德寺は東北の方に相見る、此間二町餘あり、此舞臺といふ所も二町に五町程の間平地なり、則、濃州・飛州の境山なり。扨、御厩野村より濃州・飛州の境山、尾續に【三有峰山】といふは東に相當る大山也、此三有嶺山といふは御嶽山より北西に相當る山にて、信州・濃州・飛州三國へ一山相分る三辻山故、三有嶺山と號るとかや、前書に記し置き候通り阿多野・小阪・竹原此三鄕の山内には檜・椹・槇・樅其外諸木等夥敷有之、御私領の代には別て諸材木多く仕出し、村方の者共渡世いたし候、殊に小阪奥、此御厩野を始め竹原鄕中は右三有嶺山といふ大山を控へ罷在、多年の山稼いたし來候へども、段々年毎に伐取候故、近年は盡山に成、漸く樽木等を仕出し候までにて候、然ながら此上にも後々には、只今出生の若木共年數も相立候て大木に成り、畢竟は公儀の御爲にも相成り、村方の渡世にも罷成可申候。御厩野村より三有嶺山まで三里程も有之、夫より木曾の内瀧越といふ所へも直に相越す所もあり、此山の間三里餘あり、此道は杣人ならては通路不致候。御厩野村より東美濃加茂郡加子母村の内字小鄕といふ所へ出る、御厩野より小鄕へ半里程、次は加子母村、次は附知、次は田瀨、次は福岡、次は苗木町、次は中津川、是迄御厩野より十里有之、御厩野より苗木迄九里あり、苗木・中津川迄の間、道並村々道程は此末に可記。猪、先年御厩野と小鄕と國境論出來右記置き候、舞臺の所及境論候處、御厩野村の理運に罷成候へ共、秣之義は雙方入合刈取候樣に罷成候、尤其節の御裁許書・繪圖共に御厩野村名主方に所持いたし候、猪、又境木も檜の生木二本あり、道通は右手に有之候、内一本の生木は小鄕の方に有り、此木本境木なり、御厩野の方にある一本は小鄕村より植置なり、依之境論なり、御厩野より植置候檜は、近年枯候へとも其木の根に炭を入有之事候。

【御厩野】

濃州小鄕へ出る、高山より境木まで十五里十二町五十間あり、御厩野より加子母村之内小鄕へ半里、小鄕より加子母村迄一里半あり。

一四、竹原鳳慈尾山大威徳寺略記　《文化年間》

竹原
鳳慈尾山大威徳寺略記

当山十一世北州和尚筆

当国竹原威徳寺之事、鎌倉殿以勅願建立、開山ハ永賀上人と云、叡山ノ末寺也、天正十三年乙酉十一月晦日大地震ニて伽藍諸堂悉ゆり亮し候て、本堂丈間四方、地蔵堂・大黒堂・講堂・鎮守・拝殿・鐘楼堂・三重塔・二王堂、坊数十二坊、東之坊・多聞坊・北之坊・竹林坊・西之坊・聖林坊・吉祥坊・南之坊・宝光坊・池之坊・満月坊・竹原福成寺、右十二坊、本尊ハ大威徳尊、塔ハ大日、鎮守ハ伊豆箱根熊野白山四所権現也、寺領門前和泉橋ヲ境イ、北ハ加賀なし谷通り尾ヲ境イ、東ハくらかけ白山の尾舞台、西ハ野尻山境イ、守護不入也、乗政寺領ノ田壱町壱反、上田ホキグチニ拾貫、跡津大コウリニ拾貫、ヲゴウニ大般若田弐反、其外委キ子細有之由、右之書付ハ濃州長滝寺之内阿名院ニ有リ、天正十五年丁亥林鐘下旬慶俊記之と経文之奥書ニ有之、右十二坊之内多聞坊慶俊、威徳寺滅却之後長滝阿名院ニ居住と見へたり元禄五八月金森国かへ、同年九月廿七日ハ伊奈半十郎殿高山へ御着ヤ、十月二日ハ御城渡也、夫より六年之間当国支配和川中切之宮ニ大般若有之、十六善神相添

『飛騨下呂』史料Ⅱ

一五、大威徳寺旧地にて小庵取立願　《文政九年》

午恐以書付奉願上候

威徳寺
一屋敷跡　六畝拾弐歩
一山内　五町壱反五畝歩

右は元禄八亥年御検地之節、竹原郷御厩野村ニて拙寺抱地ニ被為仰付、其砌威徳寺庵有之、所持仕来り候処相違無御座、其後床及大破候ニ付、其盛ニ仕置候、然ル処御検地之節御除地打捨同様ニ相成候ては恐多奉存候間、先規之通小庵を取立申度奉存候間、何卒此段御聞済被成下度偏ニ奉願上候、尤御厩野村は勿論都て故障之筋無御座候間、何分御慈悲之上右願之通被仰付被下置候ハヽ難有奉存候、以上

高山　宗猷寺

竹原郷御厩野村
百姓代　弥七郎
〃　組頭　増七
〃　名主　政七

高山
御役所

文政九戌年十一月

『飛騨下呂』史料Ⅱ

一六、大威徳寺ほか宗猷寺末書上　《安政三年》

以書付奉申上候

一　益田郡竹原郷野尻村
大威徳寺
右大威徳寺旦那曽無御座相続難仕候ニ付、年久鋪堂宇廃絶仕、只今寺跡境内御除地ニて寺号相残り迄ニ御座候、延享五辰年四月御改メニ御座候

一　吉城郡高原郷殿村
円城寺
正保元申年金森左京守招寺開基、小院故平僧住持ニ御座候間、万事拙寺法脈ニ付差配仕、末寺同様相心得候得共、全クハ京都妙心寺末ニ相違無御座候

一　薬師寺
無禄無檀小院ニて御座候処、文化之頃両全寺嶺州隠居仕、其節末寺ニ付上御座候趣御上より被御聞、一向不存候処、嘉永二酉年先々より付上無是寺院御除ヶ候様被仰聞、右ニ付御願上御聞済元之薬師堂も御改帳ニ相成申候

安政三辰年四月日　　宗猷寺（印）

高山御役所

『飛騨下呂』史料Ⅱ

一七、宗猷寺末寺書上　《安政三年》

以書付奉申上候

竹原郷野尻村　大威徳寺
高原郷本郷村　本覚寺
同　麻生村　南金寺
同　殿村　円城寺
同　殿村　瑞岸寺
同　伊西村　宗徳寺
同　長倉村　桂峰寺
高原郷田頃家村　永昌寺
同　一重ヶ縄村　禅通寺
同　東雲村　薬師寺

右之通拙寺末寺ニ相違無御座候　以上

安政三辰年三月　　高山一之町村之内　宗猷寺（印）

『高山市史』下巻

一八、大威徳寺跡宗猷寺抱山林反別其外書上帳《明治四年》

（表紙）
「
明治四未年三月

山林反別其外書上帳

高山壱之町村
宗猷寺抱

」

益田郡飛騨野村
大威徳寺跡
高山壱之町村
宗猷寺抱除地

一山林除地反別五町壱反五畝分
　是は草山ニて木立無御座候

大威徳寺跡
一荒場反別六畝拾弐分
右は、拙寺抱御厩野村地内除地山林并荒場取調候処、書面之通ニ御座候、以上

明治四未年三月

高山壱之町村
宗　猷　寺　（印）
御厩野村
名主　古田嘉十郎

高山
御役所

『飛騨下呂』史料Ⅱ

一九、大威徳寺旧地従前通り宗猷寺所持仰付願《明治四年》

（表紙）
「
明治四年未六月

上

高山壱之町村
宗猷寺

」

以書付奉願上候

益田郡竹原郷野尻村字こまんばニて当寺抱之除地田畠六反六歩之義、往古ハ大威徳寺所領之処、同寺廃絶之後何方ニて差配罷在候哉相知不申、其後当国金森家領知之節、当寺先代南叟大威徳寺旧跡之由来ヲ聞、再興仕度、則僧主へ願、小庵ヲ立、当寺末寺ニ相成支配罷在候、其節右田畑往古大威徳寺所領由緒ヲ以当寺へ寄附ニ相成候由、其後右小庵へ遣置候留主居出奔、以来へ当寺へ引取元禄度検地之節当寺家抱之名請仕、一旦御高入ニ相成候処、同十五年より如往古除地ニ被申付、引続是迄所持仕、小作方ハ右村金四郎外壱人ニ相預ケ、元は小作米八俵之由、幾頃より歟捨俵ニ相成、当時ニ至迄年々右之通受取来申候
右始末奉申上候、何卒御賢察之上、従前通当寺所持ニ被仰付度、尤御年貢諸役等は百姓並ニ急度上納可仕候間、何卒右之段御聞済被成下置候様奉願上候、以上

明治四年未六月

高山壱之町村
住持　宗　猷　寺
　　智　嗣　（印）

『飛騨下呂』史料Ⅱ

二〇、宗猷寺所持大威徳寺旧地譲渡一件

覚　《明治四年》

一　金五拾両也

右は、益田郡野尻村字こまんばニて、貴寺除地御田地、今般熟談之上書面之通趣意包金差出、拙者共両人持ニ相極、則御上様へ中立候、然上ハ右金子之義ハ来八月中ニ無滞急度差上可申候、為其一札差出申所如件

明治四年未七月五日　　野尻村　今井　柳蔵（印）
　　同村　今井庄次郎（印）

（下げ札）

（下げ札）
「本文御田地御定之取米当年よりハ県庁へ上納可仕筈之処、若御取調中ニて御取立無之節ハ、貴寺へ於度差上可申候、為念以下札此段申上候、以上

幸未七月五日　　野尻村　今井　柳蔵（印）
　　今井庄次郎（印）」

『飛騨下呂』史料Ⅱ

二一、宗猷寺所持大威徳寺旧地譲渡一件

御田地譲渡証文之事　《明治四年》

字こまんば
一　高五石四斗弐升五合　　但村方御水帳通
　此田畑反別六反六歩

右は、益田郡野尻村ニて元禄度御縄受仕拙寺所持之御田地、去ル七月上旬納得示談之上、貴殿両人へ譲渡、則趣意として包金五拾両今般慥請取候処実正ニ御座候、然上は以来御割付通之御年貢諸役急度御勤、永々御所持可被成候、尤此譲渡ニ付外より毛頭構申もの無御座候、為後日旦中惣代・村役人加印之御田地譲渡証文、仍て如件

明治四年未八月

譲渡し主　高山　宗猷寺
旦中惣代　奥村彦平
同断　伊東清郎
野尻村組頭　曽我久左衛門
名主　曽我　久兵衛
野尻村　今井　柳蔵殿
同
今井庄次郎殿

『飛騨下呂』史料Ⅱ

二二、斐田後風土記　《明治六年》

圓慈尾山大威徳寺跡　里俗には鷲尾山と云。

【飛州志】云、圓慈尾山大威徳寺跡は、益田郡竹原郷御厩野村に在。當山は古へより國説に云、鐮倉右大將家御願の旨ありて、伽藍を草創し玉ふべしとて、其地を諸州に尋求めらる、于時永雅上人、其命を奉じて、永雅僧正説未詳、文愛上人とも云り。普く國々を巡りて當州に來り、此山上に至るに、山溪寂寞として、心もすめる折から、山頭の池中頻に鳴動して、大龍躍出、于時永雅顯はくは、其眞容を拜せむことを祈念せしに、大龍忽小童の容と變じ、牛に乘じて出現し、永雅に告げたまふことあり。則其の容を寫し留て大威徳明王と稱す。右大將家其靈地たることを感じ玉ひて、本堂講堂をはじめ、其外塔頭十二坊を建られ、彼尊像を安置し給ふ處の靈場なり。其外鐘倉銀杏、秩父杉なんど稱するもの、今も山上に存す。是等皆諸侯の寄附として、各其地より移し植られしとなり。鐮倉時代の大名と云説誤　また秩父は俗字にて、武甲は如何。銀杏は日のよ

又御馳野の號も、諸侯群參の時、麓に馬を馳し、ありさまを稱して、山下の地名とすと云、語編の大名、鷹倉にて頭領の連てられたる寺ならば、群參すらむ、況や國主をや、辭參するものが是、是全く鎌倉將軍家の御所が築作にて、又武家天皇大變二坊の故事を採ひ、不知その築作にたらぬまじきなり。其後國内の兵亂も久しくして修補を加ふることも叶はず、自然寺坊荒廢に及びたりしに、剩天正年中、地震の爲に破られて、一宇も全からず、飛州志に天正三年の震

十二坊略　此時再建の力も盡果て、僧侶各他邦に離散して悉く廢絕すと云。原　按に、其十二坊の一數、多門坊の住僧慶俊と云ふ沙門、濃州長瀧寺に行て、其塔頭阿名院に住せり。彼院の經文末書に、舊寺の事を記せしものあり、故に次に載す。抑長瀧寺は、美濃國郡上郡長瀧にあり、往古泰澄大師開闢の名藍なり。則阿名院所在經文末書云、大威徳寺本堂丈尺五間四方、地藏堂・大黒堂・鎭守・拜殿・鐘樓堂・三重塔・二王堂・坊數十二坊・多門坊・南の坊・竹林坊・西の坊・聖林坊・吉祥坊・北の坊・寶光坊・池の坊・滿月坊・福成坊原　本尊は大威徳明王、塔は大日如來、鎭守は伊豆・箱根・熊野・白山、四所權現也。寺領は門前和泉橋を堺、北は加賀なし谷通尾を境、東はくらかけ白山の尾續、西は野尻山境、按に相泉以下の地名、悉く寺跡の意に在て今も稱ず。守護不入也。乘政之内寺領田一町一反、按に福成坊の屬に在、上田之内ほきぐちに十貫、按に同郡上相村に、ほきぐちあり、上ノ上と云ある、永の條なり、何ぐれと云に同じ、古いの訛なり、跡津大ごほりに十貫、按に同郡高鷲村の屬に在、跡津大ごほりと云、跡津小川村あるなり、天正五年丁丑林鍾下旬、慶俊記之。原　飛州志

僧慶俊が遺記を見て熟按に、大威徳寺の小本堂を始め、諸堂并十二坊の、塔頭ありては、僅かなる寺領田一町一段歩、永壱貫文地ばかりの施入にては、僧侶等甚以て貧しく乏しくて、托鉢乞食すべき市坊もなく、餓寒へて如

何なる憂目に逢つらむ。【續日本紀】に、記のこされたる、聖武天皇御代、天平十二年なる、諸國の國分僧寺、同尼寺へ、封五十戸、水田十町宛施たまひ、且其後延喜の【主税式】なる、飛驒國正税公廨、各四萬束、國分寺料五千束、文珠會料一千束、など見え、其外往古は朝廷より重く厚く、施し賜ひたるを、僧盛俊も、代官長谷川忠崇も、知らざりしにや。里民の云傳へたる、此威德寺へ鎌倉よりの寄附を此上もなき盛事にて、大功德なりと思ひし故に、如此事共を記し殘し置し事ならむ。

【和泉名所圖會】卷三、廿七丁、和泉郡、牛瀧莊に同名の寺あつて、畫圖も出たり、其大凡は、

牛瀧山大威德寺（古しへは石倉五山と云、五倉四十寺、本坊方は今は弘法寺と云、天台宗。）

本尊大威德明王（運慶作）

阿彌陀佛（弘法作、金剛乳大師作、護摩堂）

多寶塔（弘法作、御影大師作）

鐵守社（御影大師作）

大師堂（弘法大師自作の御影、本堂に在）

天照大神社（大師堂の傍に在）

役優婆塞開創にして其後弘法大師惠亮和尚の中興なり。聖武天皇御代に、天下大旱の時、勅使此瀧に來て祈雨ありしに、忽沛然として雨降りしかば、六十六州田圃を此山に施入、六十六段田と號、其後云云、弘法云云。叡山大乘坊惠亮、爰に來て修法の時、大威德明王、第三の瀧より涌出、其騎る所の牛は潭心の臥石にして、恰も青牛の水より踊出せるに似たり。其石長四丈、瀑布是を挾て飛流る、第一の瀧高二丈、第二瀧高十丈、第三瀧高四丈、此三瀧の水源に、四十八瀧あり、且此一山楓多し、秋の末紅錦を布がごとし、麓より峰まで、紅葉ならぬ所なし。坊中書院に映じて、人顏みな赤面を被たるが如し。衣類諸器まで、紅をそゝぐかとあやしまる。最奇絕の壯觀なり。騷人詞客、こゝに到らずんばあるべからず。（記載歌等有、今略之。）

右和泉國の牛瀧山威德寺はいと古し。此御廐野なるは近

き世の事にて、草創文覺ならばかねて發願して大瀑に打れつる、紀伊國那智山にこそ。右大將に勸めて、威德寺を建べけれ、瀧もなき此山中の池に、顯出たる大龍を見て、辨財天を祀らで、威德王を安置せしは、如何なる緣にか有む。

威德寺より十町餘東に美濃國加子母村小鄕地藏堂在。傳云古文覺上人威德寺へ持來りし地藏尊威德寺大破の時小鄕へ飛たりと云今に小鄕に文覺の墓在となり。

鞍掛山　御歷野村の奥の高山にて、美濃・飛驒・信濃三國の界に跨れり。【玉勝間】八卷卅七丁に、久良加介、【宇治拾遺物語】に、移のクラ廿具、鞍かけにかけたりと有、くらかけと云ものは、もと馬鞍を掛る具の名なり、と見ゆ。御歷野には、由ありけなる名なり。

產土神熊野社　祭神素戔嗚尊。境內五段八畝十步除地。

同日枝社（濱名山王社）　祭神大山咋神。境內八段三畝十步除地。

同熊野社　祭神素戔嗚尊。境內一段二畝步除地。

阿彌陀禪寺　本尊　境內九畝九步地除。高三斗四升九合。此田畑段別九畝廿五步。

十王堂　本尊　境內九步地除。

図　　版

①遠景

②伝本堂跡調査後(正面向拝部分)

③本堂跡礎石

④本堂西建物

⑤軒廊

⑥A区TP5

⑦A区B4トレ

⑧寺院中心部東方の石列と区画

図版1　遺構写真(1)

①A区石段と東西に続く石積

②A区G南拡張トレ

③A区TP6

④A区TP9

⑤A区TP1

⑥A区Eトレ

⑦B区TP7

⑧B区I9トレ

図版2　遺構写真(2)

①C区調査前

②C区(史碑南)調査前

③C区Aトレ

④C区B3トレ

⑤C区築地塀の基礎

⑥C区史碑南建物跡

⑦C区C2トレ

⑧C区E2トレ

図版3　遺構写真(3)

①C区Ｊ東トレ

②C区K西トレ

③C区TP8

④C区TP6

⑤E区排水溝

⑥E区排水溝(伝三重塔跡から見る)

⑦E区参道北の石列と区画

⑧E区参道北の通路状の石列

図版４　遺構写真(4)

①C区道路状の石列

②F区基壇状の石列

③F区基壇状の石列西の建物跡

④伝三重塔跡西法面の石積

⑤伝三重塔跡

⑥伝鐘楼跡

⑦伝山門跡

⑧D区排水溝

図版5　遺構写真(5)

①B区A～Cトレ調査前

②別荘分譲地Dトレ調査前

③B区A1・Bトレ

④B区A2・3、Cトレ

⑤D南1・東1トレ

⑥林畑谷左岸・通路状の石列

⑦林畑谷左岸・排水路の護岸状の石積

⑧林畑谷左岸・敷石状の集石

図版6　遺構写真(6)

①林畑谷左岸・水場状の遺構

②土塁状に整地された尾根

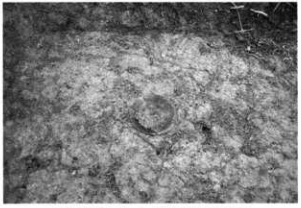
③E区Aトレ調査前

④E区A4トレ

⑤E区A4トレ築地塀の基礎状の集石

⑥E区A3・4トレ

⑦E区B2・1トレ



⑧E区B2トレ土師皿出土状況

図版7　遺構写真(7)

①寺院北端の区画と考えられる石積

②西側をＬ字状に削られた尾根

③ほぼ直角に整地された尾根南端

④Ｆ区石段東方法面の石積

⑤Ｆ区石段

⑥Ｆ区谷筋を埋めた石積

⑦階段状に整地された尾根

⑧伝山門跡東法面の石列

図版８　遺構写真(8)

⑨伝山門跡南の堀状の遺構

⑩急傾斜で落ち込むG区南斜面

⑪D区西法面の石積

⑫秩父杉切株

⑬伝三重塔跡へいたる参道

⑭参道に残る石段

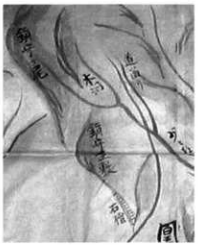
⑮K区古瀬戸遺物表採地点

⑯石造物集積地

図版9　遺構写真(9)

①高山宗猷寺所蔵「威徳寺跡図」

②同部分(1)



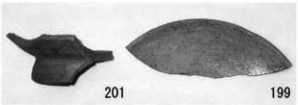
③同部分(2)

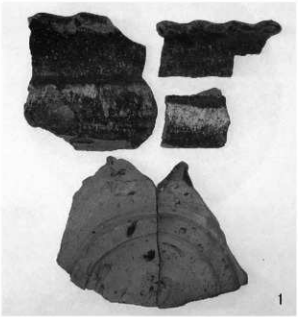
④同部分(3)

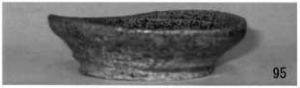
⑤阿弥陀寺所蔵懸仏

⑥石造物古写真

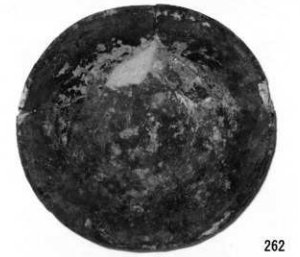
図版10　関連遺物写真

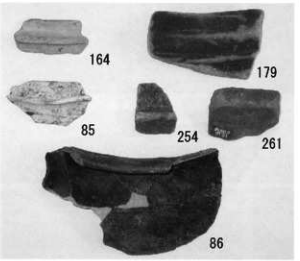




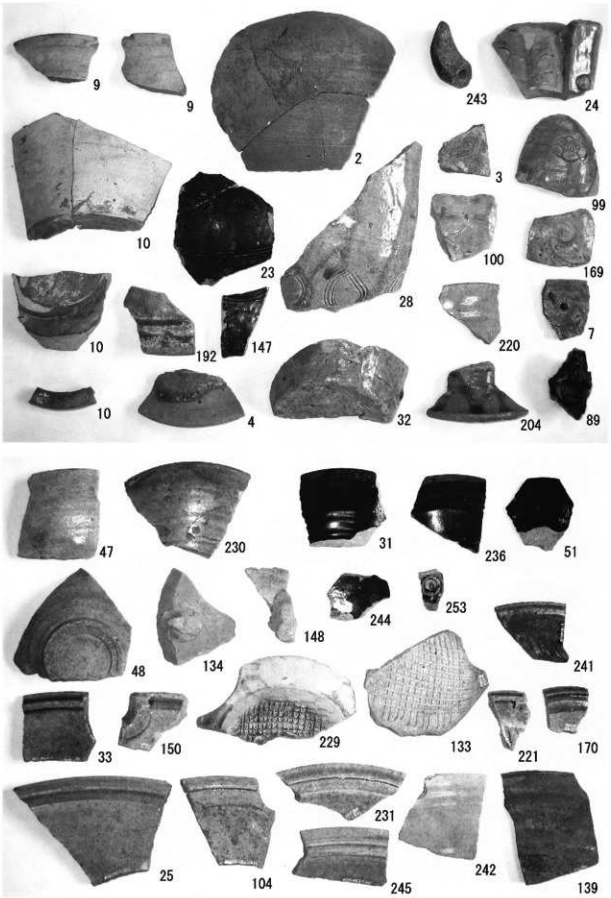


図版11　関連遺物写真(1)

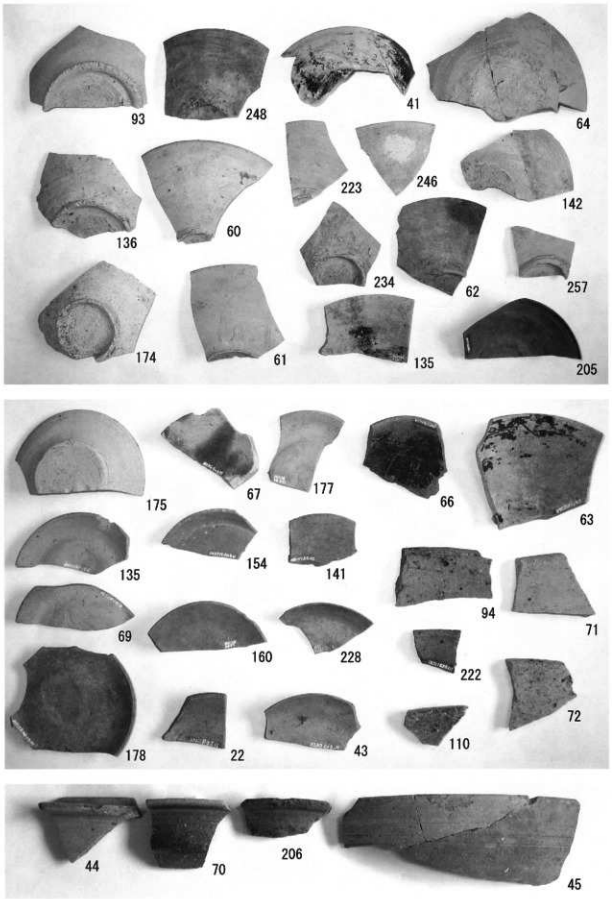




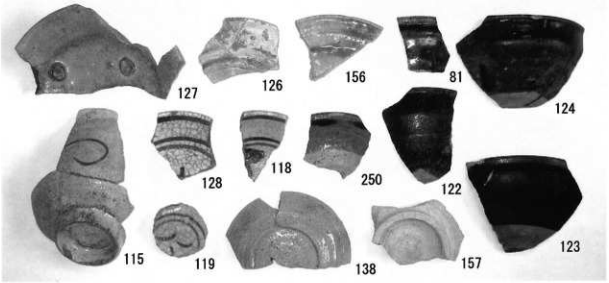
図版12　出土遺物写真(2)

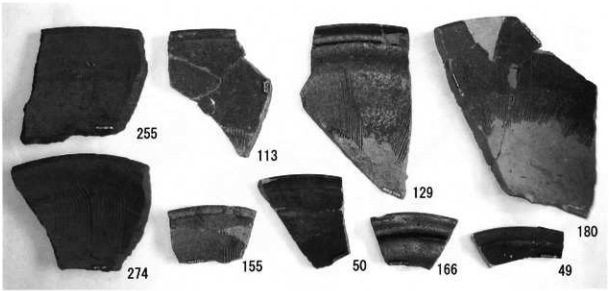


図版13　出土遺物写真(3)

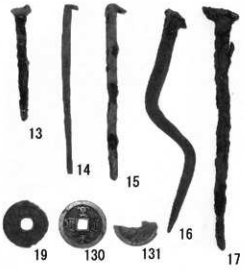


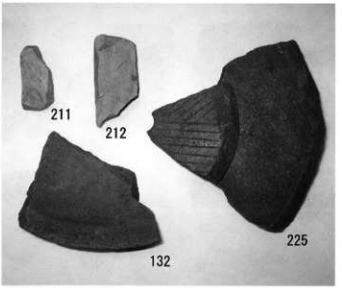
図版14　出土遺物写真(4)





図版15　出土遺物写真(5)





図版16　出土遺物写真(6)

報告書抄録

ふりがな	ぎふけんしていしせき　ほうこびざんだいいとくじあと
書名	岐阜県指定史跡　鳳悲尾山大威徳寺跡
副書名	平成15～18年度範囲確認調査報告書
巻次	
シリーズ名	下呂市文化財調査報告書
シリーズ番号	第1集
編著者名	堀正人　二村陽子　丹羽忠幸　小池三次
編集機関	下呂市教育委員会
所在地	〒509-2517　下呂市萩原町萩原1166番地8
発行年月日	西暦2007年　3月　12日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査面積(㎡) 調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号				
大威徳寺跡	岐阜県下呂市 御厩野字威徳寺	21583	01077	35° 45′ 28″	137° 19′ 44′	20030722～ 20070320 1,980㎡	保存目的の発掘調査

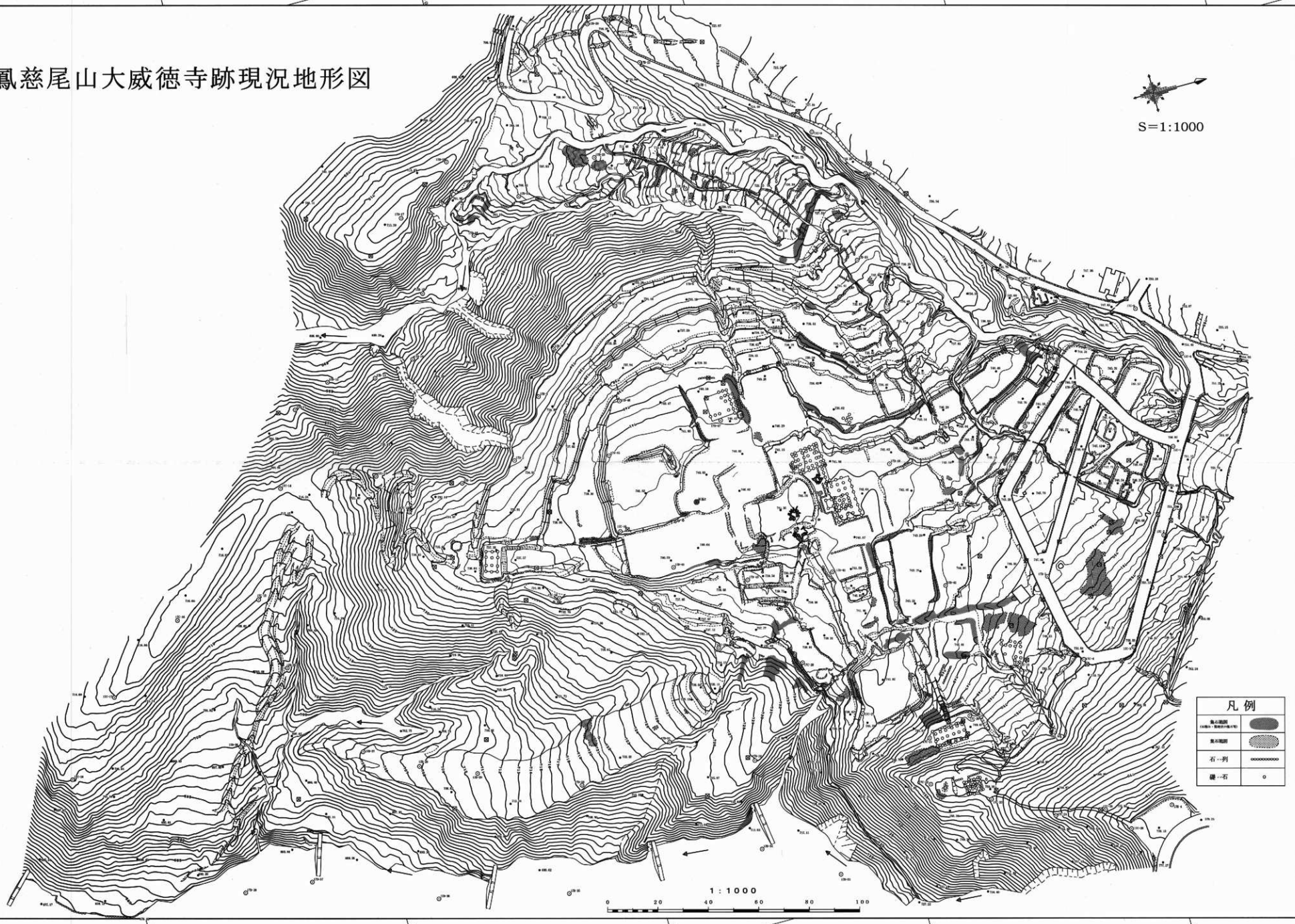
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大威徳寺跡	寺院跡	平安後期～ 江戸初期	礎石建物跡 基壇状遺構 石積 石列 石段 排水溝 築地塀基礎 中世墓	灰釉陶器 山茶碗 古瀬戸 大窯製品 連房式登窯製品 輸入陶磁器 (青磁・白磁) 瓦質土器 土師皿 鉄釘・古銭・石臼	飛騨と美濃の国境近くの山中に建てられた山岳寺院で、本堂跡など、建物の跡が良好な状態で残る。岐阜県内で四例目となる、灰釉陶器・多口瓶が出土。

下呂市文化財調査報告書　第1集

岐阜県指定史跡
鳳慈尾山大威徳寺跡
平成15～18年度範囲確認調査報告書

発　　行　平成19年3月12日
編集・発行　下呂市教育委員会
印　　刷　下呂印刷株式会社

鳳慈尾山大威徳寺跡現況地形図



株式会社 イビソク調製

下呂市

測量 平成17年 9月
測図 平成17年10月

座標系 Ⅷ

世界測地系